
麻帆良の皇家の樹

ペリ犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良の皇家の樹

【Nコード】

N1385S

【作者名】

ペリ犬

【あらすじ】

麻帆良の世界樹が天地無用の世界の皇家の樹だったら？と云う同様のコンセプトのSSから刺激を受け自分なりのアプローチをしてみました。

麻帆良学園の世界樹を調査に潜入した主人公が2-Aのクラスメイトにお節介を焼くうちに魔法と云う名の泥沼に足を突っ込みます。ネギま！の一部不可解な行動について自分なりの解釈をしています。主人公はオリキャラですが外見はキャラメルBOX 処女はお姉さま（ボク）に恋してる 2人のエルダー から外見は栢木優雨 中

身は妃宮千早 をモデルにしています。 おとボクはクロスではなく
キャラだけを借ります。

01話 指令 (前書き)

あらすじでネギま！の一部不可解な行動について自分なりの解釈をしていると書いてますがネギが来るまでそれはありません。

01話 指令

皇家の船 水鏡

私、正木吹雪樹雷が神木瀬戸樹雷に呼び出されたのは私の船、佐久^{さく}夜^やで海賊討伐の遊撃任務の最中でした。海賊の出そうな空域にインヴィジブルモードで潜んで獲物を探している最中に任務の解除命令と出頭を命じられました。ランデヴーポイントに到着したときには珍しく艦隊旗艦を務める皇家の船^{おつげ} 水鏡のみがその空域に停泊しておりました。

「ご無沙汰しております。瀬戸さま、兼光さま、水穂さま」

「よく来てくれたわね吹雪ちゃん。お菓子食べる？」

「いいりません」

品の良さそうな40代半ばに見える女性。しかしてその実態は宇宙一やっかいな女性、神木瀬戸樹雷さまです。隣には艦隊司令の平田兼光さま、情報部副官の柁木水穂さまが控えております。

「早速だけどこの画像をみてちょうだい。それとジュース飲む？」

「飲みません」

映し出されたのは大木の写真。地球のヨーロッパ風の家々の後ろの堂々とそびえ立つ常緑樹。

次に映し出されるのは発光する大樹の姿。

「皇家の樹？」

皇家の樹。それは樹雷の最重要機密。

樹でありながら現宇宙最大規模のエネルギージェネレータと演算ユニット双方の機能を併せ持つ皇家の船のコア。

「今回の任務はこの樹が皇家の樹かどうかの調査。そして皇家の樹であることが確認できた場合の回収。もしくは…」

「…はい」

破壊…でしょうか。あの子達の破壊など考えたくもないですけど。

「で、所在地は地球」

「え？」

まさか、地球？ てつきりヨーロッパに似た別惑星だと思ったのですが、地球ですか。大先史文明のシード計画とやらで地球と似た文明はいくつでもありますから、本当に地球とは思いませんでした。そんな思いを多分知りつつも瀬戸さまは言葉を続けます。

「日本の埼玉県麻帆良市つてところよ」

「は？ 埼玉？」

私が生まれた岡山県から直線距離で500km程度のところに皇家の樹が？ 宇宙的に見れば本当に目と鼻の先にそんなものがあつたとは。そしてそれに気づくことなく700年もあそこで暮らしていたのですか、我が一族は！ 恥ずかしくて顔を上げることができま

せん。

「いいのよ。だいたい遥照ちゃんすら気づいていないんだもの。吹雪ちゃんが気に病むことはないのよ。飴ちゃんあげるから機嫌なおして。一応地球にはG Pからも監視員は派遣されているけれどそこから報告はあがっていないわ」

「最初から説明しますと美星さんが発端です」

水穂さまが説明を引き継ぎます。

「美星さんが天地さんのお宅にいく途中偶然皇家の樹に似た樹木を発見し、その後その話を聞いた玲亜さんがこの写真をネットから検索して発見しました。そのあとお父様から瀬戸さまに調査依頼が出され、こちらから調査員を送り込みましたが失敗しています。」

「失敗ですか。珍しい」

瀬戸の盾と異名を持つ水穂さま率いる情報部は樹雷本星の正規の情報部にさえ勝る能力をもっているのですが。

「長距離からの映像では樹は確認できませんが、至近距離では撮影ができません。麻帆良市に入った調査員によれば樹を見たはずなのに記憶に残ってなく、樹に近づこうとしたが気がつくのと樹を素通りして別の場所に行こうとしていた、と云っています。何らかの認識障害を受けていると判断したが原因不明にため調査を中断したと云うことです」

「精神攻撃の類でしょうか」

「はい、そうと考えています。またその樹がある麻帆良市では麻帆良学園という複合私立学校がほぼ市の全域を占めています。この麻帆良学園は行政、司法さえも介入できないほどの権力を学園内にもっているらしいです。例の樹は世界樹とよばれ学園のシンボルとなっているそうです」

「うさんくさい話ですね。つまりその麻帆良学園が世界樹とやらをなんらかの方法で隠そうとしていると？」

「はい、仮定ですが、その世界樹が皇家の樹ならばいろいろと説明できます。皇家の樹がまだ力を持ち、何者かがそれを制御できるならばという仮定が出た段階で調査は中止しています」

「皇家の樹に対抗する何らかの手段が必要になったわけですね」

私が呼び出された理由が解りました。日本出身かつ皇家の船の所有者で動ける人間など私ぐらいでしょう。

「君は一時 海賊討伐から離れ、水穂のしたで麻帆良の調査をおこなってくれ」

兼光さまがそう仰有います。もつともよくあることなので問題はありませぬ。皇家の船は攻撃力は強大過ぎるが故、艦隊を組むことよりも単艦で運用されることが多く、皇家の樹のサポートを受けられるマスターは優秀な潜入者にもなるので任務ごとに所属を変えるのです。

「では、これを」

水穂さまがなにやら赤い布の束をもってきました。服でしょうか？

手に取ってみると臙脂色のブレザー、ベスト、臙脂と赤のチェックのスカート…

「これは？」

「吹雪ちゃんには学生に扮して潜入してもらおうわ」

瀬戸さまがうれしそうに仰有います。

「なんで、学生なんですか？ 教師で好いじゃないですか？」

「教師では十分な自由時間なんてとれないわよ。学生なら長期休暇もあるでしょ。それに…ぷっ」

瀬戸さまが吹き出しました。そう、本当の理由は私が子供にしか見えないことです。

私の本当の年齢は64歳。ですが見た目は12歳ぐらいです。

「とりあえず、その制服の寸法が合っているか着てみてちょうだい」いきなり数人の瀬戸さまの従者があらわれ、私はなすすべ無く別室で着替えをさせられました。私のパーソナルデータなら瀬戸さまも持っていらっしやるので寸法あわせなんて不要でしょうがあえてするのが瀬戸さまです。

「ほんと、似合うわ、吹雪ちゃん。おまんじゅう食べる？」

着替えの終わった私を見て瀬戸さまが仰有います。本当に瀬戸さまは私を子供扱いしたがりますね。水穂さまも口には出していません

が熱いまなざしを送ってきています。

私を見た目はかなりの美少女です。多少の自惚れがあれど、小さな頭に大きい目、小さい鼻と口、子供のころから美人になるともてはやされてきました。12、3のころから成長はしなくなりました。樹雷で検査したら遺伝子障害みたいなものらしいのですが治療法はないのです。歳をとること鏡を見ることが苦痛になって、この容姿はいまではわたしのコンプレックスです。いえ、わかっているのです、瀬戸さまのお気遣いも。深刻ぶっても何も生み出しません、肯定して笑い飛ばすのが一番だと云うことも。

逆らっても無駄なのでお披露目を最短ですませ、私は水鏡から逃げるように地球へ出発しました。

01話 指令 (後書き)

ぶつちやけ瀬戸さまが 報告を上げたらこの話は成り立ちません。瀬戸さまは皇家の樹の破壊もありうるので自分のところで話を止めていると云う設定です。

主人公は第二世代の皇家の樹を持ちます。

1938年4月4日誕生

1956年4月 樹雷へ 18歳

同年 佐久夜と契約

1958年 樹雷闘士 20歳

同年神木瀬戸樹雷 麾下 神木艦隊へ編入

2002年10月現在64歳

今の喋り方は神戸の女学校時代に身についた。

身長135cm B75 W50 H65

2011/04/05 前書き一部削除

2011/04/02 前書追加

02話 榎木神社にて

岡山県 榎木神社

「ご無沙汰しております。勝仁さま」

「吹雪殿、壮健そうで。今回の件では苦勞をかけるがよろしく頼む」
勝仁さまは本名を榎木遥照樹雷（うゑのき へいしょう じゆらい）と仰有い、現 樹雷皇の皇子にあたりますが現在 出奔中で700年ほど前から地球に隠れ住んでいます。地球に来た際、地球人の妻を娶り子をなしました。その末裔が私です。この榎木神社のある村はそう云った者たちで構成されています。

「とりあえず、かの学園には転入手続きをだして受理されておる。あとは試験を受けて合格すれば手続き完了じゃ」

「ありがとうございます」

「麻帆良学園中等部2年じゃ」

「……………せめて3年にはなりませんでしたか？」

「うむ、3年は受験とかがあるじゃろう」

「パンフレットにはエスカレータとありましたが」

「? 都会の学校にならエスカレータがついていてもおかしくはないのでは?」

ああ、勝仁さまは村の中学校レベルで考えているのですね。村には高校がないので付近の高校を受験しなくてはなりません。まあ、今更実は3年ですとも云えないですし我慢しましょう。

「保護者には玲亜になってもらった」

柁木玲亜さんと勝仁さまは嫁と舅の関係になります。本当は玲亜さんは私よりずっと年下ですが。

「例の樹については勝仁さま、本当になにもご存知ないのですか？」

「うむ、それなのだが、本当に心当たりはないな。それと、今回の任務にあたっていくつかのことを伝えねばならん」

そう、前置きして勝仁さまは語り始めました。

700年前樹雷を襲った魍呼じょうこと魍皇鬼じょうおうきの封印が解け、共に天地さまの家に同居していること。

勝仁を追ってきた阿重霞あえかさまと砂沙美ささみさまも同居していること。

砂沙美さまが皇家の樹の始祖 津名魅つなみさまと同化していること。

伝説の哲学士 白眉鷲羽わしゅうさまが魍呼の産みの親で、やっぱり天地さまと同居していること。

神木ノイケ樹雷さんが天地の婚約者として天地さまと同居していること。

そして天地さまが単身で光鷹翼を作り出せること。

「……………つまり、始まりの船 津名魅さま、阿重霞さまの龍皇、ノイケさんの鏡子、そして第一世代の皇家の船を超えろといわれたあの魍皇鬼がここに集っているのですか？」

何か嫌な汗が出てきそうです。

はつきり云って樹雷、いや銀河全域とまともに殴り合える戦力がここにありません。第一世代とは私たち第二世代からみても半端ではない存在ですが、それを超える魍皇鬼なら樹雷皇 亜主沙あすささまの霧封きりとさえ討ち取れるかも。そして自身で光鷹翼を作り出す天地さまの力とはいかほどでしょうか？ ある意味津名魅さまと同格なのでしょう？ 津名魅さまに至って神様ですし…

「つまり、麻帆良にあるかもしれない皇家の樹よりもこの存在が宇宙に知られるのが拙いというわけですね」

「正面きつてむかってくるバカならかまわんが、絡めて手を使われるのは勘弁じゃからな。重大ではあるが、緊急度はそれほどでもないのであせらず調査してくれ。あと、玲亜が見つ付けてくれたあの写真もすぐにネットから消えてしまったそうじゃ」

「承知いたしました」

「それと試験勉強もな」

「うー」

確かに私が学生だった頃とはカリキュラムがちがっていますね。長期休暇の度に地球には戻って来ているので世間の流れは把握していただけますが中学の授業の内容など知る由もありません。脳に直接データを転送すれば済むのですが、全教科満点というのも不自然と思い、私は一ヶ月かけて中学の勉強や世間の常識を学びなおしました。

すでに家を引き払っていたので勝仁さまのご好意に甘え榎木神社に

ご厄介になったのが間違いでした。毎日、麴呼さんと阿重霞さまの喧嘩のとばっちりを受れたり、砂沙美さま「津名魅さまの手料理を振舞われたり、マツドの実験材料にされかけたり…

私にできることは心の中で『くそばばあ』と叫ぶことだけでした。

02話 榎木神社にて（後書き）

基本的に主人公は津名魅^ニ神様と認識しているため直接お願いをする気はありません。どうしても自分たちの手に余るときのみ樹雷皇など上層部を介して上奏するべきと考えています。

03話 引越

2002年9月29日 日曜日 午前10時 麻帆良学園

麻帆良市には電車で移動しました。佐久夜は相模湾沖で待機です。

私が麻帆良学園 本校女子中等学校に転入することにあたって、残念なことに一人暮らしは許可されず女子寮へ住むこととなりました。今日は引越の日です。すでに手荷物だけでもち女子寮へ到着しております。

ちなみに相部屋ですので任務に影響することは必至です。何らかの対策をねる必要がありますね。

ルームメイトとなる方の名は相坂さよさん、長谷川千雨さんです。呼び鈴（実際は電子チャイムでしたが）を鳴らすとすぐにドアを開けてもらえました。

出てきたのは茶色の髪で眼鏡をかけた女の子でした。しかし、最近の子供は発達がいいのですね。60年以上生きて胸も背も負けるといふのは何なのでしょうか。

「初めまして、正木吹雪と申します」

「ああ、長谷川千雨だ。こちらこそよろしく」

やや慚然とした表情した千雨さんの後を追って中にはいりました。千雨さんに案内されて部屋の中を見て回りました、けど………

「この部屋二人部屋ですよ？他に相坂さんと云う方がいらっしやると伺っているのですが」

そうです。部屋には備え付けの机やベッドがあるので持ち込みなくても良いと聞いていたのですが二人分しかありません。ロフトがあります。私はそこに棲めとでも？

「ああ、相坂なんだが入学以来ずっと休んでいる」

「えっ、入学以来ですか？2年の始めからでなくて？」

「入学以来だ。一度も出席はおろか、ここにも顔をだしていない」

「でも、それじゃ2年にはなれないのでは」

「いや、それでも2年には進級している」

普通、一度も出席せずに進級できるものなのではないでしょうか？

「それは、変ですね」

私がそう云うと千雨さんはびっくりした顔をしました。

「変だと思っか？」

「変…でしょう」

「そっだよな。変だろ、変」

「変ですよね…」

「そっか、やっぱり変なんだ」

突然、千雨さんの口調が砕けたものとなり、笑い始めました。いったい今の会話のどこに千雨さんの心の琴線にふれるものがあったのでしょうか？

ほどなく宅配業者がやってきたと連絡が入り千雨さんに手伝ってもらい届いた布団や衣類を収納していきます。それほど荷物はないのですぐに終わりました。その後はノートパソコンの設定でした。見た目は普通のノートパソコンですが中身は佐久夜の端末です。もちろん銀河連盟のネットにもつながります。一応カモフラージュとして地球のインターネットにもつながるようになっています。

「へえ、正木もパソコンやるのか」

「はい、結構好きですよ、ネットサーフィン。それとできれば吹雪と呼んでもらえますか？私の育った村では住人のほとんどが正木だったので名字で呼ばれていないのですよ」

「…そう。なら吹雪と呼ぶよ」

「ありがとうございます。千雨さん」

ちなみに千雨さんの机の周りにはさながら電子の要塞と云った感じですよ。ノートや教科書を広げるスペースが無いので多分今までは私が使う机で勉強をしていたのでしよう。

そのあと二人で今後の取り決めをしました。いままで千雨さんひとりだったので共同の場の用品、つまりトイレトペーパーやシャンプー、洗剤をどう購入するかと云った話です。最初にきちんと決めないトラブルになります。私の調査がどれくらいわかるかわかりませんがベースに火種をつくりたくはありません。シャンプー類とボディソープ、生理用品は個人の趣味趣向があるので個々に購入し

緊急時には事前、もしくは事後に承諾を得ることで貸し借りをするとし、トイレトペーパーや洗剤は購入代金を折半するということになりました。また掃除などの仕事の分担も決めましたが、そこで解ったことは千雨さんが炊事をしないと云うことでした。部屋にはキッチンがあるのでありますが薬罐しかありません。食器もコーヒーカーブぐらいですね。寮生食堂中心なのでしようか、千雨さんは。

「そろそろお昼ですがどこか好い食べ物屋さんはありませんか？千雨さん」

「いや、私はあまり外では食べないから」

「寮生食堂ですか？」

「……………これ」

千雨さんは机の引き出しからなにかを取り出しました。ああ、携帯口糧ですか、闘士の訓練時代にはお世話になりました。最終的には生の蛇（みたいなもの）や虫（みたいなもの）まで食べられる様になりましたが。いえ違います、問題はそこではありません。成長期にそんな物ばかりでは体に良くありません。私が云っても説得力が無いのが悲しいところですね。

「とりあえず外にでましよう。何かごちそうさせてください」

「いや、それは悪い。むしろ歓迎するのはこっちだし」

「いえ、私に出させてください。その代わり、後で街の案内やお買い物に付き合ってください。それと季節外れの大掃除のお詫びもかねて」

ニコツと笑い小首をかしげてみせる千雨さんはちよつと照れた様子で仕方がないと云ってくれました。しかし瀬戸さまから教えられたこの仕草は効きますね。自分でもあざといと思います。

適当に選んだレストランで食事をしたあと千雨さんといっしょに麻帆良市内を歩いています。そして例の世界樹です。世界樹のまわりは広場になっていますね。

「しかし、本当に大きいですね。ギネスとかに載っているんですか？」

「いや、聞いたことねえ」

千雨さんの口調はもうはつきり砕けきっていますが、まあ良いでしょう。

「270m？ ありえないでしょう」

「そうだよな！ 変だろう！」

先ほどと同じく千雨さんのテンションがあがっています。何でしょう、千雨さんは『変』なもののマニアなのでしょう。

千雨さんをいなしながら世界樹を観察しますが、大きさ以外は普通の樹木ですね。皇家の樹はそれぞれが個別の進化をするので決まった種類は無いですし大地に根付いた樹ならまったく自然の樹木といっしょですのでいまは特定はできません。

本格的な調査は年度が替わって新入生が増えてから行う様にと瀬戸

さまからも云われていますし今日は眺めるだけにしましょうか。

「今日から自炊です。千雨さんにも食べて頂きます」

いきなり宣言しました。

「これは私の趣味ですから千雨さんからお代は頂きません。食器洗いも台所の掃除も私が行います」

きっぱり云い放つとしぶしぶ千雨さんも納得してくれました。実際一人分も二人分も手間は変わりませんし、量を作らないと味がでない料理もあります。ただ、千雨さんは食費のみ月5千円だすと云ってくれました。一応生活費も支給されているのでそこから出すつもりでしたが断るのも不自然ですのでありがたく頂戴しその分質の良い物を購入することにしましょう。寮に付属した麻帆良COPでひとおりの物を買って帰りました。

「いかがでしたか」

食後千雨さんに尋ねてみました。

「いや、すごく旨かった。料理うまいな、吹雪は」

褒められるとうれしいですね。別に料理好きではなかったのですがこの容姿ですので嫁のもらい手が少ないだろうと予測して、すこしでも付加価値を得るために家事全般は修行して参りました。もっと

もどんなに好物件でも嫁に行けない人がすぐそばにいるので若干あきらめてはいるのですが…

食事を終え、食器も洗ってからお茶を飲んでいきます。

「紅茶ってこんな味だっけ」

ああ、それは樹雷のお茶だからですね。いくつかの嗜好品はあちらからの物です。云われなければただの上質なお茶ですから大丈夫でしょう。

そのあと、二人で大浴場へ向かいます。部屋の浴場はシャワーしかなく湯船に浸かりたければ大浴場に行くしかないと言われ、千雨さんに云われました。千雨さんは今日はシャワーで済ますと言ったのを頼み込んで一緒に来てもらいました。

「本当に大きいですね」

「フロアの半分以上使っているからな、さらに施設の充実度が半端じゃねえ」

「ここも変ですね」

「変だろっ」

なんとなくうれしそうに千雨さんが答えてくれます。やはり『変』なものマニアなのですね。

「吹雪はどんなシャンプー使っているんだ」

「ちょっと変わった外国の小さなメーカーなんです」

「すごくいい香りだな」

本当はこれもメイドイン樹雷です。相性とかあるのであえて持つてきました。他には下着とかもですね。あきらかにオーバーテクノロジーと分かるものは私物では持ち込んでいません。

「そうだ、千雨さんにはあらかじめ断っておきます。実は私が転入するきっかけは父が一世一代の勝負と云って外国で事業を始めることを思い立ったのが原因です。母はすでに他界しているので知り合いに預けられるところでしたが、都会の学校に通ってみたかったのでわがままでここに転入しました。一応高校卒業まではここにいるつもりですが父の仕事次第では地元に戻るか外国へ移住するかもしれません」

「そうか、親父さんなにやってるんだ？」

「まあ、山師みたいなものと云っておきましょう」

「山師って」

父親が山師みたいなのは本当ですよ。いまだに哲学士をめざしているんですから。

部屋に戻ってから千雨さんはパソコンの前に座り電源を入れようと
して固まりました。

「吹雪、ちょっと手伝ってくれ」

千雨さんは隣合っていた机を動かして向かい合わせにしました。ああ、モニターを見られたくないのですね。

「悪いがちょっとモニターを見られたくはないんだ、なんて云うかちょっと恥ずかしい」

「はい、わかりました。もし偶然見ても誰にも云いません」

「ありがとう、助かる」

私自身、その方が助かりますし。明日にでも衝立を買いましょう。

千雨さんがパソコンに向かっていている正面で私もノートパソコンを起動します。

03話 引越（後書き）

長谷川千雨は一人部屋か？ と云う問題について

相坂さよ自身は知りませんが住所不定や元々住んでいた場所を書類に記載するといろいろ問題がでそうなので学園長が裏工作

寮の二人部屋は原作の明日菜たちの部屋に準拠

バスタブが無いのは独自設定 大浴場があるので個別に風呂を沸かすのは水・エネルギーの無駄、掃除が面倒、1巻で明日菜がネギをわざわざ大浴場につれていったことからそう判断しました。

04話 転入

2002年9月30日 月曜日 午前7時半

転入する私は早めに寮を出ることになりました。千雨さんも私につきあってくれています。女子校エリアは敷地の奥にあるらしく、寮から電車で15分更に歩いて15分かかります。

「わざわざつきあってくれてありがとうございます、千雨さん」

「いや、別にかまわねえよ」

ちよつと顔をそらす千雨さん、かわいいです。

「担任は何と仰有る方ですか」

「担任？ ああ、それなら好いか。高畑・T・タカミチ、高い畑、アルファベットのt、タカミチはカタカナ。29歳だけでもっと老けて見えるな。ヘビースモーカー」

ちなみにクラスのことを見て驚けと云って教えてくれませんでした。

「あと、デスメガネと云う異名を持っている」

「デスメガネ？」

「高畑先生は広域指導員という麻帆良学園全体の風紀を取り締まる仕事もしてる。喧嘩の仲裁なんかではハンパなく強いらしい」

「これだけ学校が集まっていれば自分の学校以外も面倒見なければならぬのですね、皆 麻帆良学園の生徒ですから」

「でも高畑先生いるかな？ よく出張でいなくなるから」

「研修とかですか？」

「いや、そこまでは知らないな」

早めに学校に到着したのでホームルームの20分前まで千雨さんの案内で校舎内を回りました。そのあと職員室の前で千雨さんと別れました。

「おはようございます。2・Aに転入する正木と申します。高畑先生はどちらにおられますか」

「高畑君？ ついておいで」

「ありがとうございます」

入り口付近の先生に頼んで高畑先生の所へ案内してもらいました。

「高畑君、君へのお客だ。転入生」

「あ、ご苦労様です」

「ありがとうございます。高畑先生、おはようございます」

「おはよう、正木吹雪くん」

挨拶の後、ちよつとした自己紹介をお互いに行い、何枚かプリントを渡されます。その後高畑先生に連れられて2 - A へ向かいました。高畑先生の後を追って教室に向かう途中、高畑先生を観察して不思議に思います。教師と云うよりも闘士のような身のこなしです。広域指導員として武道も嗜んでいるのでしょうか？

先に高畑先生が教室に入りホームルームを始めました。すぐに私が呼ばれましたのでドアを開けて入ります。

「転入生の正木吹雪くんだ」

「このたび転入して参りました正木吹雪と申します。今まで岡山の田舎の中学に通っておりましたが、父が仕事で海外を転々とすることとなり、私自身はこの麻帆良学園にお世話になることを決めました。私の育った所では住人のほとんどが正木という名字の為、今まではずっと名前で呼ばれてきましたので、皆様にも吹雪とお呼び頂ければ幸いです。寮では長谷川千雨さんと同室になりました。以後よろしくお願い致します」

深く礼をすると何人もの生徒が矢継ぎ早に質問をしてきました。高畑先生も苦笑い気味で暴走を放置してますね。困惑しつつ当たり障りの無い返事をおきます。

「ホームルームを続けるよ。吹雪くんは廊下側最後列、エヴァンジエリン…金髪の子のとなり」

「はい」

云われた席には金髪の少女がいます。これは間違えようがないですね。そして私が座る席の斜め前には千雨さんがいました。

「正木吹雪です、よろしくお願い致します」

「うむ」

エバンジェリンさん？の隣に座って挨拶をすると鷹揚な返事が返ってきました。そこから視線を黒板へ戻そうとしたときそれ、いやその人が目に映りました。緑色の髪、耳の辺りから伸びるアンテナ？、半袖の服から伸びる腕の部分の球体関節………アンドロイド？

いや、いやいやいやまだ地球では自律制御のAIは完成していない筈。しかし、わざわざ制服を着てここにいると云うことはこの方も生徒なのでしょうか。千雨さんを見ると満足そうに頷いています。ええ、そうですね、『変』ですね。先ほど高畑先生からもらったプリントに名簿がありました。4人ほど外国の方の名が見受けられます。ちよつと多すぎですね。バランスとか考えているのでしょうか。

一時限目が終了するとまたもや質問攻めでした。はっきり云ってこの世代のパワーには勝てません。

二時限目の終了と同時に逃げる様に千雨さんとお手洗いにいきました。

「本当に変なクラスだろ」

「ええ、まったく」

授業中観察しましたが本当に中学生？ と云う方が数名います。そして…

「あの、私の斜め前の方は？」

「ああ、茶々丸。 絡繰茶々丸。 どう見てもロボットだろ」

「ええ、変ですよね」

「そうそう」

うれしそうに千雨さんがうなづきます。

「でも、クラスでは誰も変だなんて云わないんだ」

ちよつと悲しそうに千雨さんがつぶやきます。そこで私は閃きました。前の調査員の報告で世界樹とやらの認識を阻害する結果みたいなものが麻帆良市全域にあるのではないかと云う話でしたが、その認識阻害の対象が世界樹だけとは限りませんね。むしろ対象を曖昧にしておいた方が便利かもしれません。何を見ても普通だ、変じゃないと意識誘導させておいた方が融通が利きます。ただ千雨さんにはそれが効いていないのですね。しかしそれは…つらいですね。千雨さんが周りのみんなに「これ変じゃない？すごいよね！」と力説してもずっと「普通」とか云われてきたのでしょうか。

「千雨さん、私はここが『変』だと知りました。そしてあなたのはばにいますよ」

「…ありがと、吹雪」

「はい、何か『変』なもの見かけたら教えてください、一緒に『変』を共有しましょう」

ここに入る間だけでも千雨さんの力になりたいですね。でも、ごめんなさい千雨さん、ずっといつしよにはいられません。でも、卒業までは…

04話 転入（後書き）

千雨さん 変なものマニアに認定

05話 視線（前書き）

桜咲刹那さんはシリーズ中かなりひどい仕打ちをされるのでファンの方注意

05話 視線

2002年10月1日 火曜日 夜

今日の夕食は雪広あやかさん、那波千鶴さん、村上夏美さんの部屋にお呼ばれています。あやかさんはクラス委員長と云う立場から私の歓迎会を兼ねてと云うことです。むろん千雨さんもいつしよです。あやかさん達の部屋は同じ寮とは思えない広さでしたがこれはあやかさんのご両親がリフォームされたと云うことでこれは『変』ではないですね。『変』大好き少女の千雨さんにとつては肩すかしでしょうか。でも『変』と云うのも語呂がわるいですね。『不思議』の方が好いですね。不思議大好き少女千雨ちゃん。素敵です。料理は千鶴さんが作られたそうですがレベルが高いですね。ハンバーグに春雨サラダ、オニオンスープ。どれも素材の味が引き立てられています。

「本当においしいですね」

「ありがとう吹雪ちゃん。でもあやかの家から送ってくれる材料が好物だからよ」

あやかさんの実家は有数な富豪らしいです。そのせいでしょうか、中学生離れたプロポーションです。千鶴さんはそれにもましてすごいです。ある意味茶々丸さんより変、いえ不思議です。夏美さんを見るとなぜか癒されます。

「あれ、なんかへこむなあ」

突然、涙目になった夏美さんです。もしかして私からなにか漏れた

のでしょうか。

食後、ジュースを飲みながら歓談をしています。ちなみにこのジュースは私からのおみやげです。

「あら、このジュースは見たことがないメーカーですわね」

あやかさんが不思議そうに眺めています。

「それはうちで作っているジュースです。なかでも特に品質が好物だけを選んで作っているので流通にはのせていません。数がだせないから」

実は佐久夜の内部で作っているジュースです。皇家の樹の有り余るパワーを使い、船の中の亜空間内の惑星で栽培しています。個人で消費できる量ではないので無人プラントでジュースやら缶詰に加工して樹雷やGPの流通部門に卸しています。

「そうですか。でもこれは何のジュースでしょうか？」

「え？ 桃のはずでは」

私があやかさんの持っているジュースのラベルを覗き込みます。

「！」

まずいです。間違えています。これは皇桃です。皇桃は船穂さまから直々の頂戴した桃の改良種で地球の桃とはすでに別物。自然栽培が難しく皇家の樹の力が無いと育たないのです。とは云え今更間違っても云えず…

「おいしいですわ」

「濃厚ないい香り」

「はあ、甘くて、酸っぱくて、ほんと濃い」

まあ、云わなければ ばれないでしょう。ただ、これが他の持ち込み品と違うのは…

「あれ、なんか気持ち良くなってきたよ」

夏美さんが頬を染めて云います。この皇桃、アルコール分はまったく無いのに酩酊するのです。もちろん、麻薬の様な成分もありません。云ってみれば脳内麻薬の分泌を促進するらしいのですが実態は不明です。副作用はまったくなく、ある程度以上には酔いがまわりません。ただ、軽い興奮状態になるので一般のジュースといっしょにするわけにもいけないので樹雷では一応酒類として販売しています。

「なあ、おい、これって」

さすが千雨さん、不思議大好き少女ですね。すかさず、私に問いかけてきた千雨さんに小声で返答します。

「すみません、一応桃なんですけど興奮剤みたいな成分があるみたいです。ただ、法律にふれたり、体に悪いと云うことはありません」

ここはちょっと嘘を吐きます。しかし、ジュースのおかげで皆さん更に陽気になったのでここはよしとしましょう。千雨さんもだいたい

おしゃべりに参加するようになりまし。ついでですから委員長のおやかさんに訊いておくことがあります。

「あやかさん。私の部屋にはもう一人ルームメイトがいて相坂さんさんと仰有るのですが、千雨さんの話では入学以来ずっと欠席していらっしやるそうですが、委員長としてなにか伺っていますか？」

すると真顔になってあやかさんが云いました。

「ええ、前に訊いた話では、相坂さんは体が弱く治療を受けながら、現在通信教育を受けてられるそうです。一度お見舞いに行こうと思つて高畑先生に尋ねましたが麻帆良から離れた場所と云うことでした。住所もそう云えば教えてもらえませんでしたわ」

何か云いたいそうな千雨さんにちよつと目で牽制をかけます。

「そうですか。ありがとうございます。高畑先生に訊いてみます」

その後はまた、他愛もない話で盛り上がりました。そのあと、いっしょに大浴場でお風呂に入っています。しかし、なんと申しましょうか。千鶴さんは…

夏美さんもまたもや涙目です。でも夏美さん、あなたにはまだ未来があるのですよ。

下らないこと考えているとなにやら視線を感じます。昨日も一応感じていたのですが転入生が珍しいからかと思いましたが、それにしては鋭い視線ですね。

「ねえ、千雨さん、あの洗い場の方 多分クラスメイトのはずですが、名前は何と仰有るのでしょうか」

「うん… あれは桜咲刹那だな、髪下ろしているからわからないか」

「桜咲… ああサイドポニーの方でしたね」

髪を下ろすとだいぶ幼く見えますね。そして…ふふ、今日は2勝3敗ですか。

しかし桜咲さんはチラチラとこちら観察してきます。もしや世界樹の関連する組織？ の調査員と云う線もあります。単なる転入生の身元確認なら好いのですが…もうばれたわけではないですよね？

「吹雪、髪洗ってくれ」

千雨さんは最初にお風呂を一緒したとき髪の洗い方が結構雑だったので強引に洗ってあげたら以後せがんでくるようになりました。まあ、甘えられると弱いですね、本来、孫ぐらいの年齢なんですから。精神も姿に引っ張られるのでときどき幼いところもありますけどね。

「なあ、なんか見られてないか？」

「…見られてますね」

千雨さんでも解るくらい刹那さんの視線が痛いです。最初、洗いつこしているのが気になるのかと思いましたが隣の洗い場ではあやかさん達も真似て洗いつこしているのですが刹那さんはどうもそちらには興味が無い様子です。千雨さんにもバレバレでは調査員失格ですよ。

「なんでこっちはっか見るんだよ」

「いつも、ああなのですか？」

「いや………　　そういえば近衛の方をよく眺めているな。特に体育のときとか」

水泳の授業のときはもっとひどかったそうです。

「近衛木乃香さん？　千雨さんの前の席ですよ。確か黒い髪で長髪……」

なんかキャラがかぶってますね。

「あいつもあんまり社交的ではないが、龍宮とは良くつるんでいるよな」

「龍宮さん？　髪が長かったですね……」

もしや、黒髪長髪フェチってことは無いですよ？　単に自分の好みだから眺めているとか、千雨さんといちゃいちゃしているから睨んでいるわけではないですよ？

「こんどは私が洗ってやるよ」

そう云って千雨さんが刹那さんからの視線を遮る位置に移動して私の髪を洗い始めました。いえ、別に同性ですから見られても構わないんですが。

05話 視線（後書き）

雨さん 変なものマニアから不思議大好き少女ヘランクアップ
刹那さん 残念な人認定

設定 第二世代以上の皇家の樹には惑星を与えられています。金銭
面での優遇措置です。

惑星は無人の星系とか放浪中のものからきてーに拾ってきて最低
限のテラフォーミングだけしています。

佐久夜内部の惑星は地球規模で陸地の表面積もほぼ地球と同じです
がオーストラリア大陸分しか手を加えていません。あとはサバンナ
程度のまま。

06話 学問のすゝめ (前書き)

読み返してみるとネギが来ないことには話が始まっていない。
ネギ(ボケ)が居ないとツツコミにくいのだ。とりあえずネギ登場
まで連投します。

06話 学問のすゝめ

2002年10月9日 水曜日

中間試験を一週間後に控えた午後の5時限目 2・Aは………だらけきってますね。この時期に出張とは高畑先生はいつたいどの様な用事なのでしょう？

「いや、去年からずっとこんな感じだぞ」

この不思議は千雨さんにとってはお気を召さないのか気乗りしない様子ですね。一応、自習となっておりますが半分以上は勝手なことを始めています。私も千雨さんの後ろの席に移動しています。

「まあ、今回もうちが最下位なんだろうな」

「なんのことですか？」

千雨さんの説明によると試験のたびにクラスの平均点を出力しており1位のクラスは表彰されるそうです。そして2・Aは2年間ずっとビリを独走中らしいのです。これは不思議と云うよりも高畑先生の怠慢と呼ぶべきでしょうか？

「個人では1位2位が、超と葉加瀬の指定席なんだが、とんでもないのがあるからな」

「ええ、別名バカレンジャーと呼ばれる5人組の各人の総合点はクラスの平均点にさえ届かないおばっかっぴりです」

千雨さんの隣の席の夕映さんが本を読みながら話に参加しました。

「人ごとみたいに云うな。バカブラック」

「え？ 夕映さんもその…一員なんですか？」

さすがに面と向かってバカとは云えませんが。

「はい、私は授業中でも他の本を読んでいるので成績は悪いです」

きっぱり云われても困るのですが。

「でも、夕映さんは本が好きなのですから国語は得意ではないのですか？」

「他の教科よりはましですがあまり変わりはないです」

国語も同じですか。少しばかり考えて…やはり云うべきですね。

「夕映さん、差し出がましいと思いますが云わせてもらいます。国語の点数が悪いと云うことは長文読解が出来ていないと解釈してよろしいでしょうか？」

「はい、かまわないです」

「それでは敢えて云わせて貰います。長文読解がきちんとできていないと云うことはすなわち作者の意図が掴めていないと云うことです。それでは本を読んでも…読書をしているつもり、でしかありませんよ」

「そんなことは…ないですよ」

小声で否定されました。

「そうですか。出過ぎたことを申しました。気分を害されたらごめんなさい」

少し云い過ぎたでしょうか。でもこれ以上は夕映さん自身で答えをだしてもらうしかありません。でもわざわざこんなことを云うのが老婆心と云うものでしょうか？老婆心…なにかへこみます。少し考えて、二人に断りを入れてから席を離れました。行き先はあやかさんの所です。

「あやかさん、ちょっと相談が」

「いまは自習中です、と云いたいところですがこんな状態ですしね。吹雪さんなら訳がありそうですね。私で良ければ相談に乗りますわ」

「ありがとうございます。来週から中間試験ですが、千雨さんからこのクラスの試験の成績が悪いことと、その原因である、5人について聞いたのですが」

「ええ、バ…、はい、それで」

「本来なら高畑先生あたりが音頭取りをなされてその方々の成績向上を図るべきと思うのですが、ご多忙らしく授業さえ満足に出来ていません」

ちなみ私はまだ2回しか高畑先生の授業を受けていませんよ。

「エスカレーターで進学出来るとはいえこのままでは高等部でも落ちこぼれることは必至です。いまのうちに何らかの手を打つべきと思うのです。そこで提案ですが、今週末は3連休です。休みを利用して勉強会をするのはいかがでしょう」

「それは良い考えかと。3日間みっちり勉強すれば成績もあがりますわ」

「いえ、むりやり勉強させても一時的に成績があがるだけで身につきません。最初の日のみ強制で出てもらい残りの日は任意で参加してもらいましょう。やる気の無い人がそばにいると周りの人のモチベーションまでさがります。最初の日にカウンセリングみたいない形で勉強する意志の乏しい方には勉強する意義を確認してもらい、勉強法に問題があるならば改善しましょう」

「なるほど、それでは私は何をしたら宜しいのでしょうか」

「あやかさんには勉強会のリーダーになって、参加者を選定してください。とりあえず件の5人を生徒とし、先生役をしてもらえる人を数人選んで参加してもらえるように説得してください。それと寮のセミナー室かなにかを会場として使用できるように申請してください。あと、先生役が開始前にあつまってミーティングができるよう段取りしてください」

「良いでしょう。吹雪さんも先生役をお願いしますか？」

「もちろん云い出しっぺですから。雑用でもなんでもしますよ」

「わかりました、それでは早速先生を勧誘いたしましょう」

さすがあやかさんと云うべきか、私の提案を聞くなり即決で勉強会を開くことを決めてしまいました。

例の5人組への説得も、本人達も思うところもあるらしく全員が参加です。先生役も近衛木乃香さん、超鈴音さん、那波千鶴さん、宮崎のどかさんが了承してもらえました。

夜、ノートパソコンで勉強会のテキストを作成しています。ちなみに私たちの机の周りには衝立で囲まれています。私の実際の学力は学士レベルです、アカデミーの。英語だけは知識がありませんでしたが何とか勉強しましたので問題ないでしょう。逆に数学では微分を使いそうになったりするので要注意ですね。

「なあ、なんで勉強会なんて始める気になったんだ」

衝立の向こうから千雨さんの声が聞こえます。

「いえ、別にこれと云ってはないですよ。多分基本的におせっかいなんでしょう。社会にでも勉強しなくてはならないことはたくさんありますよ。今のうちに勉強することを身につけていないとあとで大変ですよ」

「そんなものかなあ」

「ええ、そこで千雨さんも参加してくださいね」

「なんで、私が…」

「はい、はい、一応試験勉強はしますよね？ 周りに人がいればだれませんし、疑問点も訊けますよ。3日間全部出るとは云いません。好きな時間に参加してください」

「…考えとく」

参加決定ですね。

2002年10月12日 土曜日 午前9時

女子寮付属のセミナー室を借りて2・Aの勉強会です。出席者は、綾瀬夕映さん、神楽坂明日菜さん、古菲さん、近衛木乃香さん、佐々木まき絵さん、長瀬楓さん、超鈴音さん、那波千鶴さん、千雨さん、宮崎のどかさん、村上夏美さん、雪広あやかさん、そして私の13人です。

夕映さんにはのどかさん、明日菜さんには木乃香さん、古菲さんには鈴音さん、まき絵さんにはあやかさん、楓さんには千鶴さんが先生役としてつきます。私は夏美さんと千雨さんの担当です。カウンセリングは難しいんじゃないか？と云う意見がありましたのでそれは無しとしました。

「皆様、おはようございます。本日は私の提案した勉強会に参加いただきありがとうございます。始めに少しばかり私の話をお聞きください。」

学校で勉強することは社会にでて役に立たないと云う意見も聞きますが私の意見ではそうではありません。

国語とはコミュニケーションの勉強です。相手が何を云っているか

を理解する、自分が思っているのかをどう正確に伝えられるか、それは簡単のようで非常に難しいことです。自分の気持ちを過不足なく言葉に置き換えられる人など私は存在しえないと思います。

次に数学ですが、単に計算するだけなら算数の知識と計算機があれば日常生活は事足りります。数学の本質は論理的に考えるということではないかと思えます。理性的に物事を考えることを学んでほしいです。

理科と社会は中学の内容なら一般教養として必要なことです。徳川家康が何を為しえた人物か、遺伝の法則とか、社会に出てごく普通に知っていないと恥をかきますよ。

英語ですが中学英語の単語と文法、そして勇気があれば英語圏でなら意志の疎通はできます。海外旅行中迷子になってもホテルに帰り着けます。

話の後は散らばってマンツーマンの勉強会の始まりです。

千雨さん、夏美さんの二人に今回の試験範囲の内容をまとめたプリントを渡します。これはあやかさんのノートをお借りして私が作成し全員で修正をかけたものです。出席者全員のテキストとなります。

「これって吹雪が作ったのか？ なんだかやけに詳しいんだが」

「ほんと、カラーだし、解説もキチンと書いてるし」

いえ、学園のネットから過去問を検索して類似問題を作成して問題の主旨を解説しただけです。見た目が素っ気なかったので重要文やグラフに色をつけたりしましたが。先ほどは理想を語ったりしまし

だが、試験の点数が良くなったほうが、つとり早く勉強に対して意欲がでるでしょう。

しばらく何事もなく時間が過ぎていきました。11時半になったとき木乃香さんと千鶴さんがお昼の準備でいったん自分の部屋へ戻ります。そのあいだは楓さんはあやかさん、明日菜さんを私がサポートします。

しばらく明日菜さんの勉強を見てみますが…さすが例の5人組のリーダーと云ったところででしょうか。

「ん？ いや、なんかさあ、覚えてもすぐ忘れちゃうんだよね」

ちよつと涙目でこつちを見上げてます。

「子供の頃のことあんまり、ううん、全然おぼえていないの。なんなのかなー、多分つらいことがあって一生懸命 忘れようとしたから物覚えが悪くなったのかなって」

あやかさんが心配そうな顔でこちらをうかがっていますね。

記憶喪失ですか。子供と云うことならの外傷性、心因性が考えられますね。薬物性も考えたくないですがありえますね。

「その、原因には心当たりがあるんですか」

「私は孤児なんだけど、子供の頃高畑先生の保護された以前の記憶ってないの」

話が痛い方向に進んでいます。私が振った話ですから今更流せません。

「孤児って云うよりも身元不明らしくて高畑先生が保証人になってくれて麻帆良の初等部に転入したあたりが覚えている一番古い記憶」
身元不明、記憶喪失、明日菜さんなら昔もきつと可愛らしかったでしょう。…何か犯罪の香りがただよってきました。どうしましょう。
「思い出したい…ですか？」

「え」

「昔のことを思い出したいですか？　もしかしたらつらい記憶しかないかもしれませんよ。思い出したくないから忘れてしまったのかもしれません。いまさら忘れてしまった過去なんて不要と考えるならそれも正しい選択のひとつでしょう。ですが、もしかしたら、中途半端に過去を思い出したい、やっぱり怖いと云う感情が記憶になにか作用しているかもしれません」

「うん、ときどき怖いよ。思い出しちゃいけないような気がするし。でも、やっぱり本当は知りたい。自分の本当の名前、両親のこと」

「それならば、決心しましょう。つらくて忘れたかった記憶でも今の明日菜さんならきつと受け止められますよ。大丈夫です。たとえつらくてもそれを支えてくれる友人なら沢山いますよ」

そう云ってあやかさんの方を見ます。そんなに真っ赤な顔をしたら心配していたのがまるわかりですよ。明日菜さんもそれに気づいてやはり顔を赤くしてうつむいてしまいました。なにか二人してお見合いでもしているかの様です。

「その、ありがとね、吹雪さん。私、頑張ってみるよ」

「はい、明日菜さんが頑張り屋なのは皆さんご存じですからほどほどに」

12時を少しすぎてから木乃香さんと千鶴さんがお昼の用意を持ってどつてきました。13人分ともなると結構な量です。

「明日はちょっと用事があるんで午前中は出れないんだけど」

千雨さんがお昼を食べながら云いました。

「はい、自由参加ですから構いませんよ。お出かけですか？」

「いや、一応部屋にはいるんだが…」

言葉を濁す千雨さんです。まあ、一日中勉強しろとは云いませんし、問題ないですか。

2002年10月13日 日曜日 昼

勉強会も二日目ですが順調にすすんでいます。

今日は私と千鶴さんが食事当番です。私の担当はサンドイッチで、朝のうちに用意は完了しています。具をパンで挟んだあと、なじませるために重しをのせて状態で置いておきました。あとはパンの耳を切り落とし食べやすい大きさにカットするだけです。

鈴音さんが古菲さん等、自称机に向かうと眠くなるタイプの方々を引き連れて身体をうごかしながらする勉強を実践されているので足りるかどうか心配です。

「ただいま戻りました」

部屋のドアを開けて部屋に入ると千雨さんの声で『ちよ、ま!』と聞こえてきます。ちよっと待て? シャワーでも浴びていたのでしようか?

どうせ、女同士ですし、お互いに風呂で裸だっただけで見えていますからそれほど気にする必要もないでしょう。と思っただけ大間違いでした。

部屋の中にバニーさんが居ます……

千雨さん?

普段、ほとんど拝むことが出来ない素顔の千雨さんが居ますよ。

普段、ほとんど拝むことが出来ないバニーガールの千雨さんが居ますよ。

えーと、どうしましょう。スルーすべきでしょうか? それともびっくりした表情を見せるべきでしょうか? さて、どちらが千雨さんにとって喜ばれるでしょうか?

「あの一雨さん?」

気にしていません、と云うのは気にしていますと同義でしょうから、

「そう云う、ご趣味でしたか」

ダメでした。

すかっぴり鬱な感じ千雨さんを残しお昼を届けに行きました。

結局千雨さんは午後出てきませんでした。

「ただいま帰りました」

二日目の勉強会終了後、部屋にもどると千雨さんがパソコンに向かっています。しきりで囲まれてはいますが隙間から千雨さんがいるのはわかります。

「千雨さん？」

返事がありません。まあ、軽い天の岩戸状態でしょうか。とりあえず、お茶の準備をしてご機嫌をとろうかと思えます。

千雨さんの電子の城からはマウスを動かす音とプリンター動作音が聞こえてきます。

「吹雪」

呼ぶ前にアマテラス様が現れましたよ？

「お前が私の趣味について黙ってくれるのはわかるんだが、ちょっとだけやっぱり不安なんだ。そこで共犯になれば大丈夫じゃないかって考えたんだ」

とプリントアウトされたものを私の前にさしだします。

え？ 私？

ゴシックロリータやらメイド服やら来た私がいいます、これってアイコラと云うものでしょうか？

いつ作ったと云う以前にいつ写真を撮りました？ いっしょに撮った記憶はありませんよ？

共犯云々と云うよりも恥ずかしい写真で口封じではないでしょうか？

「前々から吹雪は私服が地味だからこう云う服を着せたいとおもっていたんだ」

いや、還暦越えていますし、精神年齢も肉体に引つ張られると云ってもそれなりなので、いまさらその手の服はきついのですよ。

「私に任せてくれれば悪い様にしないから……」

その言葉を云われてうまくいったためしはありません。いや、服を脱がそうとするのは、ちょっと。

結局、千雨さんの泣き落としてメイド服を着て撮影となりました。これが一番おとなしめだったからです。

期末テストの結果はまあまあでした。最下位脱出も果たせましたし、例の5人組も何とか500番台へとランクアップされました。中でも明日菜さんは420番と大躍進でした。最もそれ以上に皆さんが勉強するコツを得られたのが大きいと思います。

06話 学問のすゝめ (後書き)

夕映はバカレンジャーには成りえないと思って書きました。続きは図書館島編になります。途中、吹雪が語っていることは作者の妄言なので脳内でなんか好いこと云ったに変換してください

07話 絡繰茶々丸 (前書き)

今回は短いです。と云うよりも一回にやっけて長さがままままです。

07話 絡繰茶々丸

2002年10月31日 金曜日

放課後、私は夕食の材料の買い出しに街へと出掛けました。いつもは学生寮内の麻帆良マートで買い物していますがもともと寮生向けのお店ですのでオーソドックスな品揃になっています。街中の専門店の方がバラエティーにとんでいるのです。特になにを作るとも決めていないので時折気になった商品を買いたい求めながらふらふらとショッピングを楽しんでいました。

彼女に気づいたのは八百屋でした。緑色の髪、耳の部分から伸びるアンテナ、そしてメイド服…絡繰茶々丸さんです。神妙な顔つきで大根を両の手に持って見比べている彼女は運命の審判を下す女神にも見えますね。

「ごきげんよう、茶々丸さん。夕食のお買いだしでしょうか？」

「…こんにちわ、吹雪さん。質問に対しては答えはYESです」

「茶々丸さんは料理をなさるんですか？」

「はい、私には美味しいという感覚は判りませんが、味覚センサーで成分分析を行うことで飲食可能かどうか判定できます。出来上がったものの感想をマスターから頂いて次回にフィードバックさせることで品質の向上を行えます」

まあ、レシピ通りに作ればふつうに美味しいものは出来ますからね。

「茶々丸さんのマスターとはエヴァンジェリンさんで宜しいのですか？」

「はい、私はミス エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルにお仕えしております」

初めて話しましたがなかなか興味深い方ですね。単に教育型AIとは思えません。

「よろしければお買い物に同行させて頂いても宜しいですか？」

「…ええ、かまいません」

微妙な間がありました。が了解は得られました。

しばらく、茶々丸さんのお買い物に付き合いましたがネットの情報を常時検索できるのでもの選びも適切です。むしろ蘊蓄をいくつか教えてもらいました。

「エヴァンジェリンさんて食べ物では何が好きなのでしょうか？」

「特に好物といったものはありませんが、和食は好まれています。ただし、にんにく、葱類を嫌っておいでです」

「香りが強いものがお嫌なのでしょうか？ 薬味としての葱はともかく玉葱ならば細かく刻んで餡色になるまで炒めればシチュー等のコクだしになります。試しに一般のレシピの半分程度の分量で作ってみてはいかがでしょう？」

「考えてみます」

しかし、お買い物に付き合わせて頂きましたが独特な品と云うものが感じられます。

「吹雪さんは私と一緒に買い物されて楽しいですか？」

「はい、楽しいですが。それが？」

「私はロボットです。私はプログラム通りに受け答えしているだけに過ぎません」

「先ほどエヴァンジェリンさんの好物を尋ねたとき、茶々丸さんは続けてエヴァンジェリンさんの嫌いなものも挙げました。それはプログラムには無い動作だと思えますか？」

「いえ、それもプログラムの範疇です」

「本当にそうでしょうか？ 先ほどの問いですが和食が好きで中華が嫌い、お魚が好きで野菜が嫌いならばあっていますか？和食が好きで、葱が嫌いは本当は整合性がとれていません。茶々丸さんが和食が好きのあとでエヴァンジェリンさんの為人ひとにならを表すには葱が嫌いと言う言葉が好いと判断したのではないですか？」

「いえ、わかりません」

「茶々丸さんは人間には魂があると確信されているみたいですが何故でしょう？ 魂の有無は人間にとっても最大のテーマの一つで、有るとも無いとも結論は出ていません。在るのは信じるか信じないかだけです。つまり、茶々丸さんは人間には魂が有り、ロボットに無いと信じている。そうでしょうか？」

「…はい、そうなります」

「人間に有るならば猿に有るのでしょうか？ 犬や猫には？ 鳥や昆虫は？ どこで線引きすれば宜しいのでしょうか？ 人間だけに有るならば猿から進化した人類はいつから魂をもったのか？

ちよつと視点を変えましょうか。今までは理屈で魂が有るか無いかでしたが私自身に、私の魂とは何かと問うならば……記憶と思考でしようか。云い換えれば想いですね」

「想い……」

「多分それはすべての生物が持っていると思います。ただ人間ほど濃くない。薄い。それはコンピュータにも云えるかも知れません。コンピュータにはコンピュータの魂があつてそれは人間と違うだけかもしれません。」

まあ、取り留めない話を続けましたが結論を云うなら、茶々丸さんに魂があつても好いんです」

「私に魂があつても好い？」

「ええ、そう。好いんです。それだけなんです」

しばらく茶々丸さんは黙つて立っていました。そして、

「やはり私に魂が有るかわかりません。ですが吹雪さんの言葉はもつと考えてみたいです」

そう仰有つて去っていきました。

これほどのAIがあろうとは…麻帆良以外の技術レベルと比較してもあきらかにレベルが違います。宇宙からの不法侵入？いえ、アカデミーに茶々丸さんを連れて行けば制作者は哲学科への道もひらくでしょう。これも要注意物件ですね。

しかし、思い切り人間くさいですね。今時の人間以上です。まあ、あまり深く考えすぎてしまわなければ宜しいのですが…

07話 絡繰茶々丸（後書き）

茶々丸は以後、説明や返答のあとに余計一言を付け加える様になる。前回同様 吹雪の言動に特に意味はないです…深く突っ込まないでください

次回ネギ登場。今気がついたが楓の話とか冬コミの話があったはずだが書かれていない。

プロットはあるのだが作品にまでならなかったか？ ネタができれば追加できるかな？

2011/04/02 ご指摘から矛盾点修正

08話 ネギ・スプリングフィールド(前書き)

原作に入ります。今回から主人公以外の視点が入ります。

08話 ネギ・スプリングフィールド

2003年2月3日(月) 朝9時

「吹雪」

「来ねえな」

「来ませんね」

ホームルームの時間になっても先生がいらっしやいません。今日から高畑先生に代わって新しい先生が赴任されるらしいのですが、その先生がまだ来ません。しかし、なぜ今頃の赴任なのでしょう。高畑先生の出張が多く授業が滞りがちなのは今に始まったことではありませんからもっと早くに対策をとってもらいたかったです。

「時間にルーズな方は遠慮したいのですが」

先生の代わりに明日菜さんと木乃香さんが飛び込んできました。新任の先生を迎えに行つて遅れているといったメールが来ましたが遅刻するとは遅れすぎです。

「新任の先生でどんな人？」

「すぐ来はるよ、席につかなー怒られるえ」

とりあえず、木乃香さんの一言で皆 着席し静かになりました。

すぐに教室のドアが開き、なぜか少年が入ってきました。いえ、正確には数々のトラップに引っかかり転がり込んで来ました。一瞬、なにこれ、と云う雰囲気になりましたがいつしよに来ていた源しずな先生が新任の先生だと紹介するといっせいにクラスのなかでも好奇心旺盛な娘達が少年に殺到しました。質問を矢継ぎ早にされ少年が目を白黒させています。

「10歳ってマジかよ」

不思議大好き少女千雨さんもまじめな顔でネギ先生を見つめています。わかりますよ。久々にビッグな不思議ですからね、千雨さん。しかし、これでは授業になりませんね。

「あやかさん、質問は自己紹介のときに一人ひとつずつにしましょう」

「吹雪さん？ そ、そうですね。そうしましょう。皆さん…」

いつもは冷静なあやかさんですがなぜか今日はテンションが高めですね。すでに授業時間も残り半分になってしまっているので今日の授業はできませんね。出席番号順に自己紹介と先生への質問をしていきます。毎度のことですが、出席番号一番の相坂さんはお休みなので 出だしてつまづきます。途中、明日菜さんが妙な質問をしていましたが何なのでしょう。一番最後が私です。

「正木吹雪さん」

「はい、正木吹雪です。私は9月の終わりに岡山から転入して参りました。部活動には所属しておりません。特に得意な教科はありませんが個人的には歴史について興味をもっています。英語がやや不

得意ですのネギ先生の授業には期待しております。私の質問ですが、先生はこの大学で日本の教員の資格をとられたのでしょうか？」

「オックスフォード大学ででしょうか？」

あやかさんが云いましたがそれはありえませんかよ。

「英国の大学で日本の教員資格をとるための科目を組むことはないでしょう。文科省の管轄に無いですから。日本で教員免許を得るには日本の特定の大学、もしくは通信課程で教育実習を含めた必要な科目の単位を取ることが条件ですよ」

「あ、教育実習なら今がそうですよ」

いま、何て仰いました？

「そやな、3月まで教育実習だとおじいちゃんも云うてたなあ」

木乃香さんもいまのネギ先生の発言を肯定しました。

ネギ先生はきよとんとした顔をしています、しずな先生の方はあきらかに顔色が悪いですね。

「ネギ先生は教育実習生なのですか？ しずな先生、いったいどう云うことなのでしょう？ 教員免許なしの実習生の授業では私たちは単位を取れなくなるのではないのでしょうか？」

実際に高畑先生の授業は自習が多いので気にしているのです。

しずな先生の説明では能力に問題はなく特例として学园长がみとめ毎回しずな先生が監督するので問題はないらしいのですが…

「それって、しずな先生が担当すれば好いのでは？」

何か釈然としません。むりやりネギ先生に教鞭をとらせるのが目的かのようなのです。そしてうやむやのうちのその日の授業が終了しました。

「近衛近右衛門」

正直、僕は困惑していた。源しずな先生からの報告でわずか一時限も保たずにネギ・スプリングフィールドの教員免状詐称疑惑が持ち上がったからである。いや、実際に詐称なのだが。

「認識阻害に頼りすぎたかのう」

麻帆良学園一帯を覆う認識阻害の境界内では意識していないかぎりどんな現象でも当たり前と判断する様になっておる。また特定の物に対しては意識が向かない様にもな。

しかし今回は本人もあまり深く考えていなかったせいで自ら実習生であることを暴露してしまっただし、なにより僕自身も孫娘の前でそう発言していたため複数の人間が同時に疑問を呈したため認識阻害がくずれてしまったらしい。幸い しずな先生が取り繕ってくれたが、しずな先生にも負担をかける結果になってしまった。

そして、原因になった女生徒、正木吹雪。僕が昔所属していた関西呪術協会で云われていたことを思い出す。

『柁木には手を出すな』

正木は柁木の分家と聞く。岡山のある地方に住むとてつもない力を

持った一族。かつて鬼を封印し、不老長寿の秘密を奪った一族。その力を求めて何人も呪術者が彼の地に入ったが誰一人として戻ってこないと云う。彼女の出身地はまさしくその村で保護者は柁木姓転入にあたっては監視をつけており、今まで目立った行動はなかったが…

とりあえず、大学部でネギの単位を拾える様、根回しの電話をかけることにした。

「吹雪」

放課後、ネギ先生の歓迎会を開くことになったのですが肝心のネギ先生が捕まらず手分けして探している最中 高畑先生に遭遇しました。そう云えば高畑先生もお呼びする予定でしたね。

「こんにちは高畑先生、少々お話をしたいのですが」

「こんにちは吹雪くん、何の用かな」

「実はネギ先生について…!?!」

何か強い力を感じました。と、思いきや高畑先生が今感じた強い力の方向に向かっけいきなり走り出しました。人の話も聞けないのでしょうか、この元担任は？

高畑先生を追って林に入った私が見たものはネギ先生と……裸にブレザーを着ただけの明日菜さんです。羞恥のためしゃがみ込んだ明日菜さんをかばう様にネギ先生と高畑先生の間私に私の体を割り込ませます。そして体を隠してもらったためブレザーを脱いで明日菜さんに渡しました。

「高畑先生は至急、明日菜さんの着替えを用意してください」

「いや、僕よりも君の方が」

「裸の明日菜さんを男性にお委せするわけには参りません。とりあえずジャージでも買ってきてください。それとネギ先生は職員室でお待ちください。納得いく理由を聞かせてもらいます」

有無を云わさず二人に命令をします。

高畑先生が戻るまでの間に事情を明日菜さんから訊き出せました。

のどかさんが階段から落ちたとき、ネギ先生が何かしたら のどかさんの体が不自然に空中で止まったこと。

ネギ先生に問いただしたら魔法であることを告白したこと。

ネギ先生が記憶を消去すると宣言したあと、強い風が吹き服がちぎれ飛んだこと。

さらに朝ネギ先生を迎えに行ったときのくしゃみで同じく服がちぎれ飛んだこと。

諸々を聞いているうちに高畑先生がジャージを持ってきました。本
当にジャージしか買ってきていません。本当に使えない人ですね。
購買でもＴシャツやショーツぐらい売っているでしょうに。ノーパ
ンノーブラで先生方に会わせるわけにもいかないので購買でショ
ーツとＴシャツを買いました。幸いスカートとシャツも有ったのでそ
れも購入してトイレで着替えてもらいました。

その間にあやかさんにネギ先生が会議中で捕まえられず、会議が終
わるまで近くで待機している旨のメールを打ちます。

「近右衛門」

結局一日保たなかった。

僕は高畑先生からの電話を受け職員室にいたネギ先生としずな先生を呼び出し、二人に状況の説明をしてもらい：ため息を吐いた。しばらくして明日菜さんと吹雪くんが高畑先生と共にやってきた。

「正木吹雪です。こんにちは近衛学園長」

明日菜くんに比べると体つきは同年齢とは思えないほど幼いが目には強い力が宿っている。

「うむ、話はネギ君から聞いておる。当事者だけで話し合いたいんだが吹雪くんには席を外してもらえんじやるか？」

「もし、それが学園長の本心なら私は明日菜さんをつれて警察に向かい婦女暴行未遂事件として保護してもらいます」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。なんじゃその婦女暴行未遂とは」

「私が現場に着いたときには、ほぼ全裸に近い明日菜さんとネギ先生が対峙していました。客観的に見て明日菜さんがネギ先生に性的暴行を受けている様に見えましたが？」

「ネギ君はまだ10歳じゃぞい」

「はい10歳で大学を卒業されるほどですから性的に早熟でもおかしくはないかと」

吹雪くんの言葉には説得力があり状況証拠もそろっている。英雄ナギ・スプリングフィールドの息子が婦女暴行未遂で逮捕とは…

「むろん、明日菜さんが私の同席や警察への保護を拒否するならば明日菜さんの意志を尊重します」

「吹雪ちゃん、ありがとう。私は吹雪ちゃんにいてほしい」

「わかった。同席を認めよう。ただしこのことは他言無用じゃ」

「犯罪に関わることなら承伏いたしかねます」

「む、とりあえず話を聞いてもらうらうぞ」

なんともやりにくいぞ。

「吹雪」

学園長からの話は驚愕！ ……と云うわけでもなかったですね。

要点は、

麻帆良学園は魔法使いの拠点である。

学園長を始め学園には魔法使いが先生として多数在籍しており、生徒にも魔法使いがいる。

魔法使いは魔法の存在を隠匿する義務があること。

魔法使いであることを知られた魔法使いは、相手の記憶を消去、改竄すること。

ネギ・スプリングフィールドは魔法使いの試験のため日本で先生を
することになったこと。

ネギ・スプリングフィールドが明日葉に行ったセクハラは魔法の暴
走？ が原因であること。 等々

なるほど自称魔法使いさんたちがこの麻帆良の影の支配者でしたか。
私としては棚ぼた的に情報を得ることが出来ました。ところで魔法
と超能力とは違うのでしょうか？

「さて、どこから突っ込むべきでしょうか。魔法の実演がなければ
精神科か、教育委員会か、警察か、どこに相談すべきか悩むところ
でした。まずはなぜ魔法を隠すかですが」

「うむ、魔法の便利である反面、危険な面も併せ持つ。これは何に
でも云えることじゃが。歴史的に宗教がらみの迫害を受け、地に潜
つて以来 表だっては活動してはおらん。しかし、我らは影で人の
ために魔法を役立てようと日夜頑張っておる」

「はい、僕たち魔法使いは日夜、立派な魔法使いを目指しているん
です」
マギステル・マギ

ネギ先生が元気よく云いますが、学園長の怪しさもあって新興宗教
の教祖と洗脳された信者にしか見えません。マギステル・マギ？マ
スター・メイジ？魔法使いの上級職でしょうか？

「そのマギステル・マギとは女生徒の記憶を消しても、あるいは失
敗して服を消しても宜しいのでしょうか？」

いきなりネギ先生の元気がなくなります。

「その、魔法使いであることがばれると僕おこじよにされちゃうので」

おこじよ？ 先生方を見ると一応 うなづいていますが本当なのでしょうか？

「つまり、一部始終を聞いた私たちも記憶を消されるのですか？」

こう云うと明日菜さんが私の手を握ってきました。明日菜さんは先ほど記憶を消されかけましたからねえ…それとも逃げるときに私を引っ張ってくれると云うことなのでしょうが？

「いや、二人が他言しないと云うなら記憶の消去はやめよう」

「…世間に広める様なことはいたしません」

瀬戸さまには報告いたしますけどね。恩着せがましい云い方ですがそこは流しておきましょう。多分話が進まなくなります。

「私も他言しません。けど、このか は知ってるの？」

「いや、このか には教えておらん」

またもや要約しますと

麻帆良学園の母体は関東魔法協会と云って西洋発祥の魔法使いが主な構成メンバーである。

近衛木乃香の父は本土着の魔法集団、関西呪術協会の長である。

木乃香の父は武道の実力者でもあり有名人である。

木乃香は日本でも有数な魔力の保持者であり、後継者争い等に巻き

込まれない様に麻帆良学園に入学し魔法と縁のない生活をしていた。

「それじゃ、このか とネギ先生を同居させるってまずいんじゃないの？」

ちよつと聞き流せない単語がありました。

「なんですか、その同居というのは」

「実はネギ君の住むところが決まっていなくての、このか とアスナちゃんの部屋に同居してもらおうことになったんじゃない？」

「それはまずいでしょう。男性教員と女生徒の同居などスキャンダルです」

「でも、そうしないと僕、今日泊まる場所がないんです」

ネギ先生が悲しそうに訴えてきます。子供を泣かすのは趣味ではありません。

「ちよつと失礼します」

携帯電話を取り出します。

「…あやかさん、吹雪です。こちらはもう少しかかりそうです。そちらは………はい、わかりました。それでちよつとお願いが、はい、ネギ先生ですが学園の手違いで今日泊まる場所がないそうなのですがあやかさんのご実家関係で近場にビジネスホテル等は……いえ、まあ、そう仰有るなら構いません。しかし、料金はちゃんと頂いてもらわないと後で面倒なことに………はい、ネギ先生にお伝えします。」

はい、後ほど」

電話を切って学園長に向かって云います。

「雪広あやかさんの方で、ご実家が経営するホテルを一室、予約し
てくださることになりました。後で迎えをよこされるそうです。こ
れなら問題ないですね。学園長、ネギ先生」

スイートルームとかリムジンでの送迎とかは聞いてませんよ。空耳
です。

学園長も苦虫を噛みしめた様な顔で了承してくれました。請求され
る料金を見れば大急ぎで住居を探してくださいでしょう。ちなみに
一泊20万のところを5万で好いそうです。

「木乃香さんとネギ先生を同居させるのは、ネギ先生が木乃香さん
に魔法ばらしてしまうことを期待しての措置ではないですか？」

「しかしじゃな、あれの魔力ではいつ魔法に目覚めるかわからんし、
このまま何も教えず放っておくのも危険じゃし」

間接的に肯定しましたね。

「それならば、木乃香さんのお父様に直接談判するか、あるいは木
乃香さんに直接云えば良かったのです。いえ、木乃香さんに魔法の
ことを打ち明けるなら麻帆良学園に通うことの意味はなくなります
ね。なるほどネギ先生が魔法をばらして、それを知らんぷりしてお
けば木乃香さんをお膝元に置いておけると？」

「そんなことはない」

「そうですね。では、そう云うことなのでしょうね。さて、次の質問に移る前に高畑先生にお訊きしたいことがあります。今ここにいる先生の立ち位置は魔法先生ですか？それとも明日菜さんの保護者ですか？」

「それは一緒じゃいけないのかい」

「いけなくはないと思いますが、魔法使いの方は蝙蝠さんが多いみたいですからね。率直に訊きますが明日菜さんには高畑先生と出会う以前の記憶がありませんが、それと魔法は関係していますか？」

私の言葉に高畑先生はあきらかに反応しましたね。明日菜さんもやや呆然として高畑先生を見つめています。

「ご返事確かに承りました。高畑先生も学園長と同じ穴の貉ですね。明日菜さんから記憶を奪ってまで魔法から遠ざけたのなら、今更ネギ先生には会わせるべきではありませんでしたのに」

まるで鏡に映したかのような状況です。

「ところでネギ先生の処分はどうなりますか。魔法バレ、明日菜さんへの記憶操作未遂、セクハラ行為の数々。おこじよですか？」

「そこなんじゃが、どうにかならんかな」

「そうは云われても、ネギ先生からは謝罪の言葉もないと明日菜さんが仰っています。私も先ほどの件ではネギ先生が謝罪しているところを拝見しておりませんし」

外国人ですから安易に謝罪しないということなのでしょうが？

「いや、ネギ君。君のアスナくんへの行為は非常に礼を逸した行為だった。反省し謝罪したまえ」

学園長の言葉にネギ先生はコメツキバツタのように頭を下げ、謝罪のことはを口にします。基本、素直な子なんでしょうか？

「宜しいですか？明日菜さん。では、ネギ先生の処分に関しては学園長に一任させて頂きます。それと今後は魔法に関しては、存在は知っているが関わり合いを持たないというスタンスでいきたいと思えますが異存はないですね。ネギ先生が魔法バレしそうなときにはフォローぐらいはしますが。ところで、2-Aで魔法に関係している生徒について教えてもらえますか？ 連携して対処したいのですが」

多分ネギ先生のうっかりはしばらく続くでしょう。

「しかたないのう、春日美空君、桜咲刹那君、龍宮真名君、エヴァンジェリン君、絡繰茶々丸君は確実に知っている。特に刹那君はこのかの護衛役をあれの父から依頼されておる。あと、おそらく知っておるだろうと云うのは超鈴音君、長瀬楓君、葉加瀬聡美君、あたりじゃろうか」

「わかりました。ところで、ホームルームで話題になったネギ先生の教員免許の件ですが、もちろん誤魔化しなどないでしょうね。3月までは教育実習扱いですから4月までにはちゃんと必要なカリキュラムを履修されていることでしょう。マギステル・マギさん」

まあ、今回はここまででしょうか。

「では、私たちはこれにて失礼させて頂きますけれど、2 - Aでネギ先生の歓迎会を企画しており、その為ネギ先生を捜しております。すでに準備も完了しておりますのでお説教は短めにしてくださいと助かります。あっ、このことを呪文で忘却してもらえればもっと助かります。サプライズパーティーだったので。では廊下でお待ちしております、ネギ先生」

そう云い残し、明日菜さんをつれて学園調室を後にしました。

「近右衛門」

完敗じゃった。

閉められたドアを見て僕は思った。相手に話の主導権をにぎられたものの一度も取り返せなかった。さらには うかつな言葉から相手に情報をもぎ取られていく。

「さて、ネギ君。今回の件について反省文を明日中に提出してもらうぞ。また、アスナくんの服は弁償することとし費用はネギ君の給料から天引きとする。そして、今年度中に教員免状に必要な科目の単位をぜんぶ取ってもらうぞ。最後に…すまなかった。僕のわがままでネギ君にやつかない役目を押しつけるところじゃった」

「それについては僕も考えが足りなかった。反省している」

高畑先生も続いてくれる。僕たちの言葉にネギくんも謝罪を受け入れてくれた。

「しかし、正木吹雪とはどのような娘なんじゃ？しずな先生、高畑先

生
」

「恥ずかしながら僕はあまり接点が無かったんですよ。ただタレントがそろいすぎてまとまりに欠けていた2 - Aの要石の様な立場にいますね」

「そうですね、彼女がまとめて雪広あやかさんが引つ張るとというのが今の2 - Aでもっとも効率の良い運営の仕方になっています。彼女自身、学業の方もかなり優秀ですし、問題になったことはないですね」

今回の件では正木吹雪を非難する要素はないが潜在的に危険人物と僕は認識した。

08話 ネギ・スプリングフィールド（後書き）

ネギは5日間宿泊、学園側は規定の宿泊費以上の支払いは拒否 学園長が立て替え

今回はなぜ学園長が木乃香たちとネギ先生を同居させようとしたか？の第一弾
なお京都弁に関してはもんじろう先生頼みなのでスルーの方向で

09話 ネギ先生歓迎会 裏(前書き)

主人公は木乃香の内情を訊こうとして刹那に接近します。

09話 ネギ先生歓迎会 裏

2003年2月3日 午後4時

「吹雪」

ネギ先生が学園長から解放され、しずな先生と高畑先生を伴って2-Aに着いたのはそれから30分あとでした。私にとっては最早なれたこのノリですがネギ先生は目を白黒させておりますね。

刹那さんが一人で壁際にいらしたのでそっと私は近づきます。いつもながら、抜き身の刃物の様な感じの方ですね。

「刹那さん、少し宜しいですか？」

「なんですか」

警戒感むき出しです刹那さん。

「木乃香さんとネギ先生が同居されることはご存じでしたか？」

「このちゃんが？」

このちゃん？

「は、はい学園長が木乃香さんが魔法を知るきっかけとしてネギ先生を利用しようとしたのです。まあ未遂に終わりましたが」

一連の騒動の顛末を刹那さんに説明します。

「そんな、学園長がそんなことを」

「はい、そこで確認ですが木乃香さんの魔力が大きすぎて、いずれ魔法使いとして顕現するというのは事実でしょうか」

「それは多分……… 本当です。お嬢様は見る者が見ればさながら力の塊でしょう。日常の何気ない動作で何らかの魔法現象を発生させてもおかしくはないのです。下手をすれば暴走した力で自分自身を傷つけることもあります」

それを、防ぐのも私の仕事ですと刹那さんが続けます。
そうですか、学園長のはったりではなかったのですか。

「放っておくのも危険なのですね。ところで関東魔法協会と関西呪術協会は仲は宜しいのですか？」

「いえ、悪いです。表だつて事を起こしていませんが、水面下では足の引つ張り合いをしています。長同士が義理の親子関係でパイプが繋がっています。組織としては事実上冷戦状態でしょう」

刹那さんからの説明では関西呪術協会はもともとは平安京を守護した陰陽寮を祖とした団体だそうです。陰陽寮が廃止され勢力を失い始めた日本の呪術者に代わって台頭してきた西洋魔術。その西洋魔術に対抗するため幾つかの魔法結社が集まって結成したのが関西呪術協会だそうです。元々関東、関西と名乗った訳ではなく、関東、もしくは関西に本拠地を持つ魔法集団という意味合いだったそうです。そのどちらにも属さない小規模な結社は日本各地にあるらしいです。

例えるなら関西呪術協会は地元の商店街が構成する商工会で、対す

る関東魔術協会は大手のスーパーマーケットチェーン店と云うところでしょうか。

関西呪術協会は多数の魔法結社の集団であるがゆえ一枚岩と云い難く権力争いも熾烈で、そのため木乃香さんの父親は木乃香さんを麻帆良学園に入学させたそうです。関東魔法協会こと麻帆良学園が関西呪術協会から木乃香さんを守り、学園長が関東魔法協会から木乃香さんへの干渉を防ぐ、と云う事だったのでしよう。

「そう云うことだったのですか。となると、学園長の策は次善ぐらいの案だったのでしょうか？」

「どう云う事ですか？」

「木乃香さんの魔法の発現が避けられないと思つた学園長が直接木乃香さんに魔法の存在を教えた場合、組織の目からみれば関西呪術協会の要人保護の要請を関東魔法協会が不履行したと云うことになります。これは他団体から関東魔法協会への、関東魔法協会内での学園長への信用の失墜につながります。しかし、ネギ先生がもとで木乃香さんに魔法がばれた場合、未熟な見習いの暴走と云う形でネギ先生を処分することで決着をつけられるでしょう」

「それでは、ネギ先生が好い面の皮では？」

「ネギ先生は子供ですから、と云うことで軽い罰になるのでは？
実際若いですしやり直しするにも十分可能でしょう」

うまく誘導すればすすんで泥を被ってくれそうです。
しかし、難しい問題ですね、木乃香さんの魔法の発現が避けられないならばいつそ第三者の私か明日菜さんから話をもっていくしかないやいやいや、やはり間接的にも明日菜さんを魔法に近づけない方

が好い気がします。

「刹那さんは関西所属なんですよね」

「はい、でも内密につけられた護衛なので表向きには関東魔法協会に食客扱いでやっかいになっていますが」

「とりあえずこのことを木乃香さんのお父さまに報告してください。木乃香さんへお父さまから魔法について説明なされるのが一番波風が立ちません」

「わかりました。長と相談してみます」

「このクラスには魔法に関連する生徒あと4人いるとお聞きしましたが、皆さん ネギ先生が魔法をうっかりばらした場合フオーロをして頂けるのでしょうか？」

美空さん、茶々丸さん、真名さん、エヴァンジェリンさんの名を挙げます。

「正直、美空ぐらいでしょうか。龍宮は報酬がないと動きませんし。エヴァンジェリンさんと茶々丸さんは基本不介入でしょう。私もお嬢さま優先ですので」

「まあ、あまりにも酷ければさっさと英国へ戻ってもらっただけでしょうし大丈夫でしょう」

「…ところで吹雪さんはあの『柎木』なのですか」

「正木ですけど？ どういう意味で正木なのですか？」

「はい、あの、関西にいた頃、岡山の榎木神社周辺に住む榎木の一族には手を出すなと云う話をなんとも聞かされたので。かなり優秀な剣の使い手でちょっかいを出した者が皆痛い目にあっている」と

「そう云う意味ならその『榎木』ですわね。もしかして学園長もその話は知っておられるのでしょうか？」

「はい、関西では有名な話ですし学園長も昔は関西呪術協会の一員でしたので知っていると思いますが」

ああ、これは想定外でした。うちの村の人間は基本、足下（封印した鬼）か、真上（宇宙）だけを見て、周り（地球）については興味を持っていませんでした。考えてみれば実力で中立を勝ち取っていたわけですし周りにもっと気を遣うべきでした。偽名を使えば良かったのですがさっさと勝仁さまが本名で申し込んでいましたし。

「もしかして、最初の頃私を警戒なされていたのはそれでしたか？」

「は、はい。すみませんでした」

木乃香さんは警護対象、私は要注意人物として注目されていたのですね。真名さんは魔法生徒仲間でしたか。まあ私はもっと酷いことを刹那さんに対し考えていたのですから責めはしません。

「ばれられたったとは、赤面の至りです。いまさら取り繕っても仕方ありませんので告白しますが、私も とある目的を持ってこの学園に通っています。大事な物を落としたのか、置き忘れたのか判りませんがそれを探すお仕事です。この件に関してはお見逃しいただければ幸いです。取引とは云いませんが木乃香さんの関してはお力

添えができると思います」

「本来ならば今の話を学園長の報告するべきですが、それではあなたに対して不義理となります。ただ、あなたの話だけでは今すぐ返事はできません」

「そうですね、それが宜しいでしょう。ただ、刹那さんが私を危険と判断されるまで私が『柁木』であることを公にしないで頂ければ恩に着ます。ところで、実際、刹那さんはどの様なお仕事をなされているのですか？」

「はい、学園内の護衛は魔法先生や生徒によって監視や結界があるのでそちらにまかせています。代わりに私も学園の防衛のために監視任務に協力しています。お嬢様が学園外に出るときは影から護衛します」

「学園の防衛とは敵対組織がいるのでしょうか？」

「関西呪術協会はときおり間者を忍ばせてきます。所属不明の者も多いです。麻帆良には世界樹や図書館島等秘密が多いのを探ろうとする侵入者は事欠きません」

しかし、それを守るのが教師と生徒というのはいかなものでしょうか？自称魔法使いさん達にはいろいろと問いただいたいことが多いです。

「刹那さん、もし私が木乃香さんに危害を加えるならばどうしますか？」

「切ります」

短く、しかし迷い無く云い切ります。すでに覚悟はできているのですね。

しかし、その答えでは合格点はあげられません。あなたの力量では私に及びません。見抜けないのは経験不足でしょうか。応援を呼ぶとか、木乃香さんを連れて逃げるとか、現実的な案を出してほしかったです。

「切られるのは痛いですから、やめておきましょう」

そのあと、お互いの携帯電話の番号とメールアドレスの交換をして剎那さんと別れました。

「近右衛門」

夜中、近衛近右衛門に関西呪術協会の長であり、義理の息子でもある近衛詠春からの電話を受けた。タイミングが良すぎる故、今日のこと詠春の耳に入ったのかと思ったが話の内容は二人にとっては良くある協会の近況や不仲に対する懸念や打開策の検討であった。話が一段落してから学園の様子を訊かれた。

『そう云えばナギの息子はもうそちらに行っているんですか？』

「ああ、今日着いたところじゃ、木乃香のクラスの担任にしてみただい。ナギとは違って理性的な子じゃが、少しやんちゃなところはあれの息子らしいぞ」

『そうですか、私もすごく興味がありますので早く会いたいですね。お義父さんなら、ネギ君や木乃香に適切な指導を行ってもらえると信じていますよ。ああ、それと修学旅行の件ですが…』

電話を切って僕は今日何度目になるかわからないため息を又吐いた。

『釘を打たれてもった』

詠春からの言葉の本当の意味は判った。いま、木乃香かわいさでうかつに動けば関西呪術協会との関係をこじれさせてしまう。ネギ君の行動を詠春が観察しているなら迂闊なことはさせられないしこのう。しかし、問題はどこから情報が漏れたかじゃ。木乃香の護衛、桜咲刹那か詠春の独自の判断なら好いが、あの正木吹雪が一枚かんでいるとなると面倒なことになりそうじゃ。榎木の一族が自分たちの領土以外にでてくることは稀だから麻帆良に来た目的も不明じゃ。吹雪の今日の対応を見る限りでは魔法関係に明るくなさそうじゃが、鬼の封印を護る一族とも云われておるし実際どうなんじゃろう？と。りあえずは、情報を集め、監視を密にするしかないのう。

09話 ネギ先生歓迎会 裏（後書き）

主人公は木乃香の内情を訊こうとして刹那に接近しました。できれば違う視点からの魔法協会の姿を知りたかったからです。神の視点からすればここが彼女のルビコン川。

なぜ木乃香が麻帆良に通っているか？ に対して考えた設定です。古い歴史故に派閥が多い関西呪術協会
メガロの特定の派閥の出先機関である関東魔術協会 と考えています。

ネギの同居に関しては学園長はそのほかにも一石二鳥とか考えていたもよう。

それと木乃香の魔力顕現について

詠春：もうちよっと、もうちよっと

近右衛門：むり、もうむり

ぐらいの意識差、

10話 守る会発足

「吹雪」

「では第一回 近衛木乃香を守る会 会合を始めます」

女子寮の刹那さんの部屋で明日菜さんが開会の言葉を宣言します。近衛木乃香を守る会とは先日の騒動の際 木乃香さんの潜在的な危機について知ってしまった明日菜さんが発起人となつて設立。護衛役の刹那さんと私がメンバーです。正確には明日菜さんにむりやり呼び出されたわけですが。ちなみに刹那さんのルームメイトの真名さんは少し離れた所に座つて私のおみやげのケーキを食べています。

「わたしは無関係だと思つのですが」

と、明日菜さんに云つてから『あなたがばらしたのですか?』という視線を刹那さんに送つてみます。刹那さんは『とんでもない』といった顔で首を振ります。昨日、刹那さんには木乃香さんの護衛を手伝つと申しましたが能動的に行うつもりはありませんでした。情報提供とか口裏合わせぐらいを想定していましたが。

「ごめん、でも吹雪ちゃんは頭が良くて頼りになりそうだから、お願い」

そう云われると悪い気はしませんね。

心配なのはむしろ明日菜さんです、こんな会を立ち上げれば自動的に魔法に関わつてしまいますから。……明日菜さんが魔法に関することをすっかり忘れて無防備になるよりもましでしょうか。

明日菜さんのご気性では木乃香さんの危機に自分だけ逃げをうつと

云うこともできそうにありませんし。

昨日の夜には刹那さんからの正式な協力の要請がありました。関西呪術協会の長、近衛詠春さんにはクラスメイトとしか報告してないそうです。一応、信じておきましょうか。

「ところで、このかから聞いたんだけど刹那さんって このかの幼なじみなんだって？ こっちに来て一緒にになったのに以前の様に接してくれないって云っていたわよ」

ほう、明日菜さんも木乃香さんから事前に情報収集をされるとは結構本気みたいですね、しかし…

「それは、どう云うことでしょうか刹那さん」

聞いていませんよ？

「その、ですね」

刹那さんは昔、木乃香さんと親しくなされていたそうですが、木乃香さんが川で溺れたとき助けられなかったことを悔いて、二度と同じ失態を繰り返さないため、いったん木乃香さんと離れて修行に励んだそうです。

「このかお嬢様が麻帆良に移られたのを機に私が護衛に抜擢されましたがまだ未熟ゆえお嬢様の前に立てないと云うか、そのう影からお嬢様を守っていいこうかと…」

はいはい、『サヨナラ』と云って別れた後10分後に出会ったと同じ状態ですね。

顔を赤くして話す刹那さんですがやっていることがおそまつです。

「刹那さんの想いはこの際置いておきます。護衛なら四六時中そばにいるのが理想なのですから幼なじみの立場を有効に活用しなくてどうしますか？」

「そうだよ、桜咲さん。このか も態度が急に冷たくなって、ときどき睨む様にこのかを見るから 何か恨まれることをしたんじゃないかって云ってたよ」

「そんな」

がつくりうなだれてしまふ刹那さんです。

「まあ、過ぎたことは致し方有りません。お二人の関係以外には悪影響がでていないのですから。明日から刹那さんは木乃香さんにとったりくっついて過ごす様にしてください」

「えっ、い、いまさらちよっと」

「護衛なら自分の体面よりも護衛対象の安全を優先させなさい。だいたい、護衛対象に気づかれぬ様に護衛するなんて無理です。街で不良にからまれたら当然木乃香さんの前にでるわけでしょう。そんなことが数回続けばさすがに木乃香さんでも気づくでしょう」

「そうだよ。事情を知らないと桜咲さんがむりやり このかの護衛をさせられて怒っているとか考えないかな？」

「あり得る解釈でしょうね」

「そんな」

ああ、刹那さんが落ち込んでいます。

「話を戻しますが、要は刹那さんが木乃香さんと仲良くなれば好いだけの話です。実際、いきなり関係改善を刹那さんが行くと云うのも不自然ですので明日菜さん、その辺のフォローを宜しくお願いします、と云うよりも力づくで刹那さんを木乃香さんの横に引っ張って来てください」

「了解しました。隊長」

敬礼しながら明日菜さんが云います。私が仕切っていますからしょうがないですか。2 - Aではあやかさん以外では私がリーダーシップをとることが多いです。自分がやれば部下より早く終わる仕事は自分でやってしまう悪い癖がありますからね。上司の水穂さまもそうです。

その点では瀬戸さまは割り振りの達人ですよね。……瀬戸さまに割り振られた仕事を部下に任せられず自分で処理をする……婚活などする暇など生まれませんか。いやいやいや、今は木乃香さんの話です。

「ところで、刹那さん、木乃香さんのお父さまからはご返答有りましたか？」

「はい、長期の休みにお嬢様のご様子を見て魔法のことを打ち明けるかどうか判断すると仰有ってました。そのため夏休みまでは今の状態を保持してほしいと」

「春休みは？」

「多分帰らないと思うよ。このか去年も帰らなかったし」

まあ、一週間程度ですからね。

「そうになると少なくとも半年間は木乃香さんを守らなければならぬのですね。ところで外部から木乃香さんにちよっかいを出される方は多いのですか？」

「いえ、いまのところあえてお嬢様に手を出そうとする者はいません」

「なら、学園長とネギ先生の動向さえ気をつければ好いのですが」

「学園長には長が念押しをすると話していました」

「そうですか、では木乃香さんにネギ先生をあまり近づけさせないという方針でいきましょう。明日菜さんもネギ先生、いえ魔法使いたちにはあまり接触しないほうが好いかもしれません」

「そうなの？」

「ええ、魔法と関わることは日常との決別を意味する可能性があります。刹那さんは極端ですが交友よりも任務を優先させていますし。魔法を隠匿するならば近い友人にも隠しておかなければなりません。ときには嘘を吐かなければならないときもあるでしょう。しかも明日菜さんは…」

「うん、高畑先生にもう一度訊いたけど何も話してくれなかった」

「そうですね。明日菜さんにとって魔法とは今まで空想上の世界でした。意識的にはあり得ない世界、例えば壁があつて進むことが出来ない場所という認識だつたはずです。しかし、魔法が存在すると知つたいまその壁は無くなり、今まで以上に広い世界があるのがわかります。けれど、壁があつた場所には明日菜さんには見えない線があり、それを踏み越えれば今までの生活に戻れなくなります」

すでに越えてしまつた感がありますが…

「その見えない線を見るためには明日菜さんがもつと魔法について知るしかないのでしょうか。一番やつてはいけないことは、見えない線に見えないまま近づくことなのですから。」

刹那さんは明日菜さんが不用意に線に近づいたら引き戻してください。明日菜さんにとって魔法に関わることは木乃香さん以上に危険になるかもしれません」

「どつという事、吹雪ちゃん」

「学園長が女子寮に口出し出来るなら普通、護衛の刹那さんと木乃香さんを一緒にするはずです。そこをあえて明日菜さんにしたと云うことは何らかの意味があると思うのです」

「私に…」

「まあ、仮説の一つですけど」

言葉では仮説と云いましたが確信はあります。あの学園長には老獪と云う言葉がよく似合いそうです。

「拡大解釈するなら2 - A自体が魔法バレを期待されている節があ

りますね。刹那さん、学園長からネギ先生の本当のプロフィールを伺っていますか？」

「イギリスのメルディアナ魔法学校を飛び級、主席で卒業したことで魔法世界の英雄ナギ・スプリングフィールドの息子であることぐらいです」

「なに、その英雄って」

「えっと、魔法世界の大戦を終了させたそうです。その後、世界各地をNGOとして紛争地域での復興支援とか災害救助とかをしています。たそうです」

魔法世界に大戦：ですか。でもうかつにつっこみをいれると危険そうですね。刹那さんは結構その手の情報を提供してくれますが、大っぴらに話しても大丈夫なんでしょうか？

「で、そのネギ先生のお父さまはいま何をなさっているのでしょうか？」

「十年ほど前に亡くなったそうです」

「そうでしたか。」

話を戻しますがネギ先生は魔法使いたちにとっては期待のエリートであると云うことですね。その彼と私たち2-Aの面々をくっつけることで何らかの利益が彼らに生まれるのかもしれない」

「もしか、ネギ先生のパートナー探しでは」

「何ですか刹那さんそれは」

「はい、術師は呪文の詠唱中無防備になります。陰陽師ならば式神に護衛させますが、西洋の魔法使いは剣士などと特別な契約をして護衛させます。これがパートナーですが男女間での契約は結婚と同義とされるそうです」

「うそ、私やこのかがあのチビッコのお嫁さん候補なの？」

「確かに2-Aの面々なら能力的には他のクラスよりずば抜けていますね。ただ、ネギ先生のパートナー候補を2年も前から用意していたのか疑問ですね。まだ要注意人物を一カ所に集めたと云ったほうが信憑性が高いでしょう」

しかし一般人を魔法使いのパートナーに斡旋する？ 教職と魔法使いの二足の草鞋ではなく、教職を魔法使いの道具にしていることになります。いえ、表向き学園を名乗っている以上二足の草鞋も拙いのですが。

「ネギ先生はある意味、道化ですので一部始終 観察しても意味は無いと思います。学園側がネギ先生に何か指示したときこそ注意すべきでしょう。いずれにせよ私たちの本分は学生ですので、勉強をおろそかにするわけにも参りませんし」

「そうだね、私もやっと成績が上向いてきたから、勉強も頑張らないと」

「明日菜さんの今回の目標は100番以内でしたね」

「え？」

刹那さんがびつくりした顔をしています。以前の例の五人衆の印象が強いのでしょうか。確か前回の期末試験では明日菜さんは200番辺りだったはずですよ。

「はは、さすがに100番以内は難しいんじゃないかな」

「でも木乃香さんがもう明日菜さんの先生役はいらないと太鼓判を押していましたよ」

実際、明日菜さんの成績は急上昇中で質問される内容もレベルが格段にあがっています。

「刹那さんは前回の期末、何位だったの？」

明日菜さんの問いに刹那さんが顔をしかめます。そこに、

「刹那はだいたい500番中頃だな」

と、いままでベッドで銃の分解清掃をしていた真名さんが仰有います。いままで見ないふりしていましたがそれ本物ですよね？

「龍宮！」

自分の成績をばらされて刹那さんが大声をだしますが真名さんは平気な顔です。

でも500番中頃とはかなり刹那さんも成績が悪いですね。もしかして、いままで情報をくれていたのはただ考えなしに喋っていたわけではないですよね？

「ちょうど好い口実です。刹那さんは木乃香さんから勉強を教わっ

てください。そして、来年中には木乃香さんと同学力まであげてもらいます」

「そ、そんな、無理です。このちゃん前回70位だし」

「刹那さん。もし木乃香さんが魔法使いとして生きることになり関西にもどって普通の学校に入学するとき木乃香さんに今の刹那さんが入学できるレベルの学校しか選ばせないつもりですか？」

「う…」

「むろんそんなことはできませんよね。刹那さんが同じ学校に入れなかったらどう致しますか？一日中、学校の敷地の外を塀沿いにグルグルまわるおつもりですか？」

「いや、多分その時点で護衛役から外されるから大丈夫じゃないか？」

真名さん、身も蓋も無いことを…

「…勉強しましょうね」

「…はい」

「明日菜さんも木乃香さんが都合がつかないときには手伝ってくださいね」

「私が？」

「人に教えることは自分にとっても勉強になりますよ。明日菜さんはもう十分にそれだけの学力をもっています」

「いや、でもバカレッドに勉強を教えられてもさ、ね？」

「いえ、私からもお願いします。明日菜さん、私に勉強を教えてください」

「ええ！ 刹那さん？」

ともかく、第一回 近衛木乃香を守る会はこうして幕を閉じました。

次の日、明日菜さんが刹那さんを引っ張っていき、木乃香さんと仲直り？を強引のすすめ、早速その日から3人で勉強を始めることとなりました。

結果的に見てこれは、ネギ先生と親しくなった同じ図書館探検部の面々から木乃香さんを少しだけ遠ざけることになりました。もっとも元々 学園長からネギ先生と親しくする様に云われている木乃香さんですのでまだまだ目を離せません。

10話 守る会発足（後書き）

今回もぐだぐだとお喋りだけで終了。

次回から図書館島編となりますのでご勘弁を。

作中 婚活できないと云っている主人公の上司 榎木水穂のことで
す。

性格、器量、能力全て良しだが周りの環境から嫁に行けない人。

主人公は素敵な人と家庭を持ちたいと思っではいるが、理想の人は
どんな人が問われると想像できない。容姿のせいで結婚出来ない
なげくことはあっても結婚したいと云うわけでもない。

一応 作者の見解では2・Aは監視をし易くするために集めただけ。

11話 最終課題

2003年2月20日 木曜日

「近右衛門」

「これがネギ先生への最終課題じゃ」

しずな先生へと一枚の書類を差し出す。

「拝見いたします」

ネギ君のサポート役のしずな先生が書類を見て顔をしかめた。

「確かに難しいかもしれんが…」

「いえ、違います。2 - Aはすでに最下位から脱出しており、前回の期末試験では15位でしたか？」

なにか仕事をきちんとしてと云った顔でしずな先生が睨んでくるが、

「おお、そうじゃったのか」

てつきり2 - Aは最下位をばく進していると思いきんでおった。

「はい、例の正木吹雪さんが転入し、彼女が音頭をとって勉強会を始めてから2 - Aは学力が向上しています。」

「ほう、そうか。吹雪君は学年でどの位の成績なのか」

「はい、だいたい10番台の後半あたりでしたね」

「…まあなかなかの成績といったところかの」

あの、頭の回転の速さからもう少し上かと思っただのじゃが。

「いえ、彼女は英語以外の教科はかなり成績が良いのです。一般の先生方は英語さえ他の教科なみなら5位以内に食い込めると残念がつています」

「むう、それは高畑先生への当てつけかのう」

「…吹雪さんは一般の先生方にとっては評価が高いですから。彼女が来てから、2・Aが自習中に他のクラスに迷惑をかけることもなくなりました。成績の悪い生徒たちのフォローを始めて彼女たちの成績が向上した事実を知っているので、吹雪さんが一部の先生たちの尻ぬぐいをしているせいで割をくっている様に見えるみたいですよ」

「そうか、まあ、今回ネギ先生が教鞭をとっているから大丈夫かの」

「そうですね、私の目からみてもネギ先生は判り易い授業をします。その点は問題ないですね」

「そうか、じゃ、今回の試験はこうするかの」

僕は書類の文字を書き直してしずな先生へと渡した。

「ネギ」

しずな先生から手渡された最終課題の書類、開ける前は新しい呪文の習得や魔物の討伐とかの課題を予想したのだけれど実際は『2 - Aの期末試験の総合順位を5位以内にする』と書いてあった。

期末テストまであと2週間足らずだが、時間はまだ十分にある。そう思って以前の2 - Aの成績を確認してみた。はつきり云って難しいのか易しいのか判断に苦しむ。

以前まで最下位だった2 - Aだが2学期の中間テストから順位は急上昇し期末テストではほぼ中間の15位。ただ、全体的に学力が上がった訳ではなく、最下位近くだった生徒達が成績をあげたため順位があがった様だ。

個人の順位で言えば総合3位までを独占しており、更に10位台が2人。100位以内が3人、200位以内が3人、のこりは300位以降とだいぶ偏りがある。

前回の期末テストの結果では平均点を5点上げるだけで5位には届くけど、上位の生徒達にこれ以上成績を上げることは難しいと思う。超鈴音さんに至っては全教科満点であるからこれ以上の点を取ることは不可能だ。前回、前々回のテストで急上昇した生徒も今回も同じようは伸びるのは難しいだろう。順位は平均点でできるのだからここは下位の人たちの平均点を上げることに重点を置くべきだろう。問題はうちのクラスはあんまり期末テストに向けて勉強していないことだと思う。トップクラスのメンバーは所謂ガリ勉タイプではないので他のクラスと違い机にかじりついている生徒がいない。そのため他のクラスほどの緊迫感がない。

裕奈さんや桜子さんの云う通りエスカレーター式だから今の成績でも

進学には問題はないせいも成績下位の生徒も危機意識が無いらしい。どうにかして、みんなにやる気をだしてもらわないと。

「今日のHRは大・勉強会にしたいと思います。次の期末テストはもうすぐそこに迫ってきています。」

早速、みんなに提案してみたけど反応は様々だ。いいんちよさんは賛同してくれたがほとんどの生徒は啞然とした顔をしてる。あれ、なんでだろう？

そのとき桜子さんから提案があつた。

「お題は『英単語野球拳』がいーとおもいまーすっ」

英単語野球研？賢？ 野球を取り入れた勉強法なのかな？なんとなく面白そうだし、ここは生徒の自主性にまかせて…

「じゃあ、それで…」

いきましよう、と云う途中で、パンパンという手拍子で吹雪さんに話を遮られた。

うう、吹雪さんは初日の一件以来苦手だよ。特に何をされるわけでもないし、いや、HRでクラスが暴走したときは止めてくれるからありがたい人なんだけど。でも、あれ以来ずっと監視されている様な気がするし。

「ネギ先生は野球拳をご存じでしょうか？」

「いえ…知りません」

「そうですか。では一度正式な野球拳のやり方をしずな先生にでもお尋ねになられた方が宜しいかと思えます。多分10分かかると思います」

「そ、そうですね。ちょっと訊いてきます」

良かった。知りもしない勉強法を指導するのか、と怒られると思ったよ。しずな先生は空き時間だから職員室にいるはずだ。急いで職員室に行くと、しずな先生が二ノ宮先生と談笑していた。女性同士、年齢も近いのか二人は仲が好いみたいだ。

「あら、ネギ先生どうかしましたか？」

先にしずな先生が気がついて声をかけてくれた。

「しずな先生、僕に野球拳を教えてください！」

あれ、……なんでふたりとも汚い様なものを見る目つきで僕を睨むのかな？

野球拳に関しては5分とかからず教えてもらったけど残りの時間いっぱいお説教を受けた。しかも二ノ宮先生との二人がかりで…

「吹雪」

「吹雪つて結構意地悪、いや愛の鞭が厳しいよな」

戻ってこないネギ先生を待つこともなくおのおの自習をしているところで千雨さんがつぶやきました。

「なんですか？人聞きのわるい」

「いや、さっきのネギ先生への一言でもさ、あのまま野球拳なんか始めてたら先生の管理責任問題なるから止めるのは判るけど、わざわざしずな先生を引つ張り出したのはいささか意地が悪いよな」

「む、失礼な。生徒よりも指導教員のしずな先生からおしかりを受ける方がネギ先生の体面を保てると思っただけです」

「いや、それにしてもいつこうに戻ってこないぞ」

「それならば、そのぶんだけ命拾いをしたと思って頂ければ幸いなのです」

「さすが、私の宿敵。『麻帆良の歩く理論武装』の面目躍如です」

夕映さんが後ろを振り返って仰有います。なぜか最近、夕映さんは私を不倶戴天の天敵と呼ぶ様になりました。

「私も2学期の『読書をしてるつもり』発言にはいささか、かちんときたです。しかしおかげで国語は成績が上がったです」

夕映さんは先の期末試験では国語で満点をとられました。満点の答案用紙を私にみせていたのはそう云う意味があったのですか。満点

でうれしかったのかと思っただけでしたが。ただ、国語以外の成績は以前とさほど変わらないのが夕映さんらしいのですが。ではもう少しおまじないをかけてみましょうか？

「夕映さんは哲学同好会にはいつておられますよね？」

「…ええ、実は祖父が哲学者だったものでその影響で…」

話を変えられたことに訝りながらも尊敬していらっしやるお爺さまを引き合いにだせていささかうれしそうです。

「そうですか、では私の意見ですが哲学を語るには論理的な裏打ちがなければそれは出来の悪いポエムでしかありません。その論証を考える論理学は以前は哲学の一分野でしたが数学とは切り離せない関係があります。また自然哲学を語るには数学や、宇宙学を始めとする自然科学の知識が無ければ話になりません。」

また哲学を語る時哲学者が生きた社会、歴史的な背景を知った上で語らなければ片手落ちと云わざるを得ません。

さらに付け加えるなら外国の著作ならば翻訳文でなく原文を読んでみるべきだとは思いませんか？」

私がにこやかに云うと珍しく、口元を5mmほどひきつらせながら、

「覚えてるです」

と云い残して前を向き一心不乱に勉強を始めました。

「千雨さんの仰有る通りかもしれません」

「だろ」

千雨さんが満足げに笑いました。

「ネギ」

教室に戻ったとたん、授業終了のチャイムが鳴ったので起立・礼をして終った。結局、僕のしたことは自習をさせただけだ。いいんちよさんはこのクラスは自習になれているから大丈夫と云ってくれたけどなぐさめにはならなかった。

「あの、吹雪さん」

帰り支度をしていた吹雪さんを僕は捕まえた。

しずな先生からは吹雪さんに礼を云う様に云われているけど正直なつとくいかない。だって、もう少し云い方があっても好いんじゃないかな？そりゃあそのまま野球拳を始めていたらもっと大変なことになったのは判ったけど。

「何でしょうか？ ネギ先生」

「いえ、先ほどの件でお礼を…」

「お礼されるほどのことはしてはいません。実際、お小言をしずな先生より頂いたみたいですし」

「しかし…」

「では、先生、先ほどの件で正解の行動はどうだったと思いますか

「？」

「え？」

「先生はなぜ、野球拳をしようと考えたのでしょうか？ なぜ、桜子さんに野球拳がどの様なものかお尋ねにならなかったのでしょうか？ なぜ、他の人に野球拳で好いか意見を聞かなかったのでしょうか？ それについて反省にたった上でのお礼なら受け取れますが？」

僕はなにも云えず立ち尽くした。

僕はなにも反省せず、しずな先生にそうするよう云われたからお礼を云おうとしただけだったから。

吹雪さんはしばらく僕を見ていたが、お辞儀をして去っていった。

11話 最終課題（後書き）

図書館島編 1

主人公は通常は皇家の樹のサポートは受けていないが年上のプライドで本気で勉強にいそしんでいる。

宇宙では基礎データは機械で強制的に脳に転写し、思考、思索を重点に行っている（と云う設定）なので暗記物でケアレスミスを出す。英語も同様、ただほかより多いだけ。

あやかが3位 他の勉強会先生役も成績向上

麻帆良の歩く理論武装

このフレーズを使いたいため主人公の中の方は千早に決定

千早の容姿は樹雷に合わないので本来なら色違いの千歳なのだがいまいちぴんと来ず優雨か雅楽乃か迷ったあげく優雨に決定

12話 図書館探検部

2003年2月24日 月曜日

「ネギ」

僕は今、英語の補習授業をしている。2 - P組の…

先日のHRの補習がうまくいかなかったので、今度は放課後に補習をしようと考えてみた。今回は誰にも意見を聞かず失敗したから今回はいいinchよさんに先に話を聞いてもらうことにした。きっと賛成してくれると思ったのだけど…

「先生に意見は立派です。私も賛成ですが…」

いいinchよさんの話では2 - Kと2 - Pが前回、前前回の最下位と次点であり、これに2 - Aと2 - Dを加えると…

「僕の受け持ちです…」

正確にはタカミチの受け持ちだったクラスは軒並み平均点が低く2 - Dもだいたい20位くらいである。2 - Aは独自に勉強会を開いて点数を上げてきたが他のクラスはやはり授業日数が少ないため英語に足を引っ張られているらしい。

あれっ2 - Aだけはタカミチに見切りをつけたってこと？

「ですので補習を開くにしても他のクラスを優先すべきではないか

と」

常識的に考えればそうだ。教師としてなら遅れているクラスがあるならそこを是正しなければならぬ、のだけど、今回に限ってはそれも云ってられない。

「で、ですが僕は2 - Aの担任ですので」

「ええ、うちの元担任のせいで成績が伸び悩んでいるクラスに申し訳ないと吹雪さんも常々……」

吹雪さんの名が出た時点で僕は抵抗を諦めた。

職員室に戻ると浮かない顔をしたしずな先生が僕を出迎えた。

「先ほど、正木吹雪さんがきて遅れているクラスの補習授業を頼まれたのけれど」

吹雪さん、僕に何か恨みでもあるのですか？

正確にはしずな先生に吹雪さんは補習を頼んだらしい。

『ネギ先生は麻帆良に来てまだ日が浅いですし、いろいろやることもあるのではないのですか？』

と云ったらしい。他の先生方は額面通りに言葉を受け取っていたが僕には、

『教職課程のカリキュラムをきちんと取ってください』
と聞こえた。

どちらにせよ、僕の受け持ちが遅れているのは確かだし、それをし
ずな先生にまかせて2・Aの補習を行うなんて出来なかった。

2003年3月3日 月曜日

はあ、結局なにも出来ずに今日まで来てしまった。試験は木曜日か
らだからまだ3日があるけれど。2・Aでは先の土日に勉強会をや
る予定だったから僕も参加しようとしたけども

『私的な集まりですから試験直前に担任が参加するのは自粛すべき
では?』

と、いいんちよさんに云われてしまったよ。また吹雪さんが裏で手
を引いているのかな?

「はあ、僕は無力だ」

ため息を吐くと

「ネギ先生、どうしたのですか」

優しい声に尋ねられた。

「あ、宮崎さん」

赴任初日に助けた宮崎さんはあれ以来僕と積極的に交流してくれる生徒の一人だ。確かに吹雪さんや明日菜さんには魔法がばれてしまったけど宮崎さんを助けたことには悔いはない。

「いえ、折角皆さんの担任になれたのに全然力になれないなと思っただけです」

「そんなことはないです。去年の今頃は英語の試験範囲の半分も履修できていなかったことに比べれば十分ましです」

綾瀬夕映さんが云ってくれるけどやっぱりタカミチ批判？

「でも、折角担任になったのなら成績が上がってくれた方がうれしいじゃない」

早乙女ハルナさんが云ってくれるけど、上がるとうれしいんじゃないのか。3人は図書館探検部のメンバーだけど一人足りないな。

「で、図書館島の深部に読めば頭の良くなる本があるんだってさ」

「本当ですか、それ」

もし、そんな本があれば、

「見てみたいです」

ぼそっと綾瀬さんが云いました。

「へえ、夕映がそんなこと云うなんて」

ハルナさんが感心した顔で云います。

「見返したい人がいるです」

「ん？ 『歩く理論武装』？」

「このまえも手ひどくやられたです」

「でも夕映、吹雪さんは間違ったことは云っていないよ」

「別にあの人の云っていることに腹を立てているわけではないですよ、のどか。むしろ尊敬やあこがれがある故にです」

「ただ、キャラがかぶっているからねー、夕映」

「あ、あの、その『歩く理論武装』て誰ですか？」

僕が質問するとハルナさんは笑いながら吹雪さんの事だと云いました。確かに綾瀬さんと吹雪さんはいろいと似ているな。しかし『歩く理論武装』か、ハルナさんが云うには吹雪さんは相手を云い負かすのではなく納得させてしまうところが恐ろしいらしい。

「多分、出来のいい参考書の類とは思いますが…」

「でも、それなら吹雪ちゃんの『傾向と対策』の方が確実に御利益があるんじゃない？」

「傾向と対策？」

「ああ、持ってますよ」

宮崎さんからカラー印刷されたテキストを受け取って僕はびっくりした。これは日本史のテキストだけど要点がきちんと整理されているし試験範囲じゃない前後関係や世界史にも言及している。ただ余白が意外にあるとおもったけど宮崎さんの字で書き込みがしてある。

「吹雪さんが云うには見て、口に出して読んで、思ったことを書き込むことで血肉になるそうです」

「歴史の熊谷先生に見せたらちょっと引きつってた。でも感心もしてたよ」

「これが全教科？」

「はいです。吹雪さんがベースを作って委員長と超さんが手直します」

ああ、あの勉強会のテキストなのか。

「でも、あるならば見てみたいです。もし吹雪さんの『傾向と対策』を越える参考書があれば」

「じゃあ、探しに行く？」

「行くです」

「と云うことで先生今夜10時、女子寮に集合よ」

「え？ え？」

啞然とする僕を尻目に早乙女さんと綾瀬さんは宮崎さんをつれて行つてしまった。

「吹雪」

「どう云う事なんですか？」

「いえ、その私にもさっぱり」

ここは刹那さんの部屋で、刹那さんが正座してお辞儀をしている前で私が仁王立ちしている…様にも見えません。ちなみに刹那さんには明日菜さんが普通にすわり真名さんはベッドでくつろいでいますね。私が立っているのはただ部屋に入ってきた直後だからです。

とりあえず、場所代として持参したパンナコッタと紅茶をみなさんに配ります。

「試験直前にもなつて、木乃香さんが図書館島へ探検に行くといいましたか？」

「そ、そうなんです」

刹那さんの話では図書館探検部のメンバーで今日の夜、魔法の頭の良くなる本を探しに行くのに付き合うことになったそうです。しかしこの字面は本当に頭が悪そうですよ。木乃香さん自身は早乙女八

ルナさんに誘われたそうです。しかし、試験直前に部活動とはどう云うことでしょうか。本来ならばそれを止める立場でしょうに、刹那さん。

刹那さんでは木乃香さんに勝てないので私が仲に入って交渉してほしかったみたいです。

「図書館島とはどのような場所なのですか？」

「地上部分は普通の図書館ですが、地下はかなり深く50階以上の迷宮であると聞いています。稀覯本や魔導書もいたためトラップやゴレムなど配置して警護しています」

いろいろな意味でめまいを起こしそうです。図書館島の奇天烈ぶり置いておき、刹那さんの情報のただ漏れは考えがあつてのことでしょうか？ 多分、素直に問われた事に返答しているだけではないのでしょうか。まあ今は便利なので問題なしとしますけど、あとあと問題になるかも知れません。

「図書館探検部の面々は慣れてはいるかと思いますが、今回は話からすると通常よりも深部を目指す様ですね。図書館探検部の活動の一端ならば木乃香さんを無理に引き留めるのは不自然ですし、刹那さんが監視役として後を付けていくしかありませんか」

「はあ」

「…乗り気ではない様ですね、判りますが。ではどうでしょう、学園長に連絡してみても？ 学園長の立場からすれば図書館島への不法侵入を阻止するために何らかの手をうつてくれるでしょう。」

「わかりました、学園長に連絡してみます」

刹那さんが携帯で学園長と話したところ、図書館探検部では試験の度に頭の良くなる本のネタを上級生から下級生にふっており、図書館探検部の恒例の行事だから気にするなと云われたそうです。そして、責任を持つから静観してほしいとも云われたそうです。

「あの、刹那さん？　なんで中止の要請を出したのに学園長先生に丸め込まれているの？」

明日菜さんから突っ込みが入りました。

「刹那さんからの中止の要請を断り、さらには干渉されることを嫌がっていますね。少なくとも刹那さんは監視として隠れて同行すべきですね」

とは云え、刹那さんだけではなぜか心配ですね。

いったん部屋に戻り自分の荷物から使えそうなものとノートパソコンを持って刹那さんの部屋に戻りました。

「これにかけてみてください」

刹那さんに縁なしのサングラスを渡します。

「明日菜さん、照明を落としてもらえますか」

「うん、消すよ」

明日菜さんがスイッチを切ると部屋全体が暗くなります。まだ目になれていないのはつきりとは見えないはずですが。

「あれ、これは」

「赤外線スコープの機能付きです、さらに」

隠し持ったマグライトを点灯します。

「うわ、まぶし」

部屋の照明よりも数倍の発光度を誇るものです。直接マグライトの灯りを見ていない明日菜さんが叫びますが刹那さんは平気ですね。

「対閃光防御付きです。スタングレネードが目の前で閃光しても眼だけは守れます」

部屋の照明を戻し、ノートパソコンを開きアプリを立ち上げます。

「夜中にサングラスもないでしょうからレンズの色は透明にしておきます。ズーム機能は慣れないと視界が安定しないので無効。マーカー視覚化は有効」

赤外線ポートから通信で設定の変更を行います。

「驚きました」

普通のメガネになったサングラスを見てそう仰いました。

「ちょっと刹那さん、動かないでくださいね」

刹那さんの額にコンタクトレンズ風のガラスの半球を、ほお骨のどには透明なシールを貼ります。

「では、このマイクに向かってモニターにでる言葉を仰有ってください………はい、次は首だけ右を向いて、左を向いて、はい、正面に戻して上、下」

これで準備完了です。

「額に付けたのは魚眼レンズで、ほおにはスピーカ、のどにはマイクを付けています。そしてこのストラップです」

縦10cm 横2cm 厚みが1mmのプラスチックの板に目、耳、唇を模したマークが描いてあります。

「この目のところを長押しするとマークが光って、こちらのパソコンのモニターに映像がでます」

「うわ、ほんとだ」

「では、刹那さん、ちょっと部屋の外まで出てもらえますか。出たらこのストラップの耳と唇のマークを光るまで押してください」

「はい」

刹那さんが移動する同時にモニター映像もリアルタイムに切り替わります。あ、モニターに耳と唇のアイコンが点灯しました。

「刹那さん、聞こえますか？」

『あ、聞こえます』

「はい、こちらも刹那さんの声が聞こえます。ちなみスピーカは骨伝導を利用しているので周りには聞こえません。逆に周囲が騒がしくても明瞭に聞こえる筈です。戻って良いですよ」

「吹雪、映像がぶれないのは仕掛けがあるのか？」

珍しく真名さんから質問が来ました。

「のどにつけたシールはマイクのほかに首の筋肉の動きを検知して、首を振っても常に体の正面を映す様に補正をかけています。あと、音声の方も先ほど刹那さんの声をサンプリングして唾などの嚙下音を拾わない様にして、かつ刹那さんの声に近くなる様に補正をかけています」

サングラスもこのシステムもすでにオーバートテクノロジーです。本来は調査時の記録用に持ってきたものです。サングラスは私物ですけど。

「吹雪ちゃんていつたい」

「まあ、私もある目的を持って麻帆良に来た調査員です。いまところは麻帆良の実態を見聞する以外のことはいたしておりません。ま

た、木乃香さん、そして明日菜さんの身柄の保護は私自身で決めたことですので出来る限り協力すること、無断で反故にすることないことを誓います」

「あ、そうなんだ。やっぱり」

え、ばれてました？

「その、学園長先生とやりあったときなんか、すごく大人びていて刹那さんみたいな関西呪術協会？ の様な組織から派遣されたエージェントみたいだったから」

「はあ、実際その通りですから否定できません…て!?!」

ふとモニターをのぞいて血の気が引きます。リビングに戻ってくると思っていた刹那さんはいつのまにか違う部屋に移動していました。この内装は、トイレ！ なまじ近くにいるからドアの音がパソコンからでていることに気がつきませんでした。

急いでノートパソコンを閉じます。やっぱり刹那さんを100%信用するのは危険です。

刹那さんが戻ってみっちりお説教をした後でまた、モニタリングの話になりました。

「このシステムを使って私がサポートします。地下に入ったらこれを曲がり角に貼っていつてくください」

ポストイットを刹那さんに渡します。

「これはポストイット風の電波中継器です。また特殊な波長の光を

だしていただきますのでそのサングラスを使えば光って見えます。刹那さんに渡したストラップがアンテナの役割をしていますのでなくさないでくださいね。レンズもシールも専用の溶剤でないと簡単にはとれないのでうつかりなくすと恥ずかしい光景が生中継されますし録画もしていただきますので」

「うつ」

レンズは隠せても音は難しいでしょう。

「怪我や遭難したとき速やかに救助するためのサポートと考えてください。今、6時ですから3時間ほど仮眠をとってはいかがでしょう。これは睡眠導入剤です。1錠で10分かからず眠りにつけますし眠った時点で成分が分解されるので起きられないことはありません」

「すみません。頂きます」

「では9時半に又来ます」

いったん私と明日菜さんは部屋をでました。

夜11時

刹那さんを見送った後、明日菜さんの部屋に移動して刹那さんから送られてくる映像を見ています。

画面には地下3階に行く、木乃香さん、夕映さん、古菲さん、楓さん、そしてネギ先生。のどかさんとハルナさんは地上に残ったようですね。

「なんでネギ先生までいるのかな？」

最後尾をスーツにリュックと木の棒？を背負ったネギ先生が歩いていらっしやいますね。試験前の生徒になにをさせているのでしょうか？

「刹那さん、今から質問しますが声をだしても気づかれませんか？声をだせるのなら声で、だめなら目の前でチヨキを出してください」

『多分大丈夫です。長瀬にもまだ気付かれていないはずですよ』

「では、ネギ先生が同行しているのはご存じでしたか？」

『いえ、お嬢様からは聞いていません、学園長も何も云っていませんでした』

「学園側は今回の侵入には気づいていますか？」

『多分。私は避けましたが幾つかの対侵入者向けのトラップに引っかかっているので警報は出たはずですよ』

「わかりました、ではそのまま監視を続行してください」

いったんこちらのマイクをオフにしてからモニターに注目します。一行はすでに普通のルートを外れ本棚の上を移動しています。

「ねえ、吹雪ちゃん、私はこの学園にあきれるべきなのかなあ？そ

れともそれを平然と対処するクラスメートにあきれるべきなのかしら」

「なるほど楓さんや古菲さんと呼んだのは武闘派だからですね」

モニターには飛んでくる弓矢を手でつかみ取る楓さんや倒れてくる本棚を蹴り飛ばす古菲さんが映っていますが2人とも結構な腕前でいらっしやいますね。明日菜さんがあきれた口調で、私はは感心した口調で感想をもらします。しばらくして一行が休憩に入ったのでこちらで休憩することにしました。

「刹那さん、リュックにお弁当を入れてありますので休憩をしてください。あと、したくなくともご不浄はすませてください。後で急にしたくなつてもする暇があるかわかりません」

今まで護衛と云う名のストーキングをしていた刹那さんには当たり前のことかもしれませんが。

こちらで刹那さんのお弁当と同じものを食べながら休憩に入りました。

「ねえ、吹雪ちゃん。最近、私おかしいんだよ」

「何ですか、いきなり」

「うん、魔法を知ってから麻帆良のノリになんだかついて行けなくなったの。図書館島のトラップも変だし、それ以前にあの本棚なんぞで誰が管理してるのかしら。本なんて読めないじゃない、あれじゃ」

「それはしかたがないですね、手品のタネを見てしまったのと同じなのかも知れません。あるいは魔法を脅威と明日菜さんが無意識に

判定してしまっているのかも知れません」

「それとね、変な夢も最近見るの。例えば幼い私が砂漠を数人で旅しているの。そのなかにはガトウと呼ばれる渋いオジサマやナギと呼ばれる赤毛の青年がいて、そしてタカミチって少年がいるのよ」

ナギとは最近聞いた名前ですね。…確かネギ先生のお父さまの名前でしたか。タカミチは高畑先生のお名前ですが明日菜さんが幼い頃に保護者になっっているのですから歳が合いませんか？いやいやいや同一人物でない可能性もあります。第一、明日菜さんの夢ですからね。

「それで、その夢をみたあとはどうでしたか？」

「懐かしかった。すごく懐かしかった。いまでもそのガトウさんのタバコの臭いは覚えている」

「嗅覚は人間の感覚でも最も原始的な感覚です。そして記憶と密接した感覚と云われています。…明日菜さんが夢で見た光景は実際に過去の記憶かもしれませぬね」

明日菜さんの過去にネギ先生のお父さまと接触があった？やはり明日菜さんはもともとあちら側の人間だったのでしょうか？

『刹那です。お嬢さまたちが移動を始めました。追跡を再開します』

刹那さんの声でモニターから聞こえました。

再開した図書館島探検ですがさらに危険度は増しています。なんでしょうあの30m以上もある本棚とは？しかし、ものともせずロープで降下する図書館探検部と楓さん、古菲さんそしてネギ先生たち。

図書館探検部の慣れた様子にふと疑問を覚えます。この部活結構危険があると思うのですが刹那さんはご存知だったのでしょうか？

「でも、刹那さんて命綱のなしでよく降りられたよね」

「はい、本棚が足場になったとしても普通足がすくむでしょう。訓練の賜です」

さらに一行は移動して匍匐前進しなければ移動できないフロアに來てます。巫山戯ているのかここにも本棚と本はあります。しかしやつかいですね天井が低いので音が反響して近づけません。一行が天井の一角から脱出してしばらくしてから刹那さんが辺りを警戒して移動します。

「このちゃん！」

追跡者が声を上げるなど云いたいところですが私たちもそれどころではなくなりました。

画面に映し出された光景。

2体の身長5.6mはあるつかという石でできた騎士。

それぞれ大槌や大剣を振りかざすその足下に組んずほぐれつし、あられもない姿をあらわにする女生徒たち。ネギ先生は周りで観戦モードみたいです。

「なにをなさっているのでしょうか？」

「なんかツイスターゲームっぽいよね」

「……ばかばかしくなりました。刹那さん聞こえますか。あの石っころを切り倒してネギ先生たちを連れ戻してください」

『そ、その、ちょっと待ってください、あの石像から聞こえてくる声は学園長です。もしかすると学園長になにか考案があるのかも？』

「ないと思うわ」

「狂人の思考は理解いたしかねます」

『ハズレじゃな　フオフオフオ』

モニターからそんな声が聞こえたかと思ったら1体の騎士が大槌を振り下ろしツイスター板を破壊し先生達ごと床の下へ消えていきました。

『このちゃん』

あまりに刹那さんの声が大きいので音声をカットします。

「……まあ、あの学園長が噛んでいるなら命の危険はないのでしょう。しかし、このままにするわけにもまいりません。ちょっと私が刹那さんのところまで行って参ります。明日菜さんはアルバイトがおありになるのでしょうか？」

「……いま、私に出来ることはなにもない。わかった吹雪ちゃんにまかせる」

「はい、まかせてください」

玄関で靴を履き、見送ってくれた明日菜さんにお辞儀をしたあと、マスターキーを懐から取り出し空間移動を開始します。

12話 図書館探検部（後書き）

カリキュラムにこだわるのは英会話スクールの講師ではないから英語が喋れても教師の仕事はそれだけではないのであとあと大変になるのではないのかと

描写はないが普通複数クラスの教科担任にはなるものではないかと
考え設定追加

古菲、楓、まき絵の学力向上は超のちからが大

主人公だけのちからでなく各人の努力の結果の成績向上

2011/04/07 文章変更

13話 ネゴシエーター刹那（前書き）

今回もアンチ色が強いです。

学園長の行為は脚色はありますが全くのねつ造でもないとおもって書いております。

ネギ先生、学園長のファンの方はお戻りを。

13話 ネゴシエーター 刹那

2003年3月4日 火曜日 午前3時

「吹雪」

「吹雪さん？」

刹那さんにお渡ししてあるストラップを目標に空間移動しましたので刹那さんのすぐわきに出ました。刹那さんには私が何ができるか話してないので驚いておられますね。

「質問はあとで、木乃香さんたちはその穴から落ちたのですね？」

「はい」

覗き込みますが底が見えません。では降りるしかないですね。マスターキーの一つ『千早』を握り佐久夜から力を受け取ります。背中には佐久夜の力が3対6枚の羽根状に具象化しているはずです。

「さて、私は下まで降りますが刹那さんも同行されますか？」

呆然と私を見つめる刹那さんでしたが、私の言葉に自分を取り戻したようです。

「は、はい、一緒に行かせてください」

「それでは」

刹那さんの手を握ると力場を発生させて穴の下へと移動します。羽根の実際の役割は各種センサーです。同時に光学迷彩も発生させたので光学系センサーには捉えられないでしょう。魔法にも効けば好いのですが。

しかし結構深いですね。いささか不安になります。

100mほど降下するとやっと底が見えてきました。

「なんなんでしょう？　ここは」

地下とはとうてい思えない空間が広がっていますが、湖の中の本棚がここが図書館島であることを示しています。なかには洋館らしき建物が建っていますからここも管理されているのでしょうか？光源がなにかわかりませんが十分な光量があり樹木が柱のごとく天井を支えている様です。いやむしろ巨大な樹のなかの様な………あちらこちらに地面に倒れている生徒の姿が見えました。いまはそちらに集中しましょう。

「皆さん、気を失っている様ですが外傷はありませんね。やはりなにか魔法が使われたのでしょうか」

「そうですね」

刹那さんも落ち着きを取り戻した様です。

「あ、木乃香さんです」

近づいて観察してみますが外傷は無い様です。

「気を失っていると云うよりも眠っているみたいですね」

「やはり、学園長が魔法でなにかした様です」

「さて、どうでしょうか？眠ったまま全員を連れて帰れば問題が少ないのですが楓さんだけ見あたりません、彼女だけ意識を持って辺りを警戒している可能性が高いと思います」

「長瀬も一般人とは思えませんが不用意に魔法をばらすことは避けたいです」

それをこの時点で云うのも何だかなと云った感じですが建前と云うのも大事なんです。

「ではいったん戻りましょうか。一応、学園長が安全を保証しています。かなり不安は残りますが今ここで選べる選択肢はこれだけではないでしょうか」

「いや、私はここでお嬢さまの監視を」

「不許可です。刹那さんには上でやって頂きたいことがあります」

例のストラップを刹那さんから返してもらい、それを木乃香さんのブレザーの胸ポケットにいれます。

「発信器にもなっていますので、先ほどの様にこれを目標に移動することも可能です」

そして、そのまま明日菜さんの部屋へと帰還します。

「ただいま！吹雪ちゃん、刹那さん」

戻って刹那さんと打ち合わせをしていると明日菜さんが戻られました。

「ほんとに、このか無事だよね？」

「はい、それは確認しております」

「よかった」

一応メールはしていましたが、改めて確認し安堵されます。

安堵の表情を浮かべる明日菜さんとなりで刹那さんが険しい顔を浮かべています。

「吹雪さん、あなたはいつたい何者ですか？ 先ほどの魔法ではないのですか？」

まあ、云われると思いました。明日菜さんにも見せてしまいましたし。

「私が魔法使いか？ と云う問いに対しては失礼にはなりますが魔法とはいったい何か？ と云う、問いで返させて頂きます。『高度に発達した科学技術は、魔法と見分けが付かない』とアーサー・C・クラークと仰有る作家の言葉がありますが、刹那さんの仰有る魔法とはいったい如何なるものなのでしょう？ 私はネギ先生たちが使う魔法については原理はさっぱり理解しておりませんが科学とは違ったものと推察しております。」

私が先ほど使ったものは云ってみれば『物理法則を自分の好い様に

書き換える』ものですが、それが刹那さんの仰有る魔法と同一かと問われても返事はいたしかねます」

「吹雪ちゃん、刹那さんを煙に巻いているでしょ？」

「なんのことやら」

「でも、なんかすごいこと聞いた。物理法則を書き換える？ もしかして光の速度を超えたり、時間を遡ったりもできると云うこと？」

以前の明日菜さんなら聞き流しておられたでしょうに、刹那さんの方はポカンとした顔をしています。ここは明日菜さんの成長を喜びましょう。

「因果律の崩壊と同時に世界が消滅する可能性が高いのでやりませんが、時間移動は可能です。光の方は普通に超えられますね」

実際に例を挙げられたおかげか刹那さんにもようやく理解してもらえた様です。

「そこまで……」

「まあ、私のことは好いですから、木乃香さんの対策に移ります」パソコンを操作して先ほどの映像からいくつかのシーンを静止画にして刹那さんの携帯に送ります。主にツイスターゲームと石像のところですが。

「その画像を木乃香さんのお父さまへメールしてください。それで放課後までには学園長に面談出来るように手筈を整えましょう。お

「一方とも寝不足でしょうからお休みになってください。私が責任を持って起こします」

「ご自分の部屋に戻られる刹那さんと一緒に部屋でした。」

約2時間後

お貸し頂いた合い鍵を使い、明日菜さんの部屋に入り用意した蒸しタオルを明日菜さんの顔にのせます。

「あっっー」

効果観面ですね。

「おはようございます。明日菜さん、早速ですが着替えて頂けないと遅刻です」

ギリギリまで起こさなかったので本当に危ないです。着替えを手伝いながら話します。

「刹那さんは先に行ってもらっています。これはサンドイッチです、車内でもつまんでください」

「うう、吹雪ちゃんありがとう」

そのまま一緒に登校しましたが明日菜さんって足が速いんですね、ギリギリかと思った電車は一番早いものに乗れましたので明日菜さんの朝食は教室に着いてからとれそうです。さすがにこの時間帯での社内飲食は無理でした。

教室に着くとあやかさんとハルナさん、のどかさんが騒いでいました。むろん図書館島の件です。

「どうしましょう、吹雪さん、ネギ先生が」

本来冷静なあやかさんが取り乱しているので話が進まないようですね。

「一応、明日菜さんから話は伺っております。木乃香さんたちが図書館島へ部活で探検に出かけたきり戻ってこないと云うことでしたか？」

ハルナさんの説明でネギ先生を含めた5人が戻ってきていないと云う説明を受けます。

「まず、あやかさん、しずな先生に報告してください。ハルナさんはあやかさんと一緒に行って詳しい説明をしてください。ついでに今日の連絡事項をしずな先生から聞いておいてください」

「は、はい」

あやかさんがはじかれたように教室から出て行きハルナさんもそれを追っていきます。

「なんだ、ネギ先生たち遭難したのか」

席に着くと千雨さんが話しかけてきました。

「はい、どうやらそうみたいです。昨晩は木乃香さんが戻られないので結局徹夜でした」

千雨さんには木乃香さんが図書館探検部の用事で出かけるため明日菜さんと刹那さんの勉強を代わりに見ると云っていました。

「無事であれば好いのですが」

「ネギ」

気がついたら砂浜で横になっていた。さっきまで図書館島の地下にいたはずなのに。ここも図書館島の地下なのだろうか？ 空こそ見えないうえに茂った木の間から光が差ししている。

長瀬さんは気を失わずにすんだようですと出口を探してくれただけで見つからないと云っている。樹の生い茂ったところはかなりのジャングルらしく迂闊には入れそうにないらしい。みんなが気がついてから手分けして探したけどやはり出口は見つからなかった。

探索の途中 食料も見つかり、気温も地下のせいなのか温暖であるので閉じこめられたこと以外には問題はない。携帯電話の使用はできないけど、地上に残った宮崎さんと早乙女さんが捜索隊を呼んでくれるはず。しかし、期末テストは明後日からだからそれまでにもどりたい。いざとなったら僕が杖でとんで出口を探せばいい。

夕映さんはここが地底図書室だと云っているけどその名の通りあちこちに本棚があり、なかには中学2年用の参考書も混ざっていた。捜索隊が来るまで勉強して待つことにしよう。

「吹雪」

職員室から戻られたあやかさんの話では『とりあえずこれ以上騒がずにおとなしくしている』と云うことでした。さて、どのような対応をとられるのでしょうか？

「でも、心配です、吹雪さん。しずな先生は心配するなの一点張りで具体的には何も云ってくれないのです」

確かに説得力が欠けますね、それでは。

「もし、放課後になっても安否が確認出来なければPTAに連絡すると云うのはいかがでしょう。PTAからの問い合わせならば具体的な進捗状況も学園側が説明をなさるでしょうから。さらには警察や消防に捜索依頼を出すことも可能でしょう」

「ああ、その手がありましたわ。幸い母がPTA役員です、すぐに連絡しますわ」

「いえ、今はやめてください。PTAを巻き込むと問題が大きくなります。特にネギ先生の監督責任については最悪、免職まで考えられますのでどうかつに騒がない方が好いでしょう」

あやかさんはどちらを優先するか悩んだあげく私の意見を受け入れ放課後に学園長に状況の再確認をすると宣言し、クラスもそれを受け入れ状況はいったん静まりました。これで放課後までは問題は起きないでしょう。

4時限目の終了と同時に刹那さんが教室の外へと出て行きます。そ

れを見送ってから千雨さんに用事があると断ってから鞆をもって教室からでます。空き教室に潜り込んでから鞆からノートパソコンを取り出します。

「あ、いたいた」

明日菜さんが入ってきました。

「で、いったい何をするの？」

「刹那さんから学園長に早急に木乃香さんたちを連れ戻す様に要求します」

ノートパソコンのモニターには昨日と同じく刹那さんからの映像が届いています。

しばらくして職員室のしずな先生が映し出されます。

『しずな先生、ネギ先生達の件で学園長を交えてご相談したいことが』

『それは、こちらで対応すると』

『これは生徒の桜咲刹那ではなく、近衛木乃香の護衛役の桜咲刹那からの要求です』

一応小声ですがきつぱりと云いきります。しずな先生はちょっと逡巡したようですが了解してついてきなさいといって立ち上がりました。

「これって、吹雪ちゃんの入れ知恵でしょ。刹那さんこんな行動で

きなさそうだし」

確かにそうですね。

さて、刹那さんが学園長室に移動しましたがこれからが本番ですよ。

「刹那」

吹雪さんと相談した結果学園長に直談判することとなりました。

一応吹雪さんから直接指示がもらえますが足がすぐみず。

「昨日、学園長に電話をしたとき問題ないと聞きましたがお嬢さまは朝になっても戻ってきていません。これで問題ないとは到底思えません。また、クラスメイトの話ではネギ先生が同行していると云うことでしたがなぜ電話したときに教えて頂けなかったのでしょうか？ まさか云いそびれたとか云いませんね？」

強気で行けと指示されましたが、正直胃が痛いです。お昼はとつてませんが食欲なんかありません。

「うむ、いや、ネギ先生と一緒にだとはあの時点では知らなんだでの」

『写真とボイスレコーダーを投入してください』

吹雪さんの声が聞こえますけど本当に周りには聞こえていないんでしょうか。とりあえず、吹雪さんから指示通りに学園長の机の上に吹雪さんからもらった昨日の写真を並べます。

『第11問 BASEBALL』

「ハズレじゃな フォフォフォ」

ボイスレコーダーのスイッチを押すと昨日の石像の音が再生されま
す。

「木乃香さんの護衛として後をつけたが学園長の指示は守り静観し
ていた。けれど学園長の妨害で木乃香さんは行方不明です。今回の
学園長の行動には抗議をさせていただきます」

えっと、同じ内容を自分の言葉で云うんでしたよね？

「：お嬢さまの護衛として監視をしていましたが学園長の指示通り
手出しはしませんでした。けれど学園長の妨害でお嬢さまは行方不
明になってしまいました。いまさらですが今回の学園長の行動には抗
議をさせていただきます」

「近右衛門」

ネギ君の修行の一環として少数の生徒と共に図書館島の最深部に閉
じこめることに成功したがそれからいかに。

朝はしずな先生から自分にだまってネギ先生たちを図書館に閉じこ
めたことに苦情がきたが昼には刹那君から苦情がきておる。できれ
ばネギ君には今日と明日は地下で生徒たちを守ってリーダーシッ
プをとってもらいたいんじゃないが。

「あの石像は一体どうやって動いているんですか？ お嬢さまには
魔法を近づけさせないとこちらの長からも先日 再度の要請があっ

たはずです。そしていつたい地下でこんないかがわしい恰好をさせられて何の得がお嬢さまにあるのでしょうか？」

ツイスターゲームの写真を刹那君は儂にはなくしずな先生に見せながら云う。しずな先生の目も儂に批判的じゃのう。

「これは実はネギ先生の修行の一環でな、ネギ君の指導力を高めるためにじゃな」

「お嬢さまには関係ありません。また、そのネギ先生ですが委員長が心配して、放課後になっても安否が不明ならPTAを通じて警察に捜索願いを出すと云っています。大事になればお嬢さまにも傷がつきます。男性教員と無断外泊をしたといううわさが流れれば事実なだけに破滅的です。早急に全員を解放してください」

2-Aの委員長は雪広あやかじゃな、あの母親は役員の一人じゃつたな。まずいのう、PTAも警察もじゃ。特に雪広は大口の寄付者だし方々に顔が利く。うう、なにかうまい言い訳がないかのう。

「しかたありません…」

儂が黙って考えている刹那君が先に折れてくれた？　と思っただが懐から携帯電話を取り出した。

「申し訳ありません、長、お願いします」

『いえ、刹那君、君にこんなことまでさせてこちらこそ申し訳ない』

この声は、婿殿？

刹那君が持った携帯電話から婿殿の声が聞こえると云うことは今ま

での会話をずっと聞かれていたのか？

『まずは、近衛木乃香の父兄として早急に行方不明の生徒の搜索を要求します』

もし、これを蹴れば関西呪術協会の長としての要請か。

「わかった、早急に迎えを送ろう。これでええじゃろう」

「いいえ」

刹那君が反対の意見をだした。まだなにかあるのかい。

「今回の件でお嬢さまを含む全員が無断外泊、無断欠席、図書館島への不法侵入等の違反をしています。そしてクラスメイトや特にルームメイトには昨日から心配をかけまくっています。長やお嬢さまには申し訳ないのですがそれ相応の罰を受けて頂くの筋だと思いません。むろん私も同罪ですが」

『いえ、刹那君、その言葉木乃香を想つてのことだとわかります。わたしもあとで説教のひとつでもしましょう』

「わかったわい、生徒たちには試験後の休み中は奉仕活動に参加。ネギ先生には始末書提出と減俸、図書館探検部は休み明け一週間の活動停止、儂も今月の給料の半分を返納じゃ」

もう、やけくそじゃわい。

「ネギ」

意外にいけるかもしれないと思った矢先だった。

このかさんはともかく古菲さん、綾瀬さん、長瀬さんの3人は最近成績は上向いているが順位としてはまだ400番台だからここで一日中勉強させられたら成績がもつと伸びるはずと思っただけのお昼すぎにしずな先生が突然現れすべてが終わった。

しずな先生に案内され滝の裏の非常口から螺旋階段、エレベータで地上に戻った僕らはまずしずな先生からお説教を受けた。それぞれ罰則を云い渡され、僕にはまた始末書が待っていた。先生になつてもう2枚目だよ。しかも給料が一部カット、先月の給料は明日菜さんの服の弁償でほとんどとんでしまったし散々だよ。

でも本当に堪えたのは全員で教室に戻ったときだった。いいんちよさんや宮崎さんが泣いているを見て自分たちがどれだけ迷惑をかけたのか思い知らされた。

石像や最深部については立体映像を交えたものと説明を受けた。認識阻害の術もあるのでみんな納得してくれたようだ。

結局次の日も始末書作成のため何も出来ず期末テストを迎えたが学期末試験で2 - Aは堂々と5位にランクアップしていた……

13話 ネゴシエーター刹那（後書き）

アンチとはいれてあるが出来ればフォローしたいのだが、学園長、詠春義親子は組織人としていろいろ欠けていると思う。詠春も後に攻撃対象に？

緊急事態かもしれないので主人公は力を使用しました。

ばれないだろうと思っはいますが万が一の場合は別の方法を考えるつもりです。

主人公の能力は独自設定です。これもあまりつつこまないでください。

次回 一回休みの話で、その次から桜通りの吸血鬼編です。

14話 家庭訪問

2003年3月10日 月曜日

「吹雪」

ネギ先生は正式に麻帆良の教員になられたそうです。それは好いのですが今後うちのクラスの担任なのでしょうか？別にネギ先生では嫌だと云うわけでもありませんが、小中高一貫教育を謳っているとはいえ新任の教師が最終学年の担任とは荷が勝ちすぎるのではないのでしょうか？10歳の少年が仕事に明け暮れると云うのもいささか不憫です。じゃあ高畑先生にする？と云われたら丁寧に辞退させて頂きますが。

「家庭訪問？」

「はい」

寮生活で家庭もあつたものではないでしょう。ネギ先生の言い分では普段あまり喋ったことのない生徒を中心に寮の部屋に訪問して話をしたいそうです。女子寮でと云うところはいささかアレですがコミュニケーションをとろうとする態度は評価できるでしょうか。

「それで、今からですか？ネギ先生」

「すみません」

千雨さんが怒るのはもつともですね。女の子の部屋にいきなり上がらせるなんてエチケツトに反します。まあ、うちは見られて困るものはありませんが、いや、かなりありますが、嚴重に隠していますので、どなたがいつ来られても大丈夫です。

「ネギ」

最終課題は結局なにも出来ないうちに終了してしまった。合格と言う形で。努力はしたつもりだけど、僕のちからが『2-Aの期末試験の総合順位を5位以内にする』という課題に貢献しているのか未知数だ。正直、僕が何もしなくても2-Aは5位になったと思う。学園長にはそのことを云ってみただけど、運も実力の内と云われてしまい、そのままだった。

家庭訪問と云うのも教師として自分に何が出来るかと考えてみての結果だった。四月から2-Aは3-Aとなり、来年中を卒業する。おそらくみんな高等部へ進学するのだろうけれど、なかには違う生徒がいるかもしれない。来年度の3年の担任はみな今年度からのよこすべりだ。僕も一応そうだけど、2月に赴任したばかりだから、実際にはまだ一月しか付き合えない。2-Aの生徒はフレンドリーな人が多く、よく話しかけてくれるけど、逆に云えば僕から話しかける機会が少ないと云うことだ。

3年になったらいろいろ忙しいので、今年度中に終われる様に今日から始めることにした。

長谷川千雨さんと正木吹雪さんは僕があまり話をする機会のない生徒たちのなかの二人だ。

吹雪さんは赴任初日に魔法使いであることがばれて以来、距離を置かれていた様な気がするし、長谷川さんは朝倉さんの話では吹雪さん以外の生徒とはあまり親しく付き合うことはないらしい。

「押しかけるよう形になってすみません」

「そうですね、今回はかなり急でしたのでこちらは何も用意できていません」

「いえ、別にお構いなく」

もう、紅茶を出されているし。

「いえ、そう云う意味ではありません。先生に何を相談すべきかと云うことです。例えば進路とか」

あれ、またやつちやた？

そくだよね。突然、進路はどこにしますかと聞かれても困るよね。

「まあ、具体的でなくて結構です。進学かそれ以外かだけでも」

「私は高等部へ進学です」

「私もそうなりますでしょうか」

二人とも進学と。

「学園や寮生活はいかがですか？ なにか不便なことや困ったことはありませんか？」

「特にはないです」

「私もそうですね。いえ、ありますか」

よかった、何かあるんだ。

「相坂さよさんはご存じですよね？」

「は、はい、もちろん」

出席番号1番 相坂さよさん。ずっと欠席しているので一度も会ったことはないけど。

「では、さよさんのご容態はいかがなのでしょう？」

「え？　なんでそんなことを」

「いや、相坂さんは一応この部屋の住人なんですが」

本当ですか千雨さん。あれ、でもここ二人部屋？

「すみません、僕は二人が寮で同じ部屋だと聞いていたけど相坂さんまで同じ部屋だとは知りませんでした」

「別に千雨さんも責めているわけではありませんよ。事実、寮は二人部屋が圧倒的に多いのですし、この部屋も二人部屋ですが名目上3人で使用しているわけですから」

「そうですね。相坂さんですが僕も何で休んでいるのか知りません」

「以前、あやかさんに伺ったところ、体が弱いせいで治療中とは聞いております。ネギ先生も一度お見舞いに行かれた方が宜しいのではないのでしょうか」

「はい、そうします」

なにか、順番ちがうんじゃないの？ と問い詰められている気分だよ。長期欠席の子がいるならその子のお見舞いに行くのが筋だよ。ね。訊かなかった僕もわるいけど申し送りしてくれても良かったんじゃないの、タカミチ？

そのあと、雑談で過ごしたけどもグダグダだった。結論から云えばさつき吹雪さんが云った通りで僕自身も何を話したら良いのかわからなかった。でも、済んでしまったことはしかたがない、明日以降の家庭訪問では失敗しないように話す内容を決めておこう。

14話 家庭訪問（後書き）

当人にはその気がないのだがネギに会うとボディーブローを連発する主人公。

二日目以降は逆にうちに来い、うちに来いと引っ張りまわされエヴァまで回れず。

初日の失敗から二日目以降は無難に面談できた。

原作の千雨の部屋訪問にあたる話。

ネギの内面もある程度成長か？

15話 桜通りの…

2003年4月8日 火曜日

「吹雪」

新学期です。春休み中に誕生日を迎えました。65歳の… 早くこの微妙な年齢域からおさらばしたいものです。

春休み中は結構忙しかったりしました。

中間報告を瀬戸さまに行い、本格的な調査を行うためいくつかの装備を受領し講習を受けました。

私の船、佐久夜も麻帆良の上空の静止軌道に乗せ本格的に調査体制にはいったため艦橋要員も6名配置されました。なかでも副長と射撃管制官に士官学校同期が入ってくれました。彼女達はとくに仲がよい二人なので私も安心して艦を任せられます。

そんなこんなで麻帆良に戻ったのは昨日でした。

それでも千雨さんや明日菜さんたちが誕生日パーティを開いてくれました。

「吹雪ちゃんが私たちのなかでもっともお姉さんなのね。見た目とはかく、納得出来るわ」

明日菜さんに云われました。まあ、私がこのクラスで一番年上なのは朝日が東から昇るがごとく当たり前ですけど。

新学期と云っても教室は同じですし、担任も同じです。しかし今日

は顔ぶれがちよつと違います。まき絵さんが欠席ですか、めずらしいですね。それと隣の席のエヴァンジェリンさんが今日はやる気？を出しているのか熱い視線をネギ先生に送っています。

始業式もそこに身体測定です。

今現在、体の一部分は下から1/3あたりにいますが、来年辺り最後尾にいてもおかしくはありません。だいたいトップ集団はいったい何なのでしょう？ 年齢詐称はあなた方ではないですかと、問い詰めたい気持ちになります。

「まつ黒なボロ布につつまれた 血まみれの吸血鬼が」

美砂さんが怪談で鳴滝姉妹やのどかさんを怖がらせていますが吸血鬼ですか？ …… もしかして潜入時の偽装につかえるでしょうか？

途中から吸血鬼から吸血生物に変わっていますが……以前別惑星で出会ったヤツに似ていますね。明日菜さんがそんなのいるわけないと否定しますが珍しくエヴァンジェリンさんが明日菜さんをからかいます。そんな折 突然、

「先生ー、大変や、まき絵が、まき絵が」

教室の外から人の走る足音とともに亜子さんの声が聞こえてきました。

「先生」？

注意する間もなく誰かが教室のドアが開けると、やはりネギ先生がいました。しかし、なぜ身体検査中の教室の前でスタンバっているのでしょうか、ネギ先生は。まだ笑って許される年齢ですがそのまま成長されたら痛い目にあうでしょう。ネギ先生に男性を感じた瞬間から態度が180度変わる方も出るかも知れません。

ネギ先生は陽気で気さくな方ですが、突然部屋に押しかけるなど他人のことに考慮がかけられる行為が見受けられます。……考えてみればネギ先生はまだ10歳。この年頃の少年なら土足で他人の気持ちに踏み込んだり踏み込まれたりしながら他人とのコミュニケーションの仕方を学んでいる頃です。10歳で教職に就かれるほどの学力を得るには才能以外にも寝る間や遊ぶ間を惜しんで勉強なされたのでしよう。そう考えれば納得できますが周りが大人ではそう云った学習は難しいですね。大人は本音を隠しますし。……そのための担任？

わざわざ魔法使いのネギ先生を担任にするなどリスクだと思っていました。それがそれなら腑に落ちます。ネギ先生の精神年齢からすれば同年代とはうち解けにくそうですし。それが事実だとした場合、今後いったいどうなるのでしょうか？今はプラスになっているみたいですが。

学園ドラマで新任教師が生徒に『一緒に成長していこう』と云うシーンを見たことはありますがそれを文字通り実践されても……ねえ一応、みんなで保健室で眠っているまき絵さんをお見舞いしましたがただ眠っているだけの様ですね。

「はい、では第一回 明日菜さんを想う会を始めます」

「うっうっ、うめんなさい」

夜、刹那さんの部屋をお借りして明日菜さんから相談を受けています。

なんと云うか明日菜さんの話を要約するところです。

図書館探検部の4人と一緒に下校途中でハルナさんのお買い物に付き合うことにしていたがのどかさんだけが用事があるので先に帰った。

のどかさんと別れたあと、のどかさんが向かったさき 桜通りで大きな爆発音が聞こえたのでいそいで木乃香さんと向かうと裸ののどかさんを抱きかかえるネギ先生がいた。

煙の中に人影が見えてそれをネギ先生が追いかけて、明日菜さんがさらにそれを追いかけていった。

しばらくしてネギ先生を建物の屋根の上に見つけたので、屋根に上ったらエヴァンジェリンさんと茶々丸さんがネギ先生をいじめていたので蹴り倒した。

エヴァンジェリンさんと茶々丸さんは屋根から飛び降り、ネギ先生は杖にまたがって飛んで逃げた。

「まずは明日菜さんですね。なにをやっかいごとに首をつっこんでいるのですか？ ネギ先生には気をつけるように云っておきましたのよ」

「ごめんなさい。なんとなく夢中で」

正座から深くお辞儀をします。

「次に刹那さん」

「え？ 私ですか？」

隣で人ごとみたいな顔をしていましたがあなたにも云いたいことはありますよ。

「聞けば、木乃香さんは気づいていないようですが、のどかさんを襲った犯人と木乃香さんはごく近距離にいたことになります。そのとき刹那さんはどこにおられました？」

「部活です……」

「まだ、剣道部をやっていたのですか…… さつさと退部して図書館探検部に移籍しては？」

「ええ？ そんな！ あそこは本も読むんですよ」

……なぜ、刹那さんが図書館探検部に入らないのか判りました。

「まあ、好いでしよう。」

あえて今まで訊きませんでした。がエヴァンジェリンさんも茶々丸さんも魔法をご存知だそうですが詳しい話を教えていただけますか」

クラスメイトの個人情報を一方向的に引き出すのはアンフェアと思いましたが今回は自重していましたが今回はそれも云っておられませ

ん。

「詳しい話は知りませんが、エヴァンジェリンさんは闇の福音の二つ名がある600歳の吸血鬼です。昔は賞金をかけられていたのですが、今は学園の警備の一人です」

吸血鬼を警備員として雇っている？ 麻帆良学園のシステムとは何と複雑怪奇なのでしょう。あるいは全ての怪物を平等に扱っているのでしょうか？ 茶々丸さんは人造人間ですから狼男もいる可能性もあります。まあ、後でその辺も詳しく調べましょう。しかし600歳ですか。

「そうになると、ネギ先生がのどかさんを襲ってそれをエヴァンジェリンさんが捕らえようとしたと云う見方もできますね」

まあ、それはないとは思いますが。

「吸血鬼と云えば、美砂の云っていた桜通りの吸血鬼の話ってどうなの」

「去年から満月の夜に襲われる生徒はちらほらいるとは魔法生徒でもうわさになっていましたが、学園側からは特にはなにも」

「エヴァンジェリンさんが学園に反旗を翻して生徒たちを襲いネギ先生がそれ阻止した。と云うのがもっとも分かり易い話の筋ですが去年から吸血鬼の話があるところがネックでしょうか」

「そうですね、私も桜通りの話が出るたびエヴァンジェリンさんを連想していましたが学園側でも特に何もなかったので単なる偶然だと思ったのですが」

「いや、刹那さん、そこはちゃんと確認しようよ」

基本、善人な刹那さんですから。とにかく、

「クラスメイトから二人も犠牲者が出ておりますが私たちは警察ではありません。ここは学園長に連絡をとり早急に対処してもらおうべきでしょう。刹那さん、学園長に連絡をお願いします」

「えと、なんと訊きましようか？」

「そうですね、明日菜さんも のどかさんが襲われている現場は見えないのでエヴァンジェリンさんが犯人だとは限定できませんし、それでは、木乃香さんが裸の のどかさんを抱きかかえいまにもいたずらしようかと云うネギ先生を目撃してシヨックを受けているがどの様に説明をすれば好いか、ではいかがでしょうか？」

「吹雪ちゃん、ネギ先生にうらみでもあるの？」

「まさか。ただ、学園長に本気で捜査をして頂きたいだけですよ。去年から被害がでているのに注意を呼びかけないなんて怠慢と云わざるをえません。まあ、桜通りの吸血鬼ばいものに女生徒が襲われネギ先生が追いかけていった、ついでに木乃香さんもそれを目撃したで好いでしょう」

こちらも本業に着手したいのであまり関わりたくないと言う事情もあります。

「わかりました。…うう、最近学園長が冷たい目で見てるんですが」

泣き言を漏らしながら刹那さんは電話をかけました。

「学園長、ネギ先生のことでお話があるのですが」

「ネギ先生に話を訊くと云っていました」

「あまり、積極的とは云えませんが。いつそネギ先生が女生徒たちを襲っているとうわさでもたてましようか」

「さすがにそれはまずいんじゃない。実際、本屋ちゃんも被害にあっているんだし」

さすがに大人げないですね。

のどかさんは木乃香さんが寮に運んだそうですが、木乃香さん共々で不思議がっています。騒ぎにはなっていないですね。

「変に大騒ぎになるよりは好いけどさ、このかも本屋ちゃんあまり気にしていないのは、やっぱり魔法のせいなの？刹那さん」

「はい、結界内はそう云うことをあまり問題視しないようになります」

「なにかすつきりしなわね」

本当に悪影響はないのでしょうか？

「明日、教室で全員が顔を合わせるわけですし、様子を見てから対策を考えましようか。もしかすると、すでに決着がついているかも」

「しれません」

もちろん、決着なんてついていませんでした。

16話 コンマ3秒のたましい

2003年4月9日 水曜日

「吹雪」

当たり前付きアイス程度の期待値でしたが外れたら外れたでがっかりはするものです。

今日のネギ先生はHRに遅刻してきて、蒼い顔をしながら授業をしていますし、エヴァンジェリンさんはサボリです。茶々丸さんが教えてくれました。問題が解決していないのはあきらまかです。

「…パートナーを選ぶとして10歳の年下の男の子なんてイヤですよねー」

身の入っていない授業を行うと思えば意味不明の発言にクラスが騒然とします。

おそらく昨日エヴァンジェリンさんと茶々丸さんの二人がかりでぼこぼこにされたので応援がほしいと云ったところでしょうか？しかし、なぜ生徒に応援を頼もうとするのでしょうか？

ネギ先生は授業終了と共にふらふらとでていきましたが、残された生徒たちは今の発言についてお喋りをしています。普通に考えればパートナー＝伴侶でしょうから。

放課後、明日菜さんと歩いている途中にエヴァンジェリンさんと遭遇しました。

ネギ先生を助けるためとはいえ二人に暴力をふるった明日菜さんは身構えますがエヴァンジェリンさんは特に気負った風でもなく話しかけてきました。

「昨日はどうも、神楽坂明日菜、そしてこんにちは正木吹雪」

茶々丸さんは声なく一礼してきます。

「こんにちは エヴァンジェリンさん。率直に訊きますが桜通りの吸血鬼はあなたですか？」

「ああ、そうだ。宮崎のどかや佐々木まき絵を襲ったのは私さ」

「なんで、そんなことするのよ」

「それは、私が吸血鬼だからだよ。神楽坂明日菜。人が牛や鳥を食べるが如く、吸血鬼は人間から血を吸う。ごく当たり前のことだ」

「さて、それはどうでしょうか。刹那さんのお話では桜通りの吸血鬼は昨年からの出沒し始めたそうだし、満月以外の日には活動しておりません。つまり少なくとも血を吸わなければ命にかかわる問題ではなさそうです。趣味や嗜好で吸血をなさっているとしても同様になぜ最近始めたか疑問はそのままです」

「確かに口は回りそうだな正木吹雪。確かに最近になってある目的のため吸血をし始めた。それが何なのか教えてやる義理はない」

「いえ、別に教えて頂かなくとも結構です。おそらく学園長から何らかの処分が下されるのではないでしょうが」

「ふん、じじいが動くわけ無い。ぼーやが来ること教えたのはじじいだからな」

じじいは学園長でしょうね。ぼーやとはネギ先生ですか。

「エヴァンジェリンさんはネギ先生を襲う準備として桜通りで吸血行為を行っていた。しかし、なぜネギ先生を……ああ、確かネギ先生のお父さまは英雄と呼ばれた方らしいですね。もしかして以前になにかあったと云うことですか」

「…察しが良いな」

「ネギ先生への直接のうらみはないが確か…ナギさんの代わり、つまりは八つ当たりと云うことですね。更にはそのために無関係な女生徒を襲うとはまったく下衆な行いですね」

「魔法の素人が大きい口を叩いているがそれがどれほど危険なことか教えてやろうか？」

「さて、先ほどの疑問点。何故、エヴァンジェリンさんは女生徒を襲う必要があったのか？ 一つの推論ですが、吸血鬼が人間の血を吸うと云う行為は精気を吸うともれます。精気、魔法使いさん達的に云えば魔力の補充が必要だった。それなら何故エヴァンジェリンさんは魔力の補充が必要だったのか？ 何らかの理由でエヴァンジェリンさんの魔力が枯渇、あるいは封印されていて満身に戦うことが難しい。…さて、いかがでしょうか？」

「……じじいが警戒するわけだ。だが、例え私が戦えなくとも私には従者がいる。茶々丸、けがをしない程度に遊んでやれ」

おや、剣呑な雰囲気になりました。凶星だったのででしょうか。

「……申し訳ありません、吹雪さん」

後ろに控えていた茶々丸さんが前へと出ます。

「……マスターの命令ですので」

「茶々丸さん、茶々丸さんはそれで宜しいのですか？ 主人の間違った行為を正すのも従者の役目ではないでしょうか？」

「……私は機械です。命令は絶対です」

「では何故、先ほどから茶々丸さんの行動に若干のズレが生じているのでしょうか？ いつもの茶々丸さんの行動や返答のタイミングがコンマ数秒遅れています。無論 茶々丸さんの方がくわしいデータをお持ちでしょうか？」

「……確かに平均コンマ3秒の遅れが生じています」

「おめでとうございます。茶々丸さん。そのコンマ3秒があなたの魂です」

「私の、たましい？」

「茶々丸なにを話している？」

まあ、無粋な。とりあえず、ここは逃げましょうか、茶々丸さんと戦いたくはありません。明日菜さんの手を取り、同時にマスターキ―を取り出し佐久夜から力を受け取り明日菜さんともども飛び上がります。

「では、ごきげんよう、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん」

光学迷彩をほどこしつつ女子寮へ向かいます。

「エヴァンジェリン」

空にとけ込み急速に飛び去った正木吹雪と神楽坂明日菜を見送りつつ茶々丸に問いかける。

「魔力の反応はなかったが？」

「はい、加えて推進方法も不明です」

ふむ、じじいが2-Aに入れて直々に警戒しろと云ってきたときには訝しんだが、なるほどかなり喰えない奴らしい。半年となりに座っていたが多少お節介な少女としか認識できていなかった。

「茶々丸。帰るぞ」

いまだにあれが飛び去った方を眺めている茶々丸に向かって云う。

「申し訳ありません。マスター」

なんだ？

「命令を実行できませんでした」

ああ、さっきのことか。まあ、いい。

私は何も云わず歩き出した。

「吹雪」

ついからですから、女子寮まで飛んで帰りました。

「本当に飛べるんだ」

感慨深げに明日菜さんが云います。まあ、今まで明日菜さんが生で体験した超自然現象は服を脱がされたことぐらいでしょうから。あれと一緒にされのはいやですが。

「でも、遅刻しそうなときでも使いませんよ」

先に釘を打っておきます。

「うわ、ひど。でも茶々丸さんの反応のずれてって本当？」

「まあ、多少はったりに近いですね。なんとなく、茶々丸さんの態度がいつもと違った印象をうけたので云ったみましたが正解だった様ですね」

「吹雪ちゃんの方がよっぽど魔女のばあさんっぽいかも」

失礼な。

寮の近くの人気の無い路地裏に入り、ビルの入り口で光学迷彩を解除します。多分防犯カメラがあってもビルから出たぐらいに見えるでしょう。

「この前も聞きそびれたけど吹雪ちゃんの力って」

「明日菜さん、緊急でない限り外でその手の話はNGですよ」

「あ、そうか」

「うっかりしていると怖い魔法使いさんに記憶を消されますよ」

「それはいや。でもエヴァちゃんにみせてもよかったの？」

「まあ、秘密にはしておきたかったですですが私が焚きつけたおかげで明日菜さんを危険にさらす訳にも参りません。それに茶々丸さんと闘うのも気が引けます。ですが、大丈夫です。エヴァンジェリンさんは学園長とは完全に一枚岩では無いようですし、有益な情報なら交渉のカードになりますので簡単には話さないでしょう。それに他にも考えがありますので」

女子寮の前に着くとネギ先生に出会いました。まだ家庭訪問が続いているのでしょうか？

「明日菜さん、僕のパートナーになってください!」

ネギ先生が私たちを見るなり開口一番、そう仰いました。いったい何なんでしょうか?

「マジステル・マジキ立派な魔法使いにはパートナーが必要なんです」

周りに人がいるのもお構いなしですか?

「ばか、何云ってるのよ」

あわてて、明日菜さんがネギ先生を寮の中へと引つ張り込みます。とりあえず、先生を連れて私の部屋へと向かいます。幸い千雨さんは遅くなるそうです。紅茶とケーキをお出ししながら話を促します。

「いったい藪から棒になんでしょうか?」

「それは俺っちが説明するぜ」

ネギ先生の背広のポケットから白いいたちが現れました。

「俺っちはおこじょ妖精のアルベール・カモミール。カモと呼んでくれい」

……なんと云うかネギ先生関係には本当に関わりたくなってきました。私の内心などお構いなくカモさんは喋り続けます。

ネギ先生との出会いからネギ先生のお姉さまからの頼みで麻帆良に来たこと。ネギ先生がエヴァンジェリンさんと戦うためにパートナーが必要であること、等々。

「そこで、明日菜姉さんに兄貴のパートナーになってもらいたいですよ」

ここで話が繋がるのですか。

「で、明日菜さん、いかがしますか？」

「え？ 私？」

「無論です。明日菜さんを指名ですので」

「ちょっと待って、見捨てないで」

「いえ、見捨てるつもりはありませんが、最終的には明日菜さんの胸一つですのでそこはきちんと判断願います。さて、カモさん」

「なんでい、吹雪の嬢ちゃん」

嬢ちゃん……

「まず、あなたが怪しいですね。おこじよ妖精など仰有っています。がはつきり申しまして信じられません。以前 魔法をばらすとおこじよにされるとネギ先生が仰有っていましたが犯罪者の成れの果てでないかどうか？」

「こ、この、ケット・シーに並ぶおこじよ妖精をおこじよの刑の犯罪者といっしょにするなんて」

「カモ君は犯罪者じゃありません！」

…ネギ先生、聞いた話だと一度あつたきりの妖精？ を何で無条件で信じるのでしょうか？

「なら、カモさんはネギ先生が全責任を負うと云う事で納得しましょう。では、次に明日菜さんがパートナーになったとしてどの様なメリットが明日菜さんにあるのでしょうか？」

「いえ、その」

「賃金を支払われますか？」

「その、考えてませんでした」

「…ネギ先生、先ほどの先生の依頼を極端に云いますと『俺の盾になれ』になりますか？」

「そんな」

「では、まったく危険がないと仰有るのでしょうか。いえ、それでは明日菜さんにパートナーになつてもらう意味がありません。それとも、エヴァンジェリンさんは出汁で明日菜さんにプロポーズするのが目的なのでしょうか？」

「確かに危険だが、このままじゃ兄貴も本当にやばいんだ。兄貴の話じゃ昨日、エヴァンジェリンとか云う魔法使いと闘いになったとき茶々丸つてロボットに邪魔されて呪文が唱えられなかったんだ。魔法では負けてないからとにかく呪文を唱えるだけの間兄貴を守ってほしい。そこで、姉さんには仮契約バクティオーをしてもらう」

「バクティオー？」

「応よ。パートナーと云っても仮のパートナーだな。お試し期間と云っても良い。本当のパートナーを選ぶ前に期間や能力を限定して仮契約を結んでお互いの相性を確認するんだ。仮の契約でも従者になれば身体能力も上がるしうまく行けばマジックアイテムももらえるから危険はぐってさがるという寸法だ。これも人助けと思って頼まれてくれないか？」

結局は盾なんですね。

「そのパクティオーとやらはどつ行つのですか？」

「魔方陣のなかで兄貴とブチュとキスを」

「却下！」

すかさず明日菜さんが大声で制止します。まあ、当たり前ですね。さて、どこから切り込みましょうか？

「ネギ先生、先生は今回の件をどう思ってたっしゃいますか？ エヴァンジェリンさんは教え子ですか、それとも敵ですか？」

「もちろん、僕の生徒です」

「…ある教師が自分の生徒を補導しようとしたが、生徒の仲間によって殴られてしまいました。さて、その教師はどうするべきでしょうか？」

少なくとも自分も手勢を集めてその生徒に仕返しをする、と云うのは教師の道から大きく外れていると思えますが？」

「で、でも」

「教師としては話し合いで解決するしか術はありません。それでも云うこと聞かず暴力をふるうのならば、そこからは警察の仕事です。教師の職掌に暴力で生徒を従わせると云うものはないのです」

「しかしよ、吹雪の嬢ちゃん。相手は魔法使いだぜ」

「ネギ先生が魔法使いとしてエヴァンジェリンさんと対決するのなら、まあ勝手にどうぞ、と云いまししょう。ただし、一般人である明日菜さんや3・Aの生徒を巻き込むのは止めてください。理由はわかりでしょう」

「でも、そうしたらどうやって」

「しずな先生や学園長に相談しましたか？」

「いえ、していませんけど」

「なぜでしょうか？」

「その、僕の生徒だし」

「ネギ先生、確かにネギ先生は正式な教員となりましたが、それは何でも全て自分で処理して良いと云うことではありません。普通の組織では報告・連絡を常に自分の上司と行わなくてはなりません。ネギ先生の問題はネギ先生だけの問題ではなく麻帆良学園の問題でもあるからです。故に、今回の件でもまずはしずな先生に相談されるのが筋と云うものでしょう」

「は、はい」

「また、仮に闘いになった場合、先生のパートナーが誤って人を傷つけたら、その方は平気でいられるのでしょうか？」

「あ」

「今回、ネギ先生はあまりにも自分のことしか考えていないように見受けられます。状況が状況故にご自分でも気がつかれないうちに焦ってらっしゃるのでしょうか。その点を含めて、やはりしずな先生や学園長に相談なさるのが一番だと存じます。明日菜さんはどう思われますか？」

「そうだね、目の前で誰かが襲われているならともかく、やっぱり誰かと闘うのはいやかな」

「と云うことです。ネギ先生」

「わかりました。ご迷惑をかけてすみません」

そう云い残し肩をおとしながらネギ先生は部屋を出て行きました。

「なんか、後味悪いね」

「全ての人間が幸せになれる選択肢なんてそうありません。ただ、今回は他の先生方に相談すればすぐに解決するはずです。問題があるならば、この選択肢は常にネギ先生も思いつかべられたはずなのに、どうして実行しようとしなかったのか、です」

「カモ」

「どうしよう、カモ君」

しょんぼりした顔で兄貴が話しかけてくる。無理はねえか、明日菜
って云う娘っこの同情心でパートナーになってもうらう話をご破算
になったうえに説教までくらっちゃな。しかし、もうひとりの娘っ
この方は一筋縄ではいきそうにないな。

「でも兄貴は他の先生には相談したくないんだよな」

「うん、あの人はサウザンドマスターを知ってたんだ。僕が捕まえ
られればサウザンドマスターの話が聞けるかも知れない」

「まあ、他の先生に頼る前に何とか自分で解決する努力をするのも
悪くはないさ。兄貴」

とりあえず、兄貴には何人か仮契約を結んでもらわないとな。

2003年4月10日 木曜日 昼

「カモ」

午前中、兄貴のポケットに忍び込んで3-Aの授業をのぞいていた
が…

「いっ…、すいっくこいぜ」

結構、兄貴の奴もてているんだな。好感度の高いのが結構いるし、こりゃうまくやればボーナスかも？

とりあえず、好感度の高い のどかって娘と仮契約バクティオさせようか考えたが昨日釘をさされたばかりだからな。それは追々考えよう。

今は先にエヴァンジェリンで奴を倒すことを考えよう。まほネット
で調べたら奴は闇の福音の二つ名をもつ真祖の吸血鬼で15年前ま
で600万ドルの賞金首だったらしい。これを知ったときはさっさ
と逃げようかと思ったが、奴の賞金を取り下げられたのはサウザン
ドマスターに負けたかららしい。兄貴と闘ったときには魔法薬で補
助していたそうだから、サウザンドマスターに負けて魔力が減衰し
たのかもしれない。ならば、チャンスだぜ。

『復活した闇の福音をサウザンドマスターの息子が退治する』

うまく行きや従者候補の方が兄貴を求めて集まってくるぜ。相手は
二人だ、一人ずつ相手すれば勝機はある。

「兄貴、まず茶々丸って奴が一人になったときに接触しようぜ」

「なぜ、茶々丸さんなの」

「まず、エヴァンジェリンは全力が出せない様だが、元600万ド
ルの賞金首だ。強さから言えばエヴァンジェリンの方が上だろう。
こう云うのは弱いのを先に叩くのが常道だ。それに、茶々丸は口ポ
ツトだからな。万が一、壊れても修理できるだろう」

「うん、でも、」

まあ、兄貴は優しいからな。

「何も最初から鬩えって云ってるわけじゃねえ。茶々丸を説得できればエヴァンジェリンも思い直すかもしれないねえじゃねえか」

「うん、そうだね。とりあえず茶々丸さんと話し合ってみよう」

2003年4月10日 木曜日 夜

「吹雪」

「下着泥棒ですか？」

「はい、いえ、それが」

あやかさんが夜更けに部屋を訪れてそう仰いました。なんでも最近寮内で下着が無くなる事件が相次いでる注意を呼びかけているそうです。

「白い、フェレットみたいな小動物が下着をくわえて走るのを見た
と云う人が」

白いフェレットって……やはり犯罪者じゃないのでしょうか？

「その、いたちもどきの飼い主にこころあたりがあります。とりあえず 被害にあった人に被害金額を申請する様に云ってください。
損害賠償をもらう様 交渉してみます」

「そうですか、わかりました」

信用してくださっているのか深く追求されることなくあやかさんは帰って行かれました。あとで聡美さんか鈴音さんに連絡して防犯カメラから証拠映像が抜き取れないか訊いておきましょう。

2003年4月11日 金曜日 夕方

「カモ」

よし、チャンスだ。昨日からエヴァンジェリンたちを尾行していたが、やっとエヴァンジェリンと茶々丸が別れて行動した。

茶々丸の後を兄貴といっしょにつけたが、樹に引っかかった風船をとったり、婆を背負ったり、猫を助けたり、猫にえさをあげたり…

「…いい人だ」

で、感動してる場合じゃないぜ、兄貴。

教会の裏手で猫にえさをあげている今なら人目がない。

「ネギの兄貴は命をねらわれたんでしょ、しっかりしてくださいよ」

「でも、カモ君」

「確かに茶々丸ってのは良い奴かもしれないねえが、ああ、もしかして命令だから仕方なくやっているかもしれないねえじゃねえか、兄貴。こ

「こは、心を鬼にして一発やらねえと」

「そ、そうか。そうだね、カモ君」

ふう、あぶねえぜ。

「茶々丸さん」

「こんにちはわ ネギ先生」

「茶々丸」

油断しました。ネギ先生の行動パターンから単独行動時の奇襲は確率が低いのでネコさんのえさやりを優先しましたが失敗だったようです。

「茶々丸さん、あの 僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「 申し訳ありませんネギ先生。私にとってマスターの命令は絶対ですので」

「うつつ 仕方ないです」

ネギ先生は手を腰に回し銃を取り出しました。魔法銃ですか。なるほど、威力はさほど高くありませんが即応性があります。銃で牽制しながら魔法を撃つタイミングを計るつもりでしょう。ネギ先生自身も距離をとる様に離れていきます。

近づこうとしますが銃を撃たれては距離をとるしかありません。あ、呪文が完成します。

「魔法の射手 連弾・光の11矢」

呪文の詠唱が完了しネギ先生の周りに11個の光が生じます。魔法の射手は初步の攻撃魔法ですがネギ先生ほどの人が撃てば小銃弾以上のダメージになるでしょう。それを主要部に何発か命中させられたら全損する可能性があります。ならば…背中魔力ジェットを全開にしてネギ先生へと呐喊します。魔法の射手はある程度誘導できますが急激な機動にはついていけない筈。魔法の射手が何本か体を貫きますが致命傷ではありません。ネギ先生に肉薄してロケットパンチをうちま…

「ひっ！」

私におびえるネギ先生の姿を見てロケットパンチの機動シークエンスが強制終了しました。

なぜでしょう。自分自身の保護のため他者への攻撃は許可されません。しかし、これ以上のネギ先生への攻撃はできません。

ネギ先生も呆然としていますので、その隙にジェットをふかして退却します。

「ネギ先生への攻撃を止めたのは私の意志？ わかりません、マスター」

魔法の射手を受けているので修理のため葉加瀬のところに行くべきなのですが私はマスターの家にもどります。マスターに話を聞いてもらいたいです。

17話 看病

2003年4月14日 月曜日 午後4時

「ネギ」

茶々丸さんと闘いで怖じ気づいてしまった僕は当てもなく山に逃げ込み、あげく遭難しかけた。運良く 修行中の長瀬さんに助けてもらい、休日の間いっしょに修行して気がついた。魔法学校をいい成績で卒業して何でも出来るっていい気になっていたんだ
おじいちゃん言葉『わずかな勇気が本当の魔法だ』って言葉さえ忘れていた。

意を決して出勤したけど肝心のエヴァンジェリンさんはお休みだった。カゼだと和泉さんが云っていたけど、吸血鬼でもカゼをひくのかな？ 茶々丸さんもお休みだったので、放課後、家庭訪問に来ている。

エヴァンジェリンさんは女子寮ではなく、茶々丸さんと一緒に別のところに住んでいる。名簿の住所を頼りに来てみればログハウスが建っていた。

「へえー、案外素敵なお家だなア 墓場にとかに住んでるのかと思つてたけど」

玄関に赴き呼び鈴を鳴らす。

「あー、こんにちはー、担任のネギですけど家庭訪問に来ました

「」

「あ、はい、お待ちください」

中から現れたのは制服にエプロンをつけた吹雪さんだった。えっ、
なんでいるの？

「いらつしゃいませ、ネギ先生。エヴァンジェリンさんは風邪でお
休み中です。茶々丸さんは聡美さんのところでメンテナンス中なの
で代わりに私が看病をしております」

さすが、麻帆良の歩く理論武装。僕の知りたいことをすべて教えて
くれたけど…

「あの、吹雪さんはエヴァンジェリンさんの仲間なんですか？」

「ネギ先生の仰有る仲間の定義が判りませんが、クラスメイトが風
邪でフラフラになっている所をお見かけしたら助ける程度の仲でし
ょうか。どちらかと云えば茶々丸さんの方が仲が好いと思います。
ネギ先生はお見舞いに来られたのでしょうか？」

「いえ、違います。ただの家庭訪問です。すみません。変なことを
訊いて。今日は出直します」

果たし状を送りつけるつもりだったけど吹雪さんがいるんじゃないか
ないな。

「吹雪」

「あの、吹雪さんはエヴァンジェリンさんの仲間なんですか？」

もしかして、まだ決着がついていないのでしょうか？ お見舞いに来たのかと思いましたがお見舞いの品も持っていませんでしたし、家庭訪問？ 病欠した人に普通行うものでしょうか？ 英国人だからと云うのも変ですし、魔法使いだから？ それともネギ先生だからなのでしょうか？

「誰か来たのか？」

エヴァンジェリンさんが2階から降りてきました。

「あら、もう起きて大丈夫なのですか」

「ああ、あの薬はよく効くな……飲んだ瞬間は気が遠くなるが……」

「ま、まあ、うちの方ではあの薬を飲まないために健康に気をつける様になると云われてますが……先ほどネギ先生が訪問されましたが、お休みになられていると申しましたら出直すと言付けされて帰られました」

「……なんだか、新しいメイドを雇ったみたいだぞ、正木吹雪。メイド服を着てみんか？」

「お断りします」

なぜ、皆して私で着せ替えをしたがるのでしょうか？

「まあいい、先ほどの桃缶は旨かった。まだあるのか？」

「はい、それを刻んでゼリーで固めた桃ゼリーを作りましたが？」

「食べる」

「判りました。ご用意しますからベッドでお待ちください」

「うむ」

モモゼリー自体は缶詰の桃を刻んでゼラチンを混ぜたシロップで固めただけなので味自体は桃缶と同じなので生クリームとミントの葉でアクセントを付けてみます。

「うむ、旨い」

「ありがとうございます」

「ところで何でお前はいる？」

えっ、今更それを云いますか？

「昨日の買い出しの途中、ふらふらと足許がおぼつかないエヴァンジェリンさんをお見かけしましたので事情を伺ったところ風邪と花粉症でダウンされたとか。茶々丸さんがメンテナンス中のためいらつしやらないのでしかたなく薬を取りに行くと言うことでしたが、あまりにつらそうだったので、そのままここまでお連れして看病いたしました」

あやかさんに了解をとって泊まり込みで看病していました。

「うむ。」苦勞

なにか気まずい空気が流れます。図らずも主人とメイドの様なやりとりになってしまいますね。

「私とお前は敵対していたはずだな」

「まあ、そういう見解が可能なことには否定をしません」

「のらりくらりと、別に恩とは思わんぞ」

「ええ、貸しひとつで結構です」

「くっ… 夜には茶々丸は戻るそうだ。とつとと帰れ」

「わかりました。茶々丸さんは夜まで戻られないのですね。ご夕食を用意いたします。中華風のおかゆなどがでしょうか？」

「勝手にしろ」

幸い材料は結構ありました。さすが茶々丸さんですね、素材は厳選されています。乾燥した貝柱がありましたので水に戻してこれを具に粥にします。炊きあがった粥に蕪と大根の葉を刻んだものを混ぜます。トッピングには蒸した鶏肉と油条ヤウテイウの代わりに油あげを炒ったものを用意しました。

夕食の準備が整ったのは6時頃でした。二階のエヴァンジェリンさんの寝室に伺うとベッドのなかで携帯ゲームで遊んでいます。

「夕食の準備が整いました、どちらで召し上がりますか？」

「食堂へ降りよう」

「わかりました。ではガウンをどうぞ」

あの薬を飲んだなら多分大丈夫でしょうが、また風邪を引かれたら私の2日間がむだになります。

食堂でテーブルについてエヴァンジェリンさんに粥をよそいます。

「貝柱の中華粥です。蕪と大根の葉を混ぜています。トッピングは蒸した鳥肉と油揚げを炒ったものです」

「はい」

レンゲで粥をすくい一口 食べてから云われました。

「恐れ入ります」

「蕪と大根か。二草粥だな」

蕪と大根の葉は七草粥に使われますね、すずな、すずしろです。

「かゆ…うま… くくっ」

エヴァンジェリンさんが独り言を云いながら笑っています。なんででしょう？ 中華粥に笑いのつばなどがあるのでしょうか？

「ピータンがあつたはずだが」

「ええ…召し上がりますか？」

「ああ、出してくれ」

「はい、しばらくおまちください」

病み上がりにはピータンを食べますか。だいぶ、回復なさったみたいですね。そのとき玄関のドアが開く音がし、茶々丸さんが現れました。

「マスター ただいま戻りました」

「ああ」

「おかえりなさい、茶々丸さん」

「吹雪さん？」

珍しく…いえ、初めて茶々丸さんがびつくりした表情をみました。

「気にするな、お節介が一人いるだけだ」

「そうですね、茶々丸さんが戻られましたので私もお暇しましょう。
…エヴァンジェリンさん」

「なんだ、正木吹雪」

「先ほどの貸しひとつですが、ネギ先生にちよっかいをおかけになるのは致し方ないとはいえ、一般の方々、特に3-Aに迷惑をおかけになるのはお止めになって頂けませんか？」

エヴァンジェリンさんはしばらく考えて仰有います。

「よかるう、準備も整ったし、じじいもうるさいからな」

「お言葉承りました、ではエヴァンジェリンさん、茶々丸さん、ごきげんよう」

エヴァンジェリンさん宅を後にします。ああ、私も中華粥を食べたくなりました。明日の朝食は決まりですね。

18話 停電の夜

2003年4月15日 火曜日

「吹雪」

「停電ですか？」

「ああ、吹雪は初めてだよな。前は9月だったし。うちの学園では、と云うより、麻帆良全体で年2回、システムのメンテナンスを行うんだ。夜8時から12時まで一斉に停電だ」

「…何故、今なのでしょう？ 長期休暇中に行えば宜しいものを…
せめて深夜から早朝に行えばまだましではないでしょうか」

「まあ、なかには深夜停電される方が困る連中も多いからな」

千雨さんが意味不明な弁護をしています。

さて、私となりには、むっとり顔のエヴァンジェリンさんがいらつしゃいます。

「おはようございます。エヴァンジェリンさん、茶々丸さん」

「おはようございます、吹雪さん」

「ふん」

やや、不機嫌そうに仰有います。ちょうどそのときネギ先生が入ってきました。

あやかさんの号令で起立・礼をしたあと、

「うわあ、エ、エヴァンジェリンさんー!？」

エヴァンジェリンさんを見てパニックになっています。なにやら意味不明の言葉を連呼してますが良く聞き取れません。

とりあえず、授業が始まりましたが先日までと逆にやたらとテンションが高いのは、これはこれで困るのですが…

「エヴァンジェリン」

果たし状か。ネギ・スプリングフィールドから渡された封筒の表にそう書いてある。書面のほうは読む気にもなれん。どうせ、正義とか正義とか正義について書かれているのであるう。

パソコンルームで茶々丸に学園都市のネットにハッキングをかけてさせている間にあの坊やをどう弄ぶか考えてみる。

「サウザントマスターのかけた『登校の呪い』の他にマスターの魔力を抑え込んでいる『結界』があります。この『結界』は学園全体に張りめぐらされていて大量の電力を消費しています」

「ふむ、超の云う通りか」

魔法使いが科学に頼るとはな…

「まあいい、茶々丸、ぼーやに返事しろ。『今夜9時、桜通りで待

つ』と」

「…イエス、マスター」

「吹雪」

寮に帰ると鈴音さんから依頼していただいたものが届きました。ものを確かめてため息をもらします。あやかさんの方にお願ひしていただいたものもすでに届いています。本来あやかさんに頼むべき事ですがあやかさんでは妙な方向に向かいそうなので私が交渉を行うつもりです。

8時になると停電を告げるアナウンスのあと電気が消えます。千雨さんはさっさと寝てしまいました。明日早起きしてブログの更新をするそうです。もしかしたら、潜入調査のチャンスでしょうか？とおもったら明日菜さんからメールが来ました。

> from 神楽坂明日菜<

> sub 助けて<

> 寮のエントランスで<

なんとなく予想がつきます。とりあえず小物のはいったポーチを持ち、千雨さんに一応声をかけて部屋をでます。

エントランスには明日菜さんとケダモノがいますね。

「ネギ先生がらみでしょうね」

「そうなの、ネギ先生、一人でエヴァちゃんと決闘するって出て行

「つたみたいなの」

「だから、姉さん、ここは緊急事態だから、ネギの兄貴を助けてくれねえか？」

なるほど、切羽詰まった今なら明日菜さんを動かせると思いましたか。

「私行くね」

「……代わりに私が参りましょう」

「嬢ちゃんがかい？」

「はい、そうですが」

「いや、その、なんだ。相手は闇の福音、不死の吸血鬼だ。ただの助っ人じゃ危ないから仮契約しねえと危ねえぜ」

「ちなみに聞きますが、エヴァンジェリンさんは一撃でこの麻帆良を壊すぐらいの力がありますか？」

「いや…… さすがにそこまで無いと思うけど… なんて？」

「じゃあ、何とかかなりそうです」

「なるんだ……」

「では、ネギ先生はいずこに？」

「桜通りに9時だったんだが…」

ならば、もう始まっていますね。さて、明日菜さんですが、ほっておくのも危ない気がします。特にこのケダモノが。

「さて、明日菜さん。部屋で待っていて…くれませんよね。見学だけならば一緒にきても好いですよ」

「え、好いの？」

「ええ、でも本当に見学だけですよ」

「え？ ちょっと待ってくれ！」

ケダモノを置き去りにして非常口から外へ出て明日菜さんを連れて飛び立ちます。

「あの、カモ置いてちゃって大丈夫なの」

「ええ、はっきり云って手の内を見せたくないのです」

情報は貴重です。

「エヴァンジェリン」

目の前でぼーやが泣いている。

闘いが始まるとぼーやは茶々丸に接近されるのを嫌って飛行しながら

ら魔法やマジックアイテムを駆使し応戦していた。無秩序に逃げ回っている様に見せかけ外辺部の大橋に誘導しているのが見て取れた。いざとなったら麻帆良から出るつもりか？　と思っただが、じじいがぼーやに私が登校地獄で麻帆良から出ることが出来ないかと教えているとは思えない。故に畏と推測する。だいたい杖で飛んでいるのに、橋にこだわるのは不自然だ。まあ、性格は違うが親子だな、同じ戦法をとるとは。

案の定、捕縛結界の陣の罠が橋にあつたが茶々丸の結界解除プログラムを起動させ難く解除出来た。無論、私もいまではこの程度の結界などすぐに無効化できるが、じじいに手の内をさらすのはおもしろくない。

ぼーやから杖を奪うと今度は逆ギレしながら泣き出した。1対1なら負けないだと？　笑わせるな。決闘を申し込んだのはどこのどいつだ？　まあいい、邪魔が入る前にさっさとぼーやの血を頂こうと思つた矢先、ぼーやの体が地面に沈み込んでいく。転移か？

「こんばんは、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん」

正木吹雪がぼーやを抱きかかえて10mほど離れたところから浮き上がってくる。隣りにいるのは神楽坂明日菜か。

「さて、ネギ先生、子供たちは睡眠をよくとらないと大きくなれませんよ」

と、云つてハンカチでぼーやの鼻や口をふさぐと、すぐにぼーやはぐったりとした。……おい！

「吹雪ちゃん？」

神楽坂明日菜も驚いているらしい。

「麻酔と睡眠導入薬を混ぜたものです。体には害は無いはずですが、様子がおかしくなったら教えてください」

「ぼーやと刀の柄みたいなのを明日菜に渡すと吹雪はゆっくりとこちらに向かって歩き出した。さて、どうしたものか。」

「正木吹雪！ 貴様、私に昨日、ぼーやにちょっかいを出してもいいと云ってなかったか？」

「ええ、申しました。そして、こうも云いました。3-Aに迷惑をおかけになるのはお止めになって頂きたいと。これ以上のお痛はネギ先生にとって大怪我やトラウマになるかもしれません。それは3-Aにとって喜ばしいことではありません」

「なるほど、そう云う理屈か。で、私が納得するとも？」

「無理…でしょうか」

私は返事の代わりに呪文をたたき込んだ。

「刹那」

停電による結界の消失の隙について現れる侵入者を警戒して私と龍宮は麻帆良の外苑部のビルの上から大橋を監視をしている。魔法生徒の私たちの受け持ちは危険度の低い地域に限られ、山間部などは

魔法先生でも腕利きの人達が警戒にあたっている。

橋故に周りから丸見えで、一本道なので侵入を試みるものも少ないのだが今日は違った。いや、侵入者ではない、ネギ先生とエヴァンジェリンさんが大橋で闘っていた。

学園長から今日一日、ネギ先生とエヴァンジェリンについてはよっぽどのがない限り不干渉を貫けと指示されていたが、そろそろまずいのではないかと思い始めた矢先に事態が一変した。吹雪さんが突如現れ、エヴァンジェリンさんと闘い始めたのだが…

「すごいな」

二人は橋から離れ湖の上で闘っている。エヴァンジェリンさんの魔法で湖には氷の島がいくつもできている。いや、下手すると湖全体が凍結するかも。真祖の魔力とはこれほどのものなのか…

しかし、それ以上なのは吹雪さんだった。攻撃はしていないが縦横無尽にエヴァンジェリンさんの周りを飛翔し相手を翻弄している。緩急のついた3次元機動は時には信じられない動きを見せる。減速なしで逆方向に向きを変えたり…消えていないか？あの動きは飛翔しながら縮地で再現できるだろうか？私は遠くから俯瞰しているからわかるがエヴァンジェリンさんからすれば吹雪さんが多人数で襲いかかっている様なものだろう。

「しかし、攻めあぐんでいる」

龍宮がつぶやく。目のいい龍宮には私よりも詳細に観察できるのだろう。そうだ、今龍宮はサングラスをかけている。以前、私が借りたサングラスと同じ機能を龍宮の好みのフレームで作ったものだ。吹雪さんからの口止め料らしい。暗闇でのマズルフラッシュを避けたり、服の上から銃刀類を見つけることができるので重宝しているらしい。

「ちよつと貸せ」

案の定サングラスをかけると吹雪さんの姿がズームで映し出されている。しかも自動追尾らしく吹雪さんの姿を間近に見える。

「正木は攻撃に剣を使っていない」

確かにこれまでの攻撃は蹴りや掌底だけであの桜色に輝く剣は使用していない。氷を切り裂いているので飾りではないはず。

そして私には困った顔をした吹雪さんの顔がみえていた。

「吹雪」

まったく失敗しました。

エヴァンジェリンさんは不死と聞きましたが、どの程度の不死なのか聞きそびれました。寿命が無いと云うだけではありませんよね。

吸血鬼と云えば胸に杭を打てば滅びるとか聞きましたが、それ以外なら大丈夫なのでしょう。今更、エヴァンジェリンさんにお尋ねするわけにもまいりません。敵に教えてくださいと頼む？ そんな間抜けなことではできません。とは云え、明日菜さんや茶々丸さんの前でエヴァンジェリンさんをイモムシにするのも気が引けます。蹴りなどで様子を見ていますがたいしたダメージが与えられた様にもみえません。もともと私は殲滅戦が多く、出来る限りの力で目標を即座に粉碎することを第一にしてきたのでこう云ったデリケートな闘いには不向きなのです。さて、愚痴をこぼすのも兵士としては失格です。与えられた条件で与えられた目標を達成すべく努力すべし、です。

「エヴァンジェリン」

想像以上の奴だな、正木吹雪は。

闘いに入った瞬間からいつもの穏和な表情はなくなり、ただ、一つの機械のごとく精密かつ正確な攻撃を行っていく。ふむ、後で茶々丸にこの動きをトレースさせてみるか。しかし、この機動には正直云ってあきれれる。普通の人間に行わせればそれだけで死ぬだろう。いや、あいつらならば何とかやりそうな気するな。

こちらの攻撃はすべて見切られている。まあ、あの機動では悠長に呪文を唱えるのは『これから攻撃しますから避けてください』と、云っているも同然だからしかたがない。むしろねらいは湖上に足場をつくること。3次元機動は奴に分がありそうだからな。

奴は魔法使いと云うものに疎いの筈だ。ならば、遅延魔法や無詠唱など知らんだらう。無論、体術とて引けをとるつもりはない。勝ち目はある。

奴がこちらの誘いに乗り、氷上を蹴って突っ込んでくる。躲した蹴りは今までと段違いだ。地面に足がつくことによって体全体の筋肉の力を集約出来ると云うことか？

右手の掌底を受けとめ手首を取り、ひねってそのまま肘を極めようとしたが、よほど体が柔らかいかいのか腕をひねられても体勢がゆらがない。むしろ密着した状態から左脚を横から上げて踵落としをしかけてきた。こいつ、どれだけ体が柔らかいのだ？ 奴を突き放すと同時に私も後ろへ下がって体勢を整えようとしたが、宙返りをしな

がら近づいてくる。早い回転で間合いが測りづらい。無詠唱の氷の射手をはなったが、いったん大きく背後にとんぼをきってこれかわし、素早く脇から回り込んで背後をとられた。

「吹雪」

それは卑怯と云うものでしょう？

思わず口にしそうになります。背後をとり、とりあえず組み付こうとした矢先にエヴァンジェリンはたくさん蝙蝠と化してその場から逃げました。確かに吸血鬼にはそんなことも可能だった気もしますが、実際に目の前で行われると、一瞬ですが呆気にとられました。すかさず何かが飛来しました。氷の矢？ 詠唱しなくとも魔法が使えるのでしょうか？ これは吸血鬼故の能力か、それともそう云う技なのでしょう？ 先ほどの技に比べると威力が違いますので、詠唱無しでは十分な威力が出ないのでしょうか。でなければ、敵前で長々と呪文を唱えるなんて馬鹿げています。その行為自体、自殺行為にしか思えません。故にパートナーが必要なのでしょうか。エヴァンジェリンさんでなければすでに詰んでいる筈ですが…まあ、殲滅目的ならエヴァンジェリンでもすでに達成出来ているはずですが。

とは云え、あれを連発されたら打撃も組技も効かないでしょうし、剣で切り刻むのは最後の手段にしたいのですが……
そうですね、エヴァンジェリンさんが吸血鬼の能力を使うなら私は吸血鬼の弱点をつきましようか。

「刹那」

「これが正木の本来の闘い方かな？」

吹雪さんとエヴァンジェリンさんは湖にできた氷の島で格闘戦に移行していた。ここでも吹雪さんはエヴァンジェリンさんを圧倒している。素早い移動に宙返りを加えて相手を翻弄し、異常にさえ見える体の柔軟性で相手の読みを外していく。

「体の小さい吹雪さん故にパワーよりもスピード重視、互角に組み合うのを避けトリッキーな動きで相手を翻弄する… 口にするとは簡単だな」

「ああ、しかし、一撃もらったらそれでお仕舞いと云う可能性もある」

圧倒的な攻撃でさえエヴァンジェリンさんは吸血鬼の能力を駆使して躲していく。私がエヴァンジェリンさんの立場なら吹雪さんのスタミナが切れるまで待つが… いや、エヴァンジェリンさんだからまだ保っているのか？

「なあ、龍宮。さつきから比べて激しくなっていないか？」

最初のうちは組み付こうとしていた吹雪さんだが、今ではヒットアンドウェイで懐に潜り込んではずるとい蹴りや掌底を放ってまた離れていく。エヴァンジェリンさんは無詠唱の呪文を織り交ぜながら真祖のパワーで圧倒しようとしている。

「そうだな、どうやら二人とも相手を殺すつもりが無かったのかど

うかは知らないが手加減はしていたみたいだ。相手をしているうちに、これぐらいなら大丈夫と判断して力を入れ始めたんじゃないか？」

「あ！」

エヴァンジェリンさんが吹雪さんに牽制として5メートルはあろうかと云う氷柱を蹴り碎き、氷の礫を吹雪さんへと飛ばす。氷の礫が吹雪さんを襲った瞬間、氷の島が爆発した。

「吹雪」

エヴァンジェリンさんがこちらに氷の目眩ましをかけた瞬間、光鷹翼の剣でエヴァンジェリンさんの足許周辺の氷を切り刻み、体勢を崩したエヴァンジェリンさんの体を捕まえ湖にダイブしました。

案の定、エヴァンジェリンさんは水中でパニックを起こしました。ならば、この隙に拘束具でエヴァンジェリンさんを拘束します。この拘束具は優秀なんですが見た目が、まあ、アレです。拘束した人間の周りを緑色のジェル状の物質で覆ってしまい、一見、スライムに捕食される人間の様です。ジェルは拘束の他に生命維持装置として傷の手当をしたり、時には保護装置として口封じなどから被拘束者を守ったりします。対超能力機能つきですが効きますか？

拘束したエヴァンジェリンさんと共に大橋へと移動します。さて、どうしましょう。これだけの人数では転移はできません。とりあえず、ここで話し合いをしましょうか。

「マスター！」

茶々丸さんが駆け寄ってきます。

「これ以上 危害を加えるつもりはありません、茶々丸さん、エヴァンジェリンさん。おとなしくしてもらえたならば、すぐにでも解放します。」

「好きにしる」

今、エヴァンジェリンさんは首だけジェルの上に出しているのだから、まみりたいです。いや、やさぐれた幼女の顔があるだけにいっそシユールと云うべきでしょうか。なんとか身をよじって拘束からのがれようとしていますがあきらめた様です。もし、呪文を唱え始めたらジェルに溺れて頂きましょう。

「明日菜さん。ネギ先生は」

「多分大丈夫、普通に寝てると思う」

エヴァンジェリンさんとネギ先生をこんな目にあわせた私が一番状態が危ういですね。

季節外れの寒中水泳（四月ですが氷のせいでまさしく寒中でした）で二人ともずぶ濡れです。エヴァンジェリンさんはそれでも拘束具の生命維持機能で体を暖めてくれますが、私は濡れ鼠のままです。橋のうえだけに風が吹くと寒いです。

さて、問題です。拘束具はもう一個あります。

……だるまが二人になりました。

「なに、やってるの吹雪ちゃん」

「いえ、これは被拘束者の身体を守る機能もあるので体を温めているのです。出入りは自由ですから明日菜さんもいかが？」

やってみるとお湯に浸かったみたいで結構気持ちいいです。

「いや、遠慮するよ。先生をおぶっているから結構温かいし」

「そうですか」

さて、これからが問題です。

「エヴァンジェリンさん、取引をしませんか」

「取引？」

「ええ、エヴァンジェリンさんが真祖の吸血鬼である故に麻帆良学園と一枚岩でないようなんです。私に全面的に協力していただけるのなら、エヴァンジェリンさんにかけているギアスの解除に力を貸しましょう」

「魔法使いでもないお前にか？」

「いえ、私が直接行うのではなく、出来そうな方を紹介すると云うことです。もちろん、その方が失敗したならこの話はなかったという事で結構です。いかがでしょうか？」

「それはこちらに有利だが好いのか？」

「契約の不履行ですか？ 別にかまいませんよ？ エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとはそう云う方だったと云うだけです」

「まったく、ああ云えばこう云う女だな…ひとつ教えろ、正木吹雪。貴様、今いくつだ」

「ばれました？」

「…65歳です」

「うそ!？」

「なるほど、ご同類でところか？」

明日菜さんはびっくりしていますが、エヴァンジェリンさんはさも当然と云った顔をしています。むしろ200歳とかなら貴禄がついて宜しいのでしょうか。

「さて、くわしい話は、明日にでもしましょうか。お客様もいらしたようですし」

エヴァンジェリンさんの拘束具を解除します。幸い服は乾いています。

大橋の学園側から3人のシスターが現れます。一人は成人、一人は中高生ぐらい、一人は小学生ぐらいですね。

「あなたがたはいつたいここで何をしているのですか」

「女子中等部3・Aの正木吹雪と申します。実は事情はよく分かりませんがうちの担任、ネギ・スプリングフィールドがこちらのエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんに決闘を申し込みました。そのことを聞き、神楽坂明日菜さんと共にエヴァンジェリンさんに決闘を止める様説得をしに参った次第です。今、エヴァンジェリンさんには快く矛を収めてもらったところです。ところでシスターはいつたいどこの所属でしょうか？」

「私は教会に所属するシスターです。シャークティと呼んでください。これは…」

「なぞのシスターです」

「美空ちゃん？」

「美空さんですね、学園長から魔法関係者と伺っていますか？」

「うがー」

美空さんが何か吠えています。

「…そして、こっちがココネ・ファティマ・ローザ。ここであったことを全て聞かせてもらいます。全員私についてきてください」

まあ、しかたが無いですね。しばらく、てくてく橋を歩いていましたが2台の車が迎えにやってきました。私が乗った方にはガンドルフィーニと名乗る先生が運転手をされていました。向かった先は中等部学園長室です。

学園長室には学園長の他、高畑先生、しずな先生、そしてサンゲラスをかけた男性教諭、髪の長いメガネの女性教諭：しずな先生とかぶってます… がいました。それともう一台のほうの運転手は思い切り丸い方ですね。あとから、刹那さんと真名さんがやってきました。総勢17名ですか？ 部屋が狭いですね。ちなみネギ先生はもう起きています。

「もう、そろそろ日付が変わりますがココネさんを帰してはいかがですか」

シスターシャークティに提案してみましたが拒否されました。

「いえ、この子も慣れていきますので」

ふむ、能力があるのか、それとも見た目通りの歳ではないのか？ 気にとめておきましょう。本当は『もう、遅いから明日にしませんか？』と、遠回しに提案してみて、その対応から学園側の反応を見ることでしたがこの件を重要視していると云うことですね。

改めて学園長が口を開きました。

「さて、今回の騒動じゃが」

「その、騒動とはいったいなんでしょう？ 桜通りの吸血鬼騒動？ それともネギ先生の生徒への体罰のことでしょうか？」

私の言葉を受け先生方は色めき立っていますがそこは流しておきましよう。

「まず事の起こりですが、ここ数ヶ月満月の夜 女子生徒が襲われ

る事件が連続して起きていました。犯人はエヴァンジェリンさん、
そうですね」

「ああ」

「なぜですか？」

「ぼーや：ネギ・スプリングフィールドがここに来ると知ったから
さ。奴の血を吸えば私にかけられた呪いは解けるからな、だが襲う
ための魔力さえないから女生徒を襲って魔力を補充しようとした」

「やっぱり、貴様か！」

「エヴァ」

エヴァンジェリンさんの告白に周りの先生方は怒りを露わにしてい
ますが…

「たしか、エヴァンジェリンさんがネギ先生が麻帆良にいらっしや
ることを学園長から聞いたとお伺いしましたが、学園長？」

「ほう、そうじゃったかのう？」

惚けるつもりでしょうか？

「では、先生方にお訊きしますが桜通りの吸血鬼に関してうわさを
聞いて問題にしたりはなされませんでしたか？　そしてエヴァンジ
エリンさんと結び付けて考えたことはありませんでしたか？」

一瞬でしたがガンドルフィーニ先生が学園長を睨み付けました。

「つい、先日も刹那さんから連絡がされていますが？ 刹那さん？」

「はい」

あわてて、飛び出してきた刹那さんが携帯を操作すると、先日の刹那さんとのやり取りが再生されます。

「確か、始業式の放課後でしたから一週間前になります。さて、先生方、再度お尋ねします。桜通りの吸血鬼やネギ先生について学園長からの指示はありましたでしょうか？」

皆さん、渋い表情でこちらと視線を合わせようとしません。

「さて、エヴァンジェリンさんは以前ネギ先生のお父さまから酷い仕打ちをされたそうですね。その行為自体が正しいか、そうでないかは置いておき、恨みをもったエヴァンジェリンさんにネギ先生のことを教えるのは復讐をそそのかしているのも同然ではないでしょうか？ さらにエヴァンジェリンさん行動も黙認していた様ですか？」

さて、これで一方的にエヴァンジェリンさんだけが糾弾されることはないでしょう。

「確かにエヴァンジェリンさんの行為は許されるものではありません。ですが、結局どなたとどなたが被害にあわれたのでしょうか？ 認識障害の魔法とやらであきらかにエヴァンジェリンさんが関わったと判るのはネギ先生が目撃した宮崎のどかさんへの襲撃未遂とその後のネギ先生への襲撃だけです。」

さて、提案ですが、やはり停学処分が妥当ではないかと。ただしエ

ヴァンジェリンさんには普通の停学処分では反省なされないと思いますので、停学期間中は…そうですね、補習として水泳の授業を受けると云うのはいかがでしょうか？」

「ちよ、まて」

水泳と云う言葉にエヴァンジェリンさんがきつちり反応してくれました。先生方の一部も苦笑しています。

「ドバーを渡れる様になるまで停学のままと云うのは？」

「止める！」

「そうですね。まあ、処分の方は先生方で検討をお願いいたします。次にネギ先生、先生がエヴァンジェリンさんに行った指導内容を仰有っていただけますか？」

「…はい」

ネギ先生の口から桜通りの一件から、明日菜さんへのパートナー申し込み、茶々丸さんへの襲撃、エヴァンジェリンさんとの決闘まで話されました。……茶々丸さんにまでちょっかいをかけていたのですか、ネギ先生…

学園長がエヴァンジェリンさんと茶々丸さんに確認をとりましたが、おおむね間違いはないそうです。

「僭越ですが申し上げます。エヴァンジェリンさんが先に手を出したのは原因ですが、その後のネギ先生の対応は私にとっては異常としか思えません。それとも麻帆帆良では先生が生徒に決闘を申し込む

のが当たり前なのでしょうか、シスターシャーケティ？」

とりあえず、常識人ばい方に振ってみます。普通と答えられると拙いのですが。

「いえ、そんなことはありません」

「しかしじゃの、ネギ先生も必死じゃったのだし」

「それがわざわざ、ネギ先生をエヴァンジェリンさんの担任に抜擢した人の言葉でしょうか？事前にネギ先生や他の先生方に説明を行えば何事も起きなかつたのです。いえむしろ、このような事態になる様にお膳立てまでしてみせた。エヴァンジェリンさんはあえて乗ったのでしょうか、他の人間を掌の上で踊らせるのは愉快ですか？」

「……ところでお主達はどうしてあの場におつたのじゃ？」

あきらかに話をそらしていますが避けては通れない話題でしょうかから乗っておきましょう。

「迷惑なことです、ネギ先生の使い魔と称するケダモノが明日菜さんにパクテイオーとやらを要請してきたので、とりあえず私と明日菜さんがネギ先生とエヴァンジェリンさんを説得しようとお橋まで赴いたのです。私たちが到着したらネギ先生は安心したのか意識を失ってしまいましたが。エヴァンジェリンさんもこちらの説得に快く応じてくれました」

後ろで明日菜さんがニヤニヤしている気がしますがほっておきましよう。

「どうして、ネギ先生たちが大橋にいと分かったのじゃ？」

「桜通りから延々と痕跡が残っていましたか？」

「どうやら、私たちの戦闘は直接見られてはいないようですね。ならば出来るだけ惚けておきましょう。」

「龍宮君」

「こちらで確認できたのはネギ先生とマクダウエルの闘いだけだが、刹那さんと真名さんが呼ばれていたのは二人が監視者だったのでしようか？それならば、前回の口止め料がまだ有効なのでしょう。念のため、もう少し保険をかけておいた方が好いかもかもしれません。」

「わかった、今日はもう遅いので帰って好いぞ。処分は追って連絡する。」

学園長が云います。さて、帰る前にもう一仕事です。

「恐れ入りますが、ついでにお願いがあります。」

「…なんじゃ」

「最近、女子寮内で下着の窃盗事件が頻発しているのです。」

「そうか。わかった、早速調査しよう。」

「いえ、犯人の目星はついているのですが。」

ポーチから封筒を取り出し中の写真を学園長に見せます。

「ん、なんじゃ、動物のいたずらか？」

「いえ、そこに写っているのはネギ先生の使い魔です」

私の一言で部屋の空気が重くなります。ネギ先生も写真を見てカモ君と呟いています。

「これは有志の方が隠しカメラで撮影した犯人の姿です。他にも目撃者は複数います。ついでに発信器を取り付けたおとりもつかませておりますが、ネギ先生も認めているようですので必要ではないでしょう。さて、ネギ先生、これが昨日までの被害の明細ですが弁償をお願いいたします」

合計金額が6桁の明細書をネギ先生に渡します。金額も被害者の方の言い値ですからね。金額を確かめてネギ先生がうめいていますでしたがあたりません。

「よもやネギ先生の命令で下着を集めていたとは思いませんが、人語を操るケダモノのさわった下着を持ち主に返却するわけにも参りませんので弁償という形をとって頂きたいのです。それと、女性の先生方のどなたかに盗まれた下着をきちんと処分して頂いてほしいのですが」

「うむ、わかった…」

「それでは、ごきげんよう、皆様」

そう云い残して、部屋をでました。

「近右衛門」

子供達が出て行った部屋でガンドルフイーニ君に詰め寄られとる。ちなみにネギ君も帰らせた、下着の件でしずな先生をつけて。

「くわしい、事情を話してください」

うむむ、仕方があるまい。儂は覚悟を決めて話し始めた。

「今回の件は儂の仕組んだことじゃ。ネギ君とエヴァンジェリンを闘わせてネギ君をきたえるつもりじゃった。エヴァンジェリンも恨みこそあれ子供は手にかけんじゃろうからの。皆に教えなかったのは勝手に手助けされると拙いと思ったからじゃ」

「我々を信用していないのは置いておいて、実際に生徒に被害が出ていたのは初耳でした。それよりもネギ先生を優先なさるとはどう云うことですか」

「それについては生徒には悪いとは思つとる。しかし、エヴァンジェリンに頑張ってもらわねば襲わせる意味も無くなるしの」

「納得できません」

「そうじゃの。出来れば儂も他の方法をとってもらいたかったが警告程度ではエヴァンジェリンも方法を改めなかったからの」

気がついたら共犯じゃった、と云ってもわかってもらえんじゃろ。

「関係ない一般の生徒が襲われていたんですよ！」

うむ、しかし、先ほどの正木吹雪の言葉はエヴァンジェリンを糾弾するようでいて実際にはこちらの動きを掣肘するものじゃったの。

「確かに被害者が把握できなければ罪として成立しない。エヴァンジェリンに聞いても惚けられるじゃろ。しかも隠蔽したのはエヴァンジェリンではなく麻帆良の認識阻害魔法では責めようがない」

儂の言葉にガンドルフィー二君は悔しそうな顔をする。

「儂自身の弁明は無いがエヴァンジェリンには吹雪くんの云うとおり停学が妥当かもしれん」

「それよりも、エヴァンジェリンを今後学園の警備につかせることやこのままネギ先生のクラスに在籍させるのも問題です」

「確かに問題もあろうが警備に人手が足りないのも事実じゃ。それに今回エヴァンジェリンが云っておった通りあやつも他人から魔力を補充しないかぎりネギ先生に挑むことは不可能じゃろう。監視さえ怠らなければ問題はない」

なおもぶつくさ云っておるがここは無視じゃ。エヴァンジェリンにはまだやってもらいたいこともある。

「ネギ先生とエヴァンジェリンの決闘は双方とも怪我がなく、一応闘う前に交戦の意志を互いに確認しておるので魔法使いどうしの私闘扱いとし、これは双方への叱責のみとする。ネギ先生の使い魔の件はネギ先生に処理をまかせて妥当じゃない場合のみこちらで修正を加える」

ガンドルフィー二君も仕方がないと云った風情で黙っている。あきらかにネギ先生びいきの裁定じゃからの。むしろエヴァンジェリンへの貸しになるかもしれん。

「で、学園長ですが、今後独断専行は控えてもらえますか」

「うむ、わかった」

とりあえず今日の所はこれで仕舞いじゃ。しかし警戒すべきは正木吹雪じゃ。どうやら最近扱いにくくなった桜咲刹那が結託していたとは。となると、龍宮真名の証言もあやしいの。監視者をかえるべきかの？

19話 スターブックで

2003年4月16日 水曜日

「吹雪」

朝からエヴァンジェリンさんは登校しネギ先生も表面上、普通の授業を行っています。チラチラこちらを見なければですが。

放課後、エヴァンジェリンさんと茶々丸さん、明日菜さんで街のオープンカフェで今後の相談です。

「ところで、ここはきれいですか？」

「ん？」

「ええと、のぞき見したり聞き耳を立てるものはないかと」

「ああ、魔法的にはいないな」

「防犯カメラにはマスターと吹雪さんは背を向けています、隠しカメラやマイクの電波は受信していませんので盗聴、盗撮の可能性も低いです」

昨日の今日で事件の関係者が隠れて密談をするのは拙いと思い、ある程度向こうに監視させるつもりです。

「で、学園長からは」

「来週の修学旅行は病欠扱いで停学だそうだ。しかも、お前が云ったとおり水泳の授業だ」

「マスターは水の中で目をあけることも出来ません」

茶々丸さんに暴露されました。なにやら茶々丸さんにねじを巻いていますがおしおきなのでしょうが？

「そうですね、まあ、その程度ならば問題ないですね」

ここで軟禁処分にもされたら私が困るところでした。

「ところで茶々丸さん、茶々丸さんの創造主は聡美さんと鈴音さんですが、お二方に茶々丸さんの記憶が流れることはありますか？」

「管理者権限で記憶の閲覧は可能です」

「では、申し訳ありません。しばらく席を外してもらえますか」

「茶々丸、買い物にでも行ってこい」

「Yes マスター」

茶々丸さんには悪いのですができるだけ情報を知るものは少ない方が秘密を守りやすくなります。

「では、まず私の正体からですが、分かり易く云えば宇宙人でしょうか。正確には地球に流れ着き地球人と結婚した異星人の子孫になります」

「胡散臭さは超の火星人なみだな」

「はは、本当に超さんも火星人だったりして」

「てつとり早く宇宙船を呼んで宇宙へお連れすることも可能ですのでそれまでは話半分でも信じてもらえれば結構です。

私たちは寿命や能力のせいで地球人と交わって暮らすのが難しいので成人したら宇宙の方で生活しております。私も今まで御先祖さまの生まれた星にやっかいになっておりました。

さて最近、この麻帆良にあるものが発見されました。くわしくは機密ですのでいまは云えません。仮に原子力発電所みたいなものと云っておきましようか。

宇宙でも私の国だけが運用可能な筈の原子力発電所が何故かここにあり、現地の人間がそれを利用している。まず、この原子力発電所がどうやって作られたものか？ 現地の人間が作りあげたものなのか？ それとも我が国の技術が漏洩していたのか？

例え我が国の技術でなくとも他の国がこれに気づいて原子力発電所を奪取されると我が国のアドバンテージがなくなります。また、原子力発電所の運用に失敗して周りに汚染をされたり、原子力の力で宇宙進出されると我が国も非常にやっかいなことになるので調査に参りました」

「なんなのその原子力みたいなものって」

「私には見当がついたが」

まあ、魔法使いのエヴァンジェリンさんにはバレバレの比喩だったかも知れません。

「この麻帆良には認識阻害の魔法や結界等があるようなのですが、

我々にはそんな概念がありませんのでアドバイザーとしてエヴァンジェリンさんに協力をお願いしたいのです」

「まあ、面白そうな話だな。ところで私の呪いはとけるのか？」

「…銀河最高と謳われた天才科学者ですので能力的には問題ないかと」

「そうか？ よぼよぼの爺に魔法などと云う異文明に対応できるか？」

「我々は延命調整と云う技術で一般の方々でも千年弱の寿命と老化防止を行っております。また、見た目も若いまま方も結構おりますよ」

「お前もそうなのか？」

「私の場合は遺伝子障害みたいなもので成長自体止まっております」

「……それで、そいつは何時ここに来れるのだ」

「今、岡山県に住んでいらっしやるので、GW中にもお招きしようかと」

「おかやまー？」

胡散臭そうに仰いますが現にそうなのですから仕方ありません。

「宇宙では有名すぎるためここに隠棲なさっていると思ってください。宇宙一の哲学、いえ科学者ですのうで」

「まあ、期待せずに待っておいこう」

やや苦虫をつぶした様な表情のエヴァンジェリンさんです。

「その、宇宙人って話、私に聞かせても大丈夫なの？」

明日菜さんが心配そうに仰有います。

「まず、第一にお二方とも私が信頼するに足りると判断しました。次に具体的な証拠さえ残さなければ言い逃れなど如何様にもできません。先ほどの鈴音さんの火星人発言も証拠が無い以上誰も信用しておりませんし。具体的に私が所属している機関さえ表にでなければいいとも思っています。」

私もここにきてから遊んではかりいた訳ではありませんので学園から退去命令が出ても潜伏しながら調査は可能と考えています。

まあ、明日菜さんにもこの話をお聞かせしたのは秘密の共有と申しましようか、うかつにぺらぺらお喋りされてたらどうなるか、やぐざ映画などご覧になったことがあれば想像がつくでしょう」

「うそ？」

「はい、もちろん冗談です」

「おどかさないで」

ちよつと明日菜さんがイスから飛び退いていますが、それほど真実味があったのでしょうか？実際に明日菜さんを共犯者化して情報を守らせようなどは考えていません。

もつとも私が勝仁さまから天地さまたちの話を聞かされたのはそう

「云う意味もあつたと思つていますが。しかし、あんな情報どこに売りつけることができるでしょうか？敵に回る者の大きさを考えれば割に合う話ではありません。」

「失礼しました。さてこの件は今日はこちらまでにいたしましたでしょうか。…話は変わりますがエヴァンジェリンさんは相坂さよさんについては何かご存知でいらっしゃいますか？」

「変なことを聞くな、宇宙とやらに関係するのか？」

「いえ、単に興味だけです。私のルームメイトですので」

「ふふ、つくづくクラスメイトに入れ込むのだな、まあ好い。相坂さよは幽霊だ。ずっと、あの教室、あの席にいる」

「うそ、幽霊？」

「ああ、そう云うことでしたか」

「あまりびっくりしていない様子だな、正木吹雪」

「靈魂についてはこちらでもある程度研究されておりますので、そう云う事例が確認されているのは知っております。ただ、むやみに関わっていい問題でもないのですが」

「アストラル界はうかつに触れるとたたりがありますからね。皇家の樹に携わっていると実感できます、触らぬ神に…… 瀬戸さまのことではありませんよ。」

「こ、こんにちわ、エヴァンジェリンさん、明日菜さん、吹雪さん」

突然ネギ先生が現れました。昨日の騒動のメンバーが顔をつき合わせて話しをしていれば声もかけたくなるでしょうね。

「ふん、ぼーやか」

「ごきげんよう、ネギ先生」

「こんにちは」

一応空いている席を先生に勧めます。

ネギ先生は昨日の事を改めて謝罪され、一応エヴァンジェリンさんも謝罪を受け入れました。昨日の闘いぶりから見ると、ネギ先生とは完全に遊んでいたのであまり拘りはない様ですね。

「それで、エヴァンジェリンさんに訊きたいのですが、サウザンドマスターを知っているのですか？」

「知っているとも、この学園に縛り付けたのは奴だからな」

エヴァンジェリンさんは麻帆良に入学する経緯をネギ先生に話し始めました。それとネギ先生のお父さまについても。けっこう、ちやらんぽらんな人みたいですね。むしろネギ先生が神聖視しすぎていると云った方が正しいのかもしれませんが。

「そんな 奴が サウザンドマスターが生きているだと」

逆にネギ先生からの情報では、先生は6年前にお父さまと会っており、そのとき頂いた杖が証拠だそうです。ネギ先生のお父さまが生きていると云う情報にエヴァンジェリンさんはご満悦の様子です。

「京都だな。どこかに奴が一時住んでいた家があるはずだ」

「京都ですか？」

「ちょうどよかったじゃない、ネギ先生。来週から京都に修学旅行じゃない」

「本当ですか？」

「はい、そうです。しかし、残念ですね。ネギ先生」

「？」

ネギ先生が不思議そうな顔をしています。何故でしょう。

「いえ、せっかく京都までいっても訪ねる暇が……あの、ネギ先生？ 修学旅行の引率をほっぽってお父さまの家をお探しになるつもりではありませんよね？」

「いえ、その、休みも旅費もないので…服の弁償代で…」

致し方ありません。自業自得と云うものです。

「ネギ先生はマギステル・マギになるために教職についているのですが、ネギ先生のお父さまを捜す事はそれとは関係ありません。お父さまの捜索を優先させることはマギステル・マギから離れることになると思うのですが？」

ネギ先生は難しい顔をして考え込んでしまいました。子供に親を捜

すな、と云うのも何なのですが無自覚で行われるのはよしとしましょう。無論、考えの末に選んだ結果に口をはさむつもりもありませんが。

「服の弁償代と云えば あのいたちは処分されましたか？」

「処分ですか？」

「人語を解す生き物ですから物の価値観は判るはずです。下着を集めた事も窃盗と知りつつ行ったとしか思えません。弁償したから罪が無くなったとは云わせませんよ。ネギ先生がきちんとした罰を与え、今後の予防策を私たちに提示できない場合は害獣として駆除させて頂きます」

「駆除ですか？」

「真名さんに頼んでモデルガンで狙撃でもして頂きましょうか？」

「ひえー」

真名さんの妙にリアルなモデルガンを知っている明日菜さんが悲鳴を上げます。ネギ先生の背広のポケットからもくぐもった声も聞こえます。

「はい！　すぐに検討します」

とネギ先生が逃げる様に帰ってしまったのでそこで私たちもお開きになりました

20話 3 - A西へ (出発準備)

2003年4月17日 木曜日

「ネギ」

いきなり学園長に呼び出されて修学旅行が中止になったと云われたときはびっくりしたよ。確かに吹雪さんには釘を刺されているけどチャンスがあるなら父さんの家の手がかりを見つけたいし、純粹に日本の古都、京都・奈良の方がヤンキーのハワイよりずっと良い。結局、僕が特使として学園長いや、関東魔法協会の長の親書をもって訪問することになった。降ってわいた大役だけどこれが成功すれば立派な魔法使いに一步近づけるだろう。

マキステル・マキ

「吹雪」

放課後、修学旅行について懸念事項があると云うことで刹那さんの部屋にいつものメンバーが集合しています。

「実は修学旅行で関西呪術協会は魔法先生の京都入りを拒否したのですが学園長がネギ先生を親善特使として派遣することを関西呪術協会に通告してきました」

ここまでは昨日までに刹那さんからも相談されて知っていますが。

「それで最終的に関西呪術協会は？」

「何のコメントもしていません」

「と云うことは最初の状態を維持ですね？」

「はい、基本的に関西呪術協会は魔法先生自体を西洋魔術師の隠れ蓑とみなして不快感を持っています。裏は裏に徹して表に出ないと云うのがいままでの日本の術者ですので。」

しかし、本当はこのからお嬢さまが麻帆良からでて護りの薄い普通の旅館に滞在することに詠春様が危機感を覚えて回避しようとしたのですが」

京都に観光に来るな！ と云うのもおかしい話ですからね。

争いが起きそうだから来てほしくないと云ってしまつと逆に管理体制に問題有りと取られかねません。

「結局学園長がゴリ押しを？」

「はあ、いえ、一応京都行きはクラスの決定らしいので」

それを盾にして京都行きを決定ですか。さて学園長の真意はどこにあるのでしょうか？ ある意味挑発行為ですが鉄砲玉をネギ先生にさせるとも思えません。

ここで関西呪術協会と戦争でも始められると麻帆良の警戒レベルが引き上げられ調査に支障がでるのは必至ですのでなんとか穏便にすむようにするべきでしょう。

「ところで刹那さん前々から思っておりましたが、刹那さんの得物は野太刀ですね」

「はい、そうですが」

「修学旅行にも持参されるのですか？」

「はい」

迷いの欠片もなく仰有いますが、

「世間一般には銃刀法と云うものが……」

「そ、それは符で認識を阻害できるので大丈夫です」

「……例えば京都で木乃香さんと刹那さんが並んで歩いているときにお巡りさんと出会いました。そのとき何者かが刹那さんの術を打ち消しました。修学旅行生には不似合いな背中のものに気がついたお巡りさんが質問してきました。さてどうします？」

「……」

切り捨てます、と云われたらどうしようかと思いましたがまだ常識はありますよね。

「神鳴流とは野太刀以外は使えないのですか？」

「いえ、神鳴流は武器を選びません。ただ、この太刀、夕凧は長からお嬢さまの護衛に選ばれた際に託された物です」

「それにこだわってトラブルを巻き起こしてどうしますか？ 詠春さんもその夕凧を刹那さんに預けたのは、木乃香さんを託すにあたって感謝と信頼を形に表したのであって、それにより刹那さんの護衛の仕事に支障をきたすのは本意ではないでしょう。それに修学旅

行中の移動は電車、バス、タクシーなどですが、混雑した車内でもそれを振り回すおつもりですか？」

「刹那さん…多分口では勝てないからあきらめたほうがいいと思うよ」

「なにか私わがままを云っているみたいじゃないですか？ 明日菜さん。」

「今回の修学旅行で詠春さんが麻帆良の受け入れを拒否しているのは何か関西呪術協会側に動きがあると見るべきでしょう。木乃香さんの護衛ならば攻めより防御に重きを置くべきだと思います。敵に襲われた際も敵の殲滅よりも木乃香さんをかばいつつ逃げるべきだと思いますが刹那さんはどう思われますか？」

「いえ、それは理解しているのですが」

「太平洋戦争当時日本海軍の軍艦には菊の紋章、天皇家の家紋が付けられていました」

「？」

「戦争などで艦が沈没するとき天皇陛下の持ち物である軍艦を損なうことをわびるため艦長が艦と共に沈むことが度々ありました。当時周りの人間はそれを賞賛しましたが、今の私たちからすれば人材を無駄にするだけで戦争にはなんら寄与しない行為でした。刹那さんが詠春さんからお預かりした夕凧を大事に想われるのは私にも推察できますが、それにこだわりすぎて大局が見えなくなるのはよくありません」

「……そうですね。今回、夕凧は置いていきます」

「しかし、そうになると、難しいですね。野太刀がだめだから普通の刀と云うわけにもまいりません」

「なら木刀がいいんじゃない。修学旅行のお土産の定番だし」

明日菜さんのアイデアですが結構良いですね。

「そうですね、木刀ならそれほど不自然ではないですね。気で強化すればその場はしのげます。あと、用心のため短刀も用意します。これなら大丈夫ですよ」

私はアドバイスのつもりなのですが決定権はこちらにあるのでしょうか？

「それは刹那さんの判断に任せますが鞆内に収まるものならばいいと思いますよ。それと、投げることもできる細身のナイフを忍ばせておくと便利です」

常識かもしれないですが一応アドバイスしておきます。

「それとエヴァンジェリンさんと茶々丸さんは欠席されるので6班は3名になります。何とか理由をつけて5人班に振り分けられる様にしてください。刹那さんは5班に」

「うん、私が引き取る様に先生に云うよ」

5班は明日菜さんが班長でメンバーに木乃香さんがいますので是非とも刹那さんを入れておきたいですね。ちなみに班分けは以下の通

りです。

第1班（5名）

柿崎美砂、釘宮円、椎名桜子、鳴滝風香、鳴滝史伽

第2班（6名）

古菲、春日美空、超鈴音、長瀬楓、葉加瀬聡美、四葉五月

第3班（5名）

雪広あやか、那波千鶴、長谷川千雨、正木吹雪、村上夏美

第4班（5名）

明石裕奈、朝倉和美、和泉亜子、大河内アキラ、佐々木まき絵

第5班（5名）、

神楽坂明日菜、綾瀬夕映、近衛木乃香、早乙女ハルナ、宮崎のどか

第6班（5名）

桜咲刹那、絡繰茶々丸、龍宮真名、エヴァンジェリン・A・K・マ
クダウエル、ザジ・レイニーデー

先頭の方が班長です。

「それじゃ、龍宮は吹雪さんのところに」

「いえ、真名さんには4班に入る様にしてもらえますか？」

「別に構わないが、何故？」

「云ってみればネギ先生対策です。関西呪術協会といざこざが起これるとしたら、第一に木乃香さん、次にネギ先生がらみでしょう。今

現在、ネギ先生と親しいのはあやかさん、まき絵さん、のどかさんですね。班単位の行動時、ネギ先生を誘う可能性が高いので、もしそうなったら注意をお願いします。刹那さんは木乃香さんの護衛を第一に、明日菜さんは問題が起こったら私か真名さんに連絡をしてください」

「なるほど、了解した。あそこには朝倉もいるからちょうど良い」

「じゃあ、私もパルには気をつけるわ」

今回の修学旅行中、真名さんに協力を依頼しています。基本1時間/¥10,000で契約しています。戦闘などの危険手当は別途支給。弾薬等の消耗品も此方持ちです。破格の待遇だと真名さんには云われましたがやはり14歳の少女を危険な目に遭わせるのは年長者として気が引けます。もちろん真名さんの実力は確認済みでの話なのですが。

「しかし、吹雪ちゃんも大変よね。結局、ネギ先生たちの後始末まで考えなきゃならないなんて」

「理不尽だと思いは致しますが、だからと云ってこちらの都合だけではうまくいきません。時には『損して得取れ』と思って行動した方が良いことが多いのです」

それがずーっとなら続くの、いかななものかとは思いますが…

21話 3・A西へ（一日目）

2003年4月22日 火曜日

「ネギ」

さて、今日から修学旅行だ。教員は早めに集合地点まで行かなくてはいけない。うん、楽しみだから早く行きたい訳じゃないよ？

「でも本当にたのしみだなあ。日本の古都の京都・奈良に五日間も行けるなんて修学旅行って何て素晴らしいんだー」

「しかし兄貴 関西呪術協会の長への親書つてもあるし油断すんなよ！」

「うんサウザンドマスター住んでた家も、もしかしたら関西呪術協会の長さんなら知っているかも」

集合の大宮駅に着くと新田先生やしずな先生、瀬流彦先生がすでに集合していた。もちろん遅刻じゃないけど一番乗りしたかったな。

他にものどかさんやまき絵さん達も集まっていたのには驚いたけど、みんな楽しみにしていたんだね。

「それでは京都市の3A 3D 3H 3J 3Sの皆さん。各

クラスの班ごとに点呼をとってからホームに向かいましょう」

しずな先生の号令によりいよいよ修学旅行が始まった。

1班から順に『全員集合』の報告が来たが6班の桜咲さんからエヴアンジェリンさんと茶々丸さんが欠席して3人になってしまったと云われた。しまった、前々から二人が修学旅行に参加できないのはわかったけど班分けまでは考えてなかったよ。

「6人班もあるんだから5人班にふりわけたら？ せっかくの修学旅行なんだからみんなでわいわいしようよ。刹那さん、うち来る？」

「は、はい。お願いします」

僕が考える間もなく出欠の報告を終えて近くにいた5班の班長の明日菜さんが刹那さんをひっぱって行ってしまった。

「明石、頼めるかな？」

「もち、OKだよ」

龍宮さんは4班へと移っていった。

「じゃあ、ザジさんは我が3班へ」

「(コク)」

あれよあれよと云う間に問題が解決してしまった。でも、あやかさんって普通にザジさんとコミュニケーション出来ているよね…

「吹雪」

ネギ先生が『6人班から一人回して4人にしましょう』など云い出す前に無事に刹那さんを5班に送り込むことができました。明日菜さん上出来です。

東海道新幹線 ひかり213号 新大阪行きが発車してから改めてしずな先生とネギ先生からの出発の挨拶がありました。

しばらく何事ありませんでしたが、いきなり、そこかしこにカエルが出現しました。と、同時にものすごい勢いで移動する人影が！

犯人かと思いましたが楓さんでしたね、もしかして苦手なのでしょうか？カエル。

ふつうのアマガエルでしたが大きさ拳大なのでインパクトが大きかったのですね。数も数ですし、予想外の場所でしたので車内はパニックになりました。

まあ、普通に考えれば関西呪術協会の妨害でしょうがいったい何の意味があるのでしょうか、と思っている矢先に封筒をくわえたツバメが通り過ぎ、それを追ってネギ先生が走っていきました。早くも親書を奪われましたか？ まあ、あちらは今刹那さんが偵察にでかけているのでうまくやってくれるでしょう。

しばらくすると刹那さんが戻ってきました。

「途中、ネギ先生と出会いませんでしたか？」

「はい、式神が親書をくわえていましたので回収し、ネギ先生へ返しました」

「ごくるつさまでした。で、術者は？」

「いえ、そちらのほうはさっぱりです」

トイレに籠もられていたら巡回しただけではむりでしょう。もっとも逃げ場も無いので誘拐などは不向きですし下手に術をつかえば自身を巻き込んでしまいますし、車内ではこれ以上は無理でしょうね。

「先ほどのカエルは陽動でしょうか？」

「はい、あちらも式神でしたので同一犯と思われます」

「多分、小手調べと云ったところでしょうか？ 次は京都に着いてからだと思いますが気はぬかないようにいたしましょう」

「はい」

それ以後何事もなく京都に着き、京都駅からバスで清水寺へ移動しました。清水寺近辺の outlet で早速刹那さんが木刀を買っていました。

「せつちゃんはほんと剣道がすきやね」

木乃香さんにかかわれています。

しかし、ここでも妨害が起きました。落とし穴はともかく音羽の滝にお酒を混入されたのはちよつと頂けません。酔いつぶれたクラスメイトをバスに押し込んでホテルへ移動しました。

「刹那」

まったく犯人は何を考えているのだろうか？ やっていることは子供のいたずらだが式神の術者の実力はかなり高いかも知れない。目標がお嬢さまかネギ先生か、それとも両方か？

「なあ、せつちゃん、なに、むずかしい顔してる？」

こ、このちゃん、折角現実から目を背けているのに引き戻さないでください。

5班に編入された私は班行動や就寝をいっしょにできると内心喜んでいましたが、そう、お風呂までいっしょなのでした。

あれ、なんかかなりときどきしてきました。武人の心得として着替えや食事など早くするようにしている私はさっさと脱いでしまい、このちゃんが脱ぐのをゆっくり観察……いや、何してる？ 私！

そのとき、露天風呂から人の気配がしました。このホテルは麻帆良学園のみが宿泊しているはずだし、女性教諭はしずな先生だけです。入浴は3-Aからだが、まだほとんどの生徒がダウン気味だったので私たち3人が一番乗りはずです。

「さきにいます」

露天風呂は湯煙で見通しが悪いが、誰かが隠れている気配がします。

「誰だ？」

一瞬迷ったが誰何の声をかける。無関係な人を巻き込むわけにはいかないし、例え敵を逃がしてもこのちゃんさえ無事なら問題ない。手ぬぐいをお湯で濡らしてもつ。武人がもつ濡らした布は鈍器と同じだ。

ゆっくり、気配がする岩に近づくと、

「風花

フランス

エクサルマティオー
「武装解除」

いきなり呪文を唱えられた！ 西洋魔術師か？ 手にした手ぬぐいが吹き飛ばされるが構わず回り込み相手の首に手をかけた。

「ネギ先生？」

そこにいたのはネギ先生だった。なぜ、女湯にネギ先生が？
もしかして、このちゃんを覗くつもりか？

左手でネギ先生の急所をつかむ。このちゃんを汚す奴など、つぶす

！ いや もぎる！

ネギ先生から奇怪な声があった。

「くえ」

「ひゃあああーっ」

重なる様に脱衣所からこのちゃんの悲鳴が！

急いで戻るとこのちゃんと明日菜さんがおさるに襲われている。脱衣所に置いておいた木刀をつかみ、このちゃんを襲うおさるをなぎ払う。低級の式神らしいおさるは気で強化した木刀の一撃で術がと

け符にもどる。

「明日菜さん！」

もう一方の明日菜さんを見ると……明日菜さんにもおさるはとりついているが明日菜がさんの蹴りや突きで符に戻っていく。確かに低級な式神だが一般人の攻撃で符に戻るわけではない。なぜだ？

全ての式神を倒しはしたが……このちゃんにどう説明しよう？

「せつちゃん、ありがとう」

「いえ、お嬢さまもご無事で」

「ぶー、また、お嬢さまに戻るとる」

「いえ、その……ああ、実はネギ先生がなぜか風呂場にいたんです
が」

あれ、ネギ先生はどうしたのかな？

バスタオルを体に巻いて露天風呂に戻るとネギ先生が浮かんでいた
……

「吹雪」

刹那さんから呼び出され6班の部屋にいます。この部屋は6班が無

くなつたのでだれも使用していません。そこに明日菜さんと刹那さん、そしてネギ先生がいます。あと ケダモノも…

「おうおう、きりきり吐いてもらおうじゃないか!」

なぜか ケダモノが偉そうに刹那さんに詰め寄っています。

「どういたしたのですか?」

「お風呂にいつて、先に刹那さんだけ脱衣所をでただけど、なぜか浴場にネギ先生が居て驚いた刹那さんがネギ先生を気絶させてしまったの。そしてここに連れてきたんだけど、カモが刹那さんに関西呪術協会のスパイだと云い出して」

明日菜さんが説明してくれます。ネギ先生はと見れば回復されたようですね。

「生徒名簿にもちゃんときょーとかみなるりゅーとか書いてあるしネタは上がってるんだ!」

「人を犯人扱いされるならそれなりの証拠と覚悟はありなものでしょうか? ネギ先生」

「でた!」

「いたちが何か云いましたか?」

「確か明日菜さんたちは露天風呂に向かわれた筈ですが?」

「そうだよ」

なんで、そんな所にネギ先生がいたのでしょうか？

「そんな、ちゃんと男湯と暖簾が掛かっていましたよ」

もしかして、これもいやがらせの一連でしょうか？

「新幹線のなかで親書を奪われそうになったとき、こいつが奪われた親書を持っていたんだぜ」

「それは式神を切って取り戻したんです」

「どうだか、ばれそうになったから返しただけじゃないのか？」

刹那さんもケダモノと水掛け論をしてる場合ではないでしょうに。

「以前、学園長から刹那さんが木乃香さんの護衛であるとお聞きしたのを覚えていらっしやいますか？ネギ先生」

「はっ、はい、覚えています」

「学園長が刹那さんの身分を保障しております。信じて頂けないでしょうか？」

「…わかりました」

なにか、いやいやっぽいですが刹那さんは何かしたのでしょうか？

「学園長が話された通り木乃香さん自身の立場は関西呪術協会のなかでは不安定です。木乃香さんが京都に来る、いえ、麻帆良が出る

ことで何らかの動きがあるのを関西呪術協会の長が察知して今回の修学旅行を渋っていたのです。刹那さんもそのため過敏に反応したかもしれませんがそこはお察しください」

「そうだったのですか。　：わかりました、僕も木乃香さんの護衛、お手伝いします」

「お志はありがたいのですが遠慮させて頂きます」

「何ですか？」

「今回の修学旅行にまぎれて親書を関西呪術協会に渡すのがネギ先生の役目と伺っております。つまりはネギ先生は関西呪術協会から何らかの妨害を受ける可能性が高いのでそんな人物を木乃香さんに近づけたくはないのです」

「うっ」

強く云いすぎたでしょうか？　とは云え、事実ですから。

「なあ、嬢ちゃん、兄貴と手を組むのは間近にメリットは見いだせないが、長い目で見たら関東魔術協会と関西呪術協会の橋渡しになつて木乃香嬢ちゃんにもメリットに成るはずだ。ここは、仲良く…」

「いくら親書を渡されても早急には関係は改善されませんよ」

「なに！」

「お訊きしますが、ネギ先生は関西呪術協会に赴いて何をされようとしていたのですか？」

「それはもちろん親書を関西呪術協会の長に渡します」

「それで？」

「え？」

ネギ先生は不思議そうに私にそう云いますが、私としてはそんなネギ先生いや関東魔術協会に疑念を抱かざるを得ません。

「それで終わりですか？ …… 関東魔術協会の親書とやらは、受け取ったら無条件に関東魔術協会と仲良くしなければならぬほどの効力があるものなのでしょうか？ だいたい、書類を渡すだけならば郵便でも電子メールでも手段はいくらでもあります。そもそも何故関西呪術協会と関東魔術協会が対立しているのかネギ先生はご存じですか？」

「…いえ、知りません」

「それでは、もし関西呪術協会の長が親書の受け取りを拒否したり、親書を受け取っても親交を結ぶつもりないと返事されたらどういたしますか？」

「それは読む様に頼んだり、仲良くするように説得します」

「いったい何がもめている原因か知りもせずには？ 例え原因を教えてもらえたにせよネギ先生にいったいなにができるのでしょうか？」

ネギ先生は英国からの研修生ですから正式な関東魔術協会の魔術師では無いと思いましたが？」

「…はい」

「親書を渡す、と云うのは歴とした対外交渉の一環です。関西呪術協会の中には、まったく地位のない者が親書を持って交渉の席に臨むこと自体侮辱だと考える者もいるかもしれませぬ。体面とか面子を重視するからです」

「それでは、僕をしていることはまるきり無駄なのですか？」

「困ったことにそう云うきれいな部分もあります」

「えっ、そうなんですか」

「ただし、それは関東魔術協会からみた場合の話です。誰にかは判りませんが、関東魔術協会が関西呪術協会との友好を求めていると云うアピールにはなりません。また、それをネギ先生…いえ、サウザンドマスターの息子が行うと云うのも大きいのもかもしれません」

「あの、吹雪ちゃん。なにか思い切り生臭い話なんだけど」

「周りにアピールすることで外堀を埋め関西呪術協会を交渉の場に引きずり出すのが目的ならば長期的な視野から見れば和平に有効でしょう。」

話を戻します。関東魔術協会の特使になられた先生は実情がどうであれ今現在、京都にいる関東魔術協会の代表です。その様な方に庇護を受けるのは木乃香さんの立場がいまだ微妙なためプラスになるかマイナスになるか判りませぬ。ここであえて博打を打つこともないと思ひ先生の申し出を辞退させて頂きます」

「しかしだな、嬢ちゃん。ともかく関西呪術協会の妨害あるのは事実なんだしクラスのみんなも危ないんだぜ」

「そうですね、ですが私は今日の一件は妨害と云うより、嫌がらせいえ、あてこすりと云ったものだと思っておりますが」

「あてこすりですか？」

「関西呪術協会が関東魔術協会と折り合わない原因の一つに魔法の秘匿に関する両者の見解の不一致があります。ともに一般の方々は魔法を秘匿するのが原則らしいのですが、関西呪術協会からみて麻帆良学園とはそれを守っていないのです。元々一般の学校だったところに魔術師が潜んでいるのではなく、魔術師が作った学園に一般の生徒が通っているからです。」

魔術を一般人から遠ざける理由として魔術が危険であると云うのがありますが、麻帆良では逆に一般の人を呼び込んでいます。穿った見方ですが麻帆良の魔術師が人間の壁として一般の生徒を置いているとも考えられます」

「そ、そんなことはありません！」

「それなら、麻帆良の魔術師は一般生徒の安全に責任を持たなければなりません。しかし、今日のさわぎで、あのカエルが爆弾だったり、お酒の代わりに毒が混入されたとしたらどうだったでしょう？ 『生徒が守れないなら巻き込むな』と云うメッセージにも思えるのですか？」

云いたいこと云わせたもらいましたが部屋の温度をだいぶ下げてしまいました。

「無論、今のは私の推測です。麻帆良には麻帆良の考えがあつて魔法使いと一般人が一緒に生活しています。私自身、取り立ててなんらかの被害を魔法使いから受けているとも思えませんし。」

今、云いたいのは関西呪術協会と関東魔術協会には意見の相違が多数存在するため対立しているのです。親書を交わして仲良くしようと言つのは簡単ですが、どう仲良くするかは難しい問題なのです。あてこすりとは申しましたがこれ以上妨害が続くようなら、妨害を阻止するのではなく修学旅行自体をとりやめるべきでしょう」

「では、僕はどうすれば良いのですか？ 親書を渡してはいけないのですか？」

ネギ先生が沈痛な表情で訴えかけてきます。 建前として私はあな
たの生徒なのですが…

「ネギ先生のお立場からすれば職務を勝手に放棄されるわけにも参りませんから、とりあえず親書を関西呪術協会に届けるしかありませんねえ…」

私や明日菜さんが刹那さんに協力しておりますがなんの力持たない身ですから簡単なサポート程度しかできません。基本、刹那さんに負担がかかります。

まあ、ネギ先生がご自分の判断でホテルの周囲や、木乃香さんがいる場所以外をパトロールされてもなんら止める権限はもちません。ですがネギ先生も狙われる立場なのでお気を付けください」

「はい、わかりました」

弾かれたようにネギ先生が出て行かれました。

「あんなこと吹き込んで大丈夫なの？」

「真名さんもおりますし大丈夫ではないかと。東からも護衛の方がついているのでは？」

「確かに瀬流彦先生が今回一緒ですが……」

ちよつと不安げに刹那さんが仰有います。しかしネギ先生に落ち込まれるとクラス全体が意気消沈しますからね……

「まあ、しかし、恥ずかしながら、今まで今日のことは質の悪い悪戯だと思っていました。いえ、それ以前になぜ西と東が仲が悪いの考えたこともなかったです」

「まあ、現場には現場の理論もありますから。あまり考えすぎるとかえって動けなくなることもあります」

私は単艦行動の艦長でしたからこう云うことが気に掛かるだけなのかもしれません。

「それとは話が別なのですが」

そう前置きしてから刹那さんが懐から2枚の紙を取り出し短く呪文を唱えると紙は鳥に変化しました。

「式神です。お二人とも軽く握ってもらえますか？」

一応、云われた通りにしてみますが何ともありません。しかし、明日菜さんがさわった方は紙に戻ってしまいました。

「やはり… 先ほど脱衣所で式神に襲われたのですが明日菜さんが叩くと術が解けてしまった様に見えたので」

「え？ え？」

なるほど、明日菜さんには術を破る力が有るようですね。刹那さんがなんともない様なので還す力ではない様ですし、無効化と云うものでしょうか？

「確かに興味深いです。ただ、どの程度の力が判りませんね。麻帆良に帰ってからゆっくり調べましょう」

それでこの日は仕舞いになりました。

「真名」

「なるほど、こう云う使い方もできるのか」

正木にもらったこのサングラスは重宝している。どう云う理屈か知らないが金属や爆発物を検知できるので服の下に何かを隠していることが事前にわかる。最も正木自身 魔法に疎いと云っている。これは魔法具に関しては大して効果はない。

さて、今はネギ先生と入れ違いにホテルに入ってきた女性従業員だ。事前に正木からホテル従業員の顔写真を渡されていた。正面と側面

からとられた顔写真をこのサングラスに記憶させることにより自動的に判別してくれる。記憶させると云っても写真を見つつコントローラの釦を押すだけだから手間にもならない。

データに一致した人間にはタグで名前が表示されるが一致しないと何も出ない。この様に…

「そこのお姉さん。ここは麻帆良学園の貸し切りでね。従業員でもないの侵入したら不法侵入で警察を呼ばれるよ」

ワゴンの前に立ちほだかり静かに云う。相手は一瞬、表情を変えたがすぐに平静さを装った。

「あら、うっかりしていました」

あっさりと言はひきかえしていった。残念ながら荒事にはならなかったので、危険手当の上増しはなかったがクラスメイトたちの安全が優先だからな。

一応、メールで報告だけはしておこう。

「天ヶ崎千草」

東のチビッコ先生がわざわざ境界を開けてくれたのにガンダムの嬢ちゃんに見つかってしまった。

チビッコのうかつさからするとお嬢の護衛か？腕も立ちそうそやしさっさと引き返したわ。

「千草はん、今日の襲撃はなしですか？」

月詠はんかえ。

「ええ、潜入に失敗してんからに。けど本番はこれからそやし、それからおきばりやす」

「そーどすかー、残念どすが明日以降に期待しますー」

この娘はほんまに闘いが好きどすな。

云うた通り、これまではお偉いはんからの依頼の単なる脅しやったけどこれからほんまの目的を行える。愉しみどすわ。

22話 3・A西へ（二日目）

2003年4月23日水曜日

「ネギ」

どうしよう、朝倉さんに魔法使いであることがばれてしまった。

宮崎さんには告白されたし、親書も届けなきゃいけないし、朝倉さんにはばれてしまったし、宮崎さんには……

いつの間にか思考がループしていた。

「おい、ネギ先生」

「ここにいたか兄貴」

朝倉さんとカモくん！？なんで二人いつしょにいるの？

「兄貴、このブンの姉さんが味方になってくれたぜ！」

「本当、カモくん！」

「報道部突撃班朝倉和美カモっちの熱意にほだされて　ネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していくことにしたよろしくね」

「本当ですか」

「本当だよ、今まで集めた写真も返してあげる」

うわー、いきなり一番の難問が片付いたよ。ありがとうカモくん。

「俺っちとしてはパクティオーしてほしかったんだが…」

「はははっ宮崎の話は聞いたからね。先生がちゃんと返事するまでそれはちよっとね」

ああ、そっちも何とかしないと。

「まあ先生、そっちの方は私にも考えがあるからさあ」

？

「カモ」

密かに朝倉の姉さんと計画しているのは名付けて『くちびる争奪！
！修学旅行でネギ先生とラブキッス大作戦』だ。実際は仮契約
カード大量GET大作戦なんだけど。修学旅行の雰囲気を利用して
広域魔方阵で多人数の一斉パクティオーだ。うまくいけば、カード
1枚につき5万オコジョ\$だから、20人とやれば百万長者だぜ。

「しかしいいんちょは乗ってくるだろうけど吹雪が何と云うか」

「やっぱり吹雪の嬢ちゃんが障害か…」

「那波もこう云うノリは嫌いじゃないしね。吹雪も割と寛容だけど他のクラスに迷惑になりそうだったら止めにするよ」

あの嬢ちゃんは俺らにとって天敵だしなー

「なんとか、あの嬢ちゃんを一時的に外せないかな？」

「難しいね。ちょっと考えてみるよ」

「和美」

ちよっとおじやまな吹雪に席を外してもらうのにあれこれ考えた結果、一つ案をひねり出したよ。

新田にお説教されてしょぼくれているみんなに向かって『くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生とラブラブキッズ大作戦』のあらましを聞かせてみた。

意外だったけどいいんちよも乗ってきた。少しは渋るかと思ったんだけどね。

「しかし、問題があるんだよねー、ちよっどと耳貸していいんちよ」

いいんちよに私が考えた計画を耳打ちしてみる。

「しかし、それでは…」

さすがにここはで少し渋るか。吹雪は3・Aで敵にしてはいけない奴トツプ3の一人だ。ちなみに後の二人は那波と四葉だね。あたしはちがうよ？

いいんちよも吹雪がこの手のイベントに厳しいことは知っているし思案顔だ。もつともネギ先生が絡んでなければいいんちよが率先して反対したんだろうけどね。

「でも、いいんちよ宮崎がネギ先生に告げたのは知ってるっしょ？」

「わ、私だつて……」

「いいんちよ、リンドバーグって知ってる？歌手じゃないほう」

「何ですかいったい？それはもちろん存じています。飛行機で最初に大西洋を横断した……」

「そう、じゃあ2番目にそれを行ったのは誰？それとも最初に太平洋を横断した人知ってる？」

「……………」

「そう、人の記憶に残るのは偉大なる先駆者のみ。2番手も2番煎じもお呼びじゃないの。ネギ先生に最初に告白したのは宮崎のどこで未来永劫絶対変わらない。しかも宮崎は知つての通りの性格だ。それをふまえればネギ先生の宮崎から受けた衝撃はかなり大きいよ？でも、そこにもつと大きな衝撃が加えられれば最初の衝撃を忘れちゃうかも？例えば地球を飛び出すくらいだね！」

「それが…キス」

「そう、でもネギ先生は欧米人だからかるーいキツスじゃ衝撃受けないかも？」

いいんちよはしばらく考えてから云った。

「雪広あやか、ここは心を鬼にして……やります」

くくく、堕ちたよ。

夜11時、いいんちよからメールがあつて、予定通り吹雪は思いがけず転んだいいんちよが偶然持っていたシャンプーをたまたま全身に浴びて温泉へ行つた。

「さて、諸君。狩りの時間だ」

1班は鳴滝姉妹、2班は楓と古、3班はいいんちよと村上、4班は裕奈とまき絵、5班から宮崎とゆえつち。ははっ宮崎出陣となるといいんちよは負けられないね。

警備システムを拝借した実況中継の始まりだ。

やる気があるのは、いいんちよにまき絵、宮崎とそれをサポートするゆえつち。あとはだいたいお祭り騒ぎに参加するのが目的の様な。村上は人身御供つてところか？

いきなり、バトルが始まったけど新田が現れさっそく村上と裕奈が消えていった。

宮崎とゆえつちがそのどさくさに紛れて画面から消えた？そう云えば鳴滝姉妹も見えないな。と思ったらそれぞれ非常口や天井から現れたよ。

すぐさまバトルになったけどゆえつちが鳴滝姉妹どころか騒ぎにつられて現れた古ちゃんまで相手に奮闘している。まあ、枕越しとはいえ分厚い本で殴られたら結構効くよね。実際はアウトなんだけど口で丸め込んでいる。ゆえつちって吹雪に影響つけすぎてないか？

その隙と云うか、ゆえつちの捨て身の攻撃の間に宮崎がネギ先生の部屋へと侵入した。ネギ先生はあらかじめ手足を縛って猿ぐつわで声を出せない様にしておいた。出歩かれると拙いからね。

猿ぐつわを外した宮崎はそのままネギ先生に口づけを…

よっしや、良い画撮れたよ！

トトカルチヨもいいんちよが本命、まき絵が対抗宮崎は穴だったから結構もつかった筈。

残念ながら、新田がまたも登場して仮契約はこれ以上できなかつたけど、そっちはあたしの領分じゃないし、いいか！

23話 3・A西へ（三日目 昼）

2003年4月24日 木曜日

「のどか」

朝倉さんから一枚のカードを貰いました。

「昨日のゲームの豪華賞品！」

そうでした。ネギ先生とキスは勝利条件で賞品ではありませんでした。昨日のことは思い出すだけで顔から火が出そうだけど幸せな感じです。

タロットカードに似た意匠のカードの図柄は空中に浮かぶ本をめくる私です。ええ？ どうやってつくったんでしょ？

「あと、伝言だけ取り出すときは『アデアット』、仕舞うときは『アベアット』だってさ、人のいないところでやってね」

こそつと耳打ちして朝倉さんは離れていきました。アデアット？
いったいなんでしょう。

「ネギ」

今日は完全自由見学日だ。学園長の指示で関西呪術協会に親書を届けなきゃいけない。他の先生方にも連絡が届いているから単独行動は構わないんだけど、問題は僕の生徒たちだ。なぜかみんな僕を捜しているみたいだ。せっかくだけでも今日はみんなにはつき合うことが出来ない…… はずだったけど……

気がつけば3班と5班に捕まってしまったよ。

「吹雪」

いったい昨日はなにがあったのでしょうか？

あやかさんにシャンプーをかけられてしまい、しずな先生にお願いしてもう一度温泉に入ったのですが、ゆっくりしていいですよ云われたのでつい長湯をしてみました。千雨さん、明日菜さんがつき合ってくれましたので、洗いつこしたり、長時間座って腰が痛いといった千雨さんにマッサージを試してみたりしてるうちになにか有った様です。刹那さんの話では朝倉さんが主催でなにやらイベントがあったみたいですが刹那さんもよくわからないそうです。

あやかさんは昨日からなにかそわそわしていました。今日は『崖っぷちですわ』と云ってどうしてもネギ先生と一緒すると宣言していました。

私は京都はちよくちよく訪れていましたから今更観光と云うことでもないのどうでもいいのですが。昨日も大仏殿そっちのけで春日大社の全お社をお参りしていました。まあ、榎木神社の巫女ですから。

ともかくあやかさんはネギ先生から離れるつもりはない様ですし、図書館探検部の方々も引かないみたいですね。

しかし…………… 完全自由見学の今日、親書を届けるのかと思いましたがネギ先生、私服でいらっしやいますし違うみたいですね。明日も一応、京都市内ですから明日中に届けるつもりなのでしょうか？

親書を届けるのが目的ならば初日に渡すべきだったと思うのですが… これではいかにも『観光のついでに親書を届けに来ました』と云う印象になって相手を不快にさせないでしょうか？ 他人事ですが気に掛かります。

それとは別に気になったのはネギ先生が持っている布が巻かれた棒はいつたいなんでしょう。わざわざ目立つ様に持っていらっしやいました、それでいて、こそこそ宿から出て行くこととするネギ先生、理解に苦しみます。

結局、大人数になってしまいましたので近くにあるシネマ村に行くことになりました。

シネマ村で貸衣装をみんなで着ることになりましたが…… 千雨さんの目が怖いです。

「なあ、吹雪？」

「コスプレならお断りです」

「いや、みんな着ているから、思い出づくりだし」

「そつでござるよ、吹雪殿なら着物が似合つ出ござるよ、ニンニン」

あら、楓さんが現れました。忍者装束ですね。

「出たな、忍者。お前それ自前だろ？」

「なんのことやら」

なんやかんやで結局衣装を着ることになりました。私は振り袖ですね。緑色の地に青い蝶の絵柄です。千雨さんも振り袖で白地に水仙や牡丹の花が咲き乱れています。明日菜さんも白地に桜咲の花びらをあしらったものを選んでいきます。

「お前、着付けも出来るのか」

「まあ、簡単な帯締めなのですが」

「…浴衣や巫女服もレパートリーに増やせるか？」

なにやら千雨さんが真剣に考え込んでいます。着付けができることを見せたのは藪蛇だったのでしょうか？

「のどか」

カードに向かって教えられたワードを呟くとカードは本になる。まるで魔法。

うっん、魔法以外に考えられない。

本にはまわりのみんなの考えていることが記されていく。

だけど誰でもと云うわけではないらしい。名前を呼ぶことによって人の表層意識を読むと注意書きにも書かれている。

偶然…、うん偶然。ネギ先生の意識を読んできました。

関西呪術協会？ 親書？ 何だろう。ネギ先生が困っている。

何とかしてあげたい。

「刹那」

このちゃんと二人、貸衣装を着て歩いている。このちゃんはお姫様、私は新撰組風の衣装だ。このちゃんと一緒に写真に撮られた。このちゃんと一緒に買い物した。このちゃんと一緒に団子を食べた。このちゃんと一緒に…

幸せな時間。このちゃんが狙われているのが嘘の様なこの幸せな時間はずぐに誰かに破れられてしまう……

一台の馬車が私たちの前に止まった。馬車上には眼鏡をかけた亜麻色の髪の少女。この顔には見覚えがある。今朝方、吹雪さんからメールで送られてきたリストの中の一人だ。龍宮のサングラスで集めた情報から遭遇頻度の高い人物をピックアップしたと云っていた。見かけたら注意する様に云れていたが、まさか直に接触して来ようとは。龍宮が初日に会った女は関西呪術協会に照会してもらい天ヶ崎千草と云う名の腕利きではことが分かっている。多分無理だろうが関西呪術協会では拘束に動くと言っていた。

「どうもー、神鳴流です。先輩」

神鳴流？ 得物は持っていない様だが同門らしい。関西呪術協会と神鳴流は縁が深いから覚悟はしてある。むしろ宗家の方々でないだけありがたいと云うものだ。

しかし、今大事なものはお嬢さまの安全。

芝居にかこつけてお嬢さまを掠うつもりか？

相手はツクヨミと名乗り手袋を投げつけ決闘を申し込んできた。

「このか様をかけて決闘を申し込みませて頂きます。 30分後、場所はシネマ村正門横『日本橋』にてー」

薄く笑うこの少女ひどくゆがんでいる感じがする。

ツクヨミは再び馬車に乗るとさっさと去っていく。とりあえず、吹雪さんに連絡しよう。

『はい、吹雪です』

「刹那です、実は…」

事情を説明するとあっさり代わりに日本橋へ向かってもらえることになった。

『刹那さん、西の本拠地はここからどれくらいですか？』

「えーと電車と歩きで1時間半ぐらいですか」

『木乃香さん共々、お父さまに呼ばれているとか理由をつけて、西に向かわれてはいかがでしょうか？向こうも一般人を巻き込んでも仕方ないと云う姿勢を見せた以上、残念ですが木乃香さんを他のクラスメイトといっしょにするのは難しいです。先生がたには後で了

承してもらいます。出来れば迎えがほしいところですが、仕方ないですからタクシーを拾ってください。ああ、そのときは運転手には注意をしてください』

「わかりました。これから長のところへ向かいます」

どうしよう、まず長に電話してお嬢さまを呼び出す様に段取りするしかないか？

「ネギ」

シネマ村を見学している最中、宮崎さんと二人きりになった。いや、正確には早乙女さんや綾瀬さんにむりやり二人きりにさせられたんだけど。

どうしよう…

昨日いきなり告白されて、夜、なぜか朝倉さんに縛られたのを助けて貰ったけどその際キスされてしまった。

二人で歩いているけど何と云っていいか分からない。

ただ、宮崎さんはちらちらと手に持った本を覗き込んでいる。

「あの一　ネギ先生？」

「は、はい」

返事ですか？　返事をしなきゃいけないんですか？

「あの、ネギ先生。今日どこかにいかれるつもりだったんではないんですか？」

「え、なんでそんなことを訊くのですか？」

女性をエスコートしている最中、その人以外のことを考えていたのがばれるなんて紳士失格だよ。

「その、関西呪術協会へ親書を届けなきゃいけないですよね」

「どうして知っているんですか？」

「うわー秘密までばれてるし。」

「ふふん、嬢ちゃんのアーティファクトはもしかして読心系か？」

「こいつぁレアだぜ！」

「え？ カモ君？ だめだよ人前にでちゃ」

僕がカモ君を急いで隠そうとしたがカモ君は宮崎さんへと飛び移っていた。

「兄貴、実はもう嬢ちゃんと兄貴は仮契約バクティオーしている仲なんだぜ。嬢ちゃん、朝倉の姉さんから貰ったカードがその本なんだな？」

宮崎さんはびっくりしながらもコクコクと相づちを打っている。そんな、カモ君。聞いてないよー

「まあまあ、兄貴。ここは俺っちを信用してくれ。嬢ちゃん、嬢ち

「やんは兄貴のパートナーになりたくはないかい？」

「パ、パートナーですか？」

「応よ、うすうす分かってるかと思うが実は兄貴は魔法使いなんだ。魔法使いには魔法使いミニステル・マギの従者と云うパートナーが必要なんだ。魔法使いミニステル・マギの従者は魔法使いから魔力をもらって体力・精神力がアップするし、中には嬢ちゃんみたくアーティファクトを契約で得られることだってある。まあ、しばらくパートナーをやってみてダメかどうか確かめるって云うのはどうだい？」

「わ、わたし先生のパートナーになります」

「わわ、宮崎さん？」

「詳しい話はあとで。兄貴、さっさと関西呪術協会へ向かおうぜ」

「あ、そうか。今なら宮崎さんしか居ないからこのまま関西呪術協会へ向かえるんだ。」

「すみません、宮崎さん。理由はあとで云いますから、僕と一緒に来てください」

「僕たちはシネマ村を出て関西呪術協会へと向かうことになった。」

「吹雪」

剎那さんからの電話を受け日本橋とやらに向かいました。
橋の上にドレス姿の少女が立っています。ああ、あれですね。

「きげんよう」

挨拶をしながら近づきます。

少女の手には小太刀と短刀らしきものを持っています。戦闘のスタイルは私と似ているのでしょうか？

「おやー、先輩のお友達ですかー？」

間延びした口調とは裏腹に剣呑な気配が漏れてきています。

「ええ、剎那さんのクラスメイトです。吹雪と呼んでください」

正木は名乗らない方がいいでしょうね。ここは岡山に近いですし

「吹雪はんが遊んでくれはるのどすかー」

「ええ剎那さんに代わりに私がお相手します。鬼ごっこなどいかがでしょうか？ 剎那さんとの約束の時間までに私を捕まえたなら貴女の勝ちで、剎那さんにバトンタッチ致します。どうでしょう」

「そやけど、その条件ではうちが参加するメリットが無い様なー」

「まあ、もともとそちらが強引に押しかけてきたので参加料とでも思っであきらめてくださいな」

「きびしいどすなー」

「ええ、世間はきびしいのです。ですが、おまけで逃げ回る間に私が貴方にデコピンを三回いれられなかったら私の負けにしましょう。鬼ごっこのルールは身体や衣服を手で触るのが条件です。シネマ村からでたら負けです。時間は10分後、ちょうど正午ですね。では開始……」

予想通り、開始直後に仕掛けてきましたがカウンター気味にデコピンを一発入れました。速度は常人離れています。ですがエヴァンジェリンさんに比べればそれ以上でもありませんね。では、逃げましょうか。

「月詠」

刹那センパイを待つ間の暇つぶしかとおもって、お相手しましたが正直失敗どした。多分ウチではとうていかなんほどのちからを持つことはわかりません。

そんならそれでやりがあるとおますんですけど残念ですけど吹雪はんは闘いに関して何の感情も感じないどすな。

闘いでなんの気持ちの高ぶりも見せへん吹雪はんはウチの好みではあらしまへん。

とは云え、約束やから鬼ごっこをしておるけどいつこも捕まりまへんなー。

向こうはウチが勝手に刹那センパイ達に向かうのを警戒してか常に目に見える範囲から出ようとはしとりませんがコケにされとる感じどす。

つかず離れずで追いかけてこしてやはったがいつの間にかシネマ村

の外れの人気のあらへんトコにきています。
ちようどよろしおす。ウチは刀を抜いて襲いかかろうとしたんやが
気がついたら目の前に吹雪はんがおりはります。
デコピンを受けウチは吹き飛ばされました。

「私の勝ちですね」

吹雪はんがそう云いますわ。　まだ一回と云おうとしたら、

「そこはシネマ村の外ですよ」

周りを見るとここはお寺さんどすなー。

ああ、さっきのルールはうちにもあてはまりますかー、　喰えんお
人や。

「のどか」

ネギ先生と一緒に電車を乗り継ぎ関西呪術協会とやらの入り口まで
来ています。

鳥居がたくさんあつて伏見稻荷みたいです。夕映が見たら喜びそう。
移動中に魔法の事を教えて貰ったけど今でも信じられない。でも、
この手の中のカードは魔法のアイテムでアデアットと唱えると心を
映す本になる…

そして、大事なこと。

『ミニステル・マギ
魔法使いの従者』

私はネギ先生のパートナーになった。

「のどかさん？」

「はい？」

ネギ先生にはパートナーになったので名前で呼んで貰える様にお願
いしました。

「行きますよ」

「はい」

長い長い参道を上っていきますがなかなか関西呪術協会にはたどり
着けません。

途中にある休憩所で今休んでいます。

「でも、ここに休憩所ってことはまだ半分ぐらいなのでしょう
か？
ごめんなさい、先生。私 先生の足をひっぱっていませんか？」

体力の無い私にはネギ先生の歩くペースでさえついて行くのがやっ
とです。

「なあに、いざってときは兄貴が魔力供給を行えば体力も回復する
さ」

カモさんから魔力供給の説明を受け、試しとばかりにネギ先生から
契約執行を受けてみました。

「はわわわー」

すごい、すごいです。ネギ先生からの魔力が身体に満ちるのが分かります。試しのジャンプしてみると、軽く2mも跳んでしまいました。

「まあ、のどか嬢ちゃんは前衛向きではないからあんまり使う機会はないかもな」

「それなんだけどカモ君、僕が僕に魔法供給したら前で戦えないかな？」

「うーむ、理屈じゃ可能だけど、魔法を撃つ隙がなかなかないじゃないか兄貴。それとものどか嬢ちゃんに援護射撃をしてもらいか？」

ええ！ 私が魔法を？

「へえ、おもしろいやん、ちょっと試してみんか？ われ」

そのとき、参道の入り口側から一人の男の子が歩いてそう云いました。

歳の頃は先生と同じで学生服を着ていて頭にはニットで編んだ帽子をかぶっています。

理知的なネギ先生に相反する様な野性的な少年です。

「西洋魔術師は従者とかつれてちゃらちゃらしおってうざいのう」

「君は関西呪術協会の？」

「応よ、ネギ・スプリングフィールド。親書を渡してもらおうで」

少年がゆっくり近づいてきます。

「あ、あの！ 私は宮崎のどかと云います」

「？」

「あなたの名前は？ それともやましいから名乗れませんか？」

「云うなあ姉ちゃん。俺は小太郎、犬神小太郎や。女を殴る趣味はないからそこでおとなしくしてや」

云うなり、ネギ先生に向かって殴りかかっていきます。

ネギ先生も応戦するけど身を守るだけで精一杯みたい。途中、コタロー君の帽子が取れ髪の間から犬の様な耳が見える。獣人？

イドの絵日記を召還してみたが展開が早すぎて何のアドバイスもできない。

「おこじよ即席スタングレネード！」

目映い閃光とすごい音がしたとおもったら誰かに抱きかかえられています。

おこじよ即席スタングレネードとは爆竹とマグネシウムらしいです。杖にまたがり空を飛ぶネギ先生にお姫様だっこされていったん戦線離脱をしました。

しかし、上に行こうとも地上にもどされ脇にそれようとしても逆側から戻ってしまいます。

「こりゃ、結界に閉じこめられたな」

カモさんが云いましたが本当にあるんですね、結界って。途中で先生の治療、と云うか水に濡らしたハンカチで傷をぬぐいながら今後の方針について話し合っています。

「あの小太郎クンが張ったのかな？ この結界」

「そう云うタイプじゃなさそうだが」

「それじゃ小太郎クンを倒しても術がとけないかも知れないね」

「あの一、それなら私がイドの絵日記で読んでみます」

「そりゃいい」

「いえ、戦闘じゃ役に立てなくてごめんなさい。さつきもコタロー君の動きは読めたけど読むだけで精一杯で」

「それだ！」

「来ました」

コタロー君を待ちかまえていたネギ先生が遠距離呪文を唱えます。

フェイントを含めた3連発で最後の1撃が決まりましたがまだ小太郎くんは大丈夫みたいです。

「よし次だ」

「契約執行180秒間　ネギの従者『宮崎のどか』!」

「先生行きます」

「お願いします。のどかさん」

「はい、上です、次回し蹴り!」

契約執行で反射神経も良くなったので何とか小太郎クンの動きを伝えることが出来る様になりました。ですが、また押されてきました。こちらが小太郎クンの動きを読んで居ることに気がついて意識的に直前まで考えない様になると云うことが絵日記に書かれています。

「よし、のどか嬢ちゃん今だ!」

「小太郎くん、おねしょは何歳までしていましたか?...まだ直っていないそうです!」

「うそやん」

小太郎くんが一瞬こちらに注意が向いたとたんネギ先生のパンチと呪文が決まりました。

「やったぜ」

「まだです」

小太郎クンの姿が見る間に変わっていきます。手足が獣みたくなりしっぽも見えています。みるからにパワーアップしています。

「そこで何をしている!？」

突然声が掛けられました。え？桜咲さん？

刀を抜いた桜咲さんがいつのまにか立っていました。

「ちっ」

小太郎クンは後ろへ跳び消えていきました。良かった。ネギ先生が無事に済んで。

「そのー僕は、関西呪術協会に親書を渡そうと思ってここまで来ましたが途中、あの小次郎クンに襲われていました」

「そうでしたか。私もシネマ村でお嬢さまに危険が及びそうになったのでいったん長の所に避難してきたところです。屋敷の裏で結界術が行われたので様子を見に来たのですが」

「え？こっち裏なんですか」

「ええと、昔はこっちが表でしたが車が入れないと不便なので新しく入り口をつくったそうです。それとなぜ宮崎さんがいるのですか」

じろつとこつちを見ます。刹那さんは最近このかと仲良くしてるけどあまりお話したことはありません。

「実は訳あつてのどかさんには僕の従者になつてもらいました。のどかさん、実は関西呪術協会の長の娘さんが木乃香さんで、刹那さんはその護衛なんです」

ええー、このかが？

「…いろいろと云いたいことはあるのですが… それよりどうしましょう。お嬢さまに宮崎さんをどう説明するか？」

「このかに云つちやダメなんですか？」

「実はお嬢さまにはまだ魔法関係の事は秘密なんです」

そっかー。でも刹那さんってこのかをお嬢さまって呼ぶんだ。

「とりあえずお嬢さまと顔を合わさない方向で」

なにか刹那さんが疲れた顔で云いました。

しかし、私たちが関西呪術協会の本山へ着いたとき、このかと顔を合わせてしまいました。

いえ、5班の全員と…

2003年4月24日 午後二時

「明日菜」

お昼に吹雪ちゃんからこのかと刹那さんが関西呪術協会へ避難したとメールが入った。犯人は吹雪ちゃんが撃退したし、念の為の避難だからそれほど心配はしなくて良いらしい。

ただ、5班の班長としてはあまり宜しくない状態であるわけで。

「のどかも捕まらないです」

夕映が携帯を操作しながら云ってくる。

のどかは夕映とパルが共謀してネギ先生とデートしていたそうだが途中で行方不明になっているらしい。その間は私は吹雪さんといっしょに千雨さんの被写体に成ってたわけだけど…千雨さんにあんな趣味があつたなんて。

班の人間の半数が行方知れずとは…ちよつとやばい？

でも、のどかがネギ先生と一緒にしろしかしてあそこかなー？関西呪術協会。

ほどなくしていいんちよからネギ先生と連絡とれないとメールが来た。

もちろん定時報告のためにネギ先生に電話しなければならぬのだけど…なにやってんのかなー

そのうちに今度は朝倉からメールが夕映に来た。

ネギ先生の荷物にGPS付き携帯電話を忍ばせたらしい。それでの

どかの居場所がわかるらしい。なんでネギ先生とのどかが一緒に居ると知っているのかと思ったけど、

「朝倉だからね」

「朝倉さんだからです」

で、二人とも納得していた。はあ、最近このノリについて行けない自分がかなし。

「では追うです」

え？

「こんな面白そうなことほっとく手はないって」

やめてパル！

「班長、今日の自由行動は班行動が原則なのです。ですからのだかを班員が追うのは正しい行動なのです。ついでに云えば、何故かのどか達がいる地点はこのかの実家の近くなのです。もしかするとそこにこのかや刹那さんがいるかも知れないです！」

いや、みんながそこに居るのは知っているんだけどね。行きたくないんだ、私。多分、吹雪ちゃんにあきれられるから…

そして、なぜか途中で合流してきた朝倉と共に私たちはネギ先生やのどか、刹那さんを出迎えることになった。

24話 3 - A西へ (三日目 夜)

2003年4月24日 木曜日 午後六時

「明日菜」

ネギ先生はこのかのお父さん、いや関西呪術協会の長と懇談中。

デートの途中でのどかからこのかの実家がここだと聞いてついでに家庭訪問したと云う設定ね。刹那さんたちはそれを聞いたこのかのお父さんに急遽呼び戻されたと云うことになっている。

しかし、ネギ先生、アポ無しで押しかけたの？ どのヨネスケかと問い詰めたいわ。

ネギ先生たら会った矢先に親書を渡そうとしたけど近くにいたおばあさんに関係者以外の前で行うようなことではないとたしなめられていた。あのおばあさん、このかのお祖母さんて訳でもない様ね。このかも御前と呼んでいたし。でも美人だったなー、おばあさんだけど美人としか形容できない人なんて初めて見た。ストレートの黒髪と凜とした顔つきで並じゃない存在感があるし。

このかのお父さんはわり渋い感じで、狩衣だっけ？陰陽師風の衣装が似合っていたわ。あ、でも本当に陰陽師かも知れないわね。

「ネギ」

やっと親書を渡せた。けど、これで終わりじゃないんだよね。目の前にはこのかさのお父さんの近衛詠春さんと青山雅楽乃うたのと名乗った女性がいる。雅楽乃さんは詠春さんの義叔母にあたるらしい。呪術協会とは関わり合いは直接はないが詠春さんはかなり雅楽乃さんに気を遣っているみたいだ。

「確かに承りました」

親書を読んでいた詠春さんがそう云った。

「それで、どう致します？ 詠春様」

となりで親書を読みながら雅楽乃さんが尋ねる。

「確かに関東魔術協会との仲違いの解消に尽力することには吝かではありませんが、今回、この親書の返事として確約は致しかねます」

ああ、やっぱり断られたよ。

でも、仕方ないよね。

「おや、予想されていましたか？ Mr・スプリングフィールド」

雅楽乃さんが尋ねてきた。

「はい、今回の親書の件は関西呪術協会の都合を十分に考えていないことは承知しております。但し、関東魔術協会が関西呪術協会との共存協和を願うことにはいささかのゆるぎはありません。あと僕

はネギで結構です」

「では、ネギ君。関東魔術協会のどの様なところがこちらの都合を
考えていないとお考えですか？」

とりあえず、先日吹雪さんが話してくれた内容を思い出しながら長
と雅楽乃さんに説明する。

「そうですね、ネギ君。貴方のお考えお若いながら見所があるとし
ておきましょう。ところでこれは書き損じが間違っではいつていた
のでしょうか」

親書の中から一枚の紙を取り出し僕に差し出してきた。
それを見てみると…

『下もおさえられんとは何事じゃ　しつかりせい　婿殿』
ついでに漫画も添えてある…学園長…

「そんな私信は添えられていませんでしたし、無かった物を私たちが
が読むはずもありません」

うつすら笑いながら雅楽乃さんが云う。こわいよう…

「英雄の息子を送りつけてきて何をさせるのかと察じておりました
がいささか取り越し苦労だったかと思えます。ですがネギ君、女性
のお宅を訪問するときは事前に連絡の一つもいれないと嫌われます
よ」

あっ、やっちゃたよー

「さて、親書の件はこれぐらいにしましょうか。ではネギ君こちらに」

僕は詠春さん追って部屋を出た。

移動の途中で詠春さんから昔、父さんの仲間だったことを打ち明けられた。

すごい、あとで父さんの話を聞かせて貰おう。

「刹那」

長の計らいで屋敷に全員で泊まることになった。旅館には身代わりを送ったらしい。

しかし、青山の御前がいらしていたとはびっくりした。あの方は詠春さまのお父さまの弟に嫁がれた人で生粋の青山ではない。しかし、神鳴流を受け継いではいないがその人望で裏方として神鳴流をまとめていると云っても過言ではない。本家の人達も個の我が強いからまとまりが欠けるきらいがあるが、それをまとめているのがあの方だ。剣を握った神鳴流剣士に一步もひかず理で諭す姿から御前と呼ばれ尊敬されている。

私も子供のころから何度も親しく声をかけて頂いた。今回は声を頂けなかったが先ほども私を見て微笑んでくれた。それで十分だ。

それはともかく、このちゃんについて長と話をしなければならぬ。明日以降このちゃんを修学旅行に参加させて良いか相談しなくてはならないからだ。そして魔法についてもだ。このちゃんが継続的に襲われる様になるならばその理由を説明しなければならぬだろう。こんなとき吹雪さんに相談したいが何から何まで頼りにするのも筋違いだろう。吹雪さんの素性を黙っている代償にはあきらかに

大きすぎる。できれば自分なりに恩を返したいと思っではみるがお嬢さまの護衛があるかぎりままならない。

？

なんだか、気に掛かる…

先ほどまでこちらにまで届いていた5班のメンバーの歓声が消えている。いや、それ以前に屋敷にあった人の気が無くなっている？

床の間に飾ってあった刀をつかみ部屋をでる。

案の定と云うか屋敷の者が石と化している。本山に直接しかけてくるとは！

途中ネギ先生と合流し、このちゃんの部屋へ向かうが途中で長に会った。石化しかけた長に…

長はネギ先生に学園長に応援を頼む様に云って石となってしまった。

ネギ先生の話では5班のメンバーは石化したが、そのなかにこのちゃんも明日菜さんはいなかったらしい。

部屋にいなければ…このちゃんの私室か風呂かトイレのいずれか。まず行った風呂場で倒れている明日菜さんを発見した。近寄ろうとした瞬間、学生服をきた白い髪の少年の叩きふせられる。つ、強い…ネギ先生が対峙するが二、三言葉を交わして、興味なしとばかりにさっさと転移していった。

明日菜さんは幸い無事だった。しかし、このちゃんは攫われたと云う。

「護衛のくせして本山だからと気を抜いた私の責任です」

気に病む明日菜さんにそう云う。まったく何をしていたのだ、私は。

「まず、応援を呼びます」

青山の本家に応援を頼もう。幸い御前は帰られているから難を逃れたはず。

携帯で連絡するとすぐに御前に繋がった。事情を話し応援をお願いする。しかし剣士はすぐに手配できるが術師はすぐには無理らしい。手配でき次第、応援に出す云ってもらえた。

そして一瞬ためらったが吹雪さんの携帯に電話をする。ここまで来れば関西呪術協会のお家騒動で吹雪さんの手を借りるのは憚られるがそんなことはどうでも良い。このちゃんの身さえまもれるならば何でも利用する。…そうか、このちゃんが溺れたとき助けられなかった自分を責め強くなるうと決心したけど、それは私のわがままだったんだ。本当に大事なことは……

「吹雪さん、お願いします。助けてください」

「吹雪」

刹那さんから今日5班のメンバーと朝倉さんが木乃香さんのご自宅に泊まると云うことを聞かされました。身代わりを立てると云われておりましたが不安です。身代わりの人(?)は突然笑ったり意味不明の行動をしていました。とりあえず、朝倉さんごと5班の部屋に押し込んでおきます。

まあ、今日は襲撃もなさそうなので真名さんともどもゆっくり休めると思っていました。が真名さんから楓さんと古菲さんが夕映さんに呼ばれたので一緒に付いて行くと云う旨のメールが届きました。

ほどなく刹那さんからの緊急の応援要請が入りました。
今夜も早めに寝るのは無理みたいですね。

準備をしようとしたところまたも電話が入りました、今度は茶々丸さん？

『私だ』

電話に出るなりそう仰有るのはエヴァンジェリンさんですか。

『実はぼーやから学園長に応援要請がはいつてな、私が送り込まれるらしい』

「東に応援を頼んだことは伺いましたがいつ頃、到着されますか？」

大事なことですから確認しておきます。

『準備出来次第ぼーやの影に転移する。一時間はかからんだろう』

「時間はその程度しかない云うことですね」

『そう云うことだ』

それでわざわざ電話をしてくれたのですね。と云っても私が責任者ではないのですが。

詠春さんが石になる直前に東に応援要請を出したと刹那さんより伺ってはいます。事情は察せませんが詠春さんも迂闊としか云い様がありません。互いに事情が良くわからなければ最悪現地で西と東の応

援者同士で戦争でしょう。本山近くでなにやら騒動が起きており西の関係者が現場の様子を見に行ってみると西の術者と東の魔法使いの大立ち回り……ほんと、勘弁願います。

「ともかく手っ取り早く解決せんと近衛木乃香の疵になる」

確かに…若い娘さんが誘拐された。一昔ならその事実だけで世間からつまはじきにされるでしょう、例え被害者であっても。

刹那さんの立場も微妙でしょう。木乃香さんの護衛役ですが関西呪術協会の本山に入られれば本山が本来その役を引き継ぐ筈でしょうが、急の帰郷でうまく引き継がれているとも思えません。最悪今回の襲撃の責を全て引き受けさせられかねません。

「しかし、麻帆良から出ることが可能なのですか？」

ネギ先生を襲ってまで解除しようとした呪いでしたよね？

『ああ、裏技を駆使するため期間限定らしいが一日二日ぐらいはじじいも、もたせるさ』

そこで、電話が切れました。なんとなく学園長に負担がかかることだけはうかがい知れます。

さて、こちらにも飛びましようか？

以前刹那さんとおそろいのストラップを木乃香さんに渡しており、それに仕込んであるマーカ―を目印に跳んでみました…

さて、どこでしょう、ここは？ 一応、関西呪術協会みたいですが、風呂の脱衣所でしょうか？電話をかけると脱衣かごから着信音が流れてきました。刹那さんには普通のストラップしか渡していませんでした。これは凡ミスでした。

廊下にて、邸内を巡ってみますが無事な人間は誰もいません。皆、石になっています。しかし、本当に石になっていますね。時間凍結と云うわけではなさそうですし。

「吹雪ちゃん！」

後ろから声が掛けられ、振り返れば明日菜さんが駆け寄ってきます。しかし、何で明日菜さんは無事なのでしょうか？やはり先日の刹那さんの云う通りなのでしょうか？

明日菜さんは足手まといになると思い此処に残られたそうです。

明日菜さんが出てきた部屋には5班のメンバーが居りました。夕映さんだけ見あたらないそうですが真名さんのメールから察すると難を逃れた様ですね。そのことを明日菜さんにも伝えます。

刹那さんの話では、皆さん術を解呪すれば元に戻るそうですが動作途中で固まっているのでバランスが良くないですね。強度がどれほどのものか判りませんが倒れて真つ二つと云うのは宜しくないの
で布団を敷いてゆっくりと寝かしていきます。

「こんなことやっていて大丈夫なの？」

「まあ、本当に緊急ならば来た時点で手遅れでしょう」

「いや、達観しないで！」

先ほどから電話しようにも刹那さんもネギ先生にも繋がりません。
ならば…

通信機を懐から取り出しONにします。

「佐久夜、応答しなさい」

私の目の前にスクリーンが現れます。

『あら、吹雪、何かご用？』

定時連絡でもない通信で『何かご用』もないでしょうに。

神近香織理、佐久夜の副長を務める私の友人です。亜麻色の髪を後ろ髪だけ伸ばし他は肩口で切りそろえ、伸ばした後ろ髪は編んで胸もとにもってきています。その胸元と云うか胸はこれでもかと女性を強調しています。一女性として羨ましいかぎりです。

『もませる以外は邪魔なだけよ』

人の心を読むのはよしてください。

「（ごほん） 私の居場所をトレースしていますね」

『もちろんちゃんとしているわ、京都市左京区…』

「ではこの近辺をサーチして私のクラス担任と出席番号13番、15番を優先的に探してください。山間部を中心にお願いします」

「うーん、天頂からの俯瞰じゃ特定は厳しいかも。ところでいったいどう云う状況？」

簡単に香織理さんに状況を説明します。

「それなら、赤外線で手当たり次第にサーチしたほうが早いかも？
さすが佐久夜ね、処理が早いわ」

荒い画像で上からの俯瞰でわかりづらいますがネギ先生と刹那さん
ですね…

「あれー？ 私、刹那さんが飛んでいる様に見える…」

「奇遇ですね。私にもそう見えます」

刹那さんの背中から翼が生えている様に見えます。杖にまたがった
ネギ先生が横にいますから実際、飛んでいるのでしょう。変化の術
とやらでしょうか？

あら？ ネギ先生が落っこちていきます。対空迎撃されたみたいで
すね。かまわず刹那さんは飛び続けていますけど。モニターが2画
面になりネギ先生と同じぐらいの年格好の少年が対峙しています。
一応無事みたいですからネギ先生には自力でなんとかして頂きまし
ょう。

もう一度刹那さんに視線を戻せば、後ろから同じように背中に翼を
はやした人達が追いかけてきていて、時折闘いにはなっています
刹那さんが優勢のようで次々と落としていきます。しかし、こう云
つてがなんです。自分の地元からほど遠くないところでこんなファ
ンタジーな風景に出会えるとは思いませんでした。ここは宇宙より
も奇抜ですねー

「とりあえず、刹那さんに合流しましょう。明日菜さんはここでお待ちください」

通信機を明日菜さんに渡します。

「香織理さん、以後連絡は始動キー経由で行います。佐久夜にリンクさせてください」

『了解』

「では、座標送れ」

『はい』

さて行きますか。

「刹那」

いったんは追い詰めた賊だが、このちゃんの魔力で多数の鬼達が召還され、それを足止めにして賊たちは逃げた。

「先生、飛んで追います」

私はシャツとブラを強引に脱ぎ捨て封印しつづけた鳥族の翼をひろげ宙に舞う。

「え？ 桜咲さん？」

先生は驚きながらも杖に乗って後を追ってきてくれる。

烏族も多数召還されていたので、それに対処するため思う様にスピードを出すことができない。しかし、あんな多数の召還なんて初めてだ。このちゃんの魔力量は本当にすごい。天ヶ崎千草の口ぶりではこれから何かこのちゃんの魔力を使って術を行うみたいだから、文字通り力の一端なんだろう。

途中、ネギ先生が狗神に襲われて脱落した。一瞬、ネギ先生を助けて二人でこのちゃんの所へ行くか、ネギ先生を見捨てるか、どちらが有利か考える。結果ネギ先生の力が未知数のため時間優先で、構わず飛び続けた。

しばらく、烏族とやり合いつつ飛んでいたが、ついに賊が逃げ去った方向から天に向けて巨大な光の柱が立った。しまった、始まってしまった！

光の柱に近づくと小さな湖に祭壇が設けられている。祭壇の向かいには巨大な岩があり、それが光を放っている。そして光の柱の中に巨大な人影が実体化する。

「ふふふ、一足遅かったようですねあ。儀式はたった今、終わりましたえ」

女の声が聞こえる。巨神の前に浮かぶ天ヶ崎千草と…このちゃん。

「二面四手の巨躯の大鬼『リヨウメンスクナノカミ』 千六百年前に打ち倒された飛騨の大鬼神や」

くっ、ネギ先生を置き去りにしたのは間違いだっただか？ リヨウメンスクナに天ヶ崎千草、祭壇にはあの少年とツクヨミがいる。

試しに雷鳴剣を放ってみるが巨神にはかすり傷ひとつ付かない。ちっ！

「こんなとき、夕凧があればなんて思っていないませんか？」

え？

吹雪さんが横に居た。以前見た輝く羽根の姿だ。羽根は黒のジャケットの上から広がっているので私の翼の様に身体の一部ではないのだろう。

「さて、どうしましょう。鬼退治は我が一族の家業ですが……やはりここは刹那さんにおまかせましょう」

ジャケットから刀の柄を取り出すとたちまち柄から桜色に輝く刀身が現れる。しかもこれは大太刀！

刀を受け取り振り回してみるがかなり軽い。

「実は時間があまりありません。さっさと大物を討ち取ってください」

「はい！」

もう、大丈夫だ。あとはこれを切り倒して、このちゃんと一緒に帰るだけ。

近づこうとした矢先にリヨウメンスクナの腕が迫っていた。意外に動きが速い？ 躲しきれず刀で防御するが………

リヨウメンスクナの腕がただ出したただけの太刀によって切断された。

「ひえ」

情けないがそんな声が出てしまう。だって仕方ないじゃないか！ 太刀があまりに切れすぎる為、刀身があっさり肉にすいこまれていき、通過してきた腕に当たりそうなるなんて考えもなかった。しかし、それならば！

- 斬岩剣 -

渾身の一撃は古代の鬼神をたやすく両断した。

あっけにとられる天ヶ崎千草からこのちゃんを取り戻す。

「このちゃん！」

「せつちゃん？」

このちゃんにこの姿を見られてしまったがそれは仕方のない、例え

嫌われようと…

「きれい…」

え？ 今何と？

「きれいなハネと、かわいい胸… なんや天使みたいやなー」

うわ、私は半裸でこのちゃんは全裸だ。

抱いたこのちゃんの躰のやわらかさと体温が…

『おたのしみの最中、悪いんだけど』

「えっ 明日菜さん？」

手に持った太刀から明日菜さんの声が伝わってくる。

『どうする？ いったんここに戻る？』

「いえ、どこか安全な場所にお嬢さまを隠して吹雪さんに加勢を」

天ヶ崎千草も捕らえなければならぬし、あの少年も危険だ。

『なら、そのまま真っ直ぐ飛べば龍宮さんがいるから』

「龍宮が？」

『なんか、夕映ちゃんが応援に楓さんたちを呼んだのに付き添ってきたみたい。鬼とか妖怪と出くわして退治していたらしいけどあらかた片付いたって』

ああ、さっき置き去りにした連中だな。そういえば、あれもほつとくわけにはいかなかったからありがたいな。

『近づいたら教えるから』

「ありがとうございます」

私一人では多分何も出来なかった。お嬢さまを奪われ、あの少年に返り討ちにあつのがせいぜいだろう。しかし、みんな私を助けてくれた。でも、いいんですね、吹雪さん。みんなを頼っても。

「せつちゃん？」

「このちゃん… なんでもありません」

さあ、早く龍宮にこのちゃんを託し吹雪さんに加勢しなければ。

「吹雪」

困ったことに刹那さんには活躍して頂かなければなりません。まあ、夕風を持つてくるなど助言したのは私ですから仕方ないですよ？

特定の団体に肩入れなんてしてませんよ？

とりあえず刹那さんがアレを片付けるまで足止めさせて頂きましょう。

祭壇におりると早速昼間のお嬢さんがやってきました。
もう2刀を抜いてやる気全開ですね。

やはり、私のスタイルに近いですね。斬り合いをしても何をしてくるか大体判ります。

しかも…

「ざーんがーんけーん」

技をいちいち叫ぶのはなんなのでしょう？

それともそう叫ぶのがトレンドと云うものなのでしょうか？

スキだらけなのでロンドートで近づき、思い切りけっ飛ばしてみました。うっかりエヴァンジェリンさんとの鬪いと同じ程度の力加減で蹴ったので湖の上を転がっていきます。あの方向であの勢いだど湖の中心あたりで沈みそうですね。あとで助けがいるかなと思っただら別方向からなにかが飛んできてそれに巻き込まれて森へと消えていきました……

まあ、いいでしょうか？

さてもう一人、刹那さん達の話では残った学生服の少年は刹那さんでさえ遅れをとるほどの猛者らしいです。別々にやってきてくれるのは対処しやすいのでありがたいですね。まあ、ツクヨミさんでしたか、あの方が連携をとれるとも思えません。

おや、刹那さんがあっさりでかいのを倒しました。ついでに木乃香さんも奪還した様ですしさっさと帰りましょう。別にこの少年を捕まえる義理もないです。なんと云っても刹那さんに貸した始動キ

「の『千早』に力を遠隔で送るのが思ったよりも疲れます。」

「さて、私も仕事がかたづいたのでお暇させて頂きたいのですが」

「僕も用事はあらかた済んだから帰ってもいいんだけども、最後に現れたイレギュラーだけは確認しないと…ヴィシュ・タル　リ・シユタル　ヴァンゲイド……」

「おや、呪文の詠唱とは、西洋魔術師の方でしたか。まあ、とうてい日本人の風貌とは申せませんでしたか。」

ブフエー・ペトラス
「石の息吹!!」

辺り一面濃い霧に覆われましたが？　目眩ましでしょうか？

すぐに霧は風に流されていきます。先ほどと同じ場所に少年はまだおりました。と云うことは目眩ましではなく何らかの術だったのでしょうか？　変わらぬ無表情ですがなぜか慄然とした雰囲気があります。

「月詠くんから聞いてはいたが、かなりの腕らしいね」

その場から滑る様にこちらに走り込んできましたが…速いですね。エヴァンジェリンさん並です。エヴァンジェリンさんはこの世界でも最強クラスと仰有られていましたが最強とのエンカウント率が高すぎませんか？

少年は中国拳法風の体術で理詰め動きですね。少年は得物を持っていないのでこちらも千歳をもどし、体術で相手します。もっとも正統派には私の動きも冷静に対処されることが多く威力が出せない

こともままあります。もつとも倒す必要もないのですが。

向こうから刹那さんが飛んくるのが見えました。木乃香さんはどこかに置いてきたのでしょうか、単身です。

「ここまでかな」

少年もちらと刹那さんを見上げて、そう呟いて水をまとわせてながら姿を消しました。転移？できれば捕まってほしいのです。刹那さん。

ならば、

千歳を抜き打ちし振ってみますが……浅かったみたいです。

「木乃香さんは？」

「はい、龍宮にお願いしました。この剣から明日菜さんの声がして龍宮のいる場所まで誘導してもらえました。ですがあの女は逃がしてしまいました」

「それは我が従者が追っている……いや、捕まえたそうだな」

いつのまにかエヴァンジェリンさんが近づいておられました。

「まあ、私もこれぐらいはしとかなないと立場がないからな」

「いつこちらに？」

「いましがただ、ぼーやが犬にぼーられていたので蹴り飛ばしてや

った。せつかく力がもどったのに全力が出せないのは残念だよ」

蹴った？もしかしてツクヨミさんとぶつかったあれですか。

「それは仕方ありません。せつかくですから修学旅行を楽しむ方向で考えたらいかがでしょう？ホテルに戻るついでにどこかで食事をいたしましょう」

「おごりか？ おごりだな！」

「まあ、別に構いませんが…エヴァンジェリンさんもべつにお金に困っているのわけでもないでしょうに」

「ばかもん。ただ飯より旨い料理はあるまい」

そうですね。しかしもう日付が変わろうかと云う時間に女子中学生と云った風体の人間が入れる店なんて限られていますから、らーめんとかファミレスになると思うのですが。真名さんを保護者にも仕立て上げますか？

つらつらと考えていると明日菜さんから連絡が来ました。

『ごめん、吹雪ちゃん』

いきなり何かと思いましたが、関西呪術協会の応援の方にこちらが闘っている様子ごと通信しているところを見つけてしまったそうです。ああ、すっかり忘れていました、呼んでいましたね、刹那さんが。

『事情説明をしてほしいって』

「まあ、仕方ありません。但し、こちらにも事情がありますのでネギ先生たちとは会わない様に計らって頂く様お願いしてほしいのですが」

『わかった。だめだったら連絡するから』

まだまだ終わりそうにありませんね。

「フェイト」

切断された右腕を見ながら思う。彼女はなんなのだろう。

斬られた腕はすぐに治る。どうでもいい。

しかし、転移の途中で斬撃を受ける？あり得ない話だが彼女はしてみせた。月詠くんはなんて云っていたっけ、彼女を。

今回、関東魔術協会と関西呪術協会の不和の火に油をそそいであまりあちらに干渉する余裕をなくするのが目的だったけどまあ残念な結果になってしまった。

それよりも、英雄の息子、僕の魔法をレジストした二人の少女。麻帆良に探りを入れる必要があるかな？

25話 3 - A西へ (四日目、五日目)

2003年4月25日 金曜日 午前1時

「吹雪」

私は関西呪術協会本山に転移で移動しました。夕映さん達に素性を知られるわけにも参りませんので他の皆さんとは別室にしてみました。しかし私をどう紹介すれば宜しいのでしょうか。それともあの『柁木』でなにかでっちあげましょうか？ 樹雷云々よりはましかもしれません。

「お姉さま！」

え？ 宇宙広しと云えど私をそう呼ぶのは…

「雅楽乃？」

そこに立っていたのは私の女学校時代に後輩、オウ雅楽乃でした。実に47年ぶりでしょうか。

「良い歳の取り方をしたわね、雅楽乃。あの頃の凛々しさと可愛らしさは失わず、それでいて大人の優しさも感じられるわ。ところでなぜここに居るのかしら？」

雅楽乃は私が女学校を卒業するときに自分が普通の人と違うことであることを打ち明け、二度と会えないと云って別れました。次に会うのは墓前だと思っていましたの…思いがけない出会いでしたがそれで思考を止める様では生きていけない商売を生業にしていたの

は伊達ではありません。多分…

「今は嫁ぎ先の青山を名乗っております。こここの長、近衛詠春の義叔母にあたります」

なるほど、なんとなく判りました。

「詠春さんは案配は？」

「はい、術者に解呪させました。もうしばらくしたら話ができると思います」

「そう、じゃあ一時間後にお話ししましょう。厨房かりるわよ、お夜食を作らせてもらおうわ」

「わかりました」

雅楽乃は側近のものを呼んで指示した後、私を厨房へ案内してくれました。

「さて、ご飯があれば良いのだけれど」

業務用ジャーを開けると結構な量がありました。人数分以上ですがおむすびにしてしまえば応援の方々も食べられるでしょう。雅楽乃も割烹着をつけているけど…

「ところで貴女料理は大丈夫なの？」

女学校時代、雅楽乃はその当時珍しい自動車で送り迎えされるお嬢さまだったから、いっしょに料理した記憶はないわね。お弁当を食

べさせた記憶ならあるのだけれど。

「そんな失敗する姿なぞお姉さまに見せられません。以前、お姉さまが『どんな事でも自分がそれをして苦労したなら、他人にそれをしてもらったときに自然と感謝が出来る』と仰有られましたのを忘れてはおりません。家事全般は一通りできます」

なに、その、こっぱずかしい台詞は？

「……雅楽乃は汁物をお願いするわ。私はおむすびをつくります」

おかかと梅干し、しらすと菜っ葉をそれぞれ混ぜご飯にしてからおむすびにします。海苔は長方形に切って食べるタイミングでもらいましょう。30分ほどして、すまし汁が完成したので出来上がった分から運んでもらいます。雅楽乃と二人でおむすびを作っている

「これで夢が叶いました」

「え？」

「お姉さまと一緒に料理をする夢です」

「そう」

料理中は当たり障りの無い話しかしていませんでしたが、この娘はいったいどんな人生を歩んできたのかしら。

とりあえず、ご飯も無くなったので互いにつくりあったおむすびを一つずつ食べ会場に向かいました。

会場は12畳の座敷でした。中央に座卓があり、一応、詠春さんが上座に座っています。次いで雅楽乃、刹那さんの順で下座はエヴァンジェリンさん、私、明日菜さんです。

ちなみに木乃香さん及び、石にされた方々は解呪後お休みされています。

夕映さん以下応援組は夜食を取られたあと入浴してもらい、ここに泊まれる予定です。

ネギ先生は失神されていました。怪我よりも疲労のせいらしいので治療後そのままお休み中です。ネギ先生には一応茶々丸さんがついています。

「さて、自己紹介からでしょうか。エヴァンジェリンさんから」

「いや、私は詠春とは知り合いだし…」

「はい、私も闇の福音の名は存じています」
ダイク・エヴァンジェル

そう、雅楽乃も知っているなら必要ないわね。

「私は正木吹雪と申します。現在麻帆良学園中等部に所属しておりますが、詠春さまにはあの『榎木』の一族のものと云ったほうが通りがいいでしょうか？」

「そして、お姉さまは私の女学校の先輩です」

詠春さんも刹那さんも雅楽乃の言葉にびっくりしています。お姉さまが先輩かどちらにでしょうか？

エヴァンジェリンさんと明日菜さんは声をひそめて笑っています。

「えーと、吹雪さんにはネギ先生が着任以来、ずっと相談にのってもらっていました。学園長からお嬢さまにだされたちよつかいも吹雪さんの指示を受け対応していました」

なにか見かねた様に刹那さんから説明が入りました。刹那さんに「オローされる日が来ようとは…」

とりあえず、一応私を信用して頂けるようなので話が早くて良いのですが。

「そうでしたか。木乃香の父としてお礼を申し上げます」

「いえ、今回もそうですが私はクラスメイトのお手伝いをしているだけで西にも東にも協力するつもりはありません」

詠春さんはまさしく木乃香さんのお父さまと云った真っ直ぐな感じの方ですが逆に云えば腹芸が出来なさそうな感じもします。普通の企業ならいざしらず秘密結社の首領がそれで務まるか…先ほどの対応からして向いていないのかもしれないかもしれませんね。

明日菜さんの紹介のあと刹那さん、エヴァンジェリンさん、私で事件のすり合わせが行われました。

「しかし、何であるような物騒なものがここにあるのかしら、雅楽乃知っています？」

「はい、実は…」

18年前のことを説明されましたがそんな因縁が…

「でも、さっさと飛驒に戻したらよかつたんじゃないのかしら」

「それは、大きさもさることながら重さも見かけ以上らしく、あのまま移動させるには運河を掘るか、西洋魔術師を頼るかとなりまして」

「仕方ないわね。あの方もここに居られるのは本望ではないでしょうから後で私が飛驒へお送りしましょう」

「ありがとうございます、お姉さま」

その後詠春さんから今回の事件で判っている事の説明を受けました。

「さて、今回主犯の天ヶ崎千草ですがもともと西洋魔術師を憎んでいるところに、ある関西呪術協会の幹部から麻帆良学園の修学旅行の妨害の依頼があり、それに便乗して親書の強奪、木乃香の誘拐を企てた様です。幹部から幹旋で犬上小次郎、神鳴流から月詠なるものが協力者として付けられていましたが刹那くんがみた少年については不明です」

天ヶ崎千草以外は自分から名乗られたそうです。使い捨てっぽい雰囲気の中でですね。

「ところで今日の一件をどう致しますか？ 今なら無かったことにもできそうですか」

「いえ、残念ながら私が術師を探すため声を広くかけましたので隠蔽は無理かと思います」

雅楽乃が申し訳なさそうに云いますがそれは仕方がないわね。

「私見ですが、天ヶ崎千草の目的がちぐはぐな感じが致します。嫌がらせの依頼に便乗したとは云え、木乃香さんの誘拐は悪手です。まず木乃香さんの誘拐が成功しても以後、関西呪術協会の支援が受けられません。あるいは千草さんが属するグループと長のグループとの間で内部抗争が起きるでしょう。内部抗争をしながら関東魔術協会と事を構えるとは考えられません。」

木乃香さんを誘拐して詠春様を失脚させようとするならばあの場で鬼神を召還する理由はありません。」

また、同様に関東魔術協会を攻めるのならばこの場で鬼神を召還するのも妙です。あのまま東海道を下るつもりでしたのでしょうか？素人の考えですが関東近辺で鬼神の召還、例えば将門公のほうが適当ではないかと思うのですが…」

あの場に祭壇が拵ひなえられていたので追っ手を撒くための非常手段とも考えられません。」

この様におおよそ首尾一貫を欠いているのです。」

千草さんの尋問も始まるでしょうが多分、実のないものとなるでしょう。」

「天ヶ崎千草が主犯ではないと」

「いえ、本人は自分で考えて行動していたと思っていますでしょう。」

ただなんらかの意識誘導がされていた可能性があるかもしれません」

「ですがあの天ヶ崎千草は実力はある術者なので、たやすく術にかかるとは思えません」

「別に術を使わなくとも、一言二言呟くだけで人の意識を変えるの

が洗脳と云うものです」

なぜか、詠春さんをのぞくみんなが私を見ながら『あー』と云って納得しています。雅楽乃まで…

「まあ、あくまでも私見ですので……」

「わかりました お姉さま。天ヶ崎千草や他の者の尋問を慎重におこないます」

雅楽乃には伝わったようね。多分言いがかりに近いのでしょうか。あらぬ泥までかけられるのが敗者です。真実はともかく、主犯が外部か内部かでは傷の深さがちがうでしょう。ここは天ヶ崎千草に道化になってもらいましょう。

「さて、木乃香さんについてどう致しますか？ もはや隠す以前の問題ですが？」

「はい、木乃香が起きたら全てを話します。今回の件が漏れれば誰もが木乃香の力を狙うでしょう。力の封印も考えましたが人の掛けた術は人によってとかれるのです。関西呪術協会の後継者云々はともかく、あるていど術に関して学ばなければ身の守りようもありません。ですが、中学卒業までは平凡な娘として過ごさせてやりたいと思います」

まあ、麻帆良から出なければなんとかなるでしょうか？

「中学卒業後はこちらに呼び戻しますが、進学するか修行に専念するかは木乃香と話し合ってみます」

「わかりました。今日一日、こちらで話合われるのが宜しいかと存じます。すると刹那さんも？」

「はい、いままで通り、いえ、関西呪術協会の長として正式に近衛木乃香の護衛に任命します」

「で、ですが私はお嬢さまに正体を知られてしまいました。もはや近くにいたことなど…」

刹那さんの正体？先ほどの翼は術ではなかったのでしょうか？

つまり刹那さんの羽根は自前で出したり消したり出来ると…うん、まあ魔法ですから力学とか関係ないのでしょうか。

「このかなら気にしないと思うよ、刹那さん。だいたい、あの学園長を身内と認めて居るんだから」

今回は全員『あー』が唱和されました。そうですね、あれが身内だったとしたら友人に紹介するのは躊躇ためらわれます。それよりも麻帆良からであれば人間として認識されるのか否か微妙です。

「刹那さんには今回望外の働きをして頂けました。改めてあの娘の大叔母としてお礼を申します。それと勝手ですが以後刹那さんの後見をこの青山雅楽乃が務めさせて頂きます」

「御前！」

御前？ 雅楽乃、ここでも御前と呼ばれているの？

「もはや関西呪術協会はお前を手放せなくなったのだ、桜咲刹那。リヨウメンスクナノカミを成敗し近衛木乃香を救った英雄をな。腹

をくくれ」

あ、エヴァンジェリンさん、云っちゃいました。

「え、英雄？」

「今回、近衛詠春は本山に敵の侵入を許したばかりか敵に不覚をとり、娘を誘拐された。それらの企てをすべて打ち砕いたのがお前だ。今お前は関西呪術協会の新たな求心力になったのだ。今更ここを出るなど論外だ」

「そんな、あれは吹雪さんが力を貸してくれたおかげで……」

「私は剣を貸しただけですよ」

出来れば居なかったことにしてほしいのですが。

「お前、事の内情を外に喧伝する気か？」

「あー、英雄てこうやってつくられるんだー」

明日菜さんがしたり顔で云いますが、もっともですな。

「ふむ、この際、桜咲刹那は護衛のため女装していた男の娘だったと云う設定で木乃香の婚約者にしたてあげると云うのはどうだ？
性転換薬なら研究すればできそうだ」

何故か全員の視線が刹那さんの胸に集中します。

まあ、それができれば一番の方策かもしれませぬ。

詠春さんも雅楽乃も黙ったままですが……否定もしません。

エヴァンジェリンさんも黙って浅く頷いただけです。

「これが暗黙の了解？」

明日菜さん？

「説得マシーンならここに居るし、ほれ試しにちよつとこいつを説得してみる」

そう云われましても…

「木乃香さんが後継者に選ばれたなら…意に沿わない政略結婚もあるかもしれないよ。例えば、結婚相手は有力者で権力があるがそれ故悪い噂も絶えない男。それでも嫌な顔一つせず木乃香さんは結婚を承諾しました。結婚式の日、刹那さんは木乃香さんに祝福を送ります。お嬢さま、ご結婚おめでとつございます…」

在り来たりですがこんなところでしょうか。

「…」

刹那さんは言葉もだせず固まってしまいました。詠春さんもなぜか頭を抱えています。

「これが洗脳てやつなのね」

もー、さつきから明日菜さんも一言多いですよ。

とりあえず、私はこれでホテルに戻ることにしました。早朝には木乃香さんと刹那さん以外は戻られる予定です。

2003年4月25日 金曜日 午前5時

「ネギ」

早朝、茶々丸さんに起こされた。躰の傷は治療の術を掛けられたのかほとんど痛まない。

まだ、朝日も昇る直前だがうつすらと光が差し始めている。カモ君はまだ眠っているからそのままにしておいた。

とりあえず顔を洗うと昨日の広間に案内された。広間にはすでに長さんがいた。良かった術が解かれたんだ。それに雅楽乃さん、刹那さん、エヴァンジェリンさんがそろっていた。

エヴァンジェリンさんは昨日小太郎クンと闘っている最中、僕の影から突然あらわれた。僕があれほど手こずった小太郎クンをあっさり蹴り飛ばしたあと……それ以降記憶がないな。この前みたいだ。

僕が座ると長さんから昨日の顛末を説明された。桜咲さんが鬼神を退治し木乃香さんを救い出したこと。エヴァンジェリンさんが犯人グループの何人かを捕らえたこと。結局僕はなにもできなかつたな。

そのあと雅楽乃さんが話し出した。

「さて、お疲れのところ朝早く起こして恐縮ですが、昨日の鬼神リ

ヨウメンスクナは実は18年前に貴方のお父さま、サウザンドマスターがこの詠春と協力して封じたものなのです」

え！サウザンドマスターが！

「しかし、関西呪術協会のなかにはそれはサウザンドマスターの自作自演と呼んでいる者がいます」

「うそです！ サウザンドマスターはそんなことしません！」

「なぜですか？」

「それはみんながサウザンドマスターが立派な魔法使いだと云うから」

「そうですね。はっきり申しまして18年前のリョウメンスクナ復活はまるで原因不明なのです。そもそもリョウメンスクナは飛騨地方、岐阜県北部に祭られている土着神と呼ぶべき存在ですのでそれが京都で復活した理由が不明です。

リョウメンスクナは日本書紀と云う歴史書に朝廷、つまり政府に逆らう妖怪として登場しますが京都には当時、朝廷は置かれていません。そして今では首都は東京に移り、帝もそこに御座します。

リョウメンスクナの復活が単なる偶然としても京都に復活するとは考え難いのです。

故に何者かが故意に京都にリョウメンスクナを復活させたと云うことになりませんがやはり何の為にと云う疑問がのこります。

リョウメンスクナの退治の功もあって詠春は関西呪術協会の長になりましたが、それ故に詠春は疑われたのです。口さがない者達はこれを詠春の所属したグループもしくは関東魔術協会が仕組んだこと

と云っております。詠春は当時から関東魔術協会と融和を謳っていましたが結びつけられたのでしょうか。

結論からすればこれも事実無根ですがそれを主張する者はこう云います。『みんなが云っている』と」

そんな……

「わざわざ早朝から遣る瀬無い話でしたが続きがあります。今回のリョウメンスクナの復活にたまたまサウザンドマスターの息子が京都にいたら先ほど関東魔術協会の仕業と勘ぐった者達はどう思うでしょう」

「偶然とは思わないだろうな。いや、むしろ前回の復活共々東の陰謀だったと結論づけるだろうな。リョウメンスクナ退治をばーや、もしくは私がやっていたら著しく関西呪術協会の権威は落ちる。それで喜ぶのは誰だ？」

エヴァンジェリンさん！

「つまりは我々は今回の騒動に何も関係していない。そう云うことだな」

「はい、はつきり申してあなた方に表に出られると関西呪術協会が空中分解しかねません。西の応援が到着するよりも先に東の応援が居るなど通常あり得ません。先の東の陰謀論者にとって真実はどうでもいいのです。詠春や関東魔術協会を叩く口実が手にはいるのなら。」

申し訳ありませんが今回はそう云うことにしてください。重ねてお願いいたします」

雅楽乃さんがふかくお辞儀をした。

「わわ、わかりました。やめてください」

「ありがとうございます」

やっと頭を上げた雅楽乃さんはあいさつをして出て行った。

詠春さんはサウザンドマスターマダムの家に案内してくれると云ってくれた。午後に少しだけなら時間がとれるそうだ。木乃香さんと桜咲さんはそれまで用事があってここに残るらしい。

エヴァンジェリンさんと二人で食堂に向かう途中不意にエヴァンジェリンさんが話し出した。

「青山雅楽乃は近衛詠春の義叔母であること以外さほど関西呪術協会には関係していない。それが頭を下げる意味がわかるか？」

「いえ」

雅楽乃さんって関西呪術協会の関係者じゃないの？ でもそれなら何故関西呪術協会をお願いをするのだろう？

「あの場で詠春が頭をさげれば関西呪術協会の立場が更に弱くなる。そのため本来頭を下げる必要のないものが頭を下げる。そんなものだ、この世界は」

僕には何も云えなかった。僕が今ここにいてただで迷惑をしているひとが居るなんて…

その後、みんなで早めの朝食を食べホテルに帰ったけど何で僕のこ飯だけお茶漬けだったんだろう？

2003年4月25日 金曜日 午後3時

「吹雪」

夜中のうちに転移してホテルに戻りました。懸念事項の一つ、5班の身代わりです。案の定部屋を開けると全員が全裸で踊っていました。よほど腕の悪い術師に頼んだのでしょうか。

浴衣を着せればしばらくは持ちますがもう人前には怖くてだせません。早速雅楽乃に電話して起床前に全員送り届ける様頼みましたがそのあと一時間ほど長電話につきあわされました。

早朝、木乃香さん、刹那さんを除いて全員が戻りましたやっと気楽な修学旅行かと思いましたがエヴァンジェリンさんがテンション上げすぎです。

今はホテルに戻って自由時間です。生徒たちが疲れていると云うよりも先生方が限界に近いです。今日もあとでしずな先生にマッサージでもしてさしあげましょうか？ 昨日もあまり寝ていない様ですし。

自由時間なので近辺には出掛けても好いですし、温泉にも自由に入れるそうです。

ネギ先生に詠春さんからの使いが来たのですが…

「雅楽乃…」

「はい、お姉さま」

ちやっかり雅楽乃がその役を引き受けていました。

結局、5班＋朝倉さん、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん、ネギ先生、私でリムジン2台に分乗して移動です。両校前にお父さまのお宅を探さない様に釘を刺しましたがネギ先生はすっかりお忘れの様ですね。まあ、仕方ないですか。一応名目上生徒の外出の監督をされているわけですし、夕食までには帰れる様なので良しとおきましよう。

「なんで明日菜さんまで来たのですか？ 最初パスとか仰有っていましたがよね」

「うーん、その吹雪ちゃんと雅楽乃さんをみてるのが楽しくて」

「…おもしろいですか？」

昔から婆と初孫とか干し柿並とか云われていたのですが…

「うーん、口調も雅楽乃さんには砕けているし」

「呼び捨てにするのも珍しいな」

「いいな私も今度から吹雪ちゃんをお姉さまと呼んでみようかな。仮の設定でも年上だし」

「だめです」

珍しく強い口調で雅楽乃が云いました。

「お姉さまをお姉さまと呼んで好いのは私だけで、お姉さまが呼び捨てにするのはお姉さまの子供か私だけです。旦那様も呼び捨てにしないと誓ってくれました」

ああ、雅楽乃！ それは互いに墓の中まで持っていく約束でしょう！

雅楽乃も気づいたみたいで謝ってきました。

「ごめんなさい。お姉さま」

「もう、仕方がない娘ね」

あんまりしょげているので頭をなでてあげます……はっ！

「あまあまだー」

「マックスコーヒー練乳200%増量だな」

「……………」

『やっぱり吹雪は女たらしよねー』

？ 4人目だれ？ 香織理さん？

突然車中に香織理さんの映像が浮かび上がります。あー、通信機回

収していませんでした。

『ふふふ、聞いたわよ。吹雪』

「香織理さん、こんなところで」

『うん？ いいんじゃないの？ 明日菜ちゃんと雅楽乃さんには昨日ご挨拶したし、エヴァンジェリンさんたちは現地協力を頼むんでしょ』

「それはそうですが」

『可憐かつ愛くるしく、聡明で慈愛に満ちた正木吹雪さん』

「…何ですか？それ」

「あー昨日私が吹雪ちゃんの名を出したときに雅楽乃さんが云った吹雪ちゃんの為人ひとなまり」

雅楽乃！ ……いや誇らしげに胸を張られても……

「くくく、あの学園長でさえ煙に巻くお前もまったく形無しだな」

エヴァンジェリンさんが大笑いです。はあ、まったく…

結局、羞恥プレイの様な騒ぎはネギ先生のお父さまのお宅まで続き
ました。

現地には詠春さんと木乃香さん、刹那さんが待っていました。

天体観測ドーム付きの家ですか？ 素人にしては大げさな設備ですね。

ネギ先生たちは書架を眺めてわいわいやっています。

「アスナ、吹雪ちゃん。きーつかんうちにお世話になっとったんなー、かんにんなー」

「別にどおつてことないわよ。このか」

「ええ、お友達ですから。迷惑かけてもらえなくて何が友でしょうか」

明日菜さんと顔を合わせて笑います。

「でも、吹雪ちゃんて雅楽乃大叔母様のお姉さんやったんやねー。あれ、吹雪ちゃんも私の大叔母様？」

雅楽乃：そう云えば、昔お姉さまと呼ぶのを許したときも辺り構わず吹聴していたわね……

「雅楽乃、これ以上ばらさないでね」

「はい、お姉さま」

雅楽乃のお姉さま発言に木乃香さんが笑っています。はあー

「明日菜」

吹雪ちゃんと雅楽乃さんを見てちよつとうらやましくなった。私には家族がいらないから甘えたことはない…もしかしたら記憶がないだけかもしれないけど。麻帆良に帰ったら吹雪ちゃんに甘えてみようかな？ 香織理さんが云つてたけど、吹雪ちゃんて女性がなくて母性だけでできてるって。見た目があれだから甘やかそうと近づいたらいつの間にか甘えていたって人が多いらしい。そう云う人って逆に甘えたことがあまりないし、甘えると甘えるだけ吹雪ちゃんが甘やかすから結構ファンがいるみたい。

雅楽乃さんを見て理解できた。吹雪さんに会うまであれほど毅然としていた人が蕩けちゃっているもの。うーん、もしかして香織理さんもその一人？

ん？ ネギ先生のお父さんの写真？

そう云えば夢に出てきたわね、ナギ・スプリングフィールド。確認しようと思つて写真を見ると…

エヴァちゃんと吹雪さんをひっぱってくる。

「エヴァちゃんは詠春さん達を知っているよね」

「うん？ まあな」

「あの写真、右端のタバコをくわえたオジサマ、ガトウさんて云わない？」

「……なぜ、その名を知っている？ 神楽坂明日菜。こいつの名は

ガトウ・カグラ・ヴァンデバーグ……」

カグラ？

「ガトウ……確か、明日菜さんが夢で見た方でしたね。タバコの香りがする」

あーん、吹雪ちゃんていいなあ。ちゃんと覚えていてくれるんだ。

「うん、そう、そしてナギさんも夢で見た通り。タカミチくんはいないけど」

「たしかにタカミチはあの写真には写ってはいないが、どう云うことだ」

とりあえずエヴァちゃんに夢のことを話してみるけど。

「明日菜さんは幼い頃の記憶がないそうです。ただ最近昔の記憶らしきものを夢にみるそうですがそれに出てくるタカミチと云う名の少年が高畑先生ならば明日菜さんの年齢と合いません。また神楽坂の姓は高畑先生がつけられたそうですが」

「高畑・T・タカミチはガトウの弟子だからその少年はお前らが高畑先生と呼ぶ人物で間違いなからう。タカミチがガトウのミドルネームを忘れるはずもないし……まあ、他人の記憶を覗く術もあるからな、早急に結論はだせんぞ」

「うん」

あ、吹雪ちゃんが手を握ってくれる。

うん、いいなあ。吹雪ちゃん。甘えちゃおうかなー。雅楽乃さんの視線が痛いけど。

2003年4月26日 土曜日 午前7時30分

「吹雪」

やっと修学旅行も終わりです。おうちに帰るまでが遠足ですからまだまだ気は抜けません。犯人グループの一人はまだ逃走中ですしね。ですが実際には妨害もないので静かなものです。3・Aもほとんどが眠っています。ネギ先生も一緒に寝ているのは一瞬なんだかなと思いましたがまあ仕方ないと思いつまにしておきました。ネギ先生が寝ているのでつられる様にみんなも眠っているのですから、このままにしたほうが楽でしょう。

起きているのは窓の外を眺めるに忙しいエヴァさんと茶々丸さんですね。先ほど今後エヴァと呼べと命令されました。

あとは刹那さんは木乃香さんにより掛かっていますが、思案顔です。まあ、あれでしょうね。

あとは真名さんですが…

「これぐらいなんだが」

「これだけですか？」

「まあ、クラスメイトを助けるのに儲けまでだすのはなんだからね」
昨日の騒動の危険手当の請求なんですが必要経費分しか請求されて
いません。
真名さんの云い分も判りますが…あんみつでも研究いたしましょう
か？

麻帆良に帰れば今度はエヴァさんの呪いをとかなくってはなりません。
と云うよりあのマッドをお呼びするのがかなり不安ですがあの方以
外にこころあたりも有りません。
GW中にもう一度京都にいかなければ雅楽乃が麻帆良にやってくる
と脅されましたし。
まだまだ前途多難ですね。

26話 記憶

2003年4月27日 日曜日 正午

「吹雪」

先日のお礼と云うことで木乃香さんと刹那さんに食事に招待されましたが、指定された懐石風レストランに着くと両名の他、明日菜さん、エヴァさん、茶々丸さんが到着していました。私が最後でしたか。

本来ネギ先生達も呼ぶべきでしょうが、私と明日菜さんが関係していたことを知られるのはあまり宜しくありませんので後日、別にお礼をして頂けるそうです。

今夜はこの小部屋を貸し切りにして貰っているので魔法の話も大丈夫です。

「みんな、おーきになー」

本当はきちんと挨拶をされる予定だったのですが、そんなかたくなるしい挨拶するくらいなら最も云いたいことを大声で云った方が伝わると明日菜さんを通じてに伝言しておきました。木乃香さんのお礼の挨拶の後、和氣藹々とした雰囲気わきあそいで食事が進んでいきます。茶々丸さんは食事は出来ませんが明日菜さんや木乃香さんがしきりに話しかけています。もともと、人懐っこい二人ですので簡単にうち解けていました。エヴァさんは孤高に料理を愉しんでおります。

「酒が呑めないのはもったいないな」

それは仕方のないことです。まあ、京都の人間が指定した懷石料理です。でかなりレベルが高い料理がだされているので気持ちは解らないでもありません。

そのなかでも、刹那さんだけがなぜかときおりうかない顔をしてエヴァさんを覗き込む様なそぶりを見せますが：なんなのでしょう？エヴァさんを危険視しているわけでも無さそうですが？

さて、食事も終わりデザートを頂いている最中でした。

「あのお」

なんでしょうか、明日菜さん。

「いや、誰も指摘しなかったからほっておいたけど、ネギ先生が魔法使いつて結構ばれてない？」

あー、いろいろあって、後回しにしていきましたが、そう云うのもありましたね。正直ネギ先生の問題まで手が回りません。私としては魔法を知ってしまった生徒が本人の意志と無関係に危険な目に遭^あわなければいいのですが。

「夕映ちゃん、長瀬さん、古菲は決定的。」

それと二日目の夜、朝倉の主催でネギ先生とキスするイベントがあってそのとき先生とのどかがキスしたんだって」

二日目？ 私たちが夜中、温泉にはいつていたときでしょうか？

「ネギ先生とキス？」

「^{バクティオー}仮契約だな」

「私もこつちに戻ってからパルから聞いたの。仮契約したなら本屋
ちやんとネギ先生と一緒に関西呪術協会へ来たのも判るし。本屋ち
ゃんなら事情を聞いてもネギ先生についていきそうだなって。ファ
ンタジーとかも好きそうだし」

いや、やくざ映画好きが極道になると云う論法ですよ、それは。

「互いに納得しているなら口を挟む気はありませんが、ネギ先生が
どこまでのどかさんに説明なされているかが不安ですね」

「でも、いざとなったら記憶を消して普通の生活に戻すんじゃない
の？」

「魔法では記憶はそんな簡単に消せるものでしょうか？ エヴァさ
ん」

「ん？ 記憶の消去には大まかに分けて2種類あるな、記憶自体を
消す方法と思い出せなくする方法だな」

「それってどーちがうん？」

「パソコンで例えるなら前者はデータそのものを消して、後者は隠
しファイルにして検索できなくする感じでしょうか？」

「パソコンは良く判らんが検索と云うのは適切な言葉だな。まず記
憶自体を消す方だがこれは文字通り記憶が消える。後腐れ無いよう
にきれいさっぱり消える。思い出すことはない」

「ふーん？ならそつちの方が簡単そうだけど？」

「それが、そんなにうまくいかんのだ。大体、自分の記憶がどこにあるのかわかるか？神楽坂明日菜」

「あー、あたまのなかってぐらいかー」

「例えば原稿用紙に幾つかリングと云う文字が書かれている。魔法ではリングの文字だけ消しゴムで消すようにはできない。で、どうするかと云うと原稿用紙ごと破棄してしまう」

「それじゃその原稿用紙に書かれていたこと全てなくなっちゃうじゃない」

「そうだ、だからこれは大体直前の記憶を消すぐらいにしか使えないな。」

「剣術の訓練で気絶したときにちよつとまえの記憶がとんでいることはあります」

「人の記憶は夜眠っている最中に保存すべきものとそうでないものをより分けるそうです。」

ゲームで云えばセーブする前のデータが消えて最後にセーブしたところからやりなおしでしょうか」

「その例えなら判る。逆に古い記憶を消そうとするとセーブデータ丸ごと消えかねん」

「あれー私そんな危ない術をかけられたの」

以前ネギ先生にかけられていましたね。

「まあ、出回っている記憶消去の呪文で消せるのはせいぜい3分間くらいだろう」

下手に長時間記憶を消去できると犯罪に頻繁に使用されるでしょう。今のままでも十分危険ですが。

「次のやつだが、こっちは少々やかいだ。まず人間の脳の仕組みからはいるが、記憶の種類には幾つかあってそのなかにエピソード記憶と云うのがある。所謂いわゆる思い出と云うやつだ。それと対になるのが意味記憶、こちらはむしろ知識と呼んだ方が通りが早い。これらは相互に補充しあっている」

「記憶から意味を取り出すには知識が必要、知識は記憶を解体したものとしておきましょうか」

「言葉に置き換えるのは難しいな、話をすすめるぞ。この食事をあとで思い出すには、『6人での食事会』『4月27日』『昼食』『懐石』等のキーワードで検索すれば思い出すと云うのは判るな？逆にそのキーワードを消し去ればこの記憶は再生されてこない。但し、キーワードなんていくつでも出来るからな、そこで重要なキーワードが揃った場合でないと再生出来ない様にするのだ。更に全く日常では使わない文章をパスワードとして無理矢理記憶に関連づけしてキーワードの一つにしておけば思い出すことは無いだろう」

「それで記憶が封印されると云うの？」

「そうだな、問題もあるがな」

「あるの？」

「大ありだ。人間と云うのは考える動物だからな、考えるなど云われてもなにかしら考えてしまう。試しにやってみる」

そう云ったあとエヴァさんはしばらく黙られます。しかし、思考の停止は訓練しないとできないので皆さん口々に出来ないと言っています。

「ある出来事に対して脳は勝手に関係しそうなものを連想するのだが、もともとが重要な記憶だからそれは優先順位が高いから検索には頻繁に引つかかるが使用されることはない。その無駄なぶんだけ思い出す能力が低下するな。」

またやばすぎるキーワードはそれで検索しない様にもするだろうか。一々検索条件にも判定がある。自分自身の思考とは別に脳のちから使うわけだからその分だけ思考能力が低下する。

また記憶は常に同じ場所に保管されているわけでなく重要なものとうでないものを選別される。しかし封印された記憶は不必要に残っている。脳から見ればだが消すわけにもいけない。さきほど出た記憶の整理の邪魔になる。すなわち物覚えが悪くなる…

覚えられない、思い出せない、考えられない…総じて端からみると…バカになる」

がーんと云った表情でショックを受けていますね、明日菜さん…

「まほら戦隊バカレンジャー バカレッドは正義の秘密組織に脳改造されたヒーローだ！ふん、笑えんな」

まあ、確かに。エヴァさんの説明も大きく違うこともないでしょう。簡単に云えば脳に負担がかかっていますの一言ですが。

「でも魔法使いでどうやって記憶を消す呪文なんて編み出したん？」
話題を変えるように木乃香さんが仰有います。それは私も是非聞き
たいですね。

「経験則からだな。やってみたらこうなった。その繰り返しだ。
今云った理論も私が近代科学の知識から後付けしたものだからな」

「だからと云って経験則をおろそかにして好いものではありません
よ。刹那さんの剣術の型など経験則の最たるものです。こう斬りか
かってきたのをこう受けるより、こう受け流した方が反撃しやすい
と云ったものを積み重ねたものです。先人達が血と汗で培った百万
数多の経験の中から篩ふるいにかけて残ったものです」

「そうだな、だがそれゆえ停滞しつつあると云うのもある。皆効率
化された呪文を同じ様に唱えるだけだ。魔法学校でさえ既存の呪文
を覚えることとそれを効率良く運用することしか教えない。新しい
呪文の開発など大学院レベルの話らしい。桜咲刹那、貴様もただ技
をうつことだけを考えていると一流より上は目指せんどぞ」

「一流より上とは？」

「超一流。至高。最強。貴様も関西呪術協会の看板を背負っていく
身なら覚えておけ。くくっ」

「えー！ せっちゃん。関西呪術協会の看板背負うん？」

しどろもどろで刹那さんが受け答えをしている最中、

おや、着信音ですが私ではありません。

茶々丸さんが携帯を取り出しディスプレイをしばし眺めてから電話にでました。一言二言、言葉を交わしてから、

「マスター、ネギ先生からお電話です」

と携帯を差し出します。ネギ先生からですか、奇遇ですね。

「私だ、……………構わんが今外出中だ。……………ああ、その頃には戻るだろう」

それだけで切ってしまいました。

「ぼーやからだ、何か用事があるらしい。今から家に戻る」

エヴァさんが席を立って出て行かれます。茶々丸さんも一礼して出て行きます。

「やっぱり私、記憶操作されていたのかなー」

テーブルに突っ伏しながら明日菜さんが仰有います。

「そうですね。確かにその可能性が高いですね」

「なんでそんなことしたのかなー」

「おそらくは明日菜さんの幸せの為に」

「私を『ばか』にすることが？」

「ええ、正直に申しますと私もこの手の記憶操作の知識はあります。暗示の領分ですが、エヴァさんの説明通り脳に負担をかけるものですので施術の際には細心の注意が必要になります。最悪記憶障害どころか即、廃人になる恐れもあります。しかしながら明日菜さんに危害を加えるだけならばもっと簡単な方法がいくらでもあるのです。薬のなかには副作用を承知で医師が処方する場合もあります。確かに思考に制限を受けていましたが、明日菜さんが麻帆良に来てからの生活を思い出してください。決して悪いものではなかったと思うのですがいかがでしょうか？」

私はそう云うと明日菜さんはしばらく黙って考えてから仰有いました。

「そうだね、あやかが居て、このかが居て、吹雪ちゃんや刹那さんが居て、みんなが居て…悪くない…いや最高だよ…」

私にもたれかかりながら明日菜さんが泣いています。

しかし、あのとき高畑先生を糾弾する形になってしまいました。事情が判らなかつたとは云え申し訳ないことをしてしまった気もします。

「記憶の封印は人の心の領分ゆえ時間が経つにつれ如何様に転ぶかを想像するのはむずかしいのです。故に高畑先生は保護者として出来るだけ明日菜さんのそばにいたのかもしれませんが。だからこそ、封印をとくことも承知せざるを得なかつたのかもしれませんが。

……人の厚意の全てが幸福に変換されれば宜しいのですが」

肩にもたれかかっていた明日菜さんの頭が膝へとすべり落ちていきます。なで肩ですし、胸に摩擦力など期待しませんから仕方がないですが…膝枕？

しばらく明日菜さんが落ち着くまで髪をなでていましたが…どうしましょう。間が持ちません。こう云うときは…

「えと、序ついでですから耳かきをしましょうか？」

「明日菜」

いいんだよね。私、高畑先生を恨まなくても。いいんだよね。

あこがれていた高畑先生。ネギ先生が来たあの日からずっと胸につかえていた気持ちがあると落ちていく様な気がする。

まだ本当のことは判らないけどもうちょっとだけ高畑先生を信じてみようと思った。

……………

あれれ、気がついたら膝枕されてる。

どうしよう。

起きるタイミングを計っていると。

「えと、序ついでですから耳かきをしましょうか？」

と吹雪さんが云ってくれた。

「じゃあ、お願い」

吹雪さんが私の下にしていた方の肩の下に手を差し込んで力をいれると簡単に身体が回ってしまう。必然、顔がお腹に向いてしまうわけ、上を向くとおっぱいごしに吹雪さんの顔が見える…

耳かきが再開されたけど、ちょ、まずいよー 最後にまた『フツ』が来たらまずいよー

27話 訪問者達1

2003年4月27日 日曜日 午後1時半

「エヴァンジェリン」

アホか貴様

思わず云ってしまふ。

敵と承知で弟子入りを志願してこようとは。

桜通りや京都の戦いを見てだと？ どちらも半分もぼーやには力を見せていないがな。

しかし、向上心は認めてやるさ。

「悪い魔法使いにモノを頼むときにはそれなりの代償が必要だぞ
まずは足をなめろ 我が下僕しもべとして永遠の忠誠を誓え
……
話はそれからだ」

339

「そんなのダメです」

「なに云ってるんですかー」

ぼーやの従者の宮崎のどかと付き添いの綾瀬夕映が噛みついてくる。しかし、頼りなさそうなのを選んだな。と云うか何を望んで従者にしたのだ？

「巫山まじけ戯たわぶているのは貴様達だ。

私知ってる戦い方とは私自身の戦い方だ。それを教えると云うのは私自身の長所、短所を教えると云うこと。私には敵が多い。貴重な情報を与える相手に絶対の忠誠を求めるのはあたりまえだろう

が

私の言葉にぼーやは声を失ってしまつ。しかし、

「エ、エヴァンジェリンさんは『闇の福音』の二つ名を持つ真祖の吸血鬼です。ただか10歳のネギ先生に幾つか戦い方を披露して引き出しが無くなるとも思えないです。それとも天才のネギ先生に全てを見透かされそうで怖いですか!」

ほう、云うではないか。付き添いと云っているが従者候補なのだろうか？

「まあ、いい。今度の土曜日もう一度ここに来い。弟子にするかどうかテストしてやる。そのときまでに報酬はなにが好いか考えておこつ。ふふ、楽しみだ」

「お金をとるですか？」

「当たり前だ。ぼーやとて授業料から給料を貰っているのだから？バイトをして授業料を払おうとする生徒もいるなかで自分だけただで教えて貰うつもりでもあるまい？」

「そうですが、ちょっと最近出費がかさんでいて」

「ふん、金など困っておらん」

「その、血とかですか？」

「それも好いが…吸血鬼が血を吸う理由に血液中に魔力の基になるマナやオドと呼ばれるものが含まれているのだが…別に血液だけ

と云うわけじゃない」

ぼーやの股間に視線を送る。

「いけませんー」

「だ、だめですー」

二人ともぼーやの前に立ちふさがる。

なんだ、わかるのか。くくっ

ぼーやの方はきよとんとしておる。

「初物は甘露と云うが…… 冗談だ。テスト内容は追って伝える」

とりあえず、3人を追い払ってやった。

フッフ

自分が気に入った人物なら敵だろうなんだろうが構わない奴だったな、あいつも…

2003年4月30日 水曜日 午後6時

「吹雪」

またも刹那さんに呼び出されました。大切な用件があるそうですが、寮の部屋ではなく市街のビストロに呼ばれました。

出迎えたのは…

「お姉さま、ごきげんよう」

雅楽乃？　こちらから行くと云ってるじゃない。

「ええ、お姉さまの仰りたいこともわかりますが、私たちともに京都近辺は何度か足を運んおります。なら、こちらを散策するのも好いのではないか思ったのです。それに本当の目的は関東魔術協会の長に今回の騒動の顛末と協力のお礼を云いに来たのです。……もしご迷惑ならこのまま京都にもどって待っております」

はあ、この娘は…

「仕方ない娘ね、私が貴女のお願いを聞かなかったことがあって？」

「はい、お姉さま」

はっ！　辺りを見回すと何故か皆紅い顔をしています。見渡せば一昨日の面子ではありませんか。

「（コホン）　えーと用件はそれだけかしら？」

「いえ、本題はこれからです。天ヶ崎千草の尋問ですがお姉さまの云う通り意識誘導されていた様です。こちらから矛盾点を指摘するうちに千草自身が自分に疑いを持ってきています。記憶を読む術者の証言から、要所である少年がアドバイスしているのがわかりましたが実にうまく意識誘導しています。天ヶ崎千草が主犯ではありませんが計画には深く謎の西洋魔術師が関わっていたと云う見解で派閥の領袖たちとのコンセンサスがとれそうです。

その少年、フェイト・アーウェルンクスと名乗っていたのですがこちらは足取りをたどれておれませんか」

「そう」

…逃がしちや拙かったかしら？ 雅楽乃がいると判っていたならいくらでもやりようがあったんだけど。

「それと木乃香ですが、すでに力に目覚めた以上、こちらに居る間も少しは力の制御を覚えてもらわないといけないのですが、はつきり申しまして適当な人材が見つかりません。ですのでこちらにいる術師に協力してもらおう所存です。それを含めて関東魔術協会の了解を得たいと思っています」

「しかし近衛木乃香の魔力は鬼100体以上、そして鬼神を召還してもまだ空にならなかった。術の練習も好きが制御は難しいぞ」

「そうなのですか？」

「そうだな、蛇口をひねったら消防車の放水並の水圧で水が押し出される感じか？ それでコップ一杯分だけ水をくむ様なものだな。最初のうちは魔力の暴走も覚悟しないといけないな」

「ああ、麻帆良市内では周りに危険、市外だと木乃香さんが危険と」

「うむ、そうだな」

「その辺も協会長と相談ですね」

そう云ってから雅楽乃は薄い手提げ鞆をとりだしファスナーを開けると、パソコン？

「貴女の？」

「いえ、孫のです。動画が再生出来ると聞いて借りてきました。茶々丸さん、お願いします」

「はい」

雅楽乃もパソコンは扱えない様ね。

受け取った茶々丸さんがパソコンを開けるとそのままモニターが表示される。スリープだったの？

しかし、この壁紙は…たしかビブリオン？ 千雨さんが鑑賞されているアニメでしたよね？

「ねえ、雅楽乃。お孫さんにはちゃんと断ってお借りしたのよね？」

「いえ、あいにく不在だったので書き置きして持ってきましたが？」

お孫さんにお気の毒と云ったほうが好いのかしら？

「このぐらい気にしません。私も男の子二人を育て上げましたので。しかし、殿方と云うのはおかしいものです。あれで隠したつもりなんですから」

な、なにを見つけたのかしら、雅楽乃。

茶々丸さんが腕からコードを伸ばし、USBポートへ接続します。しばらくパソコン側でデバイスを探していましたが認識されたようです。

クリックしてフォルダを開くと20030424 23(2).w

m vと云う動画ファイルがあり、デスクトップへコピー後再生されました。

夜空を貫く一条の光。その中に実体化する異形の巨神

ゆっくりと上下に視点が移動し、下方から眺める視点はそのものの巨大さをあらわしている

そこに近づくと一体の人影

空中を翼で飛翔し、大太刀をもって巨身へと向かっていく

巨神の一撃を無造作に切り払うと巨神の前へと回り込む

一瞬の間の後

両断される巨神

翼持つものはその場から消え去り画面は崩れおちる巨神を映しつつける

不意に画面が揺れ夜空を映し出す、先ほどの翼持つものが髪の毛の長い少女を抱いて飛んでいる

段々とその姿は大きくなっていき裸の少女と見つめ合う翼持つもののアップで映像は終わる

3分もない短く荒い映像でしたが云うまでなく先日的一件ですね。

「うわーこっとなってんだ」

「いややわ、はずかしいわー」

明日菜さん、木乃香さん口々に感想をもらします。刹那さんは真っ赤になっただけ黙っていますね。

「エヴァンジェリンさんから先日の映像があるとお聞きしましたので」

「うむ、茶々丸の記憶映像だ」

「はい、先日の証拠物件として申し分ありません」

証拠物件？

いえ、あきらかにプロパガンダ用ね。

本気で刹那さんでまとめるつもりなのかしら？まあ、私が口を挟むことではないのだけど。

「ところで木乃香。あなたも近衛の家の惣領娘ですから残念ですが自由な結婚は望めません」

「そやな、おじいちゃんも見合いを勧めるし」

「近右衛門さまも？……それはともかく、だからと云って貴女の幸せを望んでいないわけではないのです。夫婦の不和は私たちも望みませんし。木乃香、貴女理想の殿方はいますか？」

「ええ、急にそないなこと云われてもー」

「では、例えば……そう、刹那の様な方がいかがでしょう？」

「せつちゃん？……ええかもなー」

ぼつと、頬を染める木乃香さんに刹那さんは先ほどと同じく真つ赤になつたきり黙っています。明日菜さんはぼそつと「これが外堀を埋める」と呟いています。なにか嫌な経験値だけ増えていくようなきがします。

しかし、あの話本気ですすめるつもりかしら、雅楽乃つたら。冷静になれば与太話だったと流れるとおもっていたのだけれど。

「そうですか。責任を持って刹那さんに似た方をさがしましょう。ですが最終的には貴女の意志しだいですので深く考えすぎない様に」

「はい、大叔母様」

あせつて変な男に気を向けるなと聞こえるのは私が黒いせいよね、雅楽乃…

雅楽乃が迎えの者と帰ってから私たちは繁華街を歩いています。G W中ですので社会人の方などで大いに賑わっていますね。できれば千雨さんもお誘いしたかったのですが一人で来てくれとのことだったので仕方ありません。まあ、昨日一日『れば』とやらにお付き合いましたのでがまんして頂きましょう。

「そう云えばネギ先生はどんなご用事だったのですか？」

木乃香さんに魔法のこと知って貰ったため、ネギ先生を警戒する必要もなくなり『守る会』も自然消滅でしょうか？麻帆良内ならば外

敵からの攻撃も無いようですし。

ネギ先生が仮契約ハクテイオウで生徒を従者にされることには些か納得できません。それが関東魔術協会の管轄でしょうから。

ただ、のどかさんとは一度話をしておいた方がいいでしょうか？

「うん？ああ、ぼーやが弟子入りに志願してきた。英雄の息子が悪の魔法使いにだぞ。笑えるだろう？」

「それでお引き受けされるのですか？」

「一度は蹴ったが土曜日にテストして決める」

「つまりはお受けなされると」

「なんでそうなる」

「引き受ける気があるからテストなされるのでしょうか？　つまりは引き受けたいと云う願望がある。テストするのは、受かったから仕方ない、弟子にするしかないと云うご自分に対する方便では？」

「だまれ、勝手に人の気持ちに解釈いれるな」

「そうですね。まあ、気持ち云々は置いておきましてネギ先生をお弟子にされることには賛成しますよ」

「ほう、今後のからみから反対するかもとは思ったが」

まあ、ネギ先生がエヴァさんの周りに居ることが多くなるならば若

干エヴァさんと接触しづらくなるかと思いますが、手は幾つでも考えられます。

「そちらの方はさして影響はないかと。」

ここでエヴァさんがネギ先生に恩を売っておけばなにかとエヴァさんに有利になるのではないのでしょうか？」

「おい」

「英雄の息子と云う肩書きはあちらでは大きい様ですのでネギ先生に太いパイプを作っておけば今後何らかの利となるでしょう」

「なんでそうなる？貴様の交友とは全て損得尽くなのか？」

「…ああ？失礼いたしました。お友達から始めたいと？」

「うがぁー」

「マスターが面白い様に転がされています」

木乃香さんがふと思いついた様に仰有います。

「恩と借りとはどう違うん？」

「一概には申せませんが返せるのが借り、返し尽くせないのが恩で
しょうか」

「そうなん？」

「一般的には親から子への恩でしょうね。子は親に受けた恩を全て返せません。物理の面でも心情面でも。ですから子は返しきれぬ恩を含めて自分の子に愛情をそそいでいくのです」

皆さん概念としては判るのでしょうか？木乃香さん以外には具体的には納得できないでしょうか？かと云って他に適当な例が思い浮かびません。

「貸しとは返すことを前提としていますから割と対等な関係ですね。逆に恩は返すことをあてにしない、返すことが難しい状況ですから立場に優劣があります。一度立場に優劣がつくとくつがえすことが難しいものです」

明日菜さん、エヴァさん、茶々丸さんが木乃香さんと刹那さんを見比べます。

「ですからそんな勘定を踏み越えてただ『友達だから』と云う理由だけで動ける友情は素晴らしいのですよ」

「うわ、あんなに真っ黒い話をいい話でまとめた？」

「力技にもほどがあるぞ」

そう云われましてもねえ。

「どう云う理由かは存じませんがネギ先生は人から教えて貰うことを避ける節があります。そうした観点から是非引き受けて貰いたいのですが」

「なら、最初からそう云え」

「エヴァンジェリン」

「で貴様達は何をしていたんだ」

これ以上吹雪のおもちゃにされたくないからとりあえず話を振ってみただが……

「それがなー、なんやいつのまに吹雪ちゃんがアスナを膝枕してなー、こつみみかきしてー、ふつとふいたらアスナがあつとかゆうてー」

ふん、くだら……

どがつと何か倒れる音がしてそちらを見ると茶々丸が地面に膝をついている。

初期には不安定だった茶々丸も今ではすっかり安定していたが何で急に？

「マスター、なぜその場に私はいなかったのでしょうか？」

「なぜって、だからぼーやに呼ばれて……」

そんなことまで判らないのか？

「ネギ先生…私はネギ先生をにくむ…これが憎悪、そして絶望…ワタシハコンナコトナラタマシイナドホ・シ・ク・ハ・ナ・カツ・タ」
いつもの茶々丸の音声から急に合成音に切り替わった。どうなっている？

「なんやーそないに残念ならもういっぺんすればええんのー」

むくつと茶々丸の頭があがる。

「私は別に構いませんが」

「私たちもうやってもらっただから」

そう云う明日菜の隣ではすごい速度で刹那が相づちをうつている。と云うか何で私を見る？ ちょ、まて、茶々丸…

「超鈴音」

「どしたね、ハカセ」

ハカセに呼ばれて研究室に入るとモニターの前でハカセが難しい顔でキーボードやマウスを操作している。

「超さん、先ほど茶々丸からシステムエラーが報告され、今データが転送されてきています」

茶々丸は重大なシステム異常が出たときには緊急回路から無線通信

でエラー報告と位置情報が発信されるヨ。場合によっては重要記録をバックアップのため転送するネ。つまりはカナリやばい状況ネ。

「それは日付からすると今現在の映像らしいんです」

バックアップじゃない？

「途中で記録がとぎれる可能性が高い危機的状況かもネ」

「とりあえず再生してみます」

「エヴァンジェリンさん？」

「吹雪力？」

画面には吹雪に膝枕されたエヴァンジェリンさんがいるネ。

「何なのでしょう」

「何かナ」

「と云いつつハカセ、何だてモニターから目をはずさない？」

「ちや、超さんこそ」

紅い顔してハカセがこたえる。判てるけど多分わたしの顔も紅いね。

「あとでこのデータコピーしてほしいネ」

「え、ええ、茶々丸には悪いけど何故茶々丸が重要視するか解析する必要があります」

むしろ気持ちが判りすぎるけどネ。室内には私と八カセの呼吸音と云う力、鼻息だけが響いてるヨ。

2003年5月1日 木曜日 早朝

「エヴァンジェリン」

「ずいぶんと熱心じゃないか、ぼーや」

警備の帰り、世界樹の下でぼーやを見かけた。相変わらず宮崎のどかを待らせていると思っただら佐々木まき絵までか。

それはともかく、ぼーやの動きが気に喰わん。中国拳法のスタイルだが何時習ったのだ？京都のときは私が着いたあとぼーやは闘っていないから判らんが、私と闘ったときにはずぶの素人だった。まだそれから2週間ぐらいでこうも様になるものか？

少なくとも本などの知識だけではないな。誰かがちゃんと指導している。中国拳法なら超鈴音か古菲だが……古菲だな。あれなら部活感覚で教えることだろう。

とは云え、弟子入りを要請しながら無断で他にもちよっかいをだしているとは…

「あ、おはようございます！」

「あれー、エヴァちゃん、茶々丸さんおはよー」

「おはようございます」

皆、挨拶してくるがどうでもよい。

「カンフーの修行をすることにしたのか？じゃあ、私への弟子入りの件は白紙ということでもいいんだな？」

「いえ、それは京都で1対1の戦闘で手も足も出なくて、古菲さんが麻帆良で一番強いと聞いたのでそれでアドバイスを…」

ふむ、私がぼーやに見せたのはオーソドックスな魔法使いスタイルだけだからな。無論、接近戦で遅れをとるつもりもないが。とにかく、無性に腹が立つ。

さっさと帰ろうとしたがなにやら佐々木まき絵が噛みついてきた。まったく、うるさい。

「いいだろう。立った今貴様の弟子入りテストの内容を決めたぞ。そのカンフーもどきで茶々丸に一撃でもいれてみるがいい。それで合格にしてやるう。ただし一対一でだ」

「いや、わかったよ。そんなのネギ君なら楽勝だよ」

なぜ貴様が云う？佐々木まき絵。

「もんでやれ……茶々丸？」

茶々丸を見るとなにかいつもと違う。と云うかこれは殺気？

「ネギ先生…私を絶望に陥れたあなたが許せません」

なにやら神鳴流の剣士が暗黒面に目覚めたときに様な表情でつぶやいている。

「吹雪さんと明日菜さんの膝枕シーンの録画を邪魔した罪、万死に値します」

なに云つておる。貴様、私を生け贄の祭壇に捧げて満足そうだったじゃないか。

ぼーやも茶々丸の異常な態度に腰がひけておる。

「間接のロック解除、左手モーター高速回転開始、ターゲットロック、ファイア」

茶々丸の左手がすごい勢いで飛んでいく。ぼーやはとっさに避けて無事だがあれは当たったら拙いぞ。回転力で威力を増すなんてこでができたか？

「ネギ先生、避けると痛いですよ」

拙いところに当たったら痛みなど感じる隙さえないだろうよ。

やる気満々の茶々丸が第二、第三のロケットパンチを放つがぼーやはかるうじて躲していく。

すると突然ジェットを全開にしたかと思えば急制動をかけ左右にスライドしながら相手の読みを外す動きは……吹雪か！茶々丸流にアレンジされているが基本概念は湖で見せた奴の動きに違いない。

「茶々丸、やめい」

あきらかに異常な攻撃に慌てて停止命令を出すが茶々丸が止まらな

い。

「ちい、ぼーや逃げい」

私の言葉にぼーやが初級杖で自分に魔力供給の呪文を唱え茶々丸から逃げ出すが…ばか、そっちに逃げたら…

ぼーやは茶々丸に背を向けて逃走したためそれを茶々丸も追跡し始めた。両者が私から遠ざかる方に走っているため仕方なく私も二人を追うが…

「追いつけるわけ無かるう」

同じく二人を追う佐々木まき絵はおるか、あの宮崎のどかにさえ追いつけないとは…つくづくこの身体を恨めしく思う…

あまりの高機動でのエネルギー切れやオーバロードで動きの鈍った茶々丸にどうにかの停止信号を打ちこめたのは5分後であった。

「そのー、すまんかった。まあ、あの攻撃で生き残ったのなら見込みはあるだろう。弟子にする」

「あ、あ、ありがとうございます」

ぼーやが半泣きなの感激のせいとおもう。

28話 訪問者達2

2003年5月4日 日曜日 午後6時

「吹雪」

自分の行いが恒に正しいと限りませんので検証とかはかせません。

あの方をここに呼んでよかったのか？

サンプルも何もなしでいきなりトラブルの対応策を提示できるような科学者、樹雷の最高機密の維持を確約してくださる方となると手近にはあの方しかおりません。

「いよ、吹雪殿」

「遠路はるばる感謝します。ようこそ麻帆良へ、わ、鷺羽ちゃん」

絶対なれない呼称を要求されるこの方は銀河アカデミー最高の哲学士、白眉鷺羽さまです。今回エヴァさんの登校地獄の呪いを解呪して頂くべく麻帆良にお呼びしました。

麻帆良駅の改札で出迎えます。今回は地球の交通機関の調査とか仰有り新幹線を乗り継いで麻帆良までお越しになりました。

一応辺りを見回してお一人であることを確認します。いえ、尾行とかではなく…

「気にするのは判るけど云われた通り誰も連れてきていないから、
魍呼とか美星殿とか…」

「いえ、恐れ入ります」

作り笑いを浮かべ返答しますが、名前を聞くだけで心臓の鼓動が早
まります。特に美星さんはこの麻帆良と相性が悪いと云うか良すぎ
ると云うか…混ぜたらどんな化学反応を起こすか考えたくもありま
せん。

二人でタクシーに乗りエヴァさん宅へと移動します。

そして今はエヴァさん宅です。

自己紹介でいつもの「鷺羽ちゃんと呼んで」でエヴァさんも呆気に
とられていましたが…問題はエヴァさんの呪いです。

「さて、始めるまえに一つ確認しなきゃいけないんだが、茶々丸殿」

「なんででしょうか。鷺羽さま」

「今後、いろいろエヴァンジェリン殿に協力してもらうんだけど茶
々丸殿を介して情報が漏れるのは好ましくない。つまりは茶々丸殿
には黙っていてほしいんだけど」

「私には上位管理者、超とハカセには情報を隠すことが出来ません」

「それは十分承知してるよ。別に管理者情報を書き換えようと云う
話じゃない。ただメモリーの一部を秘密領域化して茶々丸殿以外の

許可なくして閲覧できない様にするだけさ」

「私からもお願いします。出来れば茶々丸さんをのけ者にする様な真似はいたしたくありません。鷺羽ちゃんはアカデミーでも5万年もの間最高と呼ばれ続けた方ですのでバグを残す様なことはないと思っております」

頭を下げ茶々丸さんをお願いします。

「マスター宜しいですか？」

「お前の好きな様にすればいい」

「わかりました。鷺羽さまお願いします」

「そいじゃ、これ乗っけて」

鷺羽さまは懐からノートパソコンと黄色のハンドボール大のタマをとりました。タマの方は大きな黒い目と小さな口？がありアタマのしたには小さな身体が付いています。まあ、身体検査用のロボットです。これを茶々丸さんの頭の上に乗せると目が踏切の信号機のごとく交互に点滅を開始し、解析を（多分）始めました。

およそ10分ほどで解析は完了しました。解析の途中から鷺羽さまはキーボードを忙しく叩いていました。

「ふむ、癖がないプログラムだね。まあ、冗長ぎみだけど変なバグが紛れ込むよりはいいね」

「どれくらいで出来ますか」

「もう出来たよ。権限の一部変更と再変更の禁止、序でにデータ圧縮アルゴリズムの追加だからね。考えるほどじゃないよ。じゃあ茶々丸殿いくよ」

リターンキー一発で終了です。

「これで、茶々丸殿が開放指定したメモリー以外は外部からの読み出しを行えない。仮に記憶媒体ごと取り出されてもそれ自体が暗号処理されているからよほどじゃないと解析はできないよ」

まあ、それを鈴音さんたちに云って試されるのは困るのでなにか保険はかけておきましょう。

「さて、次はエヴァンジェリン殿だけど」

多少、あれを頭にのせる事に抵抗を見せていましたが渋々とかばっています。

エヴァさんの解析には時間がかかる見込みなのでお茶を頂きながら時間をつぶしていました。

「ところで、今更なのですが本当に呪いをとくつもりなのですか？」

一応念押しをしておかないといけませんからね。

「私がエヴァさんをお願いするのは麻帆良に対する裏切りです。場合によっては麻帆良から追われることもあるでしょう。それでも構いませんか？」

「当たり前だろう。サウザンドマスターは私をここに縛り付け、麻

帆良の奴らは私から力を奪った」

「まあ、奪われたものを取り戻すのはお手伝いします、約束ですから。ですが復讐の手伝いはしませんよ」

「いるか。力さえ戻れば私一人で十分だ」

「復讐できたとしても結局は賞金首に逆戻りでしょう。少なくとも退屈で平穏な日常からは遠ざかります。先日、明日菜さんに話したのですけれど…」

日曜日のエヴァさんたちが帰られてからの高畑先生の記憶操作に関する見解をお話します。

「少なくとも麻帆良に居る間は外敵からこそ逃げ回る必要もなかったのでしょうか？衣食住すべて足りていますよね。他にとにかく要だったのですか？」

「しかしあいつは帰ってくるといったのに約束をやぶったのだぞ」

あら、そっちが問題なのですか？けっこう乙女なのですわ、エヴァさん。

「私はナギさんと無論面識はないのですが、約束を守らない様な方なのでしょうか？いえ、それならばもともと期待などしなかったのではないのですか？」

普段ちゃらんぽらんでも要所要所では信頼出来る方だったからこそエヴァさんの失望が大きくなった様に思えます。ネギ先生も一緒に生活されたご様子ではないみたいですし、よほどの訳があったと考えた方が自然ですね」

「しかし、毎度毎度卒業の度、取り残される私の身にもなってみろ」

「そのことなのですが、不自然ですよね」

「なにがだ？」

「登校地獄はエヴァさん本人にかけられたものですが卒業した人間がエヴァさんの事を忘れると云う事象がです。登校地獄はナギさんの創作された魔法ですか？」

「たしか魔法教本を見て唱えていたからオリジナルでは無いはずだが」

少しばかり遠くの方を眺める様な感じでエヴァさんが仰有います。

「登校地獄と名前は物々しいですが実態は登校を余儀なくされると云ったもので呪いにしてはゆるいですね。察するにこれは元々不登校児にけるギアスだと考えた方がしつくりきます。ならば卒業と同時に解けると考えるのが自然…ですよね。」

卒業と同時にクラスメイトがエヴァさんを忘れると云ってもクラスメイトだけでなく全学年の生徒、一般教員に影響を及ぼしています。一回の卒業でおよそ3千人以上人間に影響を及ぼしているのです。この多人数に関わる記憶障害…なにかと似ていませんか？」

「麻帆良の認識障害…か」

「エヴァさんが卒業できないこと、もしくは成長しないことを隠すために認識障害が発動したとも考えられます」

「迂闊だったな。全てが登校地獄のせいだと考えていた」

「まあ、だからそれがどうしたと云われると困るのですが。もしも今後学園長と交渉することがあるのならばカードの一枚ぐらいにはなるでしょう」

「なるほど、そこへ落ち着かせたいのか」

全ての呪いがとけてエヴァさんが自由になったとしても今しばらくは麻帆良にいてもらわないと困りますし、ある程度発言権があれば尚良いですし。

「しかし、今更なんだが魔法を識らないで解呪できるのか？」

「んー？まあ、云ってみればこれはエヴァンジェリン殿に出来た癌を外科手術で切り取る様なものだね。その癌がいったいどうやって出来たかまではわからない。……できたよ」

そうこうしているうちに解析が終了したようです。

「やっぱり無理みたいだねえ」

鷺羽さまがモニターを覗き込んで難しい顔をしています。

「そちらは難しいと思っていました。やはり浸食が激しいですか？」

「そうだね。無理に引きはがせばエヴァンジェリン殿のアストラルまで影響がでるね」

「ちょっと待て！いまさら解呪が出来ないなんて云うのか？」

あつ、うっかりしていました。鷺羽さまと顔を合わせ互いに苦笑い
です。

「失礼、エヴァンジェリン殿。無理って云ったのはこの不完全な人
体強化プログラムのことさ」

「鷺羽ちゃん違います。吸血鬼化のことです」

修学旅行の帰りにエヴァさんから聞いた話ではエヴァさんは他人か
ら吸血鬼にされたとのことでした。勝手な判断ですが元の人間に戻
せる可能性が無いか鷺羽さまに調査をお願いしていました。ただ6
00年の年月が普通の人間には長すぎるためアストラルが変容して
いないか気がかりだったので、やはりうまくいかないようです。

「ああ、そうだった。まあ吸血鬼化って血を吸いたいから吸血鬼に
なるんじゃないかって吸血鬼の能力、つまりは人間以上の力がほしいか
ら吸血鬼になるんだろ？」

「そうだな、多分そうだろ」

エヴァさんはご自身の意志とは無関係でしたが。

「私から云うと吸血鬼の弱点は人体強化の副作用と云うかバグだね」

「？ ああ、なるほど、吸血鬼と云う概念が最初にあつたのでそう
云うものだと納得していたが、単に生物と見た場合妙な弱点だとは
常々思っていたよ。」

だが、麻帆良で15年か弱い少女をやっていたがやはり私は吸血鬼
だ。それを取られては、もはや私ではいられない。人間のエヴァン

ジェリンは600年前に死んだ。今此処にいるには真祖の吸血鬼工
ヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

まあ、エヴァさんらしいですね。

「了解したよ、幼年固定のプログラムもそのままでもいいかい？」

「何？」

「いや、吸血鬼化の方は肉体のポテンシャルが最大になる年齢まで
は加齢されるんだけど別のプログラムでそれを抑えているんだけど」

「つまりは歳をとると云うのか？」

「成長すると云ったほうが正しいかね」

ちよつと待つてください。それは想定外でした。いえ、普通の人にな
って普通にお歳をめされるのは歓迎しますが…いえ、歓迎しない
わけでも…

まあ、ともかくエヴァさんの呪いは揃って解除され、今後は普通に
成長されるそうです。

「それじゃ、いくよ」

鷺羽さまのかけ声と共に登校地獄等の呪いが解除されました。

しかし、鷺羽さまは科学だけで全ての呪いを解除されたのでしょうか？先ほどのエヴァさんへの説明でも隣でわかつたふりをしていま
したが内心、本当ですかと云いたかったです。以前、津名魅さまと
鷺羽さま、そして名を知らないもうひとかたを交えた酒盛りにつき
合わされたことがありましたが、お三方ともそこに太陽があるかの

様な気を発しており正直近づきたくなかったのですが渋々着つくりをした記憶もあります。まあ、この件は深く考えないことにしましよう。

「ではこちらの契約の債務を履行したと宣言します」

エヴァさんに向かって云います。やっと、とっかかりを掴めた心境です。

「確かに了解した。ふふ、さて何をしようか？」

エヴァさんはどことなくうずうずした様子ですね。

「その前にこちらの要求をいくつか。まず、この家に転送ポートを設置したいのですが」

一応、市内には幾つかの転送ポートをすでに設置していますが学園内にはできていません。

「貴様、自身で転移できるだろうか」

「それは近距離だけです。ちゃんとした目印が無いとうまく跳べません。

このポートは私の船に直結させるので船から物資だけを送ることもできます。ポートは麻帆良以外にも置いてありますので学園側に知られずに外に出ることも可能です、多分」

「多分ってなんだ？」

「いえ、今まで何度か転移しましたが学園側からのアクションが無

いので大丈夫ではないかな？と云うことで。むしろエヴァさんにはそれに探りを入れてほしい訳ですが」

「わかった。他には？」

「魔法についてのレクチャーでしょうか。まあ、それはおいおいに。そう云えばネギ先生を弟子にされたとか？」

「まあ、その、なんだ、成り行きだな」

なぜか私を睨みつけます。

「ネギ先生と鉢合わせだけは避けたいので設置場所には気をつけてください」

「わかった。どれくらいの広さが必要だ？」

「まあ面積で云えば直径3mあれば足りるでしょう。設置が完了したら船に招待いたします」

本来は禁止されていますが一応協力者と云うことで。第二世代の佐久夜ならなにかしかけられても自分で判断して対応できますし問題はないでしょう。

「楽しみにしておこう」

さて、とりあえずエヴァさんの呪いも解けましたのでお祝いの宴会です。

茶々丸さん以外は見た目はあれですが一応全員成人ですのでお酒の

乾杯からはいります。

「それではエヴァ殿の回復と今後の成長を祈って…乾杯」

「乾杯」

「乾杯」

グラスに注がれた神樹の酒をそれぞれ飲み干していきます。

「でもいいのかい、こんなとこであけちゃって」

「それはこちらの台詞です。廻呼さんが怒りませんか？」

「いいんだよ。あのザルに飲ませるよりお祝いの酒として飲んだ方がいいに決まってるさ。それにサンプルなら少量残れば十分さ」

鷲羽さまが気遣ってくれていますが、この神樹の酒は皇家の樹の実からつくるお酒で、ものがものだけに樹雷外では各国の元首以外手にいれる手段がないのです。かつてオークションに流れた神樹の酒に可住惑星並の値段が付けられたとか云われています。それでも樹雷の人間ならば一生に一度は口にはできる筈です。多分…

佐久夜でもあるていど収穫でき神樹の酒にしていますが流通させることも出来ないのです仲間内のお祝いですが飲む機会もないのです。今回の依頼料として佐久夜の神樹の酒を少量分けてほしいと鷲羽さまから云われていましたので、もののついでです。瀬戸さまの了解を得て一瓶もってきました。

「茶々丸、お前も一口ぐらい飲め」

エヴァさんも無茶ぶりしますね。以前聞いた話ではセンサーで味を分析できるが体内にいれることはできないそうです。

酒呑みの悪い癖ですよ、と云おうとしたやさき「乾杯」とささやさき、茶々丸さんがグラスに口をつけました。

？ 茶々丸さんが固まっています。

「…おいしい？」

おいしい？その概念はないと云っていましたよね？茶々丸さん。鷺羽さまを振り返りますが首を振って違うと身振りで答えます。

「ふうん、興味深いねー。多分こっちが問題だと思っけどね」

神樹の酒の瓶をつまんでゆらゆら揺らします。

茶々丸さんは飲み干すことができないので口にお酒を含んだままですが逆に考えればいつまでも味わっていられるんですね。

しばらくしてハンカチを口にあて含んだお酒を移しています。

…神樹の酒の複雑な成分にセンサーが過剰に反応してそれをおいしいと誤認識した。と云う見解も出来ませんがまあ、小さな奇蹟と思っただ方がいいでしょう。

「ところで、今日は神楽坂明日菜を呼んでいないのだな？」

「そうですが、なにか？」

「けっこうあれを連れ回していたからな。鍛えているのかと思ったからさ。それと、一緒に奴の記憶封印も解除するのかと思ったのでな」

ああ、それですか。

「先日の記憶封印の話ですが常々幼女にわざわざ施す様なものではないと思っただけです。子供の記憶など無理に封印するよりも過剰な情報量で上書きしたほうが後腐れないでしょう。ですが、明日菜さんが見かけ通りの年齢ではなかった場合、話が違ってきますね」

「なるほど、まあ、我々からすればあながち無い話では無いな」

ええ、こちらにも幼生固定で数千年生きた方もおりますし。実際の年齢と生理年齢のずれなどいくらでも生じます。

「以前、明日菜さんに思い出せばいいとそそのかしたことがありましたが、他人が強制的に封じた記憶では話が違ってきます。思い出したとたん退つ引きならない状況になるやしません」

そうだったら私もなんとかしなくてはならないでしょうが出来れば今は避けたいですね。

「なるほどな。それで脇に侍らせていたのか。よかるう、そちらもちょっと探りを入れてみよう」

「ありがとうございます」

おそらく、明日菜さんの記憶の筐の封印は解けているのでしょう。あとは何時それが開くかです。いかなる記憶なのか推測できないので無理をするわけにも参りません。私が発端ですからできるかぎり何とかしたいとは思っています。

「で、結局前に云っていた捜し物…世界樹がお前達の捜し物ならどうするのだ？」

「もちろん、交渉しますよ。出来れば金銭で折り合いがつけられればいいのですが」

折角言葉が通じるのですから話し合いは可能でしょう。

「話し合いか。奴らがそれでOKするか？」

「交渉とは相手の首根っこをつかんで交渉の席につかせ、論拠を固めて相手に選ばせるのはYESか、はいかの違いだけでしょう？」

それを聞くとエヴァさんはなぜかぐったりした表情で仰有います。

「ああ、お前はそう云う奴だよ」

「まあ、冗談が半分ですが…交渉を行う前提で調査を行っています
が場合によってどの様な交渉になるか判りません。例えばあれが宗教的シンボルとして信仰対象になっているならば交渉でなんとかなる可能性は低いでしょう。死をまつたくおそれない、あるいは人命を軽視する傾向があるならば砲艦外交も威力が薄いですし、独裁な組織よりも個人の性格の調査にシフトせざるを得ません」

「なかなか面倒なのだ。力で圧倒するのかと思っていたが」

「アウトローではありませんので、むやみにそんなことはいたしません。国民にしたら私の首ごときでおさまりもしません」

今日のことやっとならスタートが切れた様なものですが動き出したら加速は楽でしょう。

関東魔術協会だけの調査ならばエージェントの追加も可能です。むしろいざと云うときまでおとりとしてあちらの目を引きつけておくのもいいかもしれません。

今夜はジュースが美味しいです

神樹の酒が無くなったあとはエヴァンジェリンさん秘蔵のお酒で酒盛りでした。基本私は酔わないので酔っぱらいのあのテンションにはついて行けず、茶々丸さんと肴を作ったりしていました。

ただ、エヴァさんと鷺羽さまの会話で性転換薬の魔法からのアプローチなる講義が始まる頃に強引に話に参加させられました。

「魔法薬なるものなんて私もしらないんだけどね」

鷺羽さまの言葉にエヴァさんが茶々丸さんに命令して赤と青のキャンディーの入った瓶をもってこさせると赤いキャンディーをおもむろに口に入れるとエヴァさんが大人の女性に姿を変えます。

驚く以前になにか大事ななにかが壊れた気がするのはいづれのことでしょうか？本当にここは私の故郷の地球でしょうか？

ふと、鷺羽さまに目を移すといつの間にかアダルトモードに変化しています。我々はあるていど年齢を調整できますけどポンポン変化できるわけでも無いはずなのに…

一応私も一つもらいましたが変化はしませんでした。しかし茶々丸

さんでさえ妖艶な美女になったのに何故私だけ…

落ち込んだ私を茶々丸さんが髪を撫でてくれます。

「吹雪さんは今のままで十分です」

そう云ってくれるのは貴女だけです。

ただ、そう仰有ってくれる茶々丸さんですが、アダルトエヴァさんを見る目つきが冷めている気がするのは気のせい…ですよ。

29話 訪問者達3

2003年5月4日 日曜日

「千雨」

最近、私のパソコンに変な客がやってくる。

それはいつの間にか私のパソコンのデスクトップ上にいた。2頭身の髪の長い女の子でぶっちゃけて言えばルームメイトの正木吹雪をデフォルメした感じだ。初めて見たときはウィルスかと思い、駆除ソフトを走らせてみたが効果はなかった。回線を物理的に遮断して、さてどうしようかと考えていたときチャットルームが強制的に開き「おはなしして」と彼女が云ってきた。

彼女は『さくや』と名乗ったがどうやってこのパソコンと通信しているかとか、なぜ私に接触したとかは教えてくれなかった。しばらく会話して彼女が帰ったあと、やっぱり気になったのでハードディスクを初期化しOSの再インストールを行った。

次の日、まだ物理的に回線はつなげていないのにさくやはまたデスクトップ上に現れた。正直オカルトかと思ったが画面上のさくやが泣きそうな顔で「ちうはさくやがきらい？」と吹き出しつきで表示されたら罪悪感でいっぱいになってしまった。

吹雪本人にこのことを云おうと思ったが、「実は私のパソコンにお前そっくりな奴がいるんだよ」など云ったらどんな痛い奴なんだよ！と思われるのかと考えると云い出せなくなってしまった。うん、まあ、オタクなのはすでにばれてはいるんだが。

パソコンは初期化したので個人データもほぼいれていないので、試しでしばらくさくやにつき合うことにした。

さくやは変な奴だった。

常識に欠けるが知識は豊富だった。感性もちよつと人とずれているがそれがこつちには新鮮だったりもする。

なんと云つてもルームメイトの姿が私の警戒心を解いたのか、私もさくやを全く警戒しなくなり、いつしか普段の様にネットに潜り始めた。

しばらくして気がついたがさくやがパソコンに寄生？してからパソコンの処理速度が向上したりソフトの不具合がなくなった。いったん初期化したせいかとおもったがあきらかにパフォーマンスは向上している。さくやがデスクトップ上に存在する時点で処理が遅くなるはずなのだがそれは全くなく、逆にさくやがいなときの方が遅いのだ。ベンチマークを走らせてみるとあり得ない数値を叩きだしてくれた。

しばらくして気づいたことはさくやは吹雪の存在を知っている。吹雪が近くにいるときはアイコン状態になってしまう。吹雪が自分のノートパソコンを開くときにはさくやは留守になる。吹雪はさくやを知っているのだろうか？訊きたい気もするが今のさくやとの関係が壊れてしまう様な気がして訊けていない。

- ちう、お手紙 -

お、ちょうどメールが届いた様だ。さくやがあまり抑揚の無い声で知らせてくれる。

今日のさくやはメイドさんだ。アバターの着せ替えは写真やピクチ

ヤーをさくやに見せる（ドラッグ&ドロップ）だけでさくや自身が勝手に着替えてくれる。吹雪はそう云うのを嫌ってるからなおうれしい。いまブログでは妹分として活躍中だ。

さくやはいろいろと役に立ってくれる。テレビ録画のCMカットや動画変換なども手伝ってくれている。OSやソフトを勝手に魔改造しているようだが実害はいまのところないし、荒しのアドレスなど簡単に突き止めてくれる。欠点と云えばかなりの甘えん坊なのか問いかけを無視したりするといじけて悪戯で勝手に動画とかを再生したりすることだろう。チャットでキーボード入力が煩わしくなったのでボイスチャットに切り替えてみたがこれもさくやの魔改造のおかげで驚くほどの変換率だ。近頃、吹雪は神楽坂や桜咲とよくつるむ様になり、留守がちでちょっと寂しい気がするが同時に気兼ねなくさくやと遊ぶことが出来る。

昨日から吹雪が関西からきた親戚と近くのホテルに泊まり込んでいるので今日はダンジョンに潜る予定だ。無論ネットゲームだが、もちろんこれも魔改造済みだ。パラメータをいじっているのではなくキャラクターや風景がハンパなくリアルになっているのだ。デモ画面よりも緻密な画のキャラクターに書き換えられている。さくやもゲームのAvatarになってゲームに参加しているが、そのなかでは吹雪を10歳前後にしたぐらいの姿になっている。

・がん・ほー、がん・ほー、がん・ほー・

早速さくやの声が聞こえてきた。ちょっと待ってる、吹雪は食事だけは作りにおきしていくので、ちゃんと食べないとこわいんだ。

30話 訪問者達4

2003年5月5日 月曜日 午前9時

昨日はそのままエヴァさん宅に泊まり…いえ呑み明かしました。日の出のころに一旦仮眠をとっていま起床したところです。お二方ともかなり呑んでいましたが大丈夫そうです。

「…まったくなくともない。完全復活だ」

エヴァさんが叫んでいます。酒盛り自体が性能試験を兼ねていたのでしょうか？

とりあえず部屋の換気をして酒臭さを追い出します。

アセトアルデヒドの臭いは、はつきり云って耐えられません。昔、最初にお酒を頂いた翌日、あの臭いが自分の口からでてきたとき、その臭さで気分がさらに悪くなってしまいました。

以降お酒を頂いても速攻でアルコールを分解してしまう様になりました。まあ私が酔っぱらっている姿は倫理基準からはみ出しそうですしね。

「さて、そろそろいきましようか」

今回、鷺羽さまには個人的にお願いもしております。休日にははやや早い時間ですが私たち4人は麻帆良学園中等部3-Aに移動しました。

「ここかい」

「ええ、そうです」

休日のため誰もいない教室に入りました。お目当ては最前列の窓際の席です。

「はい、これ付けて」

鷺羽さまから安っぽいボール紙でできたメガネを渡されました。赤と青のセロファンがグラス代わりに張られています。これは3D…いえ、立体メガネと呼んでいたあれです。云われた通りにメガネをかけてみると窓際に髪の毛の長いセーラ服の少女が見えました。

「さよさん？相坂さよさん？」

一瞬びくつとした彼女は私の問いかけに答える様こちらに近づいてきて何やら話しかけてきますが声のほうはさっぱり聞こえてきません。しかし…

「ふーん、ずっとここに居るんだ。……そりゃつらいねー」

鷺羽さまは普通にさよさんとお話されています。立体メガネをしているのは私と茶々丸さんだけです。

幽霊と会話をされる鷺羽さま…常々思っているのですがこの方、本当はいつたい何なのでしょう？

「これだけ綺麗にアストラルだけ分離した状態ならば逆に新しい身体になじみやすいかも」

さよさんの偽体を用意して頂くのが鷺羽さまへのお願いの内容です。

「ちなみに訊くが、相坂さよを甦らして何の得が貴様にあるのだ？」
エヴァさんが仰有るのも当然ですね。銀河連盟の規約にも反している部分もあります。まあ、当然抜け道はつくってはいますが。」

「私はただ3 - A全員そろって卒業したいだけです」

これには嘘偽りはありません。おそらく今私の本当の素性を知らない方々とは、いずれ二度と会うことが出来なくなるでしょう。

女学校時代の卒業アルバムは私の唯一最高の宝物です。私は卒業する年の夏まで自分が普通の地球人でないなど疑ったことなどありませんでした。私は父親のせいで柁木の村では負い目を持って生きていました。しかし、それを不憫に思った勝仁さまが神戸の寄宿学校に通わせてくださったのです。その3年間は私の黄金時代でした。しかし、卒業の年の夏、勝仁さまから私の素性を知らされ普通の方々と同じ時を生きられないことを知りすべてを捨てて宇宙へでました。

今から思えばやり方は幾らでも有ったはずですが…若かったのですよね。

卒業アルバムは以来、私の心の支えでした。

私は3 - Aの卒業アルバムも同じように宝物にしたいのです。それにはエヴァさんやさよさんが必要なのです。

本来の役目もそこそこに無くしたものをもう一度取り戻せる機会を得てはしゃいでいるのでしょうか。まあ、我ながら浅はかな行為です。

ですが鷺羽さまとエヴァさんは詳しく訊こうともせずただ、そうか

と仰有いそれきりです。

「さてと」

鷺羽さまはしばらくさよさんと話をしたあと、おもむろにハンディクリーナーを取り出しさよさんを吸い取ってしまわれました。

「まるで魔法だな」

エヴァさんもあきれ顔で仰有います。私もそうですねと同意したいところですがそれは拙いですね。

校舎外へ移動すると鷺羽さまは、さよさんの偽体造りのために帰られると仰有いました。

「いやー、一晚エヴァンジェリン殿と語り明かしているいろいろインスピレーションをもらったからねー」

…何か激しく嫌な予感がします。しばらく榎木の村には近づかないことが良いかも知れません。

「ん？」

エヴァさんが遠くを見つめて呟きました。同じ方を見るとネギ先生とのどかささん、そして夕映さんがこちらに向かってきます。ただそれだけならば別に問題ないのですが、3人が空を飛んでいるとなると話が違ってきます。

「こんな朝っぱらから3人揃って何を？」

「もう九時半は、過ぎていますが…それより堂々と空をとんでいることが気にかかるのですが」

「一応、認識阻害の呪文がかけられておる」

…そうなのですか。私には効いていませんが。まあ、それは置いておいて。

「何となく物々しい感じですね」

ネギ先生は始め皆さん荷物を詰め込んだリュックを背負っておられます。荷物を運ぶために杖に乗っている感じです。

「のどかさんと夕映さんは図書館探検部ですね」

方角も図書館島です。

「そう云えば、坊やが詠春からナギの手がかりをもらったとか云っておったな」

私の知る限り麻帆良学園で最も怪しい場所は図書館島です。以前、木乃香さんたちを捜索した際にちらりと見ただけで、それ以来、足を踏み入れていません。重要ポイントですので不用意に侵入して無用な警戒をされなくなかったからです。…まあ、自分でも行動に矛盾はあるとは思っています。主にエヴァさんの一件ですが。まあ、こちらを警戒して探してもらっても逆にカウンターをしかけることも可能になるのでいいのですが…むしろ未だに何の反応もないのでいささか不気味です。

「どじする？」

「はい？」

「行きたいんだらう？客人は私が駅まで送っていきさ。茶々丸、お前もついていけ」

「Yes マスター」

「え？」

「これでも、あいつの師匠だからな。と云うより私に無断であれこれやるのが気に喰わん」

何となく、いまエヴァさんと鷺羽さまから目を離すのが怖い気もしますが好機であることも間違いないでしょう。

勘ですが、ネギ先生のお父さまの手がかりが世界樹の秘密にからんでいる気もします。

ネギ先生には悪いのですが、後をつけていけばネギ先生がおとりになって学園側の注意をひいてくれそうです。茶々丸さんに鷺羽さまを送ってもらうと云う手もありますが、その場合エヴァさんに付いてきてもらうことになり、何かしらネギ先生たちにあつた場合、私かエヴァさんが助けに入ることになります。そうなったらどちらが助けても問題になるでしょう。私の場合は何故そこにいるのか、エヴァさんの場合は封印されている力はどうなったのか、がです。やはり茶々丸さんについてきてもらうことが正解です。

「ここは、エヴァさんのお言葉に甘えさせて頂きます。鷺羽ちゃん、今回はまことにありがとうございました。そして、さよさんのこと

を宜しくお願いいたします」

「いいよ、まかしておいて」

じゃあ、とばかりに手をあげて挨拶されると鷺羽さまとエヴァさんは駅の方へと向かって行かれます。私と茶々丸さんはいったん手近な物陰へと移動し監視がないか確かめます。

「茶々丸さんのジェット燃料は15分ほどの量でしたね」

「はい、通常ならそのぐらいです」

「いざと云うときに燃料切れは困ります。とりあえず私につかまってください。」

「以前、神楽坂さんといっしょにとんでいましたか？」

確か、桜通りの吸血鬼のときでしたか、確かに茶々丸さんとエヴァさんの前から明日菜さんと一緒に飛んで逃げましたね。

「はい、力場を形成して飛びます。手をつなぐなりさえすれば茶々丸さんにも力場の効果が現れます。もちろん抱っこでもいいですよ」

「はい、お願いします」

もちろん冗談ですと続けようとした矢先に茶々丸さんの言葉に遮られました。

「お姫様抱っこを希望します」

「は、はい」

茶々丸さんの迫力に負けて承諾してしまいました。いや、まあ、別に構わないのですけれど。茶々丸さんの背後に回って茶々丸さんを抱きかかえます。

「重くはないですか？」

思い出したかの様に茶々丸さんが仰有いますが問題ありません。

「全然ですよ。空を飛べるくらい軽いです」

そう云ってから力場を展開し飛び上がります。ネギ先生たちはかなり先まで行つてしまいましたが、図書館島の上空で発見しました。島の上空をゆっくり旋回していましたがしばらくしてから着陸されました。地上であればら屋らしきものに入り込んで…できませぬ。そこが入り口でしょうか？

後を追うまえに辺りを調べてみますがセンサらしきものは感知できません。

さして広くはない図書館島ですがこのあたりは樹木が多く道路や対岸からも遮られている様で人気もありません。電子機器の類もやはり感じられません。一件朽ちた城壁の一部ですがそこがエレベータになっているようです。

エレベータは稼働中で地下へ降りていく最中です。これはネギ先生たちでしょう。しかし、エレベータに乗るのは拙いですよね。監視カメラが付いている可能性が大です。光学迷彩でも無人でエレベータが起動したら不審に思われるでしょう。

そう云えばネギ先生達は今回正式に麻帆良学園の許可をとっている

のでしょうか？期末試験の際、こつてりとお説教をされた様ですから今回は前回とは違うのでしょうか。それならばネギ先生はおとりにはなりそうにないですね。

エレベータに乗るのは剣呑ですが、エレベータが使えないわけではありません。エレベータのシャフトを通ればいいわけです。さて、転移でもしましょうか。

「夕映」

京都の修学旅行で魔法と云うものを初めて目にしました。その後、ネギ先生に灯りの呪文とかを実演してもらいましたが、実際に杖に乗せてもらい空を飛ぶと魔法とはすごいものだと思えるです。女子寮から図書館島までの短い距離でしたが杖にまたがり空から眺める麻帆良学園にはさすがの私でも感嘆の声をあげてしまったです。図書館島の大迷宮は魔法使い達がつくったらしいです。そう考えればあの迷宮も不思議ではありません。…いえ、以前はさほど不思議とは思っていなかったですが、それも魔法の仕業だとのこと。魔法の存在を知ってから世界が広がった気がするです。魔法は裏の世界らしいのです、しかし裏の世界を覗かなければ真の世界は見えてこない筈です。無論、私が表の世界の全てを知っているわけではありませんが、ありえないことも実はありえるかもしれないことだと知ったことは今後の考え方に重大に影響を及ぼすです。

京都の事件の後、のどかからネギ先生の従者になったと教えられたときに私は正直のどかに羨望を覚えました。のどかやハルナが石に

されたときや、長瀬さんたちが鬼と闘っている現場では恐怖を感じましたが、それでも魔法と云うものに携わりたいと思っていたからです。

のどかがネギ先生に魔法を教えてもらえるそうなので、序でに私にも教えてもらえる様にネギ先生に頼みました。一応、これで私も魔法使いの弟子です。ネギ先生の使い魔と名乗る白いオコジヨはしきり従者になるように勧めてきます。

のどかのアーティファクトと云うものをみせてもらい…よしよしよ、この話は思い出たくありません。とにかく、今はなんの力が無くても仮契約パクティオーとやらを行い強力なアーティファクトを手に入れればネギ先生の手助けができるそうです。

しかし、儀式にキスをする必要があると云われて断りました。一応、のどかの想い人であるネギ先生とキスするのは気が引けます。まして京都で見たネギ先生のお父さまたちのパーティの写真では写っているのは全て男性で内幾人かはネギ先生のお父さまの従者だそうです。カモさんはキス以外契約の方法は知らないと云っています。ちよつと信用できません。麻帆良内では京都の様なことは起きない。そうので無理に契約する必要はないと思っっているです。

ネギ先生が京都でもらったお父さまの手がかりの地図をコピーしていただき、のどかと二人で調べて驚くべき事実をつきとめました。…驚いたのはなんでネギ先生が気づかなかったことでした。地図上の門のらしきものに『オレノテガカリ』とか描かれています。そして犬の様な絵がありました。きつと彫像かもしくはそれっぽい岩か何かでしょう。きつと鍵穴かなにかがあるはず。門にたどりついた私はそう思って壁や天井を見回していましたが……ドラゴンと目が合いました。

目があった瞬間、生態系はどうなっているのかとか、腕がないから

ワイヴァーンと呼ばれるタイプだかしょうもない知識が頭の中を駆けめぐり……つまりは固まってしまったです。

ドラゴンに踏まれそうになったとき、誰かに抱えられてその場から逃げ出すことができませんでした。

「脱出します、ネギ先生」

私とのどかは突然現れた茶々丸さんに抱きかかえられていました。抱きかかえられたまま後ろを見るとドラゴンが飛び立とうとして……ゆっくり崩れ落ちていきます???

のどかはネギ先生に預けられ、私は茶々丸さんに抱きかかえられたままその場を後にしました。

エレベータで地上に戻ると予想外の人が私たちを待っていました。吹雪さんです。

「皆さん、ご無事でなによりでした」

なんで知っているですか？

「茶々丸さんがいっしょと云うことは何かトラブルに遭われたと云うことですから」

吹雪さんは自分たちが何故ここにいるか説明してくれました。私たちが飛んでいる姿を目撃したことや、一緒にいたエヴァンジェリンさんが監視として茶々丸さんに跡をつけさせたことなどです。

「え？僕たちが見えていたんですか？」

ネギ先生が驚いているです。確か認識阻害の魔法がかかっていると説明してくれたですが。

「認識阻害の魔法も万人に効くというわけでもなさそうですよ？その他にも定点カメラや偶然に携帯電話のカメラなどに写り込む可能性も考えた方がよさそうです、ネギ先生」

うっと顔を蒼くするネギ先生です。しかし、吹雪さんも魔法関係者なのですか？

「私は魔法の存在を識っていますが関係者ではありませんよ。今回ここにいるのは夕映さんとのどかさんに云いたいことがあったのですが…もう云う必要もありませんか」

「かまいません、云ってください」

たぶん、危険なことをするな、とか云うお説教でしょう。しかし、私たちには覚悟があります。

「そうですね。では質問を二つだけ…もし、夕映さんとのどかさんお二人だけで肉食獣等に遭遇しそれから逃げる途中、相手の方が怪我をされ歩くことができなくなりました。あなたは相手の方を見捨てて逃げますか？」

「そんなことできません」

「逃げるわけないです」

いったい何を云いたいのでしょうか？吹雪さんは。

「なるほど。では、逆の立場ならどうでしょう？」

え？

私が怪我をして動けなくなり命を落とすのは仕方ありません。それも覚悟の上です。しかし、私のミスでのどかまで危険な目に遭わせることまでは考えていなかったです。反面、残っていてほしい気持ちもあるです。いや、やはりここは……

私たちが返答につまっていると吹雪さんは云いました。

「これには答えて頂かなくとも結構です。もともと正解などない質問ですから。ただ、こちら側に関わっているといつか答えを求められる日が来るかもしれませぬ」

またも吹雪さんにやられてしまったです。

「吹雪さんならどうするです？」

悔しくてとっさに尋ねていました。

「私ですか…：そうですね、まず、相手が自分か、どちらが優先的に生き延びるべきか考え、どうしても私が生き延びなければならぬ場合には相手を見捨てます。逆に相手を護らなければならない場合、戦うなり、おとりになって猛獣の注意をひいてみるなりしてみます」

ネギ先生ものどかもびっくりした顔で吹雪さんを見てるです。

相手と自分の命を天秤にかけると云う言葉に驚いているようですが、いえ、でもそれは論理的には間違っていないです。もちろん、人間味に欠けている面もありますが。

なんとなく考えていた自分の役割に関して答えが出た様な気がするです。

従者でなくとも魔法のサポートが出来なくとも、ネギ先生とは違った物事の解釈を行い、助言できるならば私がネギ先生のパーティに入る価値があります。

ですが…そう云う意見がすぐにでる吹雪さんっていったい…

「この問いの唯一の不正解は…なにも選べないことでしょう。逆に努力次第では選択肢を増やすことも可能だったはず」

そうです。今の自分を基準にしましたが、魔法や体術が使えるなら戦うことや、のどかを抱えるなりして逃げることも可能です。ですが…

「止めないですか？」

「義務教育の最終学年ですから進路をご自身で決める時期でもあります。まあ、かと云ってお勧めする気はないのですが」

私の中でいろいろ疑問がわき上がってきます。そのなかでも一番大きいものを質問するです。

「吹雪さんはなぜそう、淡々としていられるのですか？魔法を知って興奮したりはしないですか？」

私がそう云うと吹雪さんにしては珍しく一瞬はつとした表情になり、そのあと遠くを眺める様な面差しでしばらく考えた後、うつむき加減で話し始めました。

「そうですね。私が感じたものは失望です」

「ご自分が魔法使いではないことにですか？」

「いえ、…それもあるかもしれませんが、魔法があっても結局世界は紛争と貧困にまみれています。魔法でも魔法のごとくそれらを解決できないと思ひ知らされたからです。それとも、一部の人間がそれを独占しているからでしょうか？」

三度、^{みたひ}言葉を失ったです。この人はどの位置から世界を見ているのでしょうか？

打ちのめされた自分の他にこの人に私を認めさせたいと強く思う自分もいます。いいでしょう。私は魔法に希望を見いだすです。あなたとは違った世界を見つけ出すです。

茶々丸さんに抱かれて去っていく吹雪さんを眺めて心に誓ったです。

「茶々丸」

ネギ先生と別かれてからずっと吹雪さんは押し黙ったままです。珍しい…いえ、初めてみます。…メランコリックな吹雪さんも趣がある…いえいえ、もしかしてネギ先生と何かあったのでしょうか？主に綾瀬さんと話されていたはずですが、もし、ネギ先生が問題ならば…次こそは！

「茶々丸さん…茶々丸さんはエスプラント語と云うのはご存じでしょうか？」

検索…… エスペラント語 人造言語 エスペラント博士ことラザロ・ルドヴィコ・ザメンホフが提唱

「知っていると言うよりデータベースにありました。それがなにか？」

「いえ、私が本当に女学生だったところ読んだサイエンスフィクションでは、21世紀には全ての国は国連の管理下に置かれ紛争も貧困もなく、皆共通言語で意思の疎通を行い、新たな大地を宇宙に求め火星やスペースコロニーに移住を開始していたのです」

幾つか吹雪さんが学生だったころのSF小説を検索し、あらすじを確認してみます。

なるほど、この頃には未来「ユートピア」とした題材のものが数多く見受けられます。

「いつか人類は戦争を放棄できると無邪気に信じていました。しかしながら結局、人類は未だに争いをなくすことができません。いえ、『3人よれば派閥ができる』とはいまだ事実です。それとも人間の根源的な性質に攻撃性が含まれておりそれを失ったら滅びを迎えると云う証左なのでしょうか？」

ああ、吹雪さんの云う世界は地球上の世界だけでなく、宇宙のことも含まれているんですね。

昨夜、マスターが今まで聞いていた情報を改めて私も吹雪さんから教えてもらいました。吹雪さんは樹雷と云う星間国家のエンジニアトらしいのですが、つまりは宇宙では今もってそう云うことが行われているんですね。

とりあえず私ができることはただ一つ、この憂いを帯びた吹雪さんの映像を未来永劫に残すことです。

31話 訪問者達5

2003年5月10日 土曜日

「吹雪」

今日は約束通り皆様を佐久夜へ案内する日です。

今回招待したのは、明日菜さん、刹那さん、木乃香さん、エヴァさんそして茶々丸さんの5名です。

エヴァさんの家の裏手から地下へと入ります。元々脱出用のルートの一つだったそうでおかげで玄関を通ることなくエヴァさん宅へ入ることが可能になりました。これなら不用意に他人と鉢合わせすることもないでしょう。

先日、エヴァさんが通販で買った家具に偽装して搬入した転送ポートはすでに地下室に設置してあります。設置したと云っても床と天井にボードを張り付けただけなのですが。

これは、正確には転送ではなく、ここと佐久夜のポート内の空間を入れ替えるものです。この装置自体には転送（入替）機能はなく正確な座標を佐久夜に送ることしかできません。普通の転送ポートに比べればより大きなエネルギーが必要ですが、佐久夜からみれば些細な差ですし、なにより簡便な機能なため万一どこぞに接收されても問題は生じないでしょう。

6人そろってポートに入ると転送が開始され瞬き一つの間軌道上の佐久夜へ移動しました。

「ようこそ、佐久夜へ。乗艦を許可します」

佐久夜側の転送ポートには香織理さんが待機していました。香織理さんはこの艦の副長です。艦長と副長がそろって応対するのはいろいろと問題があるのですが、こちらの人員をなるだけ知られたくないのであえてホステスをしてもらっています。

香織理さんと皆さんの自己紹介が終わるとそのまま指定しておいた部屋へと案内します。

部屋に入るなりエヴァさんを含めた全員が歓声をあげました。この部屋は半球体の展望室になっており青い地球が3mほどの大きさの真円で見えるのです。

「改めまして。ようこそ佐久夜へ。ようこそ宇宙へ」

その言葉と同時に展望室の重力制御が解除され、無重力状態になりました。

「え？」

「なんやー」

主に明日菜さん、木乃香さんがびっくりしつつも喜んでもらえてるようです。のこりの三方は空を飛ぶことが出来るので興奮するほどでもない様で、エヴァさん、茶々丸さんは地球の方に興味を抱いているみたいで窓越しの地球をじっと眺めています。

お約束の空中に漂うジュースを飲んだりして10分ほど遊んだ後、重力制御を復帰させます。

「もつと遊びたかった」

運動神経の良さか猫の様にぐるぐると空中を飛び回っていた明日菜

さんが仰有います。

「無重力空間では身体が慣れるまでは体液が頭の上って顔がむくんだり、頭痛や味覚障害が一時的に発生します。そこまで体験されたいと云うならば…」

「いやいや、それはけっこう」

おのおの自分の顔をさわって「むくんてるー」と云っています。がじきに直るでしょう。

さて、ここからが今日の本題そのきです。

半月状のテーブルに皆さん座ってもらうとテーブル中央に立体映像が華々しい音楽とともに映し出されます。

『こんにちは、地球の皆さん。私たちは星間国家、樹雷です。樹雷はこの銀河系で最大規模の国家の一つです』

銀河系のモデルに樹雷の領土が青く色づけされていきます。

『そしてここが地球です』

銀河の外れに地球がぼつんと光ります。改めてここが境界区だと思えます。樹雷から地球に戻ると宇宙でこんなに暗かったかしら？と愕然とします。銀河系中心部とは恒星の密度が違うのです。女学校時代、神戸から岡山に戻ると街灯の少なさに田舎だと思い知らされましたが宇宙にでてからも同じ思いをするとは……

『さて、まずは私たちの姿に驚かれていますでしょうか？宇宙人と云えば…』

おなじみのタコ型星人、グレイタイプ、あと地球上で3分しかもたないタイプのイメージが映し出されます。

『私たちの祖先が恒星間移動に成功し銀河の方々に進出しました。そこで彼らが驚いたことは自分たちとあまりに似すぎた人類が至る所で発見されたことです。そしてもう一つの発見…遺跡です。数億年前に栄えた大先史文明の遺跡が発見されたのです。遺跡の調査により今現在の銀河の生命体の多くは大先史文明が意図的に生命の種をばらまいた結果と結論づけました。しかし、大先史文明がどの様なものだったか、何故銀河に生命の種をばらまいたのかはいまだ不明のままです。』

さて、皆さんの住む地球ですが、実は樹雷の領土であります。今から十七万年ほど前、当時海賊を生業としていた樹雷はある星を樹雷と名付け、正式に国家樹雷を建国しました。その後樹雷は領土を広げるべく調査船や開拓移民船を送り出しましたがなかには冒険をもとめて樹雷の勢力圏から遠く離れたところまで進出した者もおりました。地球もそう云った冒険の果てに見つけられた惑星の一つです。』

うそですけどね…

書類手続きの不備で最近まで宙に浮いていたとも申せませんし。

『その飛び地の一つである地球に独自の進化を遂げ文明を築き上げた皆様を樹雷は敬意を持って接していきたいと思っております。』

「おい」

エヴァさんが訝しげに声をかけてきました。

「なんだ、これは」

「なんだと仰有いまして…プレゼンですが？」

「プレゼン？」

「はい、プレゼンテーションですよ。関東魔術協会との交渉に使用するもののひな形です。その場の思いつきで説明するならどんなボロが出るか判りませんから事前にまとめてあるのです」

これは香織理さんに作って頂いたもので、内容のチェックも兼ねています。最終的には瀬戸さま、水穂さまのチェックを受けるのですが。

「不明点や感想があぬならばどんどん仰有って頂きたいのですが」

「あれを本気で交渉でもぎとるつもりか？」

「ええ、そうですよ。せっかく言葉が通じるのですから争いでなく話し合いで解決したいと思っております。実際私たちも武力介入は避けたいのですよ。出来るなら金銭で譲って頂ければ宜しいのですが」

「一応、こちら側にもいろいろと言いつ分はあるのです。元々、地球が樹雷の領地である故世界樹の所有権が樹雷にあるとか、しかしそれを云ってしまうと水掛け論になってしまうでしょう。武力での解決は遺憾がのこります。また、連盟にしたらそれはそれで問題になります。」

「いくらで買い取るつもりだ？」

両の掌を開いてみます。

「10億円？」

明日菜さんが云いますが…

「いえ、単位が違います」

「え？桁じゃなくて？……まさか10兆円」

明日菜さんが一十百千万と指折り数えてから云いました。

「はい。無論いきなり10兆円で売れとは云いませんが」

一応、10兆円規模の予算は下りています。但し値切れるだけ値切れとも財務から（涙顔で）云われていますが。

「問題は直接地球の紙幣や小切手が用意できないことですか。こちらに出先機関がなかったため銀行等に預金がありません。香織理さんたちに頼んで物資を現金に換えてもらっています。10兆円ではさすがにすぐには無理です。多分、金塊等での取引になります」

ネットワークに侵入すればいくらでもデータを改竄できますがそれはできませんね。我々は犯罪集団ではありません。できれば、こちら側では枯れた技術でも地球では最先端の先にある技術なので、それらを見返りにも思いましたが麻帆良だけでなく地球全体の文明レベルを底上げしてしまう可能性もあります。

まあ、宇宙と地球ではレアアースやレアメタルの価値が違っている

のでうまくやれば想定以下の支出で交渉成立するかもしれません。しかし、後でガラス玉で島を買ったなどと云われるのも樹雷としては宜しくはないのでほどほどにしておかないと。長い付き合いになる場合勝ちすぎは負けると同等に良くはないのです。

「10兆円とは…それほどの価値があるのか？」

「あれが私どもの予想しているものならば、下手を打った場合に被る損失は計り知れません。最悪、全銀河規模の大戦が起きるかもしれません。そして世界樹の認識障害能力などは麻帆良学園にとつてはかかすことのできないものでしょう。それを無理を云って買い取るならば売り手側の値段で買っしかないのです。まあ、麻帆良学園が急にお金が入り用になったのならさうでもないかもしれませんが」

「マッチポンプかよ！」

「なあ、マッチポンプてなんなん？」

エヴァさんの言葉に木乃香さんが不思議そうに疑問を投げかけました。

「それはですね、木乃香さん。偽善的な自作自演と申しましょうか。マッチは放火、ポンプは消防車を意味します。隠れて自分で起こした火事を自分で消すことであたかも英雄面をすると云った行為です。いまの話で言えば、先になんらかの方法で麻帆良学園に財政面やその他で損失を与え学校経営を困難にしてから、そしらぬ顔で援助と引き替えに交渉をもちかける感じでしょうか」

「あんまり、おじいちゃんいじめんといてな」

「しれつとした顔で説明するな。話し合いで解決しましょうと云った次の台詞はそれか？」

「誠意ある方には誠意で対応いたしますよ？」

「はあ、『目には目を』もこう云うと良い言葉に聞こえる」

あ、明日菜さん？

「まあ、いい。続ける」

エヴァさんから巻きがはりました。

「はい、では香織理さん、お願いします」

『樹雷を銀河系最大規模の国家にのし上げた原動力、それが皇家の樹です。皇家の樹はそれ自体が卓越したエネルギージェネレータと演算ユニットの能力を兼ね備え、その皇家の樹を核とした皇家の船と呼ばれる船は一隻で一個艦隊以上の打撃力を持っています。他国で同様の打撃力を持つ戦艦はほぼ惑星並のサイズに至ります』

世二我の惑星規模艦と佐久夜とが比較されていますが…

「香織理さん、皇家の樹を説明されるのですか？」

「そうね、迷ったけどこれを説明しないとなぜあの樹が必要なのか判らないのよ」

確かにそうですが…

「逆に断固死守とか、なりませんか？」

使い方がわからなくとも強力な兵器をもっていると云うことは大きなアドバンテージになるでしょう。逆にそれを売り飛ばすことにも抵抗を感じるはずですよ。

「そうね、もうちょっとぼかしてみましようか？高性能なコンピュータと云う線で」

「それでもふっかけられそうですか…？」

「そこはネゴのしどころでしょう？」

「おい」

そこにまたエヴァさんが話しかけてきました。

「惑星規模艦とかでてきたが、この船はどの程度強力なのだ？」

「佐久夜ですか？全力でならこの惑星系を消し去ることは可能です。高速機動しない目標に時間や防御など考えない場合ですが。皆さんは私の言葉に少し呆然とされていますが…」

「理論上出来ると云うことで実際にやった船があるか私は存じません。また惑星系を消し去る程度のごことは手間暇かかれば大抵の国家、または企業にでもできません。やる価値があるかどうかは別ですが」

「まあ、貴様達が別次元だとは判っていたがな」

「恐れ入ります」

「ところで！」

突然明日菜さんが話しに割り込んできました。

「皇家の船って皇帝の家の船って意味よね。吹雪ちゃんて、もしかしてお姫様？」

そ、そこに気づきましたか。

「そうね、吹雪は現樹雷皇、つまりは皇帝陛下の血を引いているのも確かね。正木吹雪樹雷、これが吹雪の本当の名前」

香織理さん、余計なことを…

「一応、皇族の末席を汚しておりますが正木は榎木家の眷属、分家です」

「でも佐久夜と契約したときには榎木を名乗る様に云われたのよね？」

「だーからー、いまさらその話を蒸し返さないでください。」

「現樹雷皇の第一皇子が600年ほど前、凶悪犯を追ってこの地球までやってきました。犯人を捕まえた皇子ですが実は妹姫との結婚が決まっており、それを厭うてそのまま帰らずこの地で妻を娶り子を成しました。その子孫が私です。皇子は今だ表向き家出中なので私も榎木家とはおーい親戚ぐらいでごまかしています」

私が宇宙にでて偶然佐久夜と契約したとき榎木家に養子に入る様にも云われましたが、皇族など制約ばかりで得るものがないので丁重にお断りしました」

「あれは駄々をこねたと云うべきよね」

うう、自分の恥ずかしい過去を知る人間は部下には向きません…ただ、うかつに榎木を名乗り、榎木を快く思っていないものに私の素性を探られるといういろいろほりりがでてくるのでそれを避ける意味もあつたのですが。

「その…妹姫との結婚って？」

そつちに食いつきましたか…

「文字通り近親婚ですが遺伝子治療は進んでいるので問題になるのは倫理面ですね。まあ、あえてタブーを犯すことで皇家の特異性を押し出すこともありませんが実際は『お前は将来何になりたい』『お兄様のお嫁さん！』『よし婚約だ』と云うノリだったそうで」

以前瀬戸さまよりお聞きした話ですが。

あまりのばかばかしさに皆様も呆然とされています。しかし勝仁さまこと遥照様の初恋の相手は義母の美砂樹さま、自分の樹に母親の名前を付け、最初の妻は実の叔母…単に好みにあわなかったのでしょうか。

「さて、一応プレゼン映像も終わりましたが…そうですね。なし崩しに明日菜さんや木乃香さんを巻き込んでしまっています。今の映像から判る様にこの船は軍艦、そして私は軍人です。海賊討伐などで直接、間接多くの海賊を討ち取ってきました。てっとり早

く云えば人殺しです。今後どう転ぶか判りませんがもしかすると関東魔術協会と闘いになることも考えられます。場合によっては誰かを殺すこともあるでしょう。残念ですがそんなことはないとは申せません。以後、そう云うものとしてお付き合いください。もちろん、つき合いきれないと仰有いましてもけっこうです」

先日夕映さんと話していて気がつきました。私は、はしやぎすぎていました。明日菜さんたちに私が近づくことで逆に危険を呼び込んでしまう可能性を故意に考えないようにしていた様です。

銀河宇宙は確か科学は進んでいますが…ただそれだけです。決して理想郷などではありません。思い出を捨てて手にいれた今の生活ですが等価交換であったかどうか…答えはできません。まあ、選択の余地などなかったのも確かでしたが…

32話 訪問者達6(前書き)

はあ、やっと完成しました

32話 訪問者達6

「明日菜」

なんでそんなことを云うの？

食事を用意すると云って吹雪ちゃんは部屋からでて行ってしまった。

「あれなりの誠意だろう。闘いぶりからそうとう修羅場をくぐりぬけてきたのは判るからな。…だが、それを云うならば私の方が問題が多い。奴は軍人だから謂わば国家の一部として暴力を振るう者であり国によってその行為の正当性が保証されている。しかし、私はすべて私闘であつた」

エヴァちゃんは吸血鬼になつたいきさつ、そしてエヴァちゃんを吸血鬼に変えた人間を殺したこと、そして追つ手との闘いのことを語ってくれた。

「でも…殺したくて殺した訳じゃないんでしょ…」

「そうだな、しかし私を吸血鬼にした男だけは自分の意志で殺した。その他にも沢山殺したよ。無論、私からすれば正当防衛だが奴らからしてみたら自分たちが正義だからな、無念だつたらうよ。そして奴らの家族からすれば佳き夫であり佳き父であつたはずだ。それを奪つた私はまぎれもない極悪人だよ。

桜咲刹那、貴様も木乃香を守るためならば人を斬る覚悟はあるのだらう？」

エヴァちゃんの問いに刹那さんは黙って頷いた。それを見たこのかが悲鳴に似た声をあげたけど…

「近衛木乃香、これがこちら側の世界の定めだ。お前の父は愚か者呼ばわりされようとも、この定めからお前を遠ざけようとしていた」
エヴァちゃんの言葉にこのかが泣きそうな顔になりながらも、うんと頷いた。

「神楽坂明日菜、貴様もバカレンジャーを卒業したのならよく考えることだな」

「うん…」

「しかし、吹雪って全然可愛げがないわね」

今まで黙って聞いていた香織理さんが話し出した。

「せっかく暴走し始めて面白くなりそうだったのに勝手に一人でまとめてしまったわね。面白くないわ」

いや、面白くないって…

「でも、こんな所まで連れてきておきながら考え直せと云われてもねー？あの娘も、ときどきばかよね。そう思わない？」

くすくす笑いながら香織理さんが云う。

「香織理さんは…宇宙のひと…なんだよね？」

「そうね、ワウ人ほど外見に差がないからわからないわね。一応、私は樹雷の生まれよ」

「香織理さんは吹雪ちゃんのこと良く知ってますよね？その、吹雪ちゃんのこと教えてほしいんですけど？」

自分で云っていて驚いた。私、吹雪ちゃんのこと何も知らないことに…

「そうね、私が知っていることは…」

香織理さんが話してくれた吹雪ちゃんの身の上話。

「吹雪はね、自分自身が実際はどこで産まれたのか知らないらしいわ。」

父親に連れられて赤ん坊の吹雪が村にきたのが約60年前。

母親は死んだとしか吹雪も他の人も聞いていないみたい。名前さえ父親以外知らないらしいわ。ただ、吹雪は自分が父親似だって嘆いていたことがあったわね。

しばらくして、吹雪が中学に上がったころ父親は村の住人にかかなりの借金をして村から姿を消したのね。実際は借金と云うよりも詐欺に近かったみたい。

村の住人は残された吹雪には同情していたけど、吹雪自身はかなりそれを負い目に思っていた様ね。

村の神主さんの勧めで神戸の女学校に進学したけれど、女学校の卒業の年に村のしきたりで宇宙人の子孫であることを知らされ卒業と同時に宇宙へ出たわ。

樹雷星を初めて訪れた時に皇家の樹のマスターに選ばれたらしいわ。実際にはかなり複雑なことがあったみたいね。皇家の樹のマスターになることは皇族になることだものね。

その後は皇家の船のマスターとして軍に席を置いていまに至る。て
とろね」

「そうか、あいつもままならない人生を歩んでいたんだな」

ぼそりとエヴァちゃんが呟いた。

「そうかしら？」

反論したのは…香織理さんだった。

「確かに私が云った内容では吹雪には選択肢は無いわよね。でもあの娘、結構我が侷なのよ。本当に嫌だったら卓袱台ごとひっくり返してしまっわ」

「え？でも、周りの人とかに迷惑にならない様に考えた結果じゃないの？」

「そう云う気遣いもできる娘なのは確かだわ。だけど、あの娘は結構人と違った思考回路を持っていて、思想もかなりとんがっているわね」

そんなに変わった考え方してたかな？確かに一を聞いて十を知る様な感じはあるけど。

「宗教が嫌い、多数決も嫌い、民主主義すら嫌っているところがあ
るわね」

ええ？

「民主主義も民衆のレベルが低ければ衆愚政治や民衆迎合政治にすぐになってしまつわ。あの娘初めて会ったころは理想主義者みたいな感じだったけどすぐに現実主義者に転向してたわね」

頭が良いと欠点が目につくのかな…

「くわしくは云えないけれど今銀河で有力な国の大半は形としては専制政治に近い政治体系をとっているわ。特定の家系もしくは個人が政治の中枢を握っているの。もっとも民衆を弾圧などはしていないけれどね。」

支配階級の人間は延命措置でとんでもなく長生きするから政治的には安定しているわね。逆に選挙で頂点が入れ替わるところは長期的に見た場合あまり安定しているとは云えないわね。

あの娘も民主主義が嫌いじゃなくてそのシステムを活かせない人類に失望している…てところかしら」

うーん、確かに今の政治が10万年たっても同じレベルだったら哀しいわね。

「いま、私たちの上司が気にかけていることはあの娘がいつ、人類に見切りをつけるかってことなの」

人類に…見切り？

「あの娘、昔から考古学に興味を持っていて幾つもの種が進化の途中で消えていったこともよく知っているわ。私たちは遺伝子を調整することで寿命や病気を克服したけれど、あの娘に云わせればそれは進化の道を自分で閉ざした様なものなの。それで理想郷を築ければ良いけれど結局、今だ人類同士のいざごさは絶えないわ。数十万年かけてもたどり着けない境地にいつか本当にたどり着けるのかし

ら？

あの娘自身の問題なら見切りをつけた時点でさっさと他の者に席を譲るでしょう。でも、それが人類全体の話なら……私たちの上司はそれを懸念しているのよ。もちろん、吹雪が人類全体に徒なすとは思っていないし、したところで成功する可能性などほとんどないわ。ただ私たちはもしそうなったときにいつでも対処出来る様にしているだけ」

「ふむ、話は分かるがそんな危険人物か？あいつが」

エヴァちゃんが香織理さんに話しかける

「危険人物ではないわ。でも以外と重要人物かも？意外とあの娘顔が広いのよ」

香織理さんが右手の人差し指を振ると一枚の写真が空中に現れた。大きな揺り椅子にドレスを着た二人の少女が並んで座っている。片方の少女はもう片方の少女に寄りかかって眠っていて、寄りかかられている方の少女は片手で眠っている少女の髪を撫で、もう片方の手を持った小さな本を眺めている……ってこれ吹雪ちゃん？

「珍しい。こんな服もきるんだ、吹雪ちゃん……」

今まで見た吹雪ちゃんの私服ってシンプルなブラウスやスカートで色も白や黒、茶色と落ち着いた感じのものがほとんどだったけど、写真の中ではフリルや造花をふんだんにあしらった豪華なピンクのワンピースドレスを着用している。吹雪ちゃんはここ五十年は容姿の変化はないって前に云ってたから大人になってからの写真だろうけど、子供らしい服装に対してやけに大人びた表情をしている様に

見える。

「これは吹雪が三十歳の頃の写真ね。このころ吹雪は要人警護の仕事を中心にしてたわ。まあ、本人は気に入らないらしいけど、あの娘なら子供たちに混じって中から警護できるからわりと重宝されたみたい」

うん、まあ、こんな感じの服装をされて、いつもみたいにふわふわした感じの笑顔をされたら成人とは思えないわね。

「つまりはその仕事は最近はしていない口ぶりだな」

「ご明察。結論から云うと評判が良すぎたのよ。我が俣な子供が素直になつたり、自閉症気味の子が心を開いたり、疎遠だったおじいちゃんやおばあちゃんとの仲を取り持ったりしてね。

そのまま家庭教師にとか将来の側近にとか引き抜きの話も多かったらしいわ。息子の婚約者とか、養女になってほしいと云うのもあったわね」

「婚約？」

「一応、皇家の樹のマスターであることは隠していたからそつちがらみではないけれど、逆に正式に申し込まれると無碍むげにできない方々だから余計にね……」

はあ、そうなんだ。つまりはセレブな人達からいろんなラブコールがあつたんだ。

「なかには吹雪を自分の姉妹と思いこんでしまった娘もいて、ちょっとした騒動になりかけたのでそちらの仕事は現在控えているわ」

はは、雅楽^{うたの}乃さんには聞かせられないな…

「そのお世話した子供たちも今では成人しているし、警護してきた大人の方々とも交流は続いているみたい。つまりは顔が利くってわけね。

話を戻すけど、あの娘が宇宙の現状を知って、皇家の樹のマスターになったとき、私の上司でありあの娘の後見人でもある人は、あの娘が皇家の樹のマスターの資格を返上して地球に戻ると考えたのよ。だってそうでしょ、宇宙に出ても何ら理想に一步も近づくことない。確かに皇家の樹のマスターであることはメリットはあるけれどそれ以上にデメリットがああ娘にあつたと思うわ。

でも、あの娘は地球に帰らず、皇家の樹のマスターとしての資格も返上もしなかった。むしろ積極的に職務をこなしていたわ。あの娘に尋ねてみても一応、筋の通った返答はされるけど……本当かどうか判らないわ。

つまりは、表面的な強大な力とは別に潜在的な力も持っているあの娘が何を考えているかがいまいちつかめないの。

あの娘が大事にしているもの。それは学生時代の思い出……と云うよりも友人達ね。会うことができなくても大切なことにもかわりはないわ。でも、あと20年もすればその人達とも縁が切れてしまうわ。ある意味、何からも束縛されなくなった吹雪が暴走を始める切っ掛けになるかもしれない。

だからお願い。あの娘のともだちのまままでいて。身の危険があるのは判るわ。けれど、『さよなら』でなく『またね』の間でいてほし

いの」

「でも、香織理さんだって吹雪ちゃんのもだちでしょ？」

「そうね、でも私はあの娘の監視役でもあるの」

監視役？

「樹雷の機密である皇家の船のマスターには何らかの監視がつくの。このことは吹雪も知っているし私が監視役だってことも承知しているわ。むしろ監視役だからこそ吹雪も安心してともだちづきあいができるのかも？すくなくとも敵方のスパイではないのだから」

そうか。吹雪ちゃんは迂闊に友人も作れないんだ…

「あの娘が皇家の樹のマスターであるかぎり近づいてくる人間に対して私達はチェックをしなければならない。それを知っているからあの娘もあまり交遊を広げることもしない。地球の友人達に連絡をしないのはそれが壊れてしまうことを恐れているからじゃないかしら。」

あなた達は皇家の樹のマスターの正木吹雪樹雷ではなく、正木吹雪をともだちに選んだ。この絆を切らないで頂戴」

ゆっくりと香織理さんが頭をさげた。

「うちは…」

このかがゆっくりと喋り始めた。

「うちは、関西呪術協会の一員になるから今更、危険がどうこうと関係ないな」

「私もです。それに吹雪さんにはいろいろお世話になってますので恩返しもしたいです」

「私も今更危険がどうこう問題じゃない。ま、それを見越して協力者に選んだのだろう」

「私はマスターの従者ですのでマスターについていきます。ですから吹雪さんとは未永くお付き合いをしていくと考えています」

4人とも自分の意見を云って私を見る。

「私だって吹雪ちゃんとさよならなんてしたくないわ」

確かに危険なんだろう。でも、やっぱりさよならなんてしたくない。

「つられて云っていないか？バカレツド」

「別につられてなんかいないわよ。それにその理論で云ったらこのかや刹那さんとも付き合えないじゃない。確かに吹雪ちゃんが宇宙に出ちゃったら会うことなんてできないけど、ともだちを止める理由にはならないわ」

「そう云ってくれるとうれしい」

再び香織理さんが頭をさげた。

昼食の後は香織理さんに先導されて転送ポートの部屋まで来た。転送ポートにはいつて転送されると、そこは……

「え？地球？」

辺り一面白い砂浜、澄んだブルーの海。南国風の樹が生い茂るリゾートビーチに私たちは立っていた。え？戻っちゃったの？もう？地球に？

「ここは佐久夜内にある惑星なの、名前は無いわ」

え、惑星？船の中なのに？

「ええ、ほんとにふざけているわよね、皇家の船って。一応、圧縮空間と呼ばれる技術はあるのだけれど、惑星ひとつまるまる閉じこめることができるのは皇家の船だけ。それも一握りのね」

皇家の船ってこんなこともできるんだ。うわー、10兆円出すよー。いや、安すぎるかもー、10兆円。

「まあ、開発が進んでいるのはこの辺りだけなのだけれどね」

「ところで吹雪ちゃんは？」

おそろおそろ訊いてみると、

「あれでも一応、艦長だからね、あの娘。艦長にしかできない仕事をしてるわ」

「艦長にしかできない仕事？」

なんかかつこいい響きかも。

「そう、はんこ押し」

え？

「吹雪」

すまじきものは宮仕え…

毎度、佐久夜に帰るたびに事務手続きの決裁をしなくてはなりません。軍艦だからと例外で無く…いえ、軍故にいろいろと手続きが面倒なのです。できるだけ副長である香織理さんに権限を委譲してやってもらっています。それでも艦長でなくては決裁できないものがあります。

香織理さんは大型艦の艦長を任されても不思議のないほど優秀な方です。書類はすでに完成して、艦長である私が認め印を押すだけです。しかし、それでもメクラ印を押すことはできません。現状の確認をする意味でも一枚、一枚しっかり読んで処理していきますが…

「争い云々はともかく事務処理だけでも人類は克服できないものではないでしょうか？」

「ワーカホーリックの吹雪でも事務処理は嫌いかい？」

「私は別にワーカホーリックではありません。仕事をすればするほど幸福になれると云う信仰がちょっとあるだけです」

射撃管制官であるケイリ・グランセリウス嬢は序列で言えば艦のナンバー3です。能力的には香織理さんに匹敵するケイリさんですがやや奇矯な行動のせいか香織理さんほどの評価を得ていません。もっとも上を目指すことに固着しない方ですが。

「そんなくだらない信仰なんて犬にでも食べさせておしまいなさい」
香織理さんがそう云いながら現れました。

そう云われましても生まれ育った時代がそんな感じだから仕方がないのです。

「だいたい、書類の決裁と演習を同時にやっているんだからまったくもって説得力がないよ」

ケイリさんの云う通り現在、佐久夜は射撃演習の真つ最中です。軍の規定によって決められた回数の訓練や演習をこなさなければなりません。もちろんシミュレーションでは何度も行っていますが実際の演習は伸び伸びになっていました。現在のクルーは四月に配属された者たちですので早急に演習を行う必要があったのは確かなのですが。

「艦長が乗艦していないと満足に動かせないのは皇家の船の少ない欠点のひとつだね」

逆に皇家の船はマスター一人だけでも操船は可能です。艦長の私が

艦を留守にすることが多いことの方が問題ですが、今回はしかたがないですね。

「次は太陽近辺にワープアウト、そのまま恒星表面彩層近辺まで降下しスピキュールを間をスラロームしながらプロミネンスを目標に追走……」

なんですか、この無茶な訓練計画は？

「そんなの聞いていませんよー」

操舵席から次席航海士の宮藤日向ちゃんくみとう ひなたが悲鳴のような抗議の声をあげていますが。

「当たり前じゃない。どこの海賊が予定航路を提出しながら逃げてくれると云うの?」

主席航海士は香織理さんが兼任していますが今回は次席の日向ちゃんの操艦です。

今回の麻帆良の世界樹の調査においては艦隊戦が発生することはな
いとして全てのクルーをベテランで固めると云うわけにはいかな
かった様です。無論、信用調査や能力調査はパスされていますが。簡
潔に云えば将来有望の新人が多いのです。

通信や索敵などは普段から仕事はありますが、ほぼ停泊状態だった
佐久夜では日向ちゃんは今回初めて本来の仕事らしい仕事をまかさ
れたみたいです。

「でも、どこの海賊が恒星表面まで逃げ込むんですかー、普通の船
なら融けちゃいますよー」

「私たちは現場屋よ。起きたことが想定外でもその場で答えを出すのがお仕事なの。理屈にあわないなんて云いたければさっさと後ろに下がちなさいな。ああ、あと時間制限があるから気をつけてね」

「うわー、そんなこと黙っててくださいよー。プレッシャーになるだけじゃないですかー」

確かに時間制限があるとは云っていますが正確な時間は云っていません。訊いても教えてくれませんよね、香織理さんは。

「はい、はい、みんなもあきれているから私語は慎みなさいな」

云ってる間にワイプアウトしました。とたん全天モニターが真っ白になり、自動で光量がおさえられます。水星軌道よりも内側にワイプアウトした佐久夜はそのまま太陽へ降下します。

「ワイプアウト、各々確認いそげ」

「座標確認、誤差なし」

「船体、自動検出異常なし。引き続き目視確認開始」

「敵影4、恒星表面を縦列で光速の10%で移動中」

「敵を追尾、恒星表面に降下せよ」

「1)、降下開始！」

「合戦用意」

プログラムで仮想標的をレーダーやモニターに表示させての追跡戦を今回の演習にしています。

私が書類の決裁をしている間にもどんどんと演習は進行していきま

す。佐久夜は荒れ狂う太陽の彩層をスピキュールを躲しながらすすんでいきますが…

「シミュレーションより加速も梶の利きも敏感すぎますよー」

「ごめんなさい、今日の佐久夜は機嫌が悪いみたいなの」

佐久夜は気分屋なのでその日その日で運動特性が変わるのです。特に今日はかなり過敏に反応しています。こう云うときは佐久夜のご機嫌がななめの場合が多いのですが、最近構ってあげていないからかと思いましたがよくよく考えてみればそんな兆候はまったくなく今日になって急に不機嫌になった様です、はて、原因はなんでしよう？

「ピーキーすぎて扱いづらいですー」

たしかに高速機動中のほうが思ったところには行ってくれるのだけれど長時間それを続けるのは操縦者にとってつらいものがあります。

「はいはい、泣き言なんて云わないの。投げ出したいなら操舵替わるわよ？でも、そうしたら二度と梶をとらせてもえないかも？皇家の船、それも樹雷でも有数の高速船よ。もったいないわよねー」

「えー、香織理お姉様のオニー、アクマー、ドS、ドSー」

「あら、そんなに誉められたらサービスしたくなっちゃうじゃない。さすがにフレアにぶつかれば光鷹翼でも危ないそうよ。乗員の命は貴女の操縦しだい。それと今回の演習計画は樹雷本星にも送ってあるから貴重な第二世代艦の喪失者として宮藤日向の名前は樹雷が続く限り残るわよ」

あつ…日向ちゃんが固まりました。

太陽表面から立ち上るスピキュールの間を光速の10%でスラロームは結構難易度が高いです。香織理さんの云う通り佐久夜でも太陽とのガチンコ勝負は分が悪いのですが…日向ちゃんの技量に期待しましょう。

口からは弱音を吐いていますが操舵自体はさほど乱れはありません。癖のありすぎる佐久夜を上手に操っていると云って良いでしょう。

「しかし、云いたい放題でしたね、香織理さん。過去までばらされるとおもっていませんでした」

「あら、盗み聞きなんてはしたない。ところで間違ったところはあったかしら。云ってくればあとで修正しておくわ」

盗み聞きもなにもプライベートルーム以外で佐久夜の中の情報は私まで上がってくるのは貴女も知っているでしょうに。

まあ、確かにあの時点で柁木の村に戻る選択もなかったわけではないのですが、魍呼と同時に魍皇鬼まで復活した場合に備えての選択でしたが…まるつきり無駄でしたね。思えば軍に奉職したのも子供頃から魍呼復活に備えて武術をしこまれたせいで抵抗が少なかったからかもしれません。もうひとつ、誰にも云えない真の理由もありますかね。

「それで？」

香織理さんはそれだけ云ってモニターを見つめます。

そうですね。どうでしょう。

演習自体は恒星表面と云う場所さえ無視すれば通常のものとして変わりません。いえ、実弾演習で使う機動爆雷は艦を包む保護フィールドを抜けた瞬間に爆発…いえ蒸発するでしょうから使用不可。となると光線系ですが実際恒星表面を航行できる船にも有効なのでしょう。出力をあげれば良いものなのでしょうか？まあ、佐久夜にはそれ以外にも攻撃手段はありますが実際太陽で闘うこともないでしょう。……………太陽？はて、なにか引っかけた気もしますが…何だったでしょう？

「明日菜」

海水浴から帰ってみると展望室から見える光景は一転して炎の海だった。香織理さんから太陽に着いたから見に来なさいと云われて来たけど…そこはオレンジ色の炎の世界だった。炎の柱の間を縫う様に高速で飛んだり、はたまた巻き上がるコロナにからみつく様に螺旋状に急上昇したりしてジェットコースターに乗っている様な気分よね。

「ははは、完全復活どころか、今、私は太陽にまで到達したぞ！」
エヴァちゃんが展望室から太陽に向かって高笑いをしてる。確かに吸血鬼が太陽と十字架とににくを苦手になっているのは知っていた

し、晴れた日の体育の授業もさぼりがちだったけど、ここまで太陽にコンプレックスをもっていたんだ。

…なんか妙なテンションのエヴァちゃんのせいでうじうじ悩んでいるのがばからしくなっただわ。

そして一度決めたらもう迷うことはなくなった。

わたしは吹雪ちゃんのもとだから。なんにもできないけどそばにいて吹雪ちゃんが地球に来る度『おかえりなさい』と云おう。それしかできないけど、それだけでもしてあげたい。

夕食の頃には船は地球に戻ってきていた。

夕食の時にあとで話がしたいと云うと吹雪ちゃんは展望室で待っていてくれと云われた。

云われた通りに展望室に行くとな展望室一面に青い地球が広がっている。朝に来たときよりも近い位置を飛んでいるのか見慣れた地形が目の前をゆつくりと移動している。

「今はギリシャ、エーゲ海上空です。あの特徴的な半島がイタリアです。膝のあたりがローマですよ」

後ろから吹雪ちゃんの声がする。

「飛んでみますか？」

え？

返事をする間もなく室内の重力がなくなった。それと同時に今まで透明だった展望室に一筋の線が現れた。え？開いているの？

「一応、佐久夜の周辺には無理矢理気密を保持しています。真空中では作業がしづらいので。普段は不活性ガスで満たしていますが今は地球の大气に準じています」

静かに吹雪ちゃんに背中を押され私は地球に向かって飛んでいく。展望室内と違って壁を蹴って方向転換などできないから流されるままだ。手足を使って回転は止めたけどゆっくり地球に落ちていく。

「香織理さんのお話は聞かせてもらいました」

あ、香織理さん云っちゃったんだ。

「おおかたは間違っています。やはり香織理さんですね。私を理解してくれています。」

強いて云えば銀河の民が間違った進化をしたとは思ってはいません。まあ、期待とは違った進化であったことは認めますが。そしてそれと同じ道を地球が進むとは思っていません。それ故に私は地球には干渉しないように心がけてきました。

私は弱い人間ですからもし友人が病を患って死に瀕していたら銀河の薬など与えてしまうでしょう。だから二度と会わないと決めました。目の前に、そんな友人が現れたら容易く心を曲げてしまうから。いつか地球が銀河よりも高みに登れると祈っているから私は何もしません。

私が決めた自分ルールですが学生の正木吹雪は学友に対してはお節介を焼いていいのです。しかし、いつにまにかそれを踏み越えていました。銀河人の正木吹雪樹雷がいつにまにかまぎれこんでいたのです。

私は任務が完了次第ここを去ります。二度と会うこともないでしょう。ならばここで終わりにしてもいいのではありませんか？」

「そうだね、いつかはみんな離ればなれになる。でも、だから仲良くしないのは違うでしょ。せめてそのときまでは一緒にいていいんじゃない？」

「私といると余計な危険に近づくことになりますよ」

「そうかもね。でもネギ先生が来たとき吹雪ちゃんと一緒にいられなかったら私は多分考える間もなく魔法に浸かっちゃった気がする。私自身の過去が追いかけてくる気がするから。それが運命なら私は立ち向かうよ。それに吹雪ちゃんが手を貸してくれたらうれしかな？」

私がそう云うと吹雪ちゃんは一瞬きょとんとした顔をうつむかせ伏し目がちにちらちらとこちらを覗く…ちょっと、もーれつに可愛いんですけど…

「その、私を甘やかさないでください。そんなことを云われると甘えなくなるじゃないですか」

ん？この程度で甘やかすことになるの？吹雪ちゃん基準では。なにが自分に厳しく、他人には甘くないの？多分女の子限定で。

「いや、別に甘やかしていいわ。云っちゃえば私が自分で自分を守れる様に吹雪ちゃんをお願いしているんだから」

私の言葉にきよきよと拳動不審な感じ辺りを見回してから小さな声で吹雪ちゃんは云った。

「本当にいいのですか？私がそばにいても」

「いいに決まっているじゃない」

吹雪ちゃんはずばく黙っていたが一回深呼吸してこちらをふりむいた。

「明日菜さんに見せたいものがあります」

吹雪ちゃんが私の手をとると船の反対側へと移動した。

「あ、天の河」

「ええ、銀河です。但し、ここからは見る事ができない銀河をお見せします。夏休みに見にいきましょう」

.....

「そうね、楽しみにしているわ」

「????」

「吹雪さまの本心が見えて一安心です」

「まあ、見栄っ張りなのも苦労するわね。もう少し楽に生きればいいのに」

「恥ずかしがり屋なのです、吹雪さまは。ですが、いま少し、此の地に留まってくれてくれるでしょう」

「なにを考えているのか何て一目瞭然。典型的な柁木なんだから。そのくせ義理だけは果たそうなんて」

「それこそ柁木の血です。風来坊でありながら実直。あの方そっくり」

「個人的に云えば、『さつさととんずらこけばいいのに』と思いますわ。あんなお役を引き受けさせられる前に」

「……ですが吹雪さまはお優しいかたです。きっと判ってくれるでしょう」

「……そりゃ、お願いされれば断れないでしょうね。貴女からのお願いでは。でも云われた瞬間に逃げ出す可能性も……もうちょっと強い鎖がほしいわね……」

3話 おとりのじ、おんなのじ

「刹那」

ん？こじはどじだろじ。

あたり一面に桜が咲きほこり、花びらが風に舞う…

「せつちゃん？」

「あ、お嬢さま…」

このちゃんの言葉に振り返り私は言葉を失った。

このちゃんはウエディングドレスを着ていた。

「そんなん見られると恥ずかしいわあ。似合う？せつちゃん」

いや、似合う、似合わないで言えば非常に似合っているとしか申しません。いえ、しかし、いま問題なのはそうじゃなく……いつたい相手は誰なんですか？……しかし、私にはそのこと口にする勇氣がなかった。

「せつちゃん、どうしたん？あ！今日からせつちゃんじゃなくて旦那さまて呼ばなな。うちら結婚するんやさかい」

「え？このちゃんと結婚？私が？」

なんだ？いつたいどうなっている。今が気がついたが私はタキシードを着ている。

「しかし、私たちは女同士ですし」

「いややな、せつちゃん。せつちゃん、エヴァちゃんのお薬飲んで男の人になってもうたやん」

え？なに？うそだ。

あわてて手をズボンにいれ股間の辺りをさわって確かめてみる。

- むにゅ -

柔らかいものに包まれた小さい球形のものがふたつ……

「うわ！」

目を開けると見慣れた2段ベッドの天井……夢か。

京都で握ったネギ先生のあれの感触が手に生々しくよみがえってくる。

しかしなんであんな夢を？ああ、昨日、御前から送られてきたあれか……

いや、あれ自体なんのおかしいところはない。ちょっと気にしすぎているだけだ。

本山で云われた私の関西呪術協会の後継者候補の件。私が男になってお嬢さまの婿になると云う話。あの場だけの話題かと思っただが、先日御前が妙なビデオ……リョウメンスクナノカミを私が倒す場面のある。御前はあれを各方面に配るつもりらしい。リョウメンス

クナノカミを倒した英雄を軸として関西呪術協会の立て直しを図ると云う話だ。このちゃんのためになるのなら道化の英雄を演じることにためらいはないのだが。

それと昨日、御前から私宛に荷物が届いた。サイズこそ私に合わせであるが男物のスーツが数着…

『今後、刹那にはボディガードとしてできるだけ木乃香と行動を共にする様お願いします。ですが可愛い女の子が二人で居ればあなた方に声をかけてくる殿方も多くなるでしょう。無用なトラブルを避けるため刹那には男装をし、虫除け役をお願いします』

と云う旨の手紙が同梱されていた。

本当にそれだけでしょうね？御前。

エヴァンジェリンさんのことだから知らないうちにが薬を盛られることはないだろうが……ちょっと怖くなったので確認しておこう。

胸…よし、ある。…あると云ったらある。

次、股間……よし、ない！

「どうした刹那、大きな声を出して……」

下のベッドで寝ている龍宮がカーテンを開けて覗き込んできた。ああ、起こしてしまったか、すまない。

龍宮はしばらく私を見つめてからぼそつと云った。

「…たまっているのは判るが…できれば私が居ない間に処理しておいてくれると助かる」

なんのことだ？と云う前に龍宮は下に降りてしまった。

ふと、自分の姿を確認すれば…右手で胸を、左手で股間をまさぐっている？こ、こ、この体勢は！

ち、違うんだ！龍宮…

34話 別荘にて

2003年5月13日 火曜日 午後4時

「吹雪」

「ところでネギ先生の修行は進んでいますか？」

今日はエヴァさんのお宅でお茶を頂いています。アフタヌーンティを愉しんでいる…わけでもなく定例になりつつある報告会です。もつとも毎日、顔を合わせているわけですから大して重要な話し合いではありませんね、いまのところは。話すこともなくなりつつあったので、どうでもいい話を振ったつもりでしたが…なぜ、そんなに驚いた顔をするのですか？

「貴様、坊やのこと…眼中にあつたのか？」

「吹雪ちゃんてネギ先生と関わり合いたくないんじゃないんじやなかったの？」

なにか私がことさらネギ先生を冷遇しているみたいではないですか。

「いえ、別に嫌いでも無視しているわけでもありませんよ。ネギ先生を観察することで関東魔術協会の一端がつかがい知れるかもと思っただけです。実際は不調に終わりましたが…」

関東魔術協会は西洋魔術師の集まりだとは判りましたが一体、何を目的とした団体なのかは判りません。単に利益を追求する集団でも権力指向の団体とも違つみたいですから。

麻帆良と云う土地を守護する魔法使いの集団とは定義付けはしてみ

ましたが…魔法を隠すつもりなのか、そうでないのか判断に困ります」

私がそう云うとあははと乾いた笑いを明日菜さんがもらしました。ちなみに今日は木乃香さんと刹那さんも一緒にエヴァさんのお宅に伺いましたが、お二人はそのまま佐久夜に…いえ、佐久夜の中の惑星に移動しました。…ちゃんと名前を付けないと煩わしいですね。佐久夜にいるときはビーチに行くとかプラントを見てくるで通じましたが、ちよつと考えた方がいいようです。

木乃香さん達は陰陽道の修行をそこですしています。十分に広く、外部からの干渉が無い空間と云う条件は麻帆良の近くにはありませんでした。エヴァさんの別荘で行うことも提案されましたが加速空間で、居れば居るほど早く老けるとあつては三人とも謹んで辞退されていきました。三人と云うのは雅楽乃が木乃香さんにつけた神鳴流の剣士で、麻帆良学園の先生でもある葛葉刀子さんです。剣士ではありませんが陰陽道とやらの初步程度は十分に教えられると云うことです。一応刀子先生にはエヴァさんの加速機能のない別荘のひとつと云うことで説明をしています。

「でも、ネギ先生最近やつれてきてない？クラスでも心配しているのがあるんだけど、主にいいんちよだけど」

私たちはネギ先生がエヴァさんに弟子入りしたと云う裏事情を知っていますので予想はつきませんが一般の方々には最近のネギ先生のやつれ様は心配でしょう。

「魔法の練習…ではなくて魔法戦闘の訓練でしたか。まあ、あの年齢の子供ならそう云うものにあこがれるのは判りますが、実際に学ばれるのは如何なものかと思えます。私の経験からすれば人殺し

の技術は人殺しにしか役に立ちませんでした」

あれ？そう云えば私自身もネギ先生の年頃には勝仁さまから武術の手ほどきを受けていた気がします……その結果がこれですか……

「まあ、今日も坊やたちが来るかな」

エヴァさんの別荘で夕映さん、のどかさんも数日置きにネギ先生と修行をされているそうです。

中学3年の英語教師、3-Aの担任、エヴァさんから魔法戦闘、古菲さんから拳法を教えてもらい、夕映さん、のどかさんに魔法を教える……なにか働きすぎと云う気がします。……もしかして私から見ても働き過ぎと云うのは人としてかなりやばい領域にあるのではないのでしょうか？……まあ、若いのですから一度限界を知るのも良い経験でしょう。

しかし、エヴァさんの別荘、ダイオラマ魔法球と云う圧縮加速空間には驚かされました。魔法使いという存在は甘く見るべきではないですね、迂闊に接すれば足を掬われかねません。

「でも、実際にはどんなことをしているの？」

明日菜さんは興味深げにエヴァさんに尋ねました。

「私が実際に見た魔法ってエヴァちゃんが吹雪ちゃんと闘ったときしかないし。京都では訳が判らないうちに終わっちゃたし……」

「なんなら見学でもするか？」

「いいの？」

「構わんさ。一応お前達は魔法の存在を知っているのだし、そこは私の別荘だ。その……知人を招待してもおかしくはないだろう」

「あー、知人じゃなくて友人て云いなさいよ」

「うるさい。これから魔法使いの何たるかを貴様に教えてやる。刮目して待て！」

照れた様にエヴァさんが仰有います。そうですね、見ておいて損はないでしょう。

しばらくして木乃香さんと刹那さんも佐久夜から戻られました。刀子先生は先に帰ったそうです。

「せんせー、デートかて」

木乃香さんが顔を赤らめながら仰有います。デートですか。中学生には言葉だけでも刺激が強すぎますか？

「それはともかくあいつらは何なのだ？」

エヴァさんがあごで示すほうには玄関の映像が映し出されていますが、ネギ先生と夕映さんとのどかさんの他にお二人、和美さんと古菲さんが映っています。音声はないので良く分かりませんが和美さんと夕映さんが云い争っているようです。

「どうやら朝倉がネギ先生たちにくっついて来たみたいね」

和美さんはあやかさんにでもネギ先生の様子を探るよう頼まれてもしたのでしょうか。

「和美さんも古菲さんも魔法のことはご存知のようですから一度話し合いをもったほうが良いかも知れません」

「そうかな」

「ええ、なにか放っておくとネズミ算式に関係者が増えていく様な気がするので」

「クラス全員にばらしてしまえばいいのだ」

ざっと計算して約10名、クラスの三分の一が今現在魔法の存在を認識しているのですね。

「しかし、魔法の存在を知って人生が変わってしまう可能性が大きいです。春頃はまだ夕映さんものどかさんも魔法使いの修行を行うなど思ってもいなかった筈でしょう」

「うん、うちも陰陽道の修行を行うなんて思ってもいなかったなあ」

そうでしょうね。私もここまで予想とずれるたことは久方ぶりです。

「魔法の存在を知ってなお、普通の生活をするのは難しそうです。実際には存在するわけですがおいそれと公表するわけにも参りませんし、これ以上関係者を増やさないようにすることにこしたことはないかと」

実際、このなかで一般人の部類にはいつているのは明日菜さんだけ

ですが……………

「とりあえず、皆さんを中に入れてしまっても宜しいですよ？エヴァさん」

「しかたない、茶々丸！」

「YES、マスター」

茶々丸さんが玄関に向かいました。

ネギ先生たちを迎え入れるとそのまま全員でエヴァさんの別荘へと向かいました。いずれ、別荘に向かうのならば時間の節約になりますから。…外側の時間ですが。

「この別荘内での一日は外の世界で一時間にしかありません。そして一度入ったらこの世界の一日分は外の世界にもどれないです」
夕映さんが和美さんたちにエヴァさんの別荘について説明をします。

別荘内のテラスで茶々丸さんがお茶を用意してくれました。テーブル二つに主にネギ先生グループと私たちのグループに別れて座ります。

「さて、率直に申しましてネギ先生は今の状況をどうお考えなのでしょうか？」

「今の状況ですか？」

「はい、以前ネギ先生は魔法は秘匿されるものと説明されましたが、実際4名ほど魔法を知った方がここに居られます。ネギ先生が積極的にばらしたわけではありませんが、少なくともネギ先生が此処に来られなければ魔法と関わることはなかった方々です」

「しかし、私たちは望んで魔法を覚えようと云うのです。むろん、それに関わるリスクも承知して居ます」

夕映さんの言葉にのどかさんもコクコクと頷いて賛同の意を表しています。今のところそれで人生を踏み外した方はいませんからね。今のところは…

それに当人が良くても周りが迷惑を受けると云うこともあるのですが。

「そうですか。気になっていたので、良い機会だからお聞かせください。ネギ先生、お二人は関東魔術協会の所属されたのですか？」

「いえ、違います」

そうでしょうね。ネギ先生が個人的にとつた弟子だと思っただけですが、やはりそうですか。もっとも学園長あたりが黙認させているのでしょうか。

「つまり、お二人はどの組織にも所属していないフリーの魔術師となりますね。」

話は飛びますが以前ネギ先生から魔法を一般人にばらした魔法使いはオコジョにされると伺いましたが、他の魔法使いによって処罰されると云う意味で宜しいでしょうか」

「はい、そうです」

「一応エヴァさんの方も見ると無言で頷いています。自然の摂理ですと仰有つたら逃げ出すところですよ。」

「つまりは魔法使いの掟があり、それを守らせる警察に相当する仕事をされる方々が居ると云うことですね」

「はい……多分」

「おや、これは消極的な肯定ですね。やはりと云うかネギ先生にはあまり知らされていないのかもしれませんが。エヴァさんと闘ったあの日、学園長室に集まった方々がそうなのでしょう。」

「では居ると云う前提で。」

「先ほど夕映さんとのどかさんをフリーの魔術師と称しましたが、これは悪く云えばもぐり状態ですね」

「もぐり?」

「もぐりとは許可を受けないで、仕事・商売などを行うことです。古菲さん」

「わかたアル」

「それで、ネギ先生はもぐりの魔法使いを量産しつつあるのですが……ご自分が為さっていることが判っていますか?ネギ先生」

「ネギ先生の顔色が悪くなりつつあるので何をしたのか判ったのでし

よう。

「迂闊でした」

「それって危ないの？」

明日菜さんが怪訝な顔で仰有います。まあ、皆さんあまり危機感を持っていないのですね。

魔法結社の行動云々はやくざに例えると分かり易いのですが、それを云ってしまうと魔法に対して良くない感情を持っている様に見えるのでそれは止めておきましょう。

……木乃香さんから雅楽乃にばれたらどうなるか……

「そうですね、のどかさんが旅行か何かで麻帆良からどこかに出掛けたとしましょう。そこは関東魔術協会とは別の魔法結社の縄張りだったとします。その魔法結社から見たのどかさんはどの様に映るのでしょうか？」

魔力を持った人間が縄張りに現れた。調べてみると麻帆良から来たらしい。関東魔術協会に身元を照会したが該当する協会員はいない。更に調べたら、ある英雄の息子に秘密裏に訓練された魔法使いと判明する……」

「私の名前まで出たら後ろから撃たれても文句は云えんな」

エヴァさんがニヤニヤしながら仰有います。

思わず』のどかさん、逃げてー』と叫びたくなる様な状況ですね。

「その結社から見たのどかさんは関東魔術協会の息はかかってはい

ますが明確なつながりはない。とかげのしっぽ切りに適した人間に見えるのではないでしょうか」

「そんなこと、調べたら他意はないと判るではないですか！」

「夕映さん、幽霊の正体見たり枯れ尾花：疑心暗鬼の目で見れば何事も曇って見えてしまうものです。疑わしいと云うだけで過去どれだけの人間が命を奪われたのか：年号を覚えることだけが歴史を学ぶことではありませんよ。ネギ先生、魔女狩りの犠牲者は全て魔法使いだっただのですか？」

ネギ先生は何も云わずうつむいています。

ネギ先生はネギ先生で組織に隠れて私兵を集めている状態なの判ったのでしよう。

「さて、ここに木乃香さんと刹那さんが居られます。ご存知の通りお二方とも関西呪術協会に所属されているのですが：どうでしょう、関西呪術協会に所属することも考えてみても宜しいではありませんか？」

「ええ？」

「別に関西呪術協会が良くて関東魔術協会が悪いと云うつもりはありません。ただこのままでは関東魔術協会しかお二方には選択の余地がありません。幸いと云うか関西呪術協会に所属する木乃香さんたちがいるのです。その伝手を使うことも考えてみてください。組織に所属すると云うことはクラブ活動に所属するのとはわけが違います。迂闊に辞めることもできないでしょう。それ故、少しでもご自身に良い環境を選んで頂きたいのです」

まあ、ネギ先生がいる以上、関東魔術協会に所属されるのでしょうか、関西呪術協会のことを引き合いにだして関東魔術協会からよりよい条件を引き出してほしいものですね。ネギ先生やのどかさんは荷が重いでしょうから夕映さんに期待しても…良いですよね？

「それともう一点、魔法を知っただけの人間は許容されるのでしょうか？」

「それはどういう事ですか？」

「魔法を知った人間に対して基本的に魔法使いはそのことを忘却させるのでしたね。魔法の有り・無しの認識の違いは根本的な問題だからです。少なくとも魔法が存在すると云う認識があるのならば魔法を使えなくとも魔法の存在をしらしめることは不可能ではないでしょう。」

「要は魔法の存在を知っていることはそれだけで魔法使いの脅威となるわけです」

「その、吹雪さんの考えすぎじゃないですか？」

「私もちよっと思うけど」

「今、私たちは麻帆良学園内にいますが転校や卒業などで麻帆良を離れた場合どうでしょうか？ここにいくかぎり、魔法使いにとって監視や対処もし易いでしょう。しかし、所在がしれない人間の起こした問題には対処は難しいでしょう。私自身の予想では麻帆良からでるときに何らかのアクションがあるかと思っています。記憶の封印か、守秘の契約を行うか、はたまた協会に所属するか」

？ 自分で云ってみて気になりました。資質のある生徒にたいして

わざと魔法をばらして魔法使いとしてとりこむ。基本寮住まいの麻帆良の生徒は家族に相談はできない。逆に寮内には魔法使いがいる。おそらく魔法使いに有利に交渉できるでしょう……まさかそこまではしてはいないと思いたいのですが、ちよつと調べておきましょう。それと、明日菜さんを関西呪術協会の保護下に置くのも考えておきましょう。雅楽乃にお願いすれば二つ返事で承知してくれそうだけど……名前だけ貸すと云うのは関西呪術協会からすればあまりいい話ではないわね。

「そう云った懸念がありますのでネギ先生にはいつその情報の秘匿を心がける様をお願いします」

「わ、判りました」

席から立ち上がり頭を下げるネギ先生ですが、関東魔術協会からのフォローの無い状況では難しいでしょう。

お茶が終わるとネギ先生とエヴァさん、茶々丸さん、茶々ゼロさんとの模擬戦が始まりました。しばらく眺めていましたがかなりのものです。

私がネギ先生の歳のころには勝仁さまから手ほどきを受けていましたが、私には廻呼と云う目標みたいなものがありましたけど、何に對してネギ先生は強くなるうとしていたのでしょうか？ただ漠然と強くなりたいと云うタイプではなさそうです。

ちなみのネギ先生が闘っている間には夕映さんとのどかさんは体力づくりに励んでいます。

「ねえ、吹雪ちゃん」

「なんですか？」

「私に稽古をつけてくれない？その逃げ方とか危険回避のしかたとか、その、私には闘いなんてできないからせめて足手まといにならない様に」

闘いでなく逃げ方や危険の回避ですか。普通、闘い方を教えてくれと云いそうですが、守側にとってはそちらのほうがありがたいのです。

………あら？なんででしょう？明日菜さんなりに考えた思いに対して今一瞬さびしさがよぎったきがします。

それはともかく明日菜さんの考えにはおおむね賛同できます。昔ガ―ディアンをお渡ししようかと考えましたが瀬戸さま以外の上層部に知れば記憶消去される可能性があるため却下しました。それでは本末転倒です。

「そうですね、初歩の護身術や危険予知の仕方なら教えることもできるでしょう」

「そんなら、うちも」

「その、できれば私にも指南お願いします」

人に教えられるほどのものではないのですが。

とりあえず、ネギ先生たちの邪魔にならないように浜辺に移動して

危険予知の心得を話し、その後は明日菜さん、木乃香さんに簡単な護身術を手ほどきします。確か合気道をエヴァさんは嗜まっていたようですから、エヴァさんにお願ひしてご教授願うのも良いかもしれません。それとも現状の科学レベルに合わせたなにかを手配いたしましょうか？スタンガンとか。

その後、刹那さんと手合わせを行いました。

一応木刀での試合です。私は通常サイズの木刀で、刹那さんは長めの、野太刀風のものを選びました。

斬りかかってくる刹那さんを受け流しながら刹那さんを観察します。速さは十分ですがやはり力はそれなりですね。さて…

「刹那」

吹雪さんとの手合わせは意外なことに二刀ではなく一刀流だった。

しかし構えに隙は無く修練を積んでいることはすぐに判った。

とりあえず胸を借りる身だ。思い切って打ち込んでみるものの簡単にいなされる。

いったん下がりが改めて体勢を整えてから打ち込もうと思った矢先、吹雪さんの剣先が下がる…下段の構えか。剣道では意味が無い下段だが、実戦では足を切られることは非常に苦しい。動けなくなれば的と一緒にだ。遠方から大技でしとめるもよし、差がついた機動力で翻弄するもよし。

思わず後ずさって、もう一度体勢を立て直すか、そのあとはまったく自分のペースで戦えていない。踏み込もうとすると、先に動かれたり、剣先で牽制されたり、あるいは視線だけでこちらの最初の動

きが乱されてしまう。強引に行っても最初の踏み込みが充分でないために剣に力が乗り切らない。

はつきり云って嫌らしい。

気がつくとかかなり疲れている。呼吸を乱さないのが精一杯だ。対する吹雪さんは最初と全然変わらない。能面の様な面差しでいまいちどこを見ているかも定かではない。

その、吹雪さんが一瞬、眼を広げ驚いた様な表情をする。視線の先にはこのちゃん？

「よそ見をしているひまがありますか？」

首筋に木刀の感触がする。一瞬の隙に懐にはいられていた。

「まいりました」

「はい」

お互いに礼をして、試合を終了しました。できればエヴァンジェリンさんと闘ったあの動きに対処でくるのか試したかった。

「私がやりにくいと感じた相手を真似てみましたがいかがでしょうか？」

吹雪さんが嫌がる相手か…どんなひとだろう。

「はい、正直嫌らしいと感じました。強いと云うよりも巧い…相手に力をださせないで勝つ戦法。今まで剣を合わせたことのないタイプなので全然対処できませんでした」

「それならば敢えて猿まねした意味がありましたね。今更刹那さんに剣理を説いても徒に刹那さんを惑わすだけでしょうから、世の中にこんな闘い方をする者もいるとだけ覚えておいてください」

単に腕試しのつもりだったのけれど、吹雪さんはちゃんと私のためになるように考えてくれている。こう云うところはやっぱり私たちよりお姉さんだなあと感じさせられる。また、機会があつたらお願いしよう。

そして対人戦では腕の善し悪し以外に駆け引きと云うものも重要になると改めて思い知らされた。けれど、不器用な自分に視線だけで相手にすきを作らせる様なことは無理だろう。せめて、そう云うことに惑わされない様になることが必要だ。

2003年5月13日 エヴァンジェリン別荘内 夜

「吹雪」

夜中、ふと気配を感じ目を開けると明日菜さんが目の前にいますが、何でしょう？

「あ、起きた？ちょっと面白いものがあるから」

一体こんな夜中になんでしょうか？

明日菜さんに連れられていくと目をつむった状態のネギ先生を前に夕映さんのどかさんが本らしきものを覗き込んでいます。そしてそれを取り囲む様にエヴァさんらが集まっています。

「…そしてスタンおじいちゃんはいつもおとうさんのわるぐちばかりいつています…」

のどかさんが本を読み上げていますが？

「どうやらネギ先生の子供の頃の話らしいの」

こそつと明日菜さんが仰有いますが今でも十分に子供でしょう？とありえず話を聞いてみることにしました。

話の内容はネギ先生の5、6歳のころから始まり、お姉さまと離れて一人暮らしに近い状態であったこと。

意外といたずら坊主であったが実はお父さまに会いたくてわざと自分を危機に陥れていたこと。

そして悪魔の襲来…

石にされるスタンおじいさんとお姉さま。

助けに来たお父さま、そして別れ。託される杖…

その後人が変わった様に勉学に打ち込むネギ先生、あの惨劇を呼び込んだのが自分の願いだったのではないかと云う悔恨…

なんと云うか…余計な荷物を背負ってしまったね。それは周りの大人が背負うべきものでしょう？それこそ記憶から消すべきものではないのでしょうか？

周りの皆さんは涙ぐんでいますね。あら、平気なのは私だけでしょ

うか？産まれた時代が時代だけに孤児の知り合いもいますし、何より私も似た様な環境でしたしね、さすがに悪魔の襲来はありませんでしたが。でも同情されるのもつらいときがあった気がします。

「あれ、なんで皆さん聞いているんですか？」

ネギ先生が目を開けてびっくりしています。寝ていたのか、それとも瞑想状態だったのでしょうか？夕映さんやのどかさんは力になりたいと云い、他のお方も何かあったら協力すると仰有っていますが…

「いえ、その、こう云う危険があると云いたかったのですが…」

だったら内容をもう少し編集したほうが宜しいでしょう。

それはともかくのどかさんが読んでいた本はなんでしょうか？のどかさんが本を手に取り何か語りかけると本がトランプみたいなものに変わり、それを大事そうにのどかさんは懐にしまい込みました。

あれがマジックアイテムと云うものですか。しかし、そんな貴重なものをのどかさんが手に入れられたのでしょうか？ネギ先生が渡した？いいえ、ネギ先生は他人が深入りされるのを嫌ってあの話をされたのでしょうか。ならばアイテムを渡すのは逆効果でしょう。

そう云えば昔ケダモノが云っていましたね、契約することでマジックアイテムが得られると。どんな魔法がかけられているのか判りませんがどうやらテレパシー系でしょうか？悪魔と云い、まだまだわたしの知らないことが多い様ですね。ある意味すでにお腹いっぱいではあるのですが…

ただ気にかかるのはネギ先生のあれですね。サイバー症候群と云うものでしょうか？どちらか云うと特攻くずれのほうかなじみがありますか…かなり違っていきますか？

35話 悪魔が来たりて…

2003年5月13日 火曜日 午後5時

「ヘルマン」

ふむ、とりあえず学園内には潜り込めた様だが肝心なのはこれからだ。目的は2つ。

一つ目はネギ・スプリングフィールドの実力を探ること、そして二つ目魔法無効能力者の確認を行うこと。問題は魔法無効能力者が二人存在するらしいことだ。一人目の能力者の名はカグラザカアスナ、二人目は名が不明。依頼主からの念写写真ではなかなかの美少女だが実力はかなりのものらしい。無論本命はカグラザカアスナだが二人目にも依頼者は大いに関心を寄せている。

ここは敵地、長居ができぬ以上はさつさと目的を果たすことが先決であろう。二度続けての依頼の失敗は名誉に関わる問題だからな。

「遅いぞ、おっさん」

近くの茂みから狗族の少年が姿を現した。確か名前は犬上小太郎。邪気もない子供だが、それゆえに麻帆良の結界にも引つかからなかった。

今回の私の相棒だ。京都でボコられた金髪の子供に仕返しすると云っているが…エヴァンジェリンが相手では荷が勝ちすぎるだろうがほんの少し足止めしてくれば良い。

「そう云うな。私たちには這入はこるのにも手続きが必要でな」

結果はやつかいだった。だが抜け穴がないこともないらしい。

すでに別行動の下僕から目標を発見したと報告が入っている。スポンサーからは派手な事は憤み、無関係なものを巻き込まない様に指示はだされているが、折角の少年の晴れ舞台だ。観客が居なくては主役も張り合いがないだろう。無関係な人間を巻き込んでいけないと云うことは関係ある人間は問題無いと云うことだしな。

さて、彼らが私を愉しませてくれることに期待しよう。

「明日菜」

エヴァちゃんの別荘から戻ると外は雨降り。天気は変わったけどまだ一時間しかたっていないのね。加速空間でやっぱり不思議だなあ。て云うか、ネギ先生ずっとあそこで修行していたら子供先生じゃなくなるんじゃないかしら？いっそのこと高畑先生ぐらいにまであってくれたらうれしんだけど。そしたらいいinchよの病気も治って一石二鳥ね。

「じゃ帰ろつか？」

私がそう云うと吹雪さんが申し訳なそうに切り出してきた。

「これから佐久夜にもどり上司と今後の相談をしたいと思います」

え？これから。

「坊やの話のせいかな？」

「はい。ネギ先生のお話を鑑み、麻帆良が大規模な侵攻を受けた際に対応をどうするか意見を貰いたいと」

「麻帆良にも悪魔が襲ってくるの？」

「さあ、どうでしょう」

私の問いを吹雪ちゃんはあっさりかわして云った。

「麻帆良に悪魔が大挙して襲ってくる確率など判りません。大体、悪魔の存在など先ほど知ったばかりですし。」

ただ、現場を預かる身としてはそう云うことが起こった場合の対応について一応の方向性を後方とすり合わせしておきたいのです。傍観するのか、それとも影から援助するのか、積極的に支援するの
か」

「どさくさに紛れて目的を達成すると云う手もあるぞ」

「そうですね、それができれば良いのですが。状況の読めない状態で漁夫の利を得ようとするのは成功する確率と失敗して失うものを考えれば下策ではないかと思えます」

あ、やっぱり考えてはいたんだ。火事場泥棒…

「別に急を要するわけではありません。云ってみれば厄除けのお呪まじない
いです。経験ではあのととききちんと対処しておけば…と云うことが
何度かありますので」

それではまた明日と云い残して吹雪ちゃんは別れて行ってしまった。

「夕映」

「吹雪さんを探ってほしい？」

「応よ」

いきなりカモさんから妙なお願いをされました。

エヴァンジェリンさんの家からの帰り道、私とのかと朝倉さんにカモさんが相談をもちかけたのです。ネギ先生はくーふえさんに武術の歩方と称した変な歩き方で後ろからついてきています。

「あの嬢ちゃんは一応、魔法を識っているだけの一般人らしいんだが、どうもそれだけじゃ無い様な気がしてなあ」

確かに私も吹雪さんから魔法がらみの忠告を受けたのは今日で2回目です。

「できればのどか嬢ちゃんにイドの絵日記で探ってほしいんだが…
ちよつと無理そうか？」

のどかがコクコクとうなずいているです。クラスメイトの意識を無断でのぞくなんて、何らかの理由がなければのどかには無理です。逆にそう云う人柄故イドの絵日記が与えられたのでしよう。

また、エヴァさんの別荘でイドの絵日記を吹雪さんに見られています。詳しいことは訊かれなかったので教えていないですが、一見すればおおよその内容は判るでしょう。

イドの絵日記は表層意識を読み取るので、ただ使えばほしい情報が手にはいるわけではないのです。会話の中で誘導するようなことが必要になるです。となると私が吹雪さんと会話し隠れてのどかがイドの絵日記で吹雪さんの心の中をのぞくことになります。が上手くいけるか自信がありません。

「でも、まず何を探るのかな？ただ怪しいって理由だけじゃイドの絵日記はやめておいた方が良くと思うよ。怪しいと云うなら具体的にこういところが怪しいと云う証拠を見つけないとね」

朝倉さんにしてまとも、いえプライベートについてはむしろ神経をとがらせているのでしょうか？

しかし、吹雪さんが怪しいと云う思いは私のなかにもあります。何かタイムミング良く吹雪さんは現れるです。ただ魔法の存在を識っているだけとは思えない節があるのです。

「確かに、アニキとエヴァンジェリンの闘いをいつの間にか仲裁していたり、木乃香嬢ちゃんの護衛を手伝っていたり、一般人とは思えないんだが…何をどうしたのか判らねえ」

京都のこのかの実家で魔法使いに襲われ、このかが攫われたとき吹雪さんはホテルにいらしいです。結局は桜咲さんがこのかを助け出したのですが、その桜咲さんは吹雪さんに対してなにかと頼りにしている様な雰囲気があるです。これはこのかを助ける際に吹雪さんがなにか指示を出していたと思えるのです。ですが現場にいない吹雪さんに何が出来たのでしょうか？

「とりあえず、他のクラスメイトに話を聞くことと行動の調査ぐら
いかな、いま出来るのは」

朝倉さんが2、3日吹雪さんの行動を探ってみることになったです
が……

「明日菜」

寮に戻り昨日(?)のことを考えてみる。

悪魔に襲われたネギ先生の故郷。多分大勢の人が死んだのだろう。

「なあ、アスナー」

「なに、このか？」

「麻帆良は大丈夫なんやろか？」

このかはちょっと前に自分の家を襲われた。幸い死人や大きな怪我
人はいなかったが下手をすればネギ先生と同じ立場になっていたか
もしれない。

「ネギ先生の村も腕の立つ人がぎょーさんおっいたらしいけどそれで
もあかんかったしなー」

「大丈夫よ、刹那さんや吹雪ちゃん、エヴァちゃんがいるんだし。吹雪ちゃんはそれを上司の人に説明に行っただけだし」

吹雪ちゃんのはっきり云わなかったけど、麻帆良が襲われたとき静観するだけならわざわざ上司と相談する必要なんて無いはず。きつと助けてくれる。

無理矢理、自分を納得させる。

でも、本当は違う。このかが一番恐れていることは自分のせいで誰かが傷つくこと。

もし、自分があるせいで麻帆良が戦争になり誰かが巻き添えになっ
て怪我したり、死んだりしたら…それは私も同じだ。

ネギ先生が云っていた『自分への天罰』…いまになってゆっくりと
染みてくる…

？

でもよくふる雨ね…

「刹那」

ん？気のせいかな、気配が変な気がする。

「せつちゃん」

「あれ、お嬢さま、お部屋に戻られたのでは…」

振り返ると全裸のこのちゃんが……おかしい。このちゃんは全裸で歩き回る様な女性むすめではない！

「何者？」

あからさまに怪しすぎる。一体誰がこんなものをお嬢さまと見間違えようか？

「ククク、失敗したぜ」

お嬢さまを模したものは火にあぶれた飴細工の様に姿を融かしていく。

妖の類？……麻帆良にか？

「おっと大声はダスナ。コノエコノカとカグラザカアスナは預かった。返してほしくば今すぐネギ・スプリングフィールドを呼んでコイ。ネギ・スプリングフィールド意外にこのことを知らせたら……わかってるナ？」

妖は寮の壁の隙間に潜り込んで消えた。

あわててこのちゃんの携帯に電話するが…呼び出し音だけだ。明日菜さんも同じだ。吹雪さんもまだ戻っていない…どうすればいいのだ？

「ヘルマン」

「おい、おっさん！なんやねん、これ！」

世界樹の根本にあつらえた様につくられた舞台。使わない手はないとカグラザカアスナに舞台衣装に着替えてもらったところで見回りに行っていた少年が戻ってきた。ふむ、趣味が合わなかったか？

「単なる余興のひとつだよ、少年」

舞台の中央には主演女優のカグラザカアスナが拘束されて眠っている。奥には水牢に囚われた少女達が固まってこちらも眠っている。こちらは台詞は必要ないからささしずめ書き割りの代わりか？ふむ、時間さえあればもう少しどうにかできたものだが…

「何が余興だ。人質のつもりか？」

「そんなたいしたものではない。招待状のかわりだよ」

まあ、ネギ少年を呼び出すにはもっと効果的な手を持っているが、囚われたお姫様を救いに来る騎士の話の方が人には受けが良い様だ。更に云えば向かってきた騎士を返り討ちにし絶望の底に突き落とす話は我々にとってかなり好まれる話だ。

「関係無い女子供を巻き込むなんて卑怯者のすることや」

悪魔なんだがね、私は。ついでにすでに巻き込まれている君も十分に子供だよ、少年。

「ああ無論、こちらの調査が済めば全員解放することを約束しよう」

「ほんまか？」

「私は契約を守るさ」

悪魔だからね。契約についてはうるさいさ。

「寮内にいた魔力保持者、魔力の残滓を持つものの捕獲は完了です
ウ」

「その中に例の少女は含まれていない模様」

部下達の報告を聞きネギ少年が到着するのを待つつもりだったが。

「こら聞いとんのか、おっさん！」

まったく良く吠える犬だ。そんなに気にくわれないなら実力行使すれば良かるうに。

「きゃあー」

どうやらヒロインが目を覚ました様だ。ほかの少女達もその声で次々と目を覚ましていく。

彼女たちは出演者兼観客だからね。目を覚ましてもらって行幸だ。

「ハッハッハ、お目覚めかね、お嬢さん」

「誰？」

「囚われのヒロインがパジャマ姿では雰囲気がないと思ってね。少し趣向を凝らさせてもらったよ」

「こんなことして、いったい何が目的よ」

ふむ、さすが当代のヒロインは気丈だ。まあ、泣き叫ぶヒロインもそれなりにそそるが、これはこれで良い。始めから絶望されては面白味もない。

「なに、大したことはない。仕事でね、『学園の調査』が主な目的だが…『ネギ・スプリングフィールドと』キミ…『カグラザカアスナが今後どの程度の脅威になるかの調査』も依頼内容に含まれている」

「……………」

カグラザカアスナは絶句している。いいね、その表情。食指が動いてしまうよ。

そうこうしているうちに空から巨大な力が近づいてくる気配がする。来たか…

神鳴流の少女と一緒にネギ少年がやってきた。

「ただ、ネギ君に対しては個人的にも思い入れがあつてね。彼があのときからどの程度使える少年に成長したかは私自身、非常に楽しみだ」

- 魔法の射手 戒めの風矢 -

ふむ、あの距離から撃ってくるか。威力も狙いも充分だ…が、全ての魔法の矢はペンダントに吸い込まれていく…なるほど、魔法無効化はこの様に応用できるのか。実験は成功だな。これで65%の達成率だ。ちなみに学園の『穴』が20%、カグラザカアスナが45%だ。そしてネギ少年が25%と云う割合だ。

「少年よ、ネギ君の後ろの神鳴流の剣士、足止めできるか」

「ああ？」

「出来ないなら無理にする必要もないがね。だが、キミが勝ったならばカグラザカアスナ以外の生徒は即時解放しよう」

「ほんまか！」

いきなり少年は地上に降り立った神鳴流剣士のお嬢さんに向かっていった。お嬢さんはどうやら得物をもっていないらしい。なら少年でもしばし持つか？

「ようこそ、ネギ君」

「あなたはいったい誰なんです！？こんな事をする目的は！？」

「いや、手荒なことをしてすまなかったネギ君。人質でも取らないと全力で闘ってはくれないかと思ってね。私はただ君たちの実力を知りたいだけだ。私を倒すことができたなら彼女達は返す。事件はこれだけだ…これ以上話すことはない」

さて愉しませてもらおうか…

「明日菜」

不安が的中した。

見知らぬ男に拉致されてネギ先生がおびき出されてしまった。

人質は他にもいるけど…みんな私のまきぞえね。

うっ…

ネギ先生が魔法を放つと胸のペンダントが光り、身体全体が悲鳴をあげる。

なに？ いったい何なの？

良く判らないけど、これが私が他の子たちと違う理由？

ネギ先生の魔法は悉く無効化されてしまっている。

魔法の使えない先生は体術で闘おうとしているけど相手の方があきらかに強い。刹那さんももう一人の子供と変な妖精みたいなものに翻弄され足止めされている。

もう、止めて、逃げてよ、ネギ先生！

助けて…吹雪ちゃん！

しばらく遊んだが足りない…全然足りない！

ネギ少年の戦闘センスは本当に9歳かと思うほど洗練されているが……違う、違うのだ。私が求めているのはもっと魂の欲求を満たすものだ。

私に打ちのめされても立ち上がるネギ少年。必勝を期した遅延魔法もカグラザカアスナの魔法無力化で不発に終わった。それでもめげずに闘うネギ少年…

違うだろう、キミの求めているものはもっと昏いものだよ。

さあ、思い出せ。キミの原点を…

雪の日に思ったあの怒りと絶望と無力感を。力を欲せ！！！！

私は道化の仮面を外した。

ネギ少年が雰囲気が変わる。これでいい、これこそが……

突然の衝撃。体中に激痛がはしる。

目が見えない…声もでない。

眼とのをつぶされた？なんだ、なにが起こった？

「あなた、うちの子に何してるの」

その言葉が私が知覚できた最後の言葉だった。

「エヴァンジェリン」

む、どうやらネズミが麻帆良の敷地内に入り込んだ様だ。結界内に巧妙に隠されてはいるが不穏な気配あった。

「どうかなされました？」

佐久夜から戻った吹雪が怪訝そうに尋ねてきた。ふむ、こう云うことはまだ判らないのか。

「なにか結界内に侵入しているな。他の者はまだ気がついていない。学園のほうはまだ何の変化はない。と云うことは教師達は気づいていないのだろう。」

「世界樹のほうだな。しかし、ほんの刹那感じた気、あれは悪魔族か？」

「悪魔？」

「確証は無いが一瞬だけ覗けた気分量と昏さは人とは思えん。そしてそれだけの気を人ならここまで巧妙にごまかすことは難しい」

「悪魔とは、昨日の今日……でもないですか、今日の今日で呼び込むとはとんだ疫病神ですね」

まあ、坊やのトラブルメーカーぶりに箔がつくだろうよ。こう云うところはナギゆずりだな。

「ん？先客がいるな。長瀬楓か？」

忍び装束の長瀬楓が様子を遠見にしている。

「どうだ様子は？」

私が尋ねるとニンニンと首を振っている。芳しくないのか？
優に5キロは離れた丘から眺めているがこやつもやはり常人ではな
いな。まあ分かり易い奴だが。

「いったい何が見えるので…す…」

長瀬楓がいるせいか見えない振りをしよとしたらしい吹雪の言葉
がつかまった。

…ほう、神楽坂明日菜が面白い格好しているな。

「ところでエヴァさん、悪魔とは一体どんな特性をもっているの
ですか？」

「いきなりどうした？」

「質問をしているのは私です。悪魔について教えなさい」

な、なんだこいつ。いったいどうした。いつの間にか戦闘態勢に入
っているぞ…いや、あのときは発していなかった殺気が漏れ出して
いる。

私が悪魔族について説明するやいなやと飛んでいってしまった…
長瀬楓はいいのか？

?…吹雪が飛んでいった先の上空を茶々丸が眺めている。

「どづした？」

「マスター、上空から地表に向けて不可視光線が数回照射された模

様」

「なに？」

『ちよつと一体どうしたの！』

突然、茶々丸の胸から光が照射され、空中にモニターが浮かび上がった。香織理か？

吹雪から茶々丸には佐久夜へ通信できる携帯を預けられている。しかし、なぜ今頃？

『エヴァンジェリン、そっちはどうなっているの？佐久夜がいきなり主機の出力を上げ始めるわ、地表に向けて射撃管制レーザーを照射するわ、おまけに全兵装のロックがはずれるわ、いったい戦争でも始めているの？吹雪はどうしたの？連絡取れないのだけれど？』

あいつ……

「茶々丸、現状を説明してやれ」

「Yes、マスター」

どこの誰だか知らないがとんでもない奴のしつぽを踏んだらしいな。

「明日菜」

えっと、いったいどうなっているの？

正体不明の男の姿が突然変化し人間以外のものに変化した。

あれって、悪魔？

それを見たネギ先生が男に襲いかかったと思った瞬間、吹雪ちゃん
がいつのまにか現れ悪魔の顔を鷲掴みにしている。

なにかしら、この構図どこかで見たことがある？デジャーヴーと云
うものかしら？と思ったらネギ先生の思い出のなかと一緒ね。

悪魔は両手両足を力なくぶら下げ、頭の角は折られ、眼からは血を
流している…先ほどまでおしゃべりすぎる口は、今ではゼーハーと
云う呼吸音しか発してしない。

いきなり吹雪ちゃんが悪魔を離れたと思ったら崩れ落ちる悪魔の周
りを格子状の光が囲み込んだ。
よく判らないけど吹雪ちゃんが勝ったんだよね。

吹雪ちゃんはそのまま私に近づき鎖を引きちぎってくれた…鉄だ
よね、これ。

「申し訳ありません、私が眼を離れたすきに…こんな破廉恥な仕打
ちを受けていたとは…」

目を潤ませながら吹雪ちゃんが云うけど…その、破廉恥とか改めて
云われる余計恥ずかしいんですけど。

吹雪ちゃんはブラウスを脱ぎ私にかけてくれた。でも、夕映ちゃんたちは後ろで全裸なだけだね。て云うか一応下着は着けている私にブラウスを渡してくれた吹雪ちゃんが今度は下着がみえているんだけど。

辺りを見回すと見知らぬ男の子とバトルをしていた刹那さんは……いた。無事だ。あれ、その横でネギ先生が刹那さんと闘っていた男の子と折り重なったのびている？

もしかしてネギ先生は消えたんじゃなくて吹雪ちゃんにはじき飛ばされたの？

刹那さんはネギ先生を介抱しようとしているみたい。

「ねえ、吹雪ちゃん。今回のことって私のせいなのかな」

「どういう事でしょう？」

私がさっき考えていたことを話すと……

「確かに今回は明日菜さんとネギ先生が原因の一つであることは事実でしょう。ですがそれが罪だとは思いません。罪があるならば、あの悪魔とか、それをけしかけた者でしょう」

「でも、今後もこんなことがあつたら……」

「そうですね、今後もあるかもしれません。いえ、これがなにかの始まりなのかも知れません」

「だったら」

「ですが、明日菜さんが原因として、明日菜さんのなにが悪かった

のでしょうか？

確かに世の中には存在するだけで世の中に害を及ぼす人間がいます。しかし、それはその人間の所行の結果です。そうでなければ…ただ産まれながらに間違っただ存在であるというのならば…本当に間違っているのは世の中の方です」

かるく頭を撫でながら優しく云ってくれる。

「麻帆良に明日菜さんがいることで誰かに迷惑がかかるとしてもそれは明日菜さんの責任ではありません。明日菜さんにはここにいるという選択肢しか無かったのですから。しかし、それでは明日菜さんの気が済まないのしょう？」

「うん。もしこんな事がまたあつたら…」

「させません」

吹雪ちゃんは力強く云った。

「もう二度と明日菜さんを危険にさせるようなことはありません」

いったん黙って、

「正木吹雪樹雷が神楽坂明日菜を守りましょう」

にっこり笑う吹雪ちゃん。思わず見とれてしまうしまうほどの笑顔。うつつ。なんかすごくうれしいような、それでいて照れる様な気分…

私が首を振って気分を変えようとしている脇で、吹雪ちゃんは携帯を取り出すとどこかに電話をかけた。

「…分家の吹雪ですが柁木天地さまのお宅では…はい、砂沙美さま、鷺羽さまは居られますか？………そうですか、では伝言をお願いします。質の悪い新種の害虫を捕まえたので調査をお願いしたいのですが、はい、即刻送ります。触覚や脚がもげていますがまだ生きています。調査が終わったらそちらで実験にでも使ってください、では……え？つ、津名魅さま？え？はい、ええ？………判りました。近日中に伺います。ええ、はい、ご機嫌よう」

なぜか最後は電話の相手に向かってお辞儀をしている。

電話を終えた吹雪ちゃんがこちらを見た瞬間…顔を真っ赤にして転移してしまった。

「エヴァンジェリン」

いったいさつきからどうしたのだ？

いきなり飛び出していったと思ったら、転移で戻ってきて茶々丸に毛布えお娘どもに持っていく様に頼むと、自分は体育座りをしてひざに顔を埋めてうなっている。

「どうした？」

「エヴァさん………その、どうにも恥ずかしくて……」

その格好が？

「その…私は自分の感情を直接表に出したことがないので…：自分の感情をむき出しにしてしまうなんて…：なんと申しますか、裸で大通りを歩いているのに突然気がついた気分です」

「なんだ？化粧がきつい女がスツピンを恥ずかしがるやつ精神版か？まあ、良い。珍しくこいつが見せた弱みだ。今までの分まで遊んでやろう。しかしそれは後だ。」

「そこで唸っていてもどうにもならんだらう。香織理が怒っていたぞ、佐久夜を動かしたそうだな」

「？…：ああ、ことのついでに佐久夜で麻帆良で攻撃できるか試してみました。まあ、相手が柔らかかったので撃ちはしませんでした。が、いけそうですね」

「なんだ、テンパっているかと思ったら意外に冷静なところもあるじゃないか。」

「しかし、爵位級の悪魔が豆腐あつかいか…」

「そんなどうでも良いことはともかく、…：認めたくはありませんでしたがやっぱり私は明日菜さんが可愛くてなりません。木乃香さんや刹那さん、茶々丸さんも同様ですが。」

「…：しかも私に堪え性が無いことがはっきり認識できました」

「確かにな。いつものお前ではなかったな」

「いえ、あれが私の本性です。普段はぼろを出さないようにしているだけです」

「はあ…：とため息をついて立ち上がる。」

「はあ、ここで恥ずかしがっていてもしょうがないですね。まあ恥ずかしがる歳でもないですし…
嘘つきは私の十八番おはこの筈です。
ところでエヴァさん、今回あの悪魔とやらはどつやってここへ侵入したのでしょう?。」

「さて? 私からみたら結構穴があるからなここの結界も。そのどれかからじゃないか?。」

警備をしているときに幾つかそれらしきものを見つけたが、報告する義理もないからほおっておいたが。

「そう、玉に瑕と云うのじゃないのね…そちらの対策は立場上無理ね。やはり明日菜さん本人の警護けいごが重要なのかしら?。」

ボソボソと小さく独り言らしき声で考え込んでいる。
本当に大丈夫なのか? こいつ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1385s/>

麻帆良の皇家の樹

2011年12月24日19時09分発行